

ヤオザミ成長記

百聞一見

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人々が繁栄を求めて新天地を目指し、狩人達が世界を巡る頃よりずっと昔。後にユクモと呼ばれる地域に、何故かヤオザミが流れ着いた!?

ヤオザミを始めとする新たな環境で生き抜くモンスター・・・「変異種」の生態を送ります。

※以下注意書き

この小説は小説サイト「にじファン」に掲載していた物を転載したものです。「pixiv(id=1959510)」にも掲載していましたが、見れない方の為にこちらに転載することを決意しました。

この小説は主にMHP3rdを元に、色々な設定やモンスターをお借りして作成しております。

ですが過去話や独自解釈の世界観、モンスターの心理描写など、作者の妄想成分も多く含まれます。

また、過度に至らないとはいえ、若干のチート要素や都合展開も含まれております。

上記の要素を苦手としている方はオススメできないかもしれません。ご了承ください。

2013/11/3:変異種編は別投稿作品「Monster Hunter Delusion」に移転しました。

2017/9/16:ヤオザミ成長記、一応完結。

目次

本編

プロローグ「流れヤオザミ」	1
第1話「飛竜夫婦襲来」	7
第2話「ヤオザミの過去」	13
第3話「砂原の新参者」	18
第4話「盾蟹VS潜口竜」	22
第5話「女ハンターは見た」	27
第6話「アイルーの賢い生活の知恵」	33
第7話「暴君と荒武者」	39
第8話「進め！火山に行き隊！・前編」	46
第9話「進め！火山に行き隊！・中編」	53
第10話「進め！火山に行き隊！・後編」	61
第11話「到着！火山へ行き隊！」	69
第12話「鎧蟹の食いしん坊バンザイ！」	74
第13話「溪流と砂原の悲劇」	78
第14話「鬼ヶ島への挑戦・前編」	83
第15話「鬼ヶ島への挑戦・中編」	93
第16話「鬼ヶ島への挑戦・後編」	99
第16・5話「鬼ヶ島の秘密」	107
第17話「海は広いな大きいな」	112
第18話「猿蟹対面」	118
第19話「奇面族の子、現る」	123
第20話「登場！わがまま第三王女！」	126
第21話「鬼鉄蟹と奇面族の生態」	133

第22話	「第三王女を捜せ！」	141
第23話	「王女と蟹とハンターと」	148
第24話	「ハンターVS鬼鉄蟹、開幕？」	154
第25話	「ハンターVS鬼鉄蟹、再戦！」	161
第26話	「ハンターVS鬼鉄蟹、決着！」	168
第27話	「沼地における甲殻種」	175
第28話	「変異種VS特異個体」	179
第29話	「朗報」	185
第30話	「ガラダというハンター」	192
第31話	「ブッチャーの強襲」	199
第32話	「見れば解かること」	204
第33話	「世界一硬い防具」	212
第34話	「覇とGの世界」	220
第35話	「我らの団」	226
第36話	「オニムシヤの今後」	234
第37話	「鬼VS鬼」	242
第38話	「悪鬼となった訳」	247
第39話	「黒蝕竜VS鬼鉄蟹」	253
第40話	「原生林の者達」	259
第41話	「大乱闘モンスターブラザーズ」	265
第42話	「天空山の剛毅」	271
第43話	「二対の重量級」	277
第44話	「天空山での決着」	284
第45話	「その頃バルバレでは」	292
第46話	「鬼鉄蟹VS天廻龍・前編」	299

第47話	「鬼鉄蟹VS天廻龍・後編」	304
第48話	「禁足地へ踏み込む者達」	309
第49話	「VS冠蟹・前編」	316
第50話	「VS冠蟹・中編」	325
第51話	「VS冠蟹・後編」	331
第52話	「その後の【我らの団】」	340
第52・5話	「迫り来るG級」	348
第53話	「旧砂漠」	353
第54話	「虎鮫VS冠蟹」	358
第55話	「砂上船のハンター達」	364
第56話	「才能と欠点」	369
第57話	「すれ違う者達」	374
第58話	「打って変わって」	380
第59話	「ドンドルマの現状」	386
第60話	「続々集うよ」	393
第61話	「繁殖期の脅威」	398
第62話	「ハンター組と密猟組」	403
第63話	「研究者と密猟者」	409
第64話	「来る災厄」	415
第65話	「悩み事と飯」	424
第66話	「原生林再び」	428
第67話	「冠蟹VS千刃竜」	432
第68話	「ゲリョス極限個体」	438
第69話	「オウショウザミVSゲリョス極限個体」	444
第70話	「極限個体の戦い」	450

第71話 「千と二の刃」	456
第72話 「激突する刃」	462
第73話 「抗竜石」	466
第74話 「盾蟹の番い」	471
第75話 「密漁ハンターの不運」	476
第76話 「鋼龍襲来」	482
第77話 「刀蟹襲来」	487
第78話 「密猟者と2人組」	492
第79話 「突撃！ドンドル守り隊！」	497
第80話 「其々の願い」	504
第81話 「天より落ちし彗星」	508
第82話 「終わりの先」	515
ヤオザミ成長記	521

本編

プロローグ 「流れヤオザミ」

ドスジャギイは上機嫌だった。

ここ孤島では、今日も今日とて眩しくも暖かな太陽の日差しを受け、豊かな自然を育んでいく。草木が生えれば草食竜が食らい、草食竜が栄えれば肉食竜がそれを仕留めて餌とする。

そして本日も、自然の恵みは大きなアプトノスをドスジャギイの群れに与えるのである。

久々の大物に歓喜するジャギイ達だが、ゆっくりしてはいられない。い。

すぐその砂浜で見張っていたジャギイ達の報告によれば、海竜種ロアルドロスを見かけたというではないか。

水獣ロアルドロスは雑食性ではあるが、ドスジャギイらと同じくアプトノスをご馳走としている、いわば競争相手。いくら群れのリーダーとして長い経験を積んできたドスジャギイでも、体の大きいロアルドロス相手では分が悪い。

仕留めたばかりの獲物を横取りされてはたまったものではない。ロドロスが群がるかもしれないし、さっさと運び出す必要がある。

幸いにもここは巣に近いエリアで、アプトノスをそこまで運び出すのは比較的楽だ。

さあ運ぶぞ、と言っているかのようにアプトノスに齧り付くジャギイ達にドスジャギイが吼えかければ、ジャギイ達は渋々と命令に従う。自身もアプトノスの長く太い首にしっかりと噛み付き、巣へと運ぶべく引きずり出す。

腹をすかせて待っている子分達や子ども達の為に、一生懸命引きずる親分だった。

あつと言う間に巣へ辿り着いたのはいいが、何やら向こうが騒がしい。

ジャギイやジャギイノスがギヤアギヤアと騒いでいるらしいが、何があつたというのか。

獲物を残つたジャギイ達に任せ、群れの長たるドスジャギイは異変を知るべく走り出す。

—何事かと思つてきてみれば、これか。

しきりに啼いて威嚇するジャギイ達を傍目に、ドスジャギイは心なしか溜息を吐いているかのように項垂れる。

ジャギイ達が威嚇し、ドスジャギイが項垂れている理由。それは彼らの縄張りに侵入者が居たからだ。

—ルドロスでもない。

—ブルフアングでもない。

—アオアシラでもない。

—ハンターなんかもつての他だ。

大体、この時代はまだ人間の姿が見えない頃なのだから、居ないのは当然だ。

ではなんなのか。

—それは……蟹である。

飛竜の頭蓋骨を背負い、大きな鋏に四つの足を持つ、全身を硬い殻で覆つた奴。

其の名はヤオザミ……甲殻種十脚目盾蟹上科に俗する、主に砂漠や水辺に生息しているはずのモンスターだ。

しかし赤紫色をしているはずのその殻は、環境の変化の為か、重々しい鉛色となっている。

とにかくこのヤオザミ、どこからかふらりとやってきては、この孤島周辺をのんびり回っている変り種だ。

いつから居たかは知らないが、このドスジャギイの記憶によれば、彼がリーダーとして若かつた頃には既に居たはず。

この孤島でただ一匹しかいないはずの当人……もとい当蟹は、どこ吹く風とばかりに孤島をうろつき、日々大きく成長している。

今ではドスジャギイに並ぶ大きさまで成長しているので、ダイミョウウになれる日はそう遠くはないのかもしれない。

―閑話休題。

そんなヤオザミの目当ては何かといえば、ジャギイ達の巣に生えているキノコ類だ。

挟める物なら何でも食うというヤオザミだが、どういうわけかここに生えているキノコを特に好んでいるらしく、度々縄張りを侵してまで食べに来る。

後ろでジャギイ達がギャアギャア騒ごうとも、ヤオザミはせつせと鋏でキノコをちぎりながら口へ運ぶ。

ジャギイ達が侵入者を追い出そうと威嚇しているのに対し、ドスジャギイはどうすべきかと考えているかのように首を傾げている。

なぜ手を出さないかと言えば、ドスジャギイに諦めという知識が芽生えてきているからだ。

このヤオザミ、ここへ訪れたのは1度や2度では飽き足らない。キノコが再び生えるのを狙って、週4回ぐらいは訪れに来る。

そしてその回数も、ドスジャギイがこのヤオザミをなんとかして追い返した回数にも繋がる。心労も沸くというものだ。

ヤオザミは特にジャギイ達に危害を加えるわけでもなく、ただ縄張りを侵しているだけに過ぎない。

そもそも彼（一応♂らしい）は、自分に危害が及ぶか獲物を狩るかしない限り、殆ど襲い掛かって来ない大人しい性格だ。

……いや、単に暢気なだけかもしれない。現にジャギイ達が若干の疲労を見せ付けるほどに吼え続けていても、ヤオザミは平然と、そして黙々とキノコを食べ続けている。

そう、このヤオザミはドスジャギイを悩ませるほどののんびり屋なのだ。

おまけにこのヤオザミ、めちやくちや硬い。分厚い鋏はもちろんのこと、どういうわけかその鉛色に光る殻は鉄のように硬い。

というのもこのヤオザミ、なんと鉱石をも喰っている。

それだけなら不純物を体液で包み排出するだけで終わるのだが、こいつの場合はそうではない。

環境変化による突然変異か、排出するはずの鉱石の成分を殻に取り

込む体質を持つようになったのだ。本来なら赤紫色のはずの体が鉛色になっているのはその為だと考えられる。

鉄鉱石やマカライト鉱石などの鉱石がにじみ出た金属質な肌は、もはや装甲板のような重量感を醸し出している。

過去に噛み付いて痛い想いをしたのも、ドスジャギイの長きに渡る経験の一つだ。

すると一匹のジャギイノスが痺れを切らしたかのようにドスジャギイに吠え掛かる。

それをきつかけにその場に居たシャギイ達が一斉に啼き出し、ドスジャギイにエールを送る。

やっちまってください親分！と言わんばかりの子分達の雰囲気の前に、仕方ないとばかりにドスジャギイは前へ出る。

はしやくジャギイ達の道を通り、ついにヤオザミの背後に辿り着く。

—おいおう、俺らのシマにまた土足で踏み込みやがって。

……などと言っているかのように喉を唸らせ、じりじりと顔色を伺うかのように回り込むドスジャギイ。

しかしヤオザミはキノコに夢中なのか、なおも食事を続けている。いわゆるガン無視というやつである。

しかし、幾度となくヤオザミと（威嚇的な意味で）ぶつかり合ったドスジャギイがこれしきのこと諦めるはずがない。

シャギイ達の期待に添えるべく、今度は吼えを加えてヤオザミの注意を惹きつけようとする。

—てめえが飯を食いに来ただけなのはわかる。だがな、ここはおめえの餌場じゃねえ。俺達のベストプレイスなんだよ。

——……………。

—俺には子分どもを安心させてやる義務がある。親分として、てめえを黙って見過ごすわけにやいかねえんだよ。

——……………。

なお、上記の台詞はイメージです。雰囲気です。決して両者に知能があつて言っているわけではありません。

ドスジャギイの多彩な威嚇方法に対して、ヤオザミは相変わらずガン無視。毎度のことながら、このヤオザミは手強い。

やがて、仕方ない、とばかりにドスジャギイは後方へと跳躍し距離を取る。

そして身体を右90度に傾け、足を軽く畳んで力を込め……一気に身体を押し出す！

全身を使った体当たりはヤオザミの側面から激突。いくら重く硬いとはいえ、同サイズの相手から全身をぶつけられれば、流石のヤオザミも吹っ飛ばしかない。

ごろりと転がってもがくヤオザミを見て、ジャギイ達は大はしやぎ。

だが起き上がって警戒するドスジャギイを含め、ジャギイ達はヤオザミに襲いかからない。

あくまでこのヤオザミは、自身らの縄張りを侵す『強敵』であつて『獲物』ではない。

下手に強者に襲い掛かったところで返り討ちに合うのは、弱肉強食の世界では常識だ。

出て行けー、と子どものようにはしゃぐジャギイ達を前に、ヤオザミはゆっくりと起き上がる。

しばらくの間、両者が睨み合う……ヤオザミは睨んでいるように見えないが。

—そして、天はジャギイ達に微笑んだようだ。

ヤオザミは、やれやれ仕方ない、と言わんばかりに背を向き、すごごと巢から出て行くではないか。

ヤオザミもジャギイ達と争う気は無いらしく、ただ帰るだけに留めている様子。

そんな実質的な勝利を得たシャギイ達は、一斉に飛び跳ね、歓喜で身を躍らせる。ドスジャギイも一安心したのか、軽く吼えて勝利を掲げる。

一時は勝ち目の無い戦いを挑み、自慢のエリマキがズタズタになる事を覚悟していたが、どうにか回避できたようだ、

ではさっそくご馳走を食らうか、とドスジャギイの視線はアプトノスへと向けられ、一気にその厚い肉に食らいつく。

それを合図にジャギイ達も獲物に跳びかかり、肉を貪る為にアプトノスに群がる。

まるでパーティーのような賑わいを見せるジャギイ達の巢。今日も自然は、そんな彼らにもささやかな平穏と食事を与えるのだった。

余談だが、さつきまでヤオザミが居た場所のキノコは空になっていった。

空になるほど食べて満足したヤオザミは、ザカザカと砂浜を掘り進み、地中で眠りにつくのであった。

—これは、後にユクモ村という地域から強敵と噂されるようになる、ある甲殻種モンスターの成長を描く物語である。

—完—

第1話 「飛竜夫婦襲来」

暖かな日差し。澄み渡る青い空。そして強い風。

今日の孤島へと吹く風は相当強いらしい。海辺では波が荒れ狂い、木々はざわめき、ブナハブラは呆気なく飛ばされていく。

こんな日は、アプトノスのようなどっしりとしたモンスターならともかく、ジャギイとドスジャギイは洞穴や巣でじっと身構えているしかない。

いや、どうやらジャギイ達は風に飛ばされまいと身を潜めていた訳ではなさそうだ。

全員がキョロキョロと空を見上げるその姿は、何かを警戒しているようにも見える。

—その直後、空の上で何かが太陽を遮った。

強風に身を任せるようにして飛来する二つの影。

大きな翼に長い尻尾、全身を硬い殻で覆っている巨大な飛行生物。

似通った姿を持つ2頭だが一応は違いがあり、その最たるは色。

片方には燃えるような赤い色を、片方には生えるような緑の色を身体に宿していた。

—火竜リオレウスと雌火竜リオレイア。それが2頭の名だ。

仲良く2列に並んでいる所を見ると、彼らは求愛を果たし、新たな住処を求めている夫婦のようだ。

また、彼らは遠い大陸からやって来たらしい。長旅だったのか、体が少し痩せていた。

ユクモ地域の火竜の方が飛行能力に長けている理由はここに来ているのかもしれない。

同種の中でも広大な海を渡れるだけの飛行能力を有しているからこそ、より子孫を残すべく、新天地へと行く術を手に入れられたのだ。そして目の前に見える崖に狙いを定め、着地。ほどよい広さがあるこの場所は、巣を作るのに最適だった。

そして一息ついた二頭が寄り添い、グルグルと喉を鳴らす。

別に威嚇しているわけではなく、猫が懐いた相手に甘えて喉を鳴ら

すのと同じだと考えて欲しい。音量と迫力にだいぶ差が出ているが。互いに長い旅の疲れを労うかのようにして首を交わり、喉を鳴らして甘えるように寄り添う。

もしこの時期に人間が居て、この光景を目の当たりにすれば、恐らく驚愕を覚えるかもしれない。

人間が知る飛竜の恐ろしさと獰猛さを感じさせない程、優しさに溢れた光景なのだから。

リオレイアが叫べばすぐさまリオレイウスがやって来るのもここが起因なのだろう。

人が愛し合って子どもを宿すように、竜も互いに愛を育み、子を育てていく。

人が竜を恐れるあまり、自然から見れば当たり前のような光景を見逃しているだけなのだ。

―さて、次は腹ごしらえだ。

リオレイウスは広大な台地を見下ろし、その高い動体視力を持つ眼をもつてして獲物を探す。

大型の草食種、海辺を這う水獣、こちらを警戒しているのかしきりに見渡す小型の鳥竜種、飛び跳ねるケルビの群れ。

己がかつて居た地域とさほど変わらぬ育みでありながら、まったく違った生態系を目の当たりにしている。

そして獲物を定めたのか、大きく翼を広げ、風の流れを受けてその巨体に浮力を与える。

リオレイアが軽く吼えるのを合図に、リオレイウスは崖から飛び降り、風の流れに乗って飛翔する。

―リオレイウスの新たな地での狩りが、始まる。

所変わって、ここは孤島のとある浜辺。浅瀬の海と陸地が繋がっているこの砂浜は、水獣と鳥竜の境界線となっている。

そこでは、風が強いにも関わらず、一匹のアプトノスが板ばさみに遭っていた。

陸地へ続く道にはジャギイが、海辺へ続く洞穴からはルドロスが

迫っており、互いが威嚇し合ってアプトノスを追い詰めている。

ちなみに例のヤオザミも要るのだが、我関せずと、本日の昼食にと選んだ雷光虫を器用に鋏で摘まんで食べていた。

もちろんジャギイもルドロスもヤオザミを無視。というか相手にしているだけ無駄だと理解している。

今はこの獲物をどうやって仕留めるか。そう考えていた……次の瞬間、両者は上を見上げる。

―ドスンッ！

突如として空から飛来したそれは、アプトノスの上に激突。急降下による圧力だけでは足りぬと、その鋭い鉤爪を生やした足で首を掴み取り、絞め殺そうと押さえ込む。

アプトノスは必死でもがこうとするが、呼吸器官を掴まれたことで酸欠を起こし、呆気なく絶命。

小型の捕食者よりも先にアプトノスに手を掛け、仕留めたその正体は赤き飛竜―リオレウス。

この地域ではまだ見られないその大きな翼と猛々しい姿が、ジャギイとルドロスの野生の血に危機感を覚えさせた。

―直後、リオレウスが咆哮を揚げる。

雑魚に対する威嚇なのか、獲物を仕留めた歓喜なのかははつきりしない。しかしその咆哮は、小型のモンスターを追い払うには十分すぎる物だった。

―いや、一匹だけ例外があった。例のヤオザミである。

どうやら食事に夢中だったようで、先ほどの咆哮でやっと気づいたようだ。暢気過ぎる。

砂地以外でも潜行できるようになったヤオザミが、リオレウスに目をつけられた時点でせつせと潜ろうとしている。

だが逃げ遅れたことに代わりはなく、縄張りを広げているリオレウスがそれを逃すわけもない。

飛翔する必要もないと判断したか、一気にヤオザミに向けて走り出し、その凶悪な口が開かれ、ヤオザミに食らいつく。

—もはやここまで……かと思われたが、事態は予想外な展開を迎える。

—噛み切れない。

その顎は確かにヤオザミの体のみをつちりと掴み、噛み砕こうと力を込めている。

しかしヤオザミ、前回も言ったが鋼鉄の殻を持っている上、前回から今まで食した分だけ殻の鉱石成分が増えている。

顎の力が強くても鋼鉄の体は割れる気配がなく、むしろリオレウスの歯がガリガリと嫌な音を立てていた。

しかし、彼も絶対的捕食者の一角。ここで引き下がるような根性は持ち合わせていなかった。

噛み砕いてやろうとさらに顎に力を込め、銜えたまま振り回してみる。

それでもヤオザミを砕けられない。それに重いから振り回すだけでも一苦労だ。

だが諦めない。ヤオザミがもがこうとも離さない。空の王者のプライドは伊達ではない事を証明する為にも。

—ここで一つ、ヤオザミのさらなる特異点を紹介しよう。

このヤオザミは雑食性だ。挟める物であれば、鉱石だろうがキノコだろうが魚だろうが虫だろうが、何でも食べる。

中でもキノコを好んで食べてはいるが、このヤオザミは食用と毒キノコを区別するほどの知恵と好き嫌いを持ち合わせてはいない。

それこそ、致死量には至らないとはいえ、毒テングダケやマヒダケをも食べまくり、何回か酷い目にあっているほど。

だがバカだと罵ることなかれ。長きに渡って食べ続けていれば、その毒に耐性がつくのは必然的だ。

ヤオザミは持ち前の突然変異体質と食性により、毒を制し、体内に毒を宿すようになっていた。

そんなヤオザミは、クタビレタケの成分が含まれた泡を吐き、リオ

レウスの喉に流し込んでいる。

つまり、リオレウスが疲労して諦めるのが先か、ヤオザミが噛み砕けるのが先か。

—長きに渡る闘いが始まった。

太陽が地平線の彼方へ沈み、世界が赤く染まった頃。

リオレウスはヤオザミを銜えたまま口から涎を垂らし、気だるそうにしている。

そしてヤオザミは長いこと振り回されたにも関わらず、元気に必死の抵抗。

もうやる気も失せたのかりオレウスはそのまま口からヤオザミを地面に落とす。

ヤオザミは、チャンス！と言わんばかりに急速潜行。砂浜の地中深くに退避することに成功した。

—疲れた……。

ぜえぜえと荒い呼吸を繰り返し、力なく項垂れるリオレウス。

幸いなのは、あれだけ獲物そっちのけで暴れていたにも関わらず、獲物を横取りされなかったことか。

もつとも、あれだけ怒り狂って暴れていれば、横取りしたくてもできないのは当然だろうか。逆に殺されそうで。

ともかく獲物を持って帰って、ゆっくり食べるとしよう。

心に敗北感を抱きながら、疲労した身体に鞭を入れて獲物を運び出すリオレウスであった。

—この後、せつせと作った巢で待っていたりオレイアが、腹を空かせて苛立ちリオレウスに吠え掛かったのは言うまでもない。

—いつの時代どんな世界でも、かかあ天下というものは存在するの
かも知れない。

—
完
—

第2話 「ヤオザミの過去」

―時は昔。人々が新天地を目指して海を渡る頃。
まだ名は無く、後にユクモという名がつけられる予定の集落があつた。

人々がひとまず安心して暮らせるようになり、新たな自然の恵みと脅威を知る為の周辺探索の拠点が築いていく。

そこには大勢の人々で賑わっており、様々な希望と野望を抱き海を越えて集つてきた。

人々の居住地を建てる者、探索部隊を組む者、新たな商売を試みる者、それらを纏め上げ指示する者。

海の向こうからやってきた彼らは、それぞれの思惑と想いを寄せて集落を築いていった。

中には遠い大陸から派遣されたハンターも混ざっており、今後の周辺探索に念を入れてるのが解る。

とはいえ、ここより先は未だ未知の領域であることには違い無い。何も調べていない食べ物を信用していいかと言えば、もちろん駄目だ。毒性があるかもしれない。

今後の探索で必要となるのは、生息しているモンスターの確認と、食料が確保できるか否かだ。

なので、しばらくは他の地域から送られてくる食料を頼りに生きていかなければならない。

今、集落に辿り着いた漁船から様々な魚介類や保存食が箱詰めになつて運び出されている。

何人もの船員が船から大きな箱を持ち出し、集落の人々へと分け与えていた。

「これで最後だ……つとー！」

今、1人の屈強な男が己の倍ほどもある箱を船から降ろす。

どすんつと音を立てて置かれる様子を見て、船長らしき髭を生やした男が頷いた。

「ご苦労さん！ さっそく村の皆に届けないとな」

「船長！」

さっそく届けようと船員達に命令しようとした船長だが、そこへ別の船員が慌しく駆け寄ってきた。

何事かと船長はその船員の様子を見るが、まずは落ち着かせることを優先する。

「おう、そんなに慌てるんじゃないよ。で、どうした？」

普段は大人しく管理が得意な彼が慌てるほどだ。彼を知るからこそ、船長は冷静になってその報告を待った。

「船員からの報告なんです、航海の途中、一匹の食用ヤオザミが逃げ出したみたいなんです」

食用ヤオザミとは、いわゆる養殖物のザザミである。

ザザミを手軽に食べたいという村人が小さい頃のヤオザミを捕まえ飼育していたのが始まりで、それを養殖する事に成功し、今やあの村の名物となった物だ。

食用として飼われたヤオザミは輸出物としても人気で、今回の集落にもそれらが届けられている。

しかし、食用とはいえ仮にもモンスター。逃したら酷い目に合う。それを逃がしたと聞いて船員は驚いただが、肝心の船長はと言えば。

「なんだそんなことか。それならもう知ってるぞ」

「あれ？ご存知だったんですか？」

あっけらかんとそう言った船長を前に、船員は思わず唾然としてしまった。

てつきり怒られるかと思っていたが、船長の事を考えれば当然かもしれない。

この船長は細かい事を気にせず、しかし船員の事は気にかけるという、良くも悪くも大柄な人だった。

「聞いた話じゃ、逃げたヤオザミは海に飛び込んだそうじゃねえか。ヤオザミ一匹逃げたって大した事はねえ。むしろ被害が出なかったから良しと思つて放っておいたのよ」

「は、はあ……」

本当に大柄な人である。船員はそう思わずにはいられなかった。

「なーに、海のご真ん中に落ちて無事な訳ねえだろ。大型のモンスターに喰われるのがオチだぜ」

言うだけ言った船長は、んなことより運ぶぞ、と船員に怒鳴るように命令する。

思わず船員は慌てて荷物を運ぶが、それでいいのかなあ、と呟いてしまう。

まあ、船長の言うこともご尤もだ。

食用ヤオザミは小さいし、ここらの海には、海中での活動に適した「海竜種」なるモンスターも居る。気の毒だろうが、生き延びているはず無いだろう。

そう思った船員は、海を渡ってきた食料を心待ちにしている人々のために、せつせと働くのだった。

—ところがどっこい、ヤオザミはしつかりと生きていたりする。それも遅しく。

ヤオザミが漁船から逃げ出し、長い月日が流れた今になっても未だ成長を繰り返している。

孤島の豊かな自然に感謝すべきか、新たな環境に対応して生き抜いた彼を褒めるべきか。

とにかくこの鉛色のヤオザミ、立派に大きくなったものだ。

まだダイミヨウザミには至らないものの、今まで背負ってきた飛竜の頭蓋骨が小さく見えるほど大きい。

さしずめ、ブシザミとでも呼ぼうか。

—そのブシザミは今、とても困っていた。

彼が今いる所は、驚くべきことにリオレウスとリオレイアの巣であった。

飛竜の食べ残しであろう散乱した骨の山を、鋏で一つずつどかしながら、自分の身体に合うヤドを探していた。

……リオレウスに襲われないか？とつくの昔に諦めて獲物を探しにいった所だ。

彼の妻であるリオレイアも、ようやく生まれた我が子のお守りに忙しく、蟹を相手にしている所ではなかった。

彼らもドスジャギイと同じく、岩より硬く山より動かないブシザミを相手に諦めを知ってしまった。

この間の振り回し騒動もそうだったが、あれ以降、何度も挑んだが結果は惨敗。

年々鉱石を食らい硬くなったヤオザミは、自慢のサマーソルトやファイアプレスでも殺すには至らず、逃がしてばかり。

さらには重量までも増してしまい、体当たりをもつても物ともしなくなってしまった。

もはやリオレウスからしてみれば、岩を相手にしているようなもの。

居ても食べ残しを食らうか骨を漁るだけなので大した被害もないし、子供達を襲うことも無い。

その結果、放置という無難な結論に至ったわけだ。

—それはともかく
—閑話休題。

丁度良いサイズのヤドが見つからない——ブシザミは久しい危機感を覚えた。

いくら鋼鉄の殻を手にしたとしても、大事な所を剥き出しにするようなことはできない。

それ以前に、ヤドを背負うという、本能と言う名の習慣を捨てきれはるがなかった。

—さて、どうしたものか……。

巢を彷徨うブナブラの羽音と火竜の子供達の鳴き声が響く中、ブシザミは硬直する。

だいぶ日が傾き、リオレウスが仕留めた獲物を巢へ持ち帰り家族そろってかぶりついていた頃になって。

—よし。こことは別の所へ行こう。

弱小の頃より命がけで生き延び、ついにチート級の硬さを身につけ

たこの孤島。そこからついに旅立つ決心がついたのである。大きくもなった。強くもなった。ついでに毒も制するようになった。

最初の頃は脅威が少なかったからここに留まり生きてきたが、今では飛竜ですらなんとかできるぐらいにまで成長した。新天地を目指すなら今だ。

そう決心したブシザミは歩を進め、勢い良く崖から飛び降りた。

そんなブシザミの奇怪な様子を眺めていた飛竜夫婦は、やれやれやつと出て行ったか、と言わんばかりに軽く息を吐く。

子供達は遊び相手がいなくなって困るのかブシザミを止めるようにやかましく鳴くが、諦めて餌にありつくことにした。

余談だが、陰で見っていたジャギイの報告を聞いたドスジャギイが無駄に喜んだのは少し先の話。

さらに余談だが、このブシザミの急降下をモロに受けたロアルド口スが呆気なく絶命。

シャギイの群がりオレウスに次いで繁栄するようになるのは、遠いようで割と近い話。

—こうしてしばしの間、ヤオザミ改めブシザミの、新たなヤド探しの旅が始まるのだった。

—完—

第3話 「砂原の新参者」

―突然だが、リノプロスというモンスターをご存知だろうか？

灼熱の砂原地域に生息する草食種の一種だ。

その硬い頭殻は幾度も突進と頭突きを繰り返してきた結晶で、後にハンターが装備品としての価値を見出すほど。

このモンスターは、後にハンター達から「ロケット生肉」という奇妙なあだ名を持つようになる。

その理由は簡単で、このモンスターが持つ異常な程の勇敢さにある。リノプロスは縄張り意識が非常に強く、侵入者に所構わず突進してくるのだ。

相手の強弱に関わらず、敵を自分の縄張りから追い出すためにとにかく突っ込む。それに飽き足らず、同種の縄張り争いや求愛にですら頭突きをするほどだ。

そんなにも頭突きをしていれば頭の甲殻が硬くなるのは、むしろ当然。

―さて、リノプロスに関する話はここまでにしよう。

そんなリノプロスだが、やはり草食種。灼熱の大地とはいえ草木が全く生えていないわけではなく、程よく草木が生えている地でのんびりと草を食べている。

しかしリノプロスは、ある姿を発見し、食事を中断。どうやら何者かがリノプロスの縄張りを侵しているようだ。

その姿をはつきりと捉えるより前にリノプロスは威嚇するが、謎の存在は構わずゆっくりと歩いてくる。

この辺では見慣れない顔ぶれだ。肉食竜ではないようだし、大きさも自分達より一回り大きい程度だ。

どちらにしても、威嚇を無視するということは頭突きを仕掛けていいるという証拠。それを理解するや否や、リノプロスは意気揚々と砂を蹴り、狙いを定める。

―目標、前方の生き物……GO！

リノプロスは駆ける。侵入者に突進する為に。

そしてその硬い頭が一直線に侵入者に迫る！

—ゴイイン

この地域に生息していないはずのイヤンクックが空を飛んでいた。それも小さいのが何匹もいて、同じところをグルグルと回っている。

いや、正しくは眩暈を起こしたりリノプロスの幻なのだが（何故ヒョコでないのかは謎）。

岩肌にぶつけても平気でいられるはずのリノプロスが、激しい音を立てるほどに強い衝撃を受けた証拠だ。

では岩よりも硬い物体とはなんなのか？

それは——蟹である。

それも岩をも超える硬度を持つ鋼鉄を纏った、例のブシザミであった。しかもぶつかった先は、分厚い鋏の方。

なるほど、これではぶつかってきたリノプロスが逆に目を回しても仕方ない。

一方ぶつけられたブシザミからしてみれば迷惑でしかなく、急ぎ足でリノプロスの縄張りから逃げ出す羽目に。

とりあえず、縄張りから追い出すことができた以上はリノプロスの勝ちだ。

しかし未だにふらついているリノプロスからは、なんとも言えない敗北感が漂っていた。

唐突に場面は変わり、砂原のとある洞窟内部。

洞窟とは言っても日は差しており、程よい薄暗さと湧き出ている水源によって丁度良い避暑地となっている。

さて、ここではメラルーと呼ばれる、白黒の模様が特徴的な獣人族の群れがいた。

メラルーはとても悪戯好きな獣人族で知られ、他人の持ち物を盗んだりする性質の悪い連中である。

そんなメラルー達は、オアシスの木々に漂っている虫を食べていた
ブシザミにちよつかいをかけていた。

抵抗したり（簡単に）怒ったりしないことをいいことに、悪戯とい
うよりはブシザミを遊具に見立てて遊んでいた。

中には嫌がらせとしてブシザミの背負っている飛竜の頭蓋骨を抜
いてやろうと何匹かが引つ張っている始末。

しかしこれが中々外れず、メラルー達は若干ムキになっているよう
だ。

そんなメラルー達に遊ばれているブシザミはといえば気にもせず、
黙々と好物である不死虫を食べ続けていた。

腹が減っては戦……いや探し物は出来ぬ。厳しい環境だからこそ
腹ごしらえは大切である。

だから虫以外も食べるべく、乗り物にのった子供のようにはしゃぐ
メラルー達を乗せたまま、ブシザミはゆっくりと歩き出した。

とりあえず、砂原地域に生息するメラルー達は、ブシザミを危険度
の低いモンスターだと認めてくれたようだ。

ただ、怒らせると大きな鋏で地震攻撃を仕掛けてくるので、今後は
度の過ぎた悪戯はしないとメラルー達は誓った。

さて、ここからはブシザミの視点からご覧頂こう。

このブシザミ、実は幼少の頃、つまり食用として人に捕まる前は砂
漠に暮らしていた。厳しい環境に住むヤオザミほどザザミソが濃厚
になるんだそう。

話は逸れたが、この灼熱の日差しの下で果てしなく広がる砂原は、
まさしくブシザミの故郷に近い物だ。

もちろん砂の海を跳ねて泳ぐデルクスという魚竜種は知らないし、
彼に故郷を懐かしむほどの感情や記憶力は持っていない。

ただ本能的には懐かしんでいるのか、しばし目の前の絶景を眺めて
いるかのようにつんでいた。

そしてブシザミは、新たな地にも関わらず平然と砂地に足を踏み出
して歩き出す。

何かめぼしいヤドは無いか。デルクス達が回りで飛び跳ねている事など気にせず、そんなことを考えながら歩き続ける。

すると前方にあるものを発見した。

砂に半分ほど埋まっているそれは、一見するとゴツゴツとした白い岩のようにも見える。

しかしそれは岩ではなく、大昔に砂原で息絶えたモンスターの頭蓋骨だ。

大きくゴツゴツとしたそれは、ボルボロスと呼ばれる獣竜種の頭が白骨化したものだ。

大きく硬いその頭は、頭突きでオルタロスのアリ塚を破壊できるほどとされている。それだけ発達した頭が白骨化すれば岩のように見えるのも無理は無い。

とにかくブシザミがわかったことといえば、ボルボロスの頭蓋骨の大きさが丁度いいサイズだということ。

—おお、なんと立派な頭蓋骨だろう。

ブシザミは一目で気に入ったようだ。遠めでは頭蓋骨の大きさはつきりとしなが、きつとあれならヤドに丁度いいだろう。

さつそくヤドにしてしまおうと、ブシザミは頭蓋骨の方へと歩き出す。

だがしかし、求めている物がそう易々と手に入らないのは自然の摂理。

ハンターが碧玉や紅玉を手に入れられなくて何度も狩らなくてはいけないように、モンスターだって苦労はする。

捕食者に見つかって食べられてしまいそうになるのも、この厳しい砂漠では当たり前のこと。

今、ブシザミは巨大な口の中にログインした。

—完—

第4話 「盾蟹VS潜口竜」

―見た事の無い獲物だ。

砂の中から半分だけ顔を出したそれが、遠くに見える生物を見て感じた事だ。

だが大きさから見て自分の口に入りきれぬサイズだろうから、自分にとつては獲物ではない。

それだけ解った所で、それは行動に移すべく、砂の中に身を潜める。呼吸器官を使つて鯨の潮吹きのように砂の中で息をし、獲物の足音を頼りに砂の中を潜行する。

そして地中に潜んだ存在が、地中から飛び掛かり姿を現した。

巨大な口が最大の特徴であるこのモンスターの名は、ハプルボツカ。『潜口竜』という異名を持つ、地中からの奇襲を得意とした、砂漠での活動に秀でた海竜種だ。

そんなハプルボツカが口に銜えこんだのは、この地では新参者であるブシザミ。

が、当然のことだが、カブレライト鉱石をも含む鋼鉄の体は、ハプルボツカにとつては硬すぎたし重すぎた。

噛み砕くことができれば飲み込むことはできない。いくら大きくても丸呑みは不可能だ。

予想外な獲物とはいえ、銜えた以上は離さないとばかりにハプルボツカは顎に力を込める。しかし……。

―!?

不意を突かれたかの様にハプルボツカは叫び、もがくように頭を振るい出す。

そのまま地中から上半身を這い出ても頭を振るい続け、やがて口からブシザミが放り投げ出された。

投げられたブシザミはといえど勢いと重みによって砂に沈むが、何事もなかったかのように這い出る。

そんなブシザミを睨むハプルボツカの口から鮮やかな体液が出ており、どうやら口内でブシザミが何かを挟んで傷をつけたようだ。

大きな口を開いて威嚇の咆哮をあげ、自分で仕掛けておきながら怒り状態になるハプルボツカ。

対するブシザミはといえば、気に入ったヤドを取ろうとして邪魔されて腹が立ったのだろう。その分厚く大きな鋼鉄の鋏を、これでもかと大きく広げて威嚇の姿勢を示す。

―なにしやがんじやワレエ!

―それはこっちの台詞だつーの!

なお、上記のやり取りはイメージです。

互いに闘争意欲を露にすれば、鬨の火蓋が切られた。

先攻はブシザミ。四つの脚をアンカー代わりにして打ちこみ、鋏を盾にして身構える。

それを見たハプルボツカは何か仕掛けてくると思ったのか、地中へと潜行する。

ハプルボツカが完全に地中へ消えた頃、ブシザミからハプルボツカの居た地点へと紫の線が引かれた。

これはダイミョウザザミが得意とする水ブレスに毒テングダケの成分を注入した、いわば毒水ブレス。

岩ぐらいなら簡単に傷をつけることができ、外傷を与える上に毒まですえられる強力なものだ。

だがハプルボツカが地中に潜る方が早かったようで、毒水ブレスは砂地に割れ目を作るだけに終わった。

地中へ逃げられた以上、ブシザミはハプルボツカがどこから出るか予想がつかず、周囲を忙しなく見渡す。

しかし見えない以上は仕方ない。とりあえず鋏を盾にして構えることで守りに入る。

前方は完璧だが、相変わらず不釣合いなほどに小さい飛竜の頭蓋骨のせいで、背面にはやはり不安が残っていた。

それをハプルボツカは逃さない。案の定、ブシザミの後方から一気に跳びかかり、ヤドに食らいついたではないか。

もちろんブシザミは抵抗しようとするが、がちり噛まれている以上、得意のバックジャンプ攻撃もできず、身体を揺らすしかない。

しかしハプルボツカは離さず、このままヤドを引き抜いてやろうと噛み付いたまま暴れ出す。

—このままでは埒があかない……こうなったら。

ブシザミは揺れ動かすのをやめると、ぐつと身体に力を込める。

ぶわっ！

なんと、ブジザミの体と飛竜の頭蓋骨から紫色の濃霧が溢れ出たではないか。

これもブシザミが編み出した技の一つで、毒テングダケの成分を含んだ水を霧状にして口とヤドから発射することができるのだ。

全方位から放たれた濃霧が毒だと解ったハプルボツカは、こりやたまらんとばかりにヤドから口を離し、地中へ逃げ込む。

これで振り出しに戻ったが、同じ失敗を繰り返しはしない。ブシザミは四つの脚に力をこめ、一気に伸ばして体を空へ飛ばす！

ダイミヨウザザミではお馴染みのジャンププレス攻撃。

鋼鉄の体でよく跳べるなあとお思いだろうが、これもブシザミの食生活が関連している。

ブシザミは雑食系で、木の実を食べることもある。その中には力を高める効果のある「怪力の実」も混ざっている。

それを微量でも毎日食べることで、ブシザミは自身の重量を支えられるだけの脚力を手に入れることができたのだ。

気力低下水に毒水、そして自身の身体を支える脚力。これらは全て食の力ともいえよう。

ようするに、好き嫌いしていると大きく強くなれない、ということだ。

話は逸れたが、ブシザミが高く跳んだ途端、ハプルボツカは顔を出した。

ブシザミが跳び出した時の音に釣られたのか、ブシザミが居た地点に口を開いて出現したのだ。

しかし肝心の獲物はおらず、その上からブシザミが勢いよく落ちてくる。

—ズドンッ

激しい音を立てて、鋼鉄の塊がハプルボツカの頭に直撃する。

さすがに毒霧を受けて弱まっていた身体では耐え切れず、ハプルボツカは絶命。力なく地に頭を伏せて息絶えた。

そしてヤオザミはいええ、ごろりと倒れたハプルボツカの頭から転がり落ち、運悪く逆さまになってしまった。

しばしの間、ヤオザミは重い身体を起こせずにもがくしかなかった。

デルクス達がハプルボツカの亡骸に集まり食らいついていた頃。

辺りが真つ暗になり、気温が一気に低下したことで、灼熱から一転して極寒の地になる時間帯となった。

たまたまりノプロスが体当たりしてくれたおかげで起き上がったブシザミは、お目当ての物へと脚を運ぶ。

—どれだけこの時を待ったことか……。

上記の台詞はイメージとはいえ、ボルボロスの頭蓋骨を見るヤオザミには感慨深い物を感じていた。

鍔で小突いて大きさを確認すると、さつそくヤドを交換すべく、身を一瞬にして移す早業を披露。ついにブシザミは、ボルボロスのゴツい頭蓋骨を背負うことができたのである。

少々大きめだが、これからも成長して大きくなるのだから、むしろ丁度いいくらいだ。

ブシザミは身体を揺らして己の新しいヤドが上手く嵌ったか確かめると、そのまま地中へと潜っていった。

やっこのことでも手に入れた新しいヤド。

その時から、ブシザミの新たな砂原地域での暮らしが始まる。

そしてブシザミが砂原に適応し始める頃、それらはいずれやって来る。

新たな縄張りを求めて襲来する角竜と、新天地を巡り狩りへと挑もうとするハンター達が。

—
完
—

第5話 「女ハンターは見た」

人々の暮らしが落ち着き、徐々にその地域特有の文化が栄えるようになり、村にユクモという名がつけられた頃。

ついに、大陸を渡ってきたハンター達がこの大陸の自然に挑む時が来たのである。

しかし村は、周辺に強力なモンスターが入ってこないよう、村の安全の為に有力なハンターまたはギルドを雇わなければならない。

かといって発展途上であるユクモには大勢のハンターを雇えるほどの資金は無く、警備に加えて探索にも派遣に出せるほどの要員も多く無い。

ではどうするのか——それは新米ハンターを主なターゲットとした、狩猟よりも探索や採取を主とした依頼を発注することである。

職がある以上、成り立ての新人が現れ、いずれ玄人となるべく経験を積むべく働いていくのは当たり前。

ならば賃金が低くても、生存率が高く、土地勘を身につけ、自然に関する知識を生かすことができる依頼は必要不可欠とも言える。

ユクモ村で中心となっている探索関連の依頼は、新米ハンターにとってはまさに渡りに船。新たな地で己の名を広め、より広大な地に足を踏み出すべく、新米達はこぞつてユクモへと旅立っていくのである。

新たな狩猟、新たな生き甲斐、新たな旅、新たな夢を求めて。

今回からは、そんな新たな地での狩猟生活を送る、とあるハンターの成長もお見せしよう。

砂漠特有の灼熱の日差しに負けず、黙々と歩き続けている1人の人間がいた。

片手に飲み干したクーラードリンクの瓶を持っていたがそれを懐に仕舞い込み、代わりに双眼鏡を手を取った。

その双眼鏡で砂漠周辺を見渡すその顔は、好奇心と警戒心が程よく入り混じっていた。

ハンターシリーズと呼ばれる、ハンターなら一度は世話になるであろう防具を身に纏うその人物は、やはり成り立てのハンターだった。ただ、その人物が装備している防具は一般の物とは少々……いや、だいぶ形状が違っていた。

―ズバリ、胸辺りの膨らみ方がヤバイ。

そう、このハンターは紛れもない程にグラマーな女性だったのだ。ヘルメットからはみ出る程に長くストレートに伸びる、黒に近い蒼色の髪。

双眼鏡を離すことで見せる、眼鏡ごしでもわかる優しさと鋭さを思わせる切れ長の紅い眼。

そしてなんといつても特徴的なのは、その魅力的な体だ。異性なら必ずしも振り向きたくなくなるほどにグラマラスな身体は、彼女の型に合わせた特注の装備を用意せねばならないほど。

ハンターではなく受付嬢だったら間違いなく人気者だったろうに……なんて思わせるかもしれない。

彼女の名はアザナ。こうみえても成り立てほやほやの18歳である。

20歳にも満たずしてハンターになり、彼女の故郷である雪山の村から海を渡って新天地に辿り着いた。

若くして大陸を渡った理由。それは彼女の父にあった。

忘れもしない、あれは彼女が18歳になった誕生日の出来事……かつてハンターだった父曰く。

「娘よ、今日から世界を見て来い！」

……と言って、旅の荷物と共にその身体を無理やり入れられ、ユクモ村に行く貨物船に積まれ送り込まれた。

昼飯にドスファンゴを狩って焼いて持つてくる程に豪快で無茶苦茶な父だと知っていた彼女でも流石についていけず、二重の意味で流

されてしまった次第だ。

アザナは思い出しただけで溜息を漏らす。あんな奇行に比べれば軽いと、見ず知らずの土地でハンターの登録や住居の確保などをこなせてしまった自分が恐ろしい。

だが、旅立ち方はともあれ、旅立ち自体は彼女にとって好機には違いなかった。

幼少の頃から逞しい父の背を見て育ち、ハンターとしての心構えや知識を身につけてきた。

父の教育を生かし、憧れてきた大自然の世界を見るということに憧れてきたのだから、結果としては無問題だった。

厳しい環境であるはずの砂漠ですら、双眼鏡越し見る彼女の眼には、何もかもが目新しく楽しさですら覚える。

しかし今後この大地と向き合い続けなければならないのだから、気は緩めない。そういった自制にも長けていた。

現在の彼女の任務は、砂漠周辺の探索がてら、ジャギイを一定数狩ること。既に孤島地域を探索し、採取や戦闘の仕方がある程度学んだ彼女にとっては軽い仕事だ。

だが、彼女の故郷で言えばドスランポスに近いドスジャギイの眼を掻い潜り、その手下であるジャギイを討伐しなければならぬ。

孤島で初めてめぐり合ったドスジャギイは、ドスランポス以上に賢い鳥竜種なのだとその身を持って知った。

巧みに自分を使って追い込み、拳句の果てにハンターが踏み込めない地点へと逃がしてしまった強敵だ。

その依頼で知り合った先輩ハンターは、あのドスジャギイは相当歳を重ねている規格外な奴だと言っていた。

それでも、彼女は過去を経験に生かすタイプ。現在の武装でドスジャギイを相手にするのは難しいと判断し、こそこそとジャギイを手堅く仕留めることに専念するのだった。

そうこうしている内に、目標数まで残り一匹。その残り一匹を探して双眼鏡で周囲を探しているのだが……これが中々見つからない。

双眼鏡で見渡しながら、本来ならこんな用途ではないのだが、手に

持っていた盾を団扇に見立てて扇ぐ。

—ふと、アザナの身体は何かの存在を感知し、双眼鏡はある光景を目撃した。

「地中から何かが這い出てくる……っ！」

ふと眼で見た光景を言葉として漏らしてしまうが、幸いにもここは砂原から遠い地点。その正体が飛竜種だったとしても、そう簡単にはこちらの姿を見つけない。

心おきなく双眼鏡でその様子を見てみると、ようやく砂煙で見え辛かったその姿を捉えることができた。

その姿は、かつて父が大好物だった故に「鍋にしよう」と狩って来たモンスターに酷似していた。

丁度そのモンスターも、こんな砂漠が主な生息地としていたはずだ。

だから、その姿を見た時は驚いた。そのモンスターは、この地には居ないはずだったから。

「盾蟹……っ？」

鋼色をしていて、モノブロスの頭蓋骨の代わりにボルボロスの頭蓋骨を背負っている四足の巨体。

多少違っただけでも、地中から這い出たモンスターの姿はダイミョウザミにそっくりだった。

この地域に居ないはずのダイミョウザミだが、アザナは心当たりがあった。もしかしなくても、あれが砂漠地域付近の村に古くから知られていたモンスターだろう。

—曰く、そいつはボルボロスの頭突きを食らってもビクともしない鋼鉄の身体を持つ。

—曰く、そいつは毒を吐き、麻痺液を吹き、疲労させる濃霧をも放つ。

—曰く、そいつの鉄はとてつもなく硬くて力が強く、地面を叩けば地震を起こす程。

―曰く、そいつからの被害はほとんど無く、村人を襲った記録はまったく無い。

―曰く、そいつは中々姿を見せず、生態が謎に包まれている。

そんな力を秘めた盾蟹の変種。ユクモ地域で唯一の、そしてただ一匹の甲殻種。

ダイミヨウザザミにしてダイミヨウザザミにあらぬ猛々しきは、むしろ荒武者の名に相応しい。

戦国の時代を生き抜き、鎧姿で刀を振るって戦い続けた、荒く武き者。故に荒武者。

―故にその名は……アラムシャザザミ。別名「よろいがに鎧蟹」。

そんな鎧蟹だが、目撃例は少なく、長く砂漠付近で暮らす村人でもほとんど見かけないという。

遠くからとはいえ、ハンターとして鎧蟹を発見したのは自分が初めてかもしれない。

新たな出会いに興奮していたのも束の間、そこへ別の影を目撃することとなる。

ごろごろと鎧蟹の後方から転がってくる赤い玉。

ユクモで手に入れた書物で見たことがある。確かあればラングロトラと呼ばれる牙獣種だ。

知ってはいたが、こうして実物を見るのは初めてだった。

そんなラングロトラはアラムシャザザミに気づかず、またアラムシャザザミも後方からの存在に気づかなかった。

アザナがあつと声を漏らすよりも早く、二匹は激突。アラムシャザザミが平然としているのに対し、ラングロトラは逆に跳ね返されてしまう。

突然の邪魔者に腹を立てたのか、起き上がって威嚇の姿勢を見せるラングロトラ。

―しかし、それよりも先にアラムシャザザミが動いた。

条件反射だったのか、ぶつかってすぐにぐつと四足に力を込めて、一気に後方へと跳ぶ。その勢いは通常のダイミヨウザザミのバック攻撃の比ではなかった。

ボルボロスの頭突きのように跳んできたアラムシャザザミが、ラングロトラの腹部に直撃。

痛々しい音を立てて吹っ飛んだラングロトラは、そのままごろごろと転がっていき、谷間へと落ちていった。

—強い……。

それがアザナから見た、アラムシャザザミの感想だった。

余談だが、この後で背後からジャギイに襲われ、思わず振り返りにしてしまったことでクエスト終了。

依頼主に早急に報告しなければならなくなり、アラムシャザザミの観察を終えるしかなかった。

アザナは噂以上の情報を引き出すことが出来ず、残念な気持ちでしかなかったという……。

—完—

第6話 「アイルーの賢い生活の知恵」

もふもふの毛皮、可愛らしい猫耳、二本足で立つ小さな体躯、ぷにの肉球。

そう、我らハンターが愛する頼もしいマスコット、獣人族のアイルーである。

彼らは人間並の賢い知能を持ち、集落を築き、互いにコミュニケーションを取ることができる。

同じくメラルーという種族もいるが、彼らも正確にはアイルー科に属しており、つまりはアイルーに違い無い。

その証拠に、彼らも人間同様の器用さと賢さを持ち、集団行動で生き延びてきた種族だ。

だが若干の血筋の違いか、悪戯好きな性格が災いし、常に迷惑な行動を起こすようになったというわけだ。

モンスターが蔓延る自然に集落を築いて生きてきた辺り、彼らは人間以上に逞しいのかもしれない。

可愛らしい外見をしていても、彼らも自然の世界に生きるモンスターには違いない、ということだろうか。

さて、そんなアイルー達の行動範囲は広い。草木が生える森ならともかく、彼らは驚くべきことに砂漠にすら生息している。

というのも、砂漠周辺に住むようになったのは、実は人間という存在が現れるようになってからである。

元々アイルー達には人間に近い言語がある程度発達しており、話し合いには困らなかった。

—そんなアイルー達と人間との関連性……それは簡単に言えば売り手と買い手という間柄だ。

人間達は砂漠に眠る化石や鉱石などを求めており、それをアイルー達が採取し、対価として食料や生活用品を渡す。

小さな村に住む人々にとって、ある意味でハンター以上に自然の脅威を知っているアイルー達は頼りになる存在だ。

アイルー達にとっても、自分達には出来ない調理方法で作った食料

は魅力的で、それに見合った対価を払うのは当然だと思っている。

ハンターのようにモンスターは追い出せないが、物々交換という点に置いてはハンター並の活躍を見せている。

人間とアイルーの間柄は、こんな昔から築かれていた、ということです。

そんな砂漠出身のアイルー達の今日の主なターゲットは、サボテン。

だが、ただのサボテンだと思っ無かれ。サボテンは保水性が高い植物で、水が豊富に含まれている。

砂漠では水こそが命。村人もアイルーも、水の確保にサボテンを利用することは多いのだ。

アイルー達は棘に注意しながらサボテンを根元から折り、水が漏れないように布で縛る。

取り過ぎて生えなくなることがないように、確保する量は一定数に留めておくのが礼儀だ。

一匹だけドジなアイルーが刺さった棘で泣き叫んでいるが、皆して大方終わったようだ。

ちよつと茶色が混ざったアイルーが他のアイルー達に指示を送り、移動する。

どうやら彼が今日のリーダーのようで、サボテンを背中に抱えた他の5匹が彼の後を追う。

―丁度いいから、あそこで休憩するニャー。

まだアイルーが人語を完全にマスターしていない頃なのか、猫語(？)で告げる茶アイルー。

やつと休めると思ったのか、隊員達(ドジアイルーだけは未だ棘が抜けず困っている)は溜息を零す。

砂に半分だけ埋もれている頭蓋骨に出来た影の下に集まり、アイルー達は座り込む。

皆が休憩する中、茶アイルーだけは、警戒の為か頭蓋骨の上に陣取って周囲を見渡していた。

お昼休みのようにのんびりしているアイルー達がいる中、異変は起

きた。

グラグラと地面が揺れ出したではないか。アイルー達は揺れ出した地震に慌てるが、それを茶アイルーが制した。

—心配しニヤくていいニヤ。これはきつと……。

茶アイルーはその地震の正体を知っているのか、しっかりと頭蓋骨にしがみ付いた。

そしてその頭蓋骨がゆっくりと浮かび上がり、ある姿が地中から現れた。

その正体を知った途端、アイルー達は、なーんだ、と安堵したではないか。(ドジアイルーは砂を被ってしまった)

その正体は、アイルーでもご存知のアラムシャザザミであった。

なるほど、ボルボロスの頭蓋骨にしては大きいと思ったら、彼の物だったか。

アイルー達は起き上がったアラムシャザザミを見ても逃げ出すそぶりは無い。

というのも、この鎧蟹は砂漠周辺に住まうアイルー達にはお馴染みで、危害さえ加えなければ安全だと理解していた。

いやむしろ、賢いアイルー達にとって、アラムシャザザミは便利な存在だったりするのだ。

起き上がったアラムシャザザミは、食事時だったのか、その大きな足を動かしてゆっくりと歩き出す。

それを見計らった茶アイルーは、皆乗るニヤ、と手を振って登ってくるように部下に伝える。

隊員アイルー達は躊躇せずに頭蓋骨に跳び移る(ドジアイルーは不運にも足にしがみ付いてしまった)。

そのまま各々が頭蓋骨の上で寛ぎ始め、茶アイルーに至っては頭蓋骨の頂でデルクス釣りを始めている。

このアラムシャザザミ、お昼頃になると食事所であるオアシスへと向かう事が多い。

それをアイルー達は利用して、アラムシャザザミに乗ることで移動を楽にしたのである。

まるで馬車のような扱い方だが、そんな些細なことを気にするよう
なアラムシャザザミではない。

一匹の鎧蟹と7匹のアイルー達（ドジアイルーはデルクスに襲われ
ている）の旅路は、ゆっくりだが安全なのだ。

やっと辿り着いた砂漠のオアシス。日の光を避けたこの地は、休憩
するにはもってこいだ。

アラムシャザザミが好物のキノコを食しているのをいいことに、ア
イルー達はヤドから跳び降りて地面に着地。

水分補給も兼ねて再度休憩に入ることにした（ドジアイルーは疲れ
て倒れこんでしまった）。

しかし休んでいるのも束の間。襲撃者は突如として現れた。

アイルー達の野生の勘が働き、すぐさま大きな岩の陰へと避難する
（疲れていたドジアイルーも必死に着いてきた）。

大きな影を作って、それはアラムシャザザミの頭上から舞い降りて
きた。

その正体は雌火竜リオレイアで、ゆっくりと地面に着地した後、威
嚇を込めた咆哮を挙げる。

だがアラムシャザザミは食事に忙しく、リオレイアの相手をする気
が無いらしい。

黙々とキノコを食べ続けるアラムシャザザミを前に、無視されたり
オレイアは軽く怒りを露にした。

そっちがその気ならばと、すうつと息を吸い込み、その息に火炎を
加えて吐き出す。

リオレイアが得意とする爆撃ブレスが、アラムシャザザミごと放射
状に広がっていく。

アイルー達は物陰に隠れているからよかったものの（ドジアイルー
の尻に火の粉が飛んだ）、アラムシャザザミは避けようとしなない。

―いや、一応は効果があったようだ。

いくら熱に強くとも、鉄で出来た身体に高熱の炎を当てれば急激に
熱くなり、驚きもするだろう。

アラムシャザザミはびつくりしたようにその場で暴れ出し、熱した身体をオアシスに飛び込ませて冷やす。

じゆうつという嫌な音を立てて落ち着いたアラムシャザザミを前に、リオレイアは更なる追い討ちを掛ける。

ドスドスと陸の女王に相応しい力強い脚で地面を蹴り、その巨体で体当たりを仕掛けてきたのだ。

しかしこのアラムシャザザミは、妙に好戦的なボルボロスの突進を何度も受けてきた。いくらリオレイアの方が大きいとはいえ、その程度の体当たりではびくともしない。

むしろ当たり所が悪かったのか、突進してきたリオレイアが痛そうに悶え出したではないか。

ここでアラムシャザザミの反撃。倒れていることをいい事に、大きな剣を両方とも振り上げ、一気にリオレイアに叩きつける！

叩きつける音と骨が軋む音が響いた中、リオレイアは気絶。どうやら頭を強く打ったらしい。

ぴくりとも動かないリオレイアを前に、アラムシャザザミは終わったと悟ったのか、ゆっくりと移動を開始する。

隠れていたアイルー達は拍手喝采を送りながらその後を追う（ドジアイルーは倒れたと同時にアイルー達に踏まれてしまった）。

さすがはアラムシャザザミだニヤ、と茶アイルーは賞賛の言葉を呟いた。

そして夕暮れ時。腹いっぱいになったのか、あちこちを食べ歩いてきたアラムシャザザミは地中へと潜り出す。

その様子を眺めてから、夕日色に染まったアイルー達は自分達への集落へと帰っていく。

収穫も十分取れ、安全に一日を送れ、今日もこうして無事に過ごせた（タンカで運ばれているドジアイルー以外は）。

明日も頑張つて働こう。それが茶アイルーの、既に居ないアラムシャザザミを見て思ったことだった。

アイルー達は賢く、人間以上に野生を知っている。そんなアイルー

達にとって、アラムシャザザミは便利な用心棒兼乗り物として重宝していた。

野生の草食種も、人の手が加われれば車を引く便利な家畜として生まれ変わることができる。

将来ハンターの敵になりかねないアラムシャザザミも、今後によっては人々から様々な扱い方をされるかもしれない。

だが、未だハンターに詳しい生態を知られていないアラムシャザザミにとって、今は関係なかった。

とりあえず、アイルー達がどう扱おうとも、彼はただ日々をいつも通り過ごすだけ。

それだけが、彼の、いや全てのモンスターに言える野生の知恵なのだ。

ちなみに、リオレイアは気絶していただけで、ちゃんと生きてました。

—完—

第7話 「暴君と荒武者」

今、重低音が砂漠中に響き渡った。

金槌などといった鈍器で金属の塊を打ち付けたかのような金属音。相当大きな者同士が衝突しなければ生じないほどの大音量が、一体どこから発しているというのか。

その答えは、ジャギイシリーズで身を固めた女ハンター・アザナが持つ双眼鏡で目撃できた。

— 鎧蟹と角竜が激突している。

一方は噂のアラムシャザザミ。その分厚い鉄を合わせて盾にし、防御体勢を取っている。

そんなアラムシャザザミに挑んでいるのは、「砂漠の暴君」の二つ名を持つ飛竜—ディアブロス。

ボルボロス以上のパワーを持つ竜が全速力でアラムシャザザミにぶつかつた結果、先ほどのような衝突音が響いたのだ。

かつてハンターとして初めてアラムシャザザミを目撃したアザナ。そんな彼女だが、あの時から今まで、アラムシャザザミを目撃することができなかつた。

しかし今日は、当初以上に貴重な様子をその眼で見ることができたのだ。

それが、一方的ではない、明らかな闘争心を持って挑むアラムシャザザミの姿だ。

加えて、彼女の故郷では強豪と噂されているディアブロスを、この地で初めて見ることができた。

砂漠の暴君と荒武者の戦い。ハンターとして観戦……いや観察しない手は無い。

食いつくように双眼鏡で観戦しているハンターの存在など気づくこともなく、二頭は争い続けていた。

ディアブロスはこの地の縄張りを確保する為、1番の邪魔者であるアラムシャザザミを倒そうとしている。

だがアラムシャザザミはそんな縄張り意識はなく、むしろ一方的に

攻撃されているから反撃しているに過ぎない。

なによりも、これほどまでに高い攻撃力と生命力を持つ生物を相手にすること自体、アラムシャザザミは初めてだった。

いくら甲殻に大量の鉱石が含まれているとはいえ、よくてカブレライト鉱石。限度というものがある。

アラムシャザザミの硬度と重量を上回るほどのパワーが、このディアブロスにはある。

かといって、ディアブロスもこれほどまでに強固な相手を知らなかった。若くも暴君の名に恥じない凶暴さとパワーは、今まで多くの飛竜を返り討ちにしてきた。

決して世間を嘗めているわけではなく、単純に豊富な戦闘経験とそれに似合う勝利の数から得た事実だ。

ダイミヨウザザミですら突き飛ばした経験もある彼だが、アラムシャザザミは別格だった。

世界は広い。各々が自身を強者だと思っても、それは自惚れでしかないと諭されるほどに。

巡りあってしまえば、嫌でも互いの力を知り、己よりも上が居ると思い知らされる。それが野生の世界だ。

接近戦に持ち込んだディアブロスだが、アラムシャザザミは鋏で角の行く先を塞ぎ、刺されまいと防御する。

するとディアブロスは、角を地面に突き立てたかと思えば、アラムシャザザミを下から搦り上げるようにして頭を上げる。

両足に踏ん張りを入れ、若干だがジタバタともかくアラムシャザザミを持ち上げることに成功した。

このままではひっくり返ってしまうが、鋏は空振りするし、水ブレスは一直線に飛ぶので当たらない。

そこでアラムシャザザミは、体内に含まれている麻痺毒を霧状にして噴霧。周囲を黄色い霧で覆った。

短時間だったうえに一定量を吸わなければ効果が出ないとはいえ、

ディアブ羅斯は若干吸っただけで麻痺毒に気づいたようだ。

濃霧の危険性に気づいたディアブ羅斯は持ち上げを中止し、すぐさま地中へと退避する。

麻痺の霧で難を凌いだアラムシャザザミだが、地中へ潜った音を察知した以上は安心しきれない。ディアブ羅斯ほど早くはないが、こちらも急いで地中へと潜り込む。

黄色い濃霧が晴れた頃には、二匹の姿は無い。だが地中を潜る音が周囲に響き渡っている以上、出てくるのは時間の問題だろう。

—今、地中で鈍い音が響き、地面が一部膨れ上がった。

どうやら地中でディアブ羅斯とアラムシャザザミが衝突したらしい。

ディアブ羅斯のパワーとアラムシャザザミの重量、そして互いの潜行速度が合わさることで、地震のような衝撃が周囲を襲う。

その激突の余波は凄まじく、遠くから見ているアザナにも若干の揺れを感じさせるほどだ。

やがて地中からアラムシャザザミが這い出て……というよりは投げ飛ばされた。

緩やかな軌道を描いて地面に激突するアラムシャザザミだが、幸いにもすぐに起き上がることができた。

しかし僅かな隙をも見逃すまいと、ディアブ羅斯が勢いよく地中から現れ、そのまま体当たりを仕掛ける。

完全に体勢を立て直したアラムシャザザミだが、この状態で霧を放つてもぶつかるだけだ。

ならばと両の鋏を広げ、ディアブ羅斯の頭部に生える角を鋏で挟み、動きを封じ込める。

しかしさすがはディアブ羅斯。鋏で頭部を押さえつけられていても、じりじりと押していく。

そのパワーを受け止めるだけの力をアラムシャザザミは有していたが、このままでは力負けしてしまう。

ディアブ羅斯は角を挟む鋏を振り払おうと頭を振るうが、アラムシャザザミの鋏は離れない。

もはや体当たりを仕掛けていたことなど忘れ、力強く首を振ってアラムシャザザミの鋏を振り払おうとし……。

—ボギンと、嫌な音が鳴った。

ついにアラムシャザザミの強力な鋏がディアブロスの立派な角をへし折ったのである。

それにより頭を振るってアラムシャザザミを振り払うことができなくなったものの、ディアブロスは気が気でない。

地面に刺さった己の角を見るなり、ディアブロスは怒りの余り黒い吐息を吐き出し、強烈な咆哮を上げる。

高周波にも耐性を持つているはずのアラムシャザザミだが、咆哮の前で後退りしてしまう。その様子は、まるで角を折ってしまったことに対して罪悪感を抱いているかのようにだった。

太陽が地平線の彼方へと沈んでいき、月が浮かぶ頃。夕焼けを通り越して星が映える夜空が広がり、生き物達を眠りへと誘う。

だが例外もある。夜行性の生き物と、この二頭の存在だ。

荒い呼吸を繰り返す、片角のディアブロス。ぐったりしている、傷だらけのアラムシャザザミ。

時間ギリギリまで観察していたアザナが帰った後もぶつかり合いを続けていた二頭は、いつしか互いに傷だらけになり、睨み合う程度に留まっていた。

ディアブロスはアラムシャザザミが放つ様々な毒で疲労が溜まり、アラムシャザザミは空腹で体力切れを起こしていた。

それでも互いに睨み合っているのは、隙を見せたらやられると思っているからだろうか。

しかしいつしか夜になったと気づけば、さすがに諦めるべきだと悟ったようだ。

まずはディアブロスがアラムシャザザミに向けて軽く吠えようと、背を向けてゆっくりと歩き出す。

それに続くようにして、アラムシャザザミもゆっくりとした動きで地中へと潜っていった。

この勝負は引き分け、という結論に達したのだろうか。

いずれ雌雄を決めなければならぬ戦いだ、彼らは死ぬまで戦い抜くようなバカではないし、体力もない。

生き残る為には諦めが必要な時もあると彼らは理解している。だからこそ、退くという選択肢を選んだのだ。

そして、今回でお分かりいただけただろうか？

世の中には強い者が確かに存在する。それは弱肉強食の世界では当たり前前の事だ。

チート並に硬いアラムシャザザミでも、現時点では若いディアブロスと互角に戦えるレベル。

このディアブロスが後に「ユクモのマ王」と呼ばれる程の逸材だったとしても、それは未来の話だ。

上には上がいるのだ。それはアラムシャザザミも、若きディアブロスも同じ。

頂点はまだまだ先にある。それを目指す為に、彼らモンスター達は日々成長を繰り返さなければならぬ。

―それが、モンスターにとっての「生きる意味」なのだから。

余談だが、この日を境に、砂漠での頂点はアラムシャザザミとディアブロスとなった。

しかし好戦的で誇り高いディアブロスはそれを許さず、何度かアラムシャザザミに戦いを挑むようになった。

とはいえ、今回のような生死を分けた戦いではなく、ディアブロスの一方的な喧嘩程度に収まっただけ。

それでもアラムシャザザミにとっては迷惑でしかなく、良くて逃げ、悪ければ喧嘩に付き合う他なかった。

二匹の頂上決戦は頻繁に行っており、運よくお目にかかれるハンターが多くなったとか。

一方、ユクモ村のとあるハンターギルドでは。

先ほどお偉い方にディアブロスとアラムシヤザザミの戦闘を報告し終えたアザナ。

彼女は、最近になって出てきたという温泉に身を浸らせながら、ぼーっと夜空を眺めていた。

憎き湯煙が彼女の裸体や水面に浮かぶモノを見る権利を邪魔するが、当人はそれどころではなかった。

彼女の頭の中では、今日の争いが鮮明にリプレイされていた。

重量級がぶつかり合い、広範囲かつ多種類の猛毒、それに耐える角竜、突進を受け止めた鎧蟹。

かつて彼女の父が聞かせてくれた老山龍との戦いよりもスケールは小さいが、それ以上に迫力があつた。

現在の彼女が戦える相手といえば、精々ボルボロス程度。あの領域には到底及ばない。

ユクモ村で一番強いと噂される、ナルガクルガを討伐した経歴を持つハンターにだって、あの二匹に勝てるかどうか……。

そもそもこの地は未だ解明しきれていない。それこそ、あの二匹を超える古龍種も存在している可能性だってある。

—強くなりたい。そして戦ってみたい。

父譲りの闘争本能と好戦的な性格は、彼女の向上心と野心を掻き立てていた。

震える身体を抑え、あの二匹の戦いを間近で見たいと思った自分を抑制できたのが奇跡にも思えてきた。

あの域に到達するには、より強い素材を手に入れ、技を磨き、心身を鍛えなければ。

長い先に目標を築きあげたハンターの成長は凄まじい。それは夢の大きさに比例する。

挫折も多くなるだろう。だが彼女の眼には、まだ見ぬモンスターと戦う自分の姿が見えていた。

—モンスターも成長するように、人間も成長していく。

―いずれ、互いがぶつかり合うことを想定して……。

ちなみに、このユクモ村の温泉は混浴である。いくらタオルで巻いているとはいえ、そのナイスバディな流体線は隠し切れない。

いつのまにか入ってきた男数人がこちらを見ていることに気づいたアザナは、恥ずかしさのあまりリオレウスの咆哮にも負けないほどの絶叫を上げたそうなの。

―完―

第8話 「進め！火山に行き隊！・前編」

今、郵便配達を生業としている一匹のアイルーが郵便帽を被ったガーグアの背に乗り、砂漠を立ち去っていった。

この時代にも手紙というものはあり、それを書いて出す者、届けに行く者、そして受け取って読む者の3つが居る。

それは人間もアイルーも、そしてメラルーも同じだ。

先ほどの郵便アイルーから手紙を受け取った、青が混じった黒い毛並みが特徴的な一匹のメラルー。

他のメラルー達がそれぞれ手紙を読み終えて好き勝手しているというのに、その青メラルーだけはじつと手紙を見続けていた。

大小様々な肉球のスタンプが意味ありげに並んでおり、獣人族特有の文字で綴られている。

人間からしたらちんぷんかんぷんだが、青メラルーの目から涙が溢れている所を見る限り、その手紙の内容は悲しいものらしい。

鼻を鳴らしながら、青メラルーは砂漠の青空を見上げる。そこには大きな白い雲が流れていた。

彼の目には、雲の上から手を振って自分の名を呼ぶ、老夫婦らしき二匹のメラルーが見えていた。

手紙を握り締めてポタポタと涙を零す所からして、その手紙は故郷の両親からの手紙のようだ。

そりや泣きたくもなるだろう。両親に会いたくなくてたまらなくなるのだから。

だが、彼の故郷は火山の麓にある。砂漠から歩いて向かうには遠すぎる。両親の下から旅立ち、砂漠で中間のメラルー達と上手くやっている青メラルーだが、流星に長い旅路を一人で行くのは難しい。

なにせこの時期だと、アイルーやメラルーが行商の為に通る道に大型のモンスターが見えるようになるのだ。

モンスターがいるとなれば、さすがに渡ろうとは思わない。渡ろうとすれば喰われるのがオチだ。

だが青メラルーの気持ちは変わらず、むしろ強くなる一方だ。

—両親に会いたい。

—お土産に竜骨結晶を持ってきて両親を驚かせてやりたい。

—親父のツルハシを振る姿が見たい。

—お袋の作る、紅蓮石で焼いたこんがり魚が食べたい。

青メラルーの頭の中では、かつての暖かく、そして懐かしい記憶の映像を再現していた。

悪戯好きなメラルーにだって、親孝行したくなる時があるものなんです。

—さて、どうするかニヤ。

だからといって、感情に任せてモンスターの蔓延る道へ出掛けて行くほどバカなメラルーではない。

いくら行きたいという気持ちが強かったとしても、目の前の問題が事前に解決してくれるはずがないのだし。

大型モンスターを上手く避けつつ火山へ向かう事ができるかどうか。それが目の前にある課題だ。

途中の溪流付近に村があるはずだから、道中で食料と水の補給はできる。後は移動手段だ。

これが厄介で、移動手段でお馴染みのガーグアやアプトノスでは、大型モンスターに食べられてしまう。

せめて旅路に連れて行けるモンスターが強い奴だったら……そこまで考えて、青メラルーはあることに気づいた。

—そうニヤ、『奴』ニヤら使えるかもしれない。

あるモンスターの姿と実力を思い出した青メラルーは、そのまま考え込む。

腕を組んで首を傾げている青メラルーの姿を見た他のメラルー達は、何しているのだろうかとうと首を傾げる。

やがて一匹のメラルー（どうやら青メラルーの友達のようなだ）が青メラルーに声を掛けようとするが……。

—閃いたニヤー！

頭の上で雷光虫が光り輝いた青メラルーが突然叫び出した。

それを間近で聞いた友達メラルーは驚きのあまり気絶してしまっ

だが、張本人の青メラルーはそれどころではない。

その表情はとても活き活きとしており、興奮ではしやぎまわっているほどだ。

—これで故郷の両親に会いに行けるニヤ!

我ながら天才ニヤ!としきりに騒ぐ青メラルーを見て、より深い角度に首を傾げるメラルー達。

家族も大事だろうが、まずは友達を大事にしてあげなさい。

さつそく青メラルーは行動に移すことにした。

まずは火山に行きたい者と溪流に行きたい者を中心に旅路を共にする仲間を集める。

商売をしに行きたい者も居れば、青メラルーと同じく故郷の家族に会いに行きたい者と、結構な数が揃った。

続いて先ほど浮かんだ、火山と溪流に向かう為の移動手段を教える。彼のアイディアは仲間内からは好評で、上手く行けば今後の行商にも使えるかもしれないと言われた程だ。

次に旅の支度。これは仲間達と一緒に集めたり揃えたりしていく。十分な食料と水、テントや日よけの布など、キャラバンとしての装備を充実させる。

最後に『奴』の確保。これが一番重要だ。

なにせモンスターが相手なのだから、いくらいけそうだとはいえ、こればかりは運任せだ。

しかし確信に近い物がメラルー達にはあるようで、意気揚々と『あれ』を採取し始める。

—メラルー達の企みは、着々と準備を進めていくのだった……。

所は変わって、とある砂原。今日もデルクス達が元気良く泳ぎ回っている。

灼熱の日差しを受けているにも関わらず、アラムシャザザミは暢気に食事を満喫していた。

本日の昼食は、毒水ブレスで仕留めたりノプロス。肉を鋏で千切り、それを食べる。

最近ではキノコの生え具合や植物の育ちが悪いらしいので、こうして肉を食らう事にしたのだ。

というのも、ディアブロスが現れ砂原の縄張りが分断された日から、食べる場所が徐々に限られたからだ。

アラムシャザザミからしてみればディアブロスは避けたい相手なので、なるべく彼の縄張りには入らないようにしている。

何せ出会う度にどつかれるのだ。同じくよく頭突きにくるボルボロスならまだしも、彼となれば話は別だ。

そんなこともあって、彼の縄張り内にある食べ物を我慢しているおかげで、最近はどうも食い足りない。

肉でも魚でも鉱石でも食べられる雑食性だからいいものの、彼としてはキノコを存分に食べたいようだ。

それでも、鋏で挟める物はとりあえず食べる。それがアラムシャザザミの悲しい食性だった。

黙々とリノプロスの肉を食べていると、アラムシャザザミのすぐ上に何かが見えた。

なにかと思ってみ上げてみれば、なんと彼が最も好む希少なキノコ、マンドラゴラが浮かんでいるではないか。

しかも沢山。数にすると10本程度だが、アラムシャザザミにとつては宝の山にも見える。

希少な上にこしばらく食べていなかったのか、視線は宙に浮かぶマンドラゴラに夢中だった。

さっそく頂こうと鋏を伸ばすが、ひよい、とマンドラゴラが距離を取るべく離れ出した。

人間なら不思議がるなり怪しむなりするだろうが、残念ながらアラムシャザザミはモンスター。発達していない知能はマンドラゴラに鋏が届かないだけと判断し、ゆっくりと歩き出して取ろうとする。

それでもマンドラゴラに鋏は届かない。だから歩く。届かない。歩く。でも届かない。また歩く。

もはや執念とも言える食性が彼にはあり、それを原動力に徐々に歩行速度を上げるのだった。

—こいつバカじゃニヤいか？

—いや、単に食い意地が張っているだけだニヤ。

マンドラゴラを詰め込んだ網を吊るしている竿を握り締めながら、2匹のメラルー達は呆れたようにアラムシャザザミを見下ろした。

宙に浮かぶマンドラゴラの正体——それはメラルー達の仕事だったのだ。

旅の荷物をヤドごと雁字搦めにロープで巻き、数匹のメラルー達がヤドの頂上に居座って周囲を見渡している。

青メラルーが閃いた、火山へ向かう為の安全な方法。

それは餌でアラムシャザザミを誘き寄せ、馬車に見立てるという事だった。

長年に渡り砂原でアラムシャザザミと付き合っていた彼ら一族だからこそ、アラムシャザザミの生態を良く知っている。

それはつまり、アラムシャザザミの食性や食い意地、そしてマンドラゴラを好んでいる事を知っている、ということだ。

加えて暢気な性格だからこそ、自分達に危害が及ばず、かつ餌で釣られる単純さがあるだろうと確信したのだ。

加えて、アラムシャザザミはここいらの砂漠の中では一番強いモンスターだ。ディアブロスという同格もいるが、奴とは比べものにならない頑丈さと安心さがある。

旅路に出会うモンスターにだって簡単には負けないし、村人をむやみに襲うことも無い。

そんな彼を用心棒兼移動手段にして進めば、きっと安全に旅路を歩むことができるはず。

そして今に至る。

竿で吊り下げたマンドラゴラを原動力にアラムシャザザミを動かし、移動手段兼用心棒として旅をする。

とりあえず餌で釣れたことだけでも大成功だ。旅の荷物にも気づ

かないし、乗り心地も悪くない。

後は、旅の目的地である溪流付近の村と火山地域に辿り着けるかが問題だ。どこかでバレないかも不安だ。

だが、発案者である青メラルーには確信に近いものがあつた。きつと上手くいくと。

―そして何より、これで両親に会いに行けるといふ小さな希望が、彼を新たな挑戦へと導いたのである。

そんな彼らの企みなど露知らぬアラムシャザザミはといえば。

食べたいという欲求ばかりが彼の脳ミソを侵食し、必死にマンドラゴラを追いかけていた。

こうして、アラムシャザザミとメラルー達の、火山へ向かう旅が始まったのだつた。

―おいこら勝負しろやーっ！

なお、上記の台詞はイメージです。

地面から突如として姿を現したのは、砂原のもう一匹の支配者、ディアブロスである。

今日も自分からアラムシャザザミの縄張りを侵し、それをきつかけに争いを仕掛けようと張り切っていた。

しかしそこにあるのは食べ残しのリノプロスの死骸と、それに貪りつくジャギイ達だけだつた。

ジャギイ達はすぐに逃げ出したが、ディアブロスはそんなこと気にせず、呆然としていた。

―おかしい。ここにいると思つたのに。

アラムシャザザミに喧嘩を売ろうとあちこちを回つたのに、何故居ないのか。

先ほどメラルー達の陰謀(?)によって火山へと出発したことなど知らぬディアブロス。

砂漠の暴君たる証を見せ付けるべく挑んできたというのに、これはどういうことか。

呆然と立ち止まるディアブロスには、どことなく哀愁が漂っていた。

もし今の彼に効果音をつけるとしたら、こんな感じになるかもしれない。

—シヨボン

—完—

第9話 「進め！火山に行き隊！・中編」

生え渡る新緑の木々。穏やかに流れる川。活き活きとしたモンスタ―達。

ここは溪流。季節が変わる毎にその全貌を変える、自然豊かな土地。

孤島とは違った自然の育み。その理由は山から湧き出て川となっている水にあつた。

澄み渡る透明度を誇るその水は、草木を育て、川魚を繁栄させ、モンスタ―達の喉を潤す。

草木が育てば、モンスタ―の餌になるばかりでなく、昆虫の住処になり、キノコ類の苗床となる。

清らかな水がこの自然を育てたといつても過言ではないだろう。

豊富な自然の恵みがあるからこそ、人々はここに集落を作った。

ここには、人間の主な住処とされるユクモ村より離れている、林業が盛んな小さい村がある。

頑丈でしなやかな木は居住地を作るには持つて来いで、あちこちに木造建築が立ち並んでいた。

また、この強度の高い木のおかげで林業が盛んで、この地の特産物として世間から注目を浴びているほどだ。

だがしかし、全て万事OK、と行かないのが自然である。

豊かな自然の恵みは、人々を繁栄させるだけでなく、大型の肉食モンスタ―を育てる要因にも繋がる。

現にこの溪流には様々な肉食モンスタ―が蔓延っており、危険性も高まっている。

雑食性で食いしん坊な牙獣種アオアシラ、同じく牙獣種だが突進で大抵の物を破壊するブルファンゴ、ユクモ地域に広く生息しているドスジャギィ。

リオレウスやディアブロスに比べれば弱いとはえ、ハンターでない村人から見れば脅威でしかない。

ではどうするのかといえば、やはりハンターの力を借りるのが妥当

だろう。

アオアシラやドスファンゴなど、広く多く生息しているが、決して強敵とは言えないモンスター。

それらを村人が発見した場合、討伐または捕獲してもらおう為、ユクモ村でクエストを発注する。

ユクモ大陸中に若きハンター達が散らばっているとはいえ、それらは主にユクモ村を中心に活動している。

速達の郵便アイルーに出せばすぐにユクモ村に発注し、血気盛んなハンター達が数日内に駆けつけてくれる。

「だりやあー！」

—そして今日もまた、1人のハンターがアオアシラを討伐してくれた所だ。

鍾乳洞に続く滝の麓で、一匹のアオアシラと1人のハンターが浅い河の上で争っている。しかしその勝負は、つい先ほどの怒号と共に決したようだ。

ジャギイシリーズを着込んだハンターの太剣がアオアシラの腹部に向けて振り下ろされる。

重量感溢れる刃の一撃を受けたアオアシラの腹部が切り裂かれ、とうとう力尽きて倒れこんだ。

倒れてくるアオアシラに潰されないう、ハンターは斜め前に転がり込む。

起き上がった直後に振り向いて太剣を構えるが、アオアシラが動かないのを確認すると、緊張が解けたのか大きく息を吐く。

長きに渡る戦いだったのか、倒れたアオアシラの身体は傷だらけだった。

数多くの傷の中には、刀傷だけではなく、銃弾を撃たれた跡も幾つか残っている。それがどういう意味を表しているかというところ……。

「よー！とうとうアオアシラを仕留めたか！」

「お疲れ様だニヤー、若旦那さん！」

ようするに、剣士だけでなく、ガンナーもアオアシラ討伐に参戦し

ていたのだ。

ガチャガチャと金属音を鳴らしながら近づいてくる、一人のハンターと一匹のアイルー。

両者とも鉱石で出来た装備で統一されており、ハンターの方はインゴット、アイルーはアロイで身を固めていた。

ヘヴィボウガン『青熊筒』を片手で軽々と振り回すほどの豪腕を持つハンターの名は、アームス。

全身を鎧で隠しているが、笑顔とダンディな髭が自慢の（自称）若き怪力親父なんです。

「ありがとうございます、アームスさん」

疲労感と解かれた緊張感によって汗だくになったジャギイヘルムを脱ぎ捨て、アームスにお辞儀する。

汗で濡れたボサボサの紅い髪に、ある程度整った顔、頬に爪で裂かれた傷跡を宿した若き青年。

名はカリガ。彼もまた、大陸を渡ってやってきた、成り立てホヤホヤの新人ハンターである。

顔はどこかあどけなく、オマケに身体が細く近眼でメガネ持ちと、どちらかといえば体育系というより文化系のイメージが漂う。

どうして剣士なんかやっているんだという容姿だが、なんと彼は細身でありながら身長2mを越えているのだ。

おまけに結構な力持ち。これは大剣を振り回していなければ逆におかしいといえよう。

「はっはっは！次からは1人で倒せるように頑張れよ少年！」

「あだだだだ！」

自分よりも背丈の低い（それでも180cmと大柄である）親父から背を叩かれている、身長2mの青年。

傍から見ればシュールな光景である。年上なのはアームスの方なのだから仕方ないが。

「ニャ？」

そんな二人の様子を眺めていた（高みの見物ともいう）アイルーが何かを察したのか、あたりを見渡しだす。

「お？どうしたんだコテツ？」

「ニヤニヤ、なんかデカいのが近づいてきているみたいニヤ」

己のオトモアイルー・コテツに声を掛けるアームス。ちなみに今はカリガにヘッドロックを仕掛けている最中である。

酸欠して苦しんでいるカリガのことなど知らぬと言わんばかりに、周囲を見渡しながら答えるコテツ。彼は千里眼の術を会得している為、乱入してきたモンスターに敏感なのだ。

―乱入。討伐した直後に別のモンスターが現れたという警告。

モンスターは気配に敏感だ。大型モンスターが討伐されて亡くなったとなれば、それを察知し、己の縄張りだと主張して現れるモンスターもいる。

事前に狩猟環境が不安定だと確認していたが、まさか本当に来るとは。

アームスは無言でカリガを手放し、カリガは深呼吸をして落ち着いた後、己の武器―族長の大剣―を構える。

「いいか少年、まずは様子見だ」

「はい」

解っています、とヘヴィボウガンを構えるアームスを横にして呟くカリガ。

コテツもしきりに周囲を見渡すが、気配を完全に察知できたようで、そこへ案内しようと先導する。

ここでさつきと逃げれば安全のだろうが、この時期となれば話は違う。

生態が詳しく知られていないモンスターが多い今の時期、ハンターギルドは少しでも新たな情報を欲している。

過去に、新種のモンスターを発見し報告しただけで報酬を得ることができたハンターが居たほどだ。

ガセや出任せでない限り、新種のモンスターの存在や詳しい生態は解り次第ギルドに報告する。

それがこの時期のハンターの小遣い稼ぎ兼、情報収集でもあった。
そして二人と一匹が発見したモンスターはといえば……。

「これって蟹だよな？」

「ええ……蟹ですよね……」

「でっかい蟹だニャー」

砂原付近の村人の間では有名となっている、一部では守り神として奉るべきではと噂されている甲殻種—アラムシヤザザミ。

そんなモンスターがどうして、こんな森の中でキノコを黙々と食らっているのだろうか？

アラムシヤザザミの噂やある程度の生態を聞いていたとはいえ、これは面食らってしまった。

これでは乱入というより、通りすがりの食べ歩きに近い。現にアラムシヤザザミはキノコを食べまくっているし。

カリガはこのモンスターの後姿を見つめながら、ふとあることを思い出した。それは、自分と同じく新人ハンターである女性、アザナの事だった。

アラムシヤザザミの生態を初めて報告した第一人者として知られ、ここ最近になって急激な勢いで成長しているハンターとしても名高い。

たまたま砂原の情報収集として彼女を尋ねにいった時の、あの凛とした表情には惹かれるものがあった。

何かを目指してまっすぐに突き進んでいるかのような強い眼差し。そこに惚れたといっても過言ではない。

自分よりも二つ年下だが、そんな彼女と共に狩りをしていきたいというのが、彼の最初の目的でもある。

そんなことを考えていたから、あることを見逃してしまった。

—ドンツ！ガンツ！ドンツ！ガンツ！ドンツ！ガンツ！

なんと、アームスがヘヴィボウガンに火を点け、発砲したではないか！しかも3発！

空気を僅かに揺るがず砲撃音と、それを弾く金属音が交互に響き渡る。

その音を聞いてやつと我に還った頃には、アームスのあまりの大胆な行動に驚かざるを得なかった。

「ななななな、何しているんですかアームスさん!？」

「そうだニャー旦那さん!！」

彼のオトモであるコテツですらこの慌てっぷりだ。どれだけ大胆かはお分かりだろう。

アラムシャザザミは性格こそ大人しいものの、一度怒り出せばその名に恥じぬ攻撃性を見せ付けるといふ。

それは硝煙を放つ青熊筒を握っているアームスにも解っているはずだ。なのになぜ。

「うげ、弾あ弾きやがった!?!安物とはいえ貫通弾だぞ!?!」

「話聞いてくださいっ!！」

むしろ倒すつもりだったのか。アームスの驚いた反応を見てそんなことを考えてしまったが、それどころではない。

怒って暴れたりしたらたまらないと己の武器を投げ捨て、コテツと一緒にアームスから青熊筒を奪い出す。

「ちよ、そんなに慌てなくてもいいじゃねえか。ほれ、この蟹、余裕こいてガン無視だぜ?！」

武器を奪われた理由は解るらしく、少し驚いた程度に留まったアームス。

それでも落ち着いたようにアラムシャザザミを指差し、まったく襲ってこないことを伝える。

むしろアラムシャザザミの甲殻には傷一つなく、黙々と、そして美味しそうにキノコを食していた。

「だからって何故撃つんですか!?!」

「いやあ、俺って実はかなりのザザミソ好きなんだよ」

「命知らずにも程があるニャー」

コテツの言う通りである。大人しいモンスターを怒らせる馬鹿がいるか。

そんな二人の反応など知るもんかと言わんばかりに、ガツハツハと笑い出すアームス。笑顔が似合うナイスガイの二つ名は伊達ではない、ということか。

その後、一匹のメラルーが現れ、慣れない言語でハンター達に事情を説明。

コテツの通訳も加えると、メラルー達はアラムシャザザミを使って砂原からやってきたと言う。現在メラルー達は溪流の村で商業と採取をしており、しばらく滞在するんだとか。

ではアラムシャザザミはどうするのかといえば、メラルーが交代して見張らせるから、しばらく放置するらしい。

村人にもハンターにも忠告しておけば襲う事も無いだろうから安心しろ、とはあの青メラルーの談。

本来なら信じられない話だが、これまでの噂や生態系を聞く限りでは、あながち嘘だと言い切れない。

―ハンター達が心配しようにも、当蟹は平然と餌を食べて大人しくしているのだから。

余談だが、カリガ達はアラムシャザザミが溪流に現れた事を、ユクモ村のハンターギルドに報告。

ギルドは警戒と村の護衛の為にユクモ村からハンターを派遣し、アラムシャザザミの様子を見る事にしたようだ。

この依頼にあの女ハンター・アザナが食らい付かない訳がなく、まっさきに依頼を受注。

溪流で発見したカリガも受注する流れとなり、数日間のみだが、アザナとチームを組む事になった。

何気に夢の叶ったカリガだが、アザナはそんな彼の事など気にも留めず、密かに宿るファイティングスピリットを燃やすのだった。

そんなハンター達のことなど知らぬアラムシャザザミはといえば。頭突きを仕掛け頭を強く打って気絶しているドスファンゴをほつといて、暢気に魚を食らっていた。

ちなみに彼の背後では、ドスファンゴを討伐し終えた後も、ザザミソ狙いと負けん気で攻撃を仕掛けるアームスが居た。

尤も、今の彼の武器で撃てる弾では全て弾かれてしまい、存在すら気づいてもらえなかったようだが。

—完—

第10話 「進め！火山に行き隊！・後編」

それは、溪流の村で発注されていたクエストから始まった。

この間、眠れなくて村の外れを歩いていたら、ズシン、ズシンって地震が起こったんだ。

慌てて村の皆を起こしに行ったんだが、皆は地震なんか無かったっていうんだよ。

例のアラムシャザザミが出歩いているし、そいつの作業じゃないかって皆は言うんだが、本当にそうなのか？

このままじゃ、気になって益々眠れなくなっちゃうよ！頼む、ハンターさん！謎の地震の正体を暴いてくれ！

―狩猟環境不安定

―不眠症気味な村人より

このクエストを見たアザナは、アラムシャザザミの警戒と観察（という名目の敵前調査）の為、即座に受注。

それに付き合わされるように同じクエストを受注するのは、彼女の期間限定の相方であるカリガだ。

観察は人数が多い方が良いとはアザナの談だが、惚れた弱みというべきか、普段なら不安がるカリガは躊躇無く賛同した。

ついでに地震の正体であろう、尾槌竜ドボルベルクの調査も考慮することとなり、準備を整える。

ちなみにアームスは、とうとうアラムシャザザミの怒りを買ってしまい大怪我を負った。

命に別状はなかったものの、大怪我には違いなので、ユクモ村で療養中だ。全治1ヶ月。

この時代では、ユクモ地域のモンスター生態系を調査することを主な目的とされている。

発見や観測こそされているものの、討伐や捕獲の回数は少なく、未だ解明されていない点が多い。

例えば、近年になって溪流付近で発見され、調査員や新人ハンターの観察記録が多数ある獣竜種・ドボルベルクがいるとする。巨大な身体にハンマーのような尻尾を持つ、木を主食とする草食性の大型モンスターだ。

だが、そこまでしかハンターギルドは解って居ない。いくら姿形、食性や特徴を理解していたとしても、解っていない箇所は多い。

例えば攻撃手段だとか、凶暴性の有無だとか、有効とされる素材が剥ぎ取られるかどうかなど。

しかしこの時期はまだ装備が不足しており、ジャギイやアシラといったシリーズが最新鋭だと云われているほど。

ドボルベルクのような大物はベテランのハンターぐらいでしか倒すことができないが、人数が少ないのが現実だ。

詳しい情報を知るには、一定数の討伐・捕獲を繰り返すなりして戦闘記録を作成しなければならない。

さらにそのモンスターの亡骸をハンターギルドの拠点に送り込み、解剖して肉質や材質を詳しく調べる必要がある。

リオレウスやナルガルクといった既知のモンスターなら、多少の肉質や性質の違い程度で済ますことができる。

しかし、このユクモ地域は近年になって発見されたばかりの新しい土地だ。新たなモンスターが見つかる可能性は高く、発見する度に詳しい調査や解明をしていかなければならない。

つまり、新たなモンスターから装備品を作り出すには時間がかかるのだ。

もちろん、ユクモ村にも立派な職人さんは居る。笑顔と元気が取り得の粋な職人さんだ。

彼は豊富な技術と技量を持って大陸を渡ってきたが、それでも知らないモンスターからいきなり装備品を作ることにはできない。

どんな肉質か、どんな性質を持つのか、切れ味はよくなるのか、どのようなデザインにすべきか。

素材の質を知り尽くしているからこそ、レウスシリーズやナルガシリーズといった優秀な防具や武器を作れるのだ。

調べてもいない素材を使ったとしても、すぐにはできず効率が悪いだけである。

だからこそ、できる限り新種モンスターの詳しいデータや観測記録を必要としている。その代表格がアラムシャザザミであり、ドボルベルク、ということだ。

そして当日の夜。地震の正体はあつと言う間に姿を現した。

—ガツンッ！

とある河にて、重々しい金属音と地鳴りが岩場に隠れている二人に襲い掛かる。

身体が揺れることで、カリガはついアザナの揺れるモノを見てしまうが、肝心のアザナは目の前の光景に夢中だった。

尾槌竜ドボルベルクと鎧蟹アラムシャザザミが争っている。

この渓流の頂点に君臨するドボルベルクから見たら、アラムシャザザミは侵入者でしかない。

自慢の尻尾をアラムシャザザミに叩き付けるが、ガード体勢に入っていた為、両の鋏で防がれてしまう。

しかし、さすがの鋼鉄の殻を持つアラムシャザザミでも、ドボルベルクの尾槌はキツイようだ。

このままでは鋏が壊れてしまうのと思ったのか、すぐに体勢を崩し、二度目はバックジャンプでかわした。

これを見たアザナは珍しいと思った。しかし、無理の無い話だと納得も出来た。

ディアブロスにドボルベルク。これら二匹は解り易いまでのパワータイプだった。

あの二匹のパワーを前にすれば、流石に暢気なアラムシャザザミも危機感を抱き、戦わざるを得ない。

逆に言えば、ドボルベルク並のパワーが無ければアラムシャザザミに攻撃は通らない、ということだ。

あれほどまでのパワーを生み出すには、やはり人間の筋力だけでは足りない。やはり武器や防具の強化は必須か……アザナは尾槌竜と鎧蟹の激戦を見ながら、そんな事を考えていた。

—そんな時だ。カリガが異変を察知したのは。

(アザナさん、アザナさん)

コツコツと肩を叩かれてやつと我に戻ったアザナは、何かとカリガを見る。

そういえばいつも思うのだが、カリガの方が自分より年上なのに、何故自分をさん付けで呼ぶのだろうか？

二つ下なんだから気にするなといつも言っているのに……いつ直るんだろうか。

(どうした?)

(周りの様子が変です)

(周り?)

小声でそう言われて、二匹の争いを眺めていた視線が横へと向いた途端、目の前を横切る黄色い光が視界に入った。これは雷光虫だったか。

しかし、一匹だけではない。彼女の視界には、溪流中の雷光虫らしき光が溢れかえっていた。

これだけでも異変だというのに、ガークアやケルビが一斉に同じ方向、しかし雷光虫とは反対方向へと逃げていく。

—何かが来る。

そんな予感がカリガにも過ぎったのか、二人同時にガークア達に混ざって避難することに。

幸いな事に、ドボルベルクはアラムシャザザミに頭を押し付けているのに夢中のようなのだ。

二匹に見つかることなく横を通り過ぎ、逃げるモンスター群れに混ざりこみ、距離を置くことに成功した。

この位置なら、急いで後ろへダツシユすれば、すぐに安全地帯へ逃げ込むことができる。

—そして二人が物陰から二匹と雷光虫の大群を見つめていた時、そいつは現れた。

見たことも聞いたことも、ましてや今まで見たモンスターのどの分類にも当てはまらない姿をしていた。

雷光虫の群れに囲まれたそのモンスターは、飛竜のような翼は無いが、強靱な四肢を持って大地を踏み抜いている。

牙獣種のように体毛が生えているが、蒼い鱗も混ざっている以上、竜の類には違い無い。

なによりも、体中から溢れ出ている電撃とプレッシャーが、並大抵のモンスターの比ではなかった。

電撃はフルフル以上、プレッシャーはリオレウスやナルガクルガに匹敵するかもしれない。

そんな脅威性を物語るモンスターだからこそ、二匹の反応はそれぞれ違っていた。

アラムシャザザミはといえば、そのモンスターを前にして、一目散に地中へと潜って逃げた。ディアブロスやドボルベルクですら相手することができるアラムシャザザミが、だ。

知能は低いものの、相手の姿を見ただけで強いと本能で理解したのかも知れない。

何にしても、そそくさと逃げ出す程の何かを感じたのには違いないだろう。

一方のドボルベルクはそうではない。両者の大きさの問題で自分よりも弱いと思っただのか、逆に意気揚々と立ち向かってきた。

長きに渡る溪流の頂点故の傲慢さか、それとも己のパワーを信じた自信からか。

だが、そんなドボルベルクを前にしても、蒼と金色の獣のようなモンスターは立ち止まらない。

その身体に雷光虫達を纏わせ、前足がしっかりと地面を踏みつけ、唸り声を上げる。

すると、無数の雷光虫から電撃が放たれ、それがモンスターに蓄電

していくではないか。ドボルベルクが何をするのかと威嚇するが、それでも蓄電は止まらない。

—嫌な予感がする。

(逃げるぞ、カリガ)

(え？けどこの距離なら……)

(いいから！)

野生の勘による生存本能か、あるいはプレツシャーに押し負けただけか。アザナはカリガの腕を掴み、安全地帯に向けて走り出した。

その勢いと強さは、彼女よりも高身長である彼を容易に引つ張り出したほどだ。彼女の力強さを物語らせる。

—オオオオオオン！

遠吠えが背後で轟いた直後、凄まじい光と音が溪流中を襲った。

これではまるで……いやまさに雷が落ちたような音と光ではないか。

どうなったのか振り向いて見てみたいが、それを許せるほどの度胸が二人には無かった。

幸いなことにすぐそこに安全地点がある。ドボルベルクの調査も終えたし、一応は達成できた。

今はただ、狩人が野生の狩人を恐れ、逃げることでしかできなかつた……。

次の朝。溪流に住む村人達は、朝から奇妙な光景を目の当たりにしていた。

まずはアラムシヤザザミの出没。しかし村を襲ったわけではない。子供ですら平気で通り過ぎるほどのんびりとしたアラムシヤザザミ。そんな彼が忙しなく走っていたのである。まるで何かから逃げているかのよう。

これを見たメラルー達は大慌て。何せアラムシヤザザミが自分から走り出すとは思わなかった。メラルー達は急いで荷物を抱え、アラ

ムシャザザミの後を追うのだった。

そしてもう一つ。

これが村人にとっても、後日に報告を受けるハンターギルドにとっても衝撃的な出来事だった。

—それは、まるで雷に撃たれたかのように焦げていた、ドボルベルクの死体だった。

アザナとカリガの報告を受け、その証拠を見にやってきた村人とギルド関係者は大騒ぎ。

村人達は、今は見えぬ新たな脅威に怯えている。こんな巨大なモンスターを黒焦げにした程の相手なのだから、仕方ないだろう。

ギルド関係者は、ドボルベルグの解剖をしようだとか、新種モンスターの発見が先だとか、仲間内で揉め合っている。

強敵が現れた以上、その存在の確認だけでなく、それに対抗しうる装備を急いで作り上げたいというのが彼らの想いなのだろう。

アザナとカリガはといえば、ドボルベルクの亡骸を呆然と見つめながら、モンスターの脅威を改めて知ったのだった。

—ユクモ地域には、未だ発見されていないモンスターがいる。今回で学んだことは、それに尽きた。

霊峰に続く崖の上から眺めている、後に雷狼竜と呼ばれるようになるモンスター。

彼が見下ろす先に居るのは、若きハンター二人と、黒焦げになった元・溪流の主と、多くの人々。

しかしあれらへの興味が薄いのか見るのを止め、遙か地平線へとその鋭い眼を向けた。

—遙か地平線の先。雷狼竜ゾンオウガの眼には、暗雲と雷光が微かに映っていた。

—
完
—

第11話 「到着！火山へ行き隊！」

—これをお読みの皆様方へ。

—どうかお手元に厚手のハンカチと、感動の再会に相応しいBGMを用意してお読みください。

最初は夢かと思った。

それは、愛すべき夫と共に育ててきた、大事な愛息子の姿。

彼が独り立ちする頃の、仲間と共に火山の集落から旅立って行った息子の背中を、今でも忘れてはいない。

もちろん背中だけではない。父譲りの青み掛かった黒毛も、自分譲りの柔らかな眼だつてちゃんと覚えていた。

—そんな息子の姿が、目の前にあった。

思わず手に持っていた魚を落としてしまい、後ろに居た夫もツルハシを落としてしまったようだ。

しかし彼の気持ちはわからないでもない。砂原から火山へは遠いと再会を半ば諦め、手紙で互いの生活を知り合うしかなかったというのに。

そんな遠くに居た息子が、すぐそこまで来ている。しかも自分達の名前を呼んで。

蜃気楼と幻聴が同時に襲ってきたとも思ってしまったが、それよりも先に身体が動いていた。

愛息子に抱き付くべく、夫と並んで駆けつけた。夫なんか涙を零していた。

—父ちゃん！母ちゃん！

—息子よ！

もふっと柔らかな音を立てて、メラルー親子はついに再会し、抱き合うことが出来た。

長きに渡る家族への想いが、ついに青メラルーの小さな夢を叶える

に至ったのだ。

今はただ、柔らかな毛並みの良い両親の抱擁を心行くまで身体で味わう。

後ろで仲間達が自分達の再会に感動してくれているようだが、気にしないようにしよう。

こうしてメラルー達一同は、長き旅を追い、火山の麓にまでたどり着くことが出来たのである。

近辺の村や国への行商も兼ねているが、大抵のメラルー達は火山の集落での里帰りが目当てだ。

商いをする前に、ここでゆっくりと家族で暮らし、長旅の疲れを癒す為に。

さて、そんな再会の最大の貢献者であるはずのアラムシャザザミはといえば。

とある森の中で、フロギイ達の威嚇を無視して木の実類を吟味していた所だ。

彼も長旅だったので疲れたのだろう。見事なまでの無視っぷりと食べっぷりだ。

それに加えて、溪流にてジンオウガへの恐怖が忘れられないからこそ、夢中で食べているのかもしれない。

砂原にてディアブロスという脅威が現れたとはいえ、それ以上の脅威を知ったのは久々だった。

いつも暢気でいるが、ヤオザミ期には脅威となるモンスターばかり居たので、こう見えても危険予知能力は高い。

ジンオウガの姿を目撃しただけでそのプレッシャーや脅威を察知することができ、生き延びることができたのだ。

今度またあのような脅威に出会っても逃げられるよう、食べて体力をつけようとしていた。

さてさて、森の中を散策して食べ歩いていると、ドスジャギイに似たモンスター……毒狗竜ドスフロギイがお出迎え。

いきなり毒を吐いてきたが、ドクキノコを食してきたアラムシャザ

ザミにはちつとも効果が無い。

だが視界を防がれたことにより危機感を得たアラムシヤザザミは、我武者羅に鋏を振るって攻撃を仕掛ける。

—グシヤツ!

呆気なく分厚い鋼鉄の鋏はドスフロギイに直撃。横から重量感のある一撃を得たドスフロギイは大樹に激突。そのまま絶命してしまふ。

毒霧が晴れた頃になってドスフロギイが倒れているのを目撃したアラムシヤザザミだが、そのまま無視。

向こうに見える虫の群れに向けて足を進めるのだった。哀れ毒狗竜。

とりあえず腹が一杯になった。

水平線が見える海辺で食休みをするかのように、ズワロポスに並んで海辺に身体を浸かる。

ここら辺りは残念ながら好物のキノコ類が無く、代わりに珍しい昆虫や木の実が沢山あった。

忍耐の実やドスヘラクレスなど、砂原や溪流、そしてかつての故郷である孤島でも中々見つからない珍味ばかりだ。

中でもマレコガネが気に入ったらしく、見つけた物は即座に鋏が食らい付いたほど。

しかし、ある意味でここからが本題だった——いよいよ火山へと突入する時が来たのである。

先ほど転げ落ちていた石ころを食していた際、珍しい鉱石を発見することができた。

それがドラグライト鉱石。火山でしか見つからない、マカライト鉱石を越える硬度を持つ鉱石だ。

歯ごたえがマカライト鉱石や鉄鉱石とは比べ物にならず、自身の殻をより強化させるには十分な硬度だった。

しかも、ごくたまに見つかるカブレライト鉱石とは違って多くの量を食することができる。

その為には、この先にある、高温の熱風が漏れている火山への入り口に入らなければならぬ。

太陽の日差しと熱した砂とは比べ物にならない熱を誇るその空気に、アラムシヤザザミは若干の抵抗を覚える。

しかし、ここから先ならきつと良質な鉱石にありつけ、今以上に甲殻の硬度を高めることができるはず。

—そうすれば、あのジンオウガやドボルベルグにも対抗できるかもしれない。

久しく忘れていた危機感と防衛本能を沸かしたアラムシヤザザミは、そのまま歩き出す。

全ては己の身を強め、自然界に生き残る為だ。熱が何ほのものだ。アラムシヤザザミはゆっくりと歩き出し、火山へ続く道へと進んでいった。

—ここから先は、ズワロポスの視点でお楽しみください。

—ドタバタと、熱を帯びて赤くなった蟹が水辺に向かって走ってきた。

—蟹が水に身を浸すと、ジュウ、と音を立てて水が少し蒸発した。

—しばらくして、また蟹が火山へと歩き出した。

—しばらく姿を現さなくなった。

—やっぱり火山から出てきて、慌てて水に浸って湯気を上げた。

—しばらくして、またまた蟹が火山へと歩き出した。

—今度は噛み付いて離さないウロコトルを連れて蟹が出てきた。

—水に浸り、身体を冷やす。ウロコトルが零れ落ちて水に慌てるが、しばらくしたら平然と泳いでいた。

—また蟹が水から上がって火山へ向かった。ウロコトルは自分の周りを泳いできた。

しばらく水辺と火山内部を行き来していたが、やっと溶岩から放つ熱に対応することができた。

ポツケ地域からユクモ地域に流れても適応したほどだが、改めて、彼の環境に対する適応力の高さが解る。

邪魔なウロコトルを蹴散らしながら、アラムシャザザミは注意深く辺りを見渡ししながら、内部を探索する。

すると、どこからかゴロゴロと大きな音を立てて何か近づいてくるのが解った。

音の主が放っているであろう地面の揺れも感じており、それが何なのかと周囲を見渡す。

—ゴッソ—

転がって移動していたウラガンキンが何かを踏んだのを察知して振り向いたが、結局気づかずに行ってしまった。

そんなウラガンキンに踏まれたアラムシャザザミはといえば、その巨体と重量に耐え切れず、地面に埋まっていた。

この後、アラムシャザザミは無事に抜け出すことに成功したことだけは記しておこう。

—完—

第12話 「鎧蟹の食いしん坊バンザイ！」

ウラガンキンが痺れて動けずにいる。

原因はアラムシャザザミで、防衛本能による咄嗟の麻痺ガス攻撃が原因だ。黄色い濃霧がウラガンキンの周囲を取り囲み、絶えず麻痺毒が充満している。

その効果は高く、たまたま地中から出てきたウロコトルが痺れて倒れてしまう程。

……で、肝心のアラムシャザザミはといえば。

ドボルベルグやディアブロスに勝るパワーと重量感を持つウラガンキンの相手をしたくなかったのだろう。

しっかりと正面からウラガンキンに睨まれた途端、麻痺ガスを口から吐き、背を向けて逃げていた。

生き物の持つ武器は、戦うことだけが全てではない。時には逃げるために使われることもある。アラムシャザザミの場合、単に面倒くさいだけなのかもしれないが。

さて、アラムシャザザミが逃げ続けて数刻後。やっとウラガンキンから逃げ切れたと本能が察したのか、動きが遅くなった。

安心したとばかりに、いつものようにのんびりと歩きながら、周囲を見渡してみる。

どうやらここは火口へ続く道らしく、アラムシャザザミがぎりぎり通れるほどの細い坂道が続いている。

しかし、アラムシャザザミにとってそれは些細なこと。なぜならあちこちに鉱石が散らばっており、それをも食すアラムシャザザミからすれば穴場も当然。

動き回って腹が減っていたのか、すぐさま地面に転がっているそれを銜で挟み込み、それを食べる。

どれもこれも歯ごたえがよく、中には噛み砕きにくいものもあるが、食欲を満たしたいが為に遠慮なく食べる。

—ザリ

何か不味いものが口の中に入っていたらしく、奇妙な音が鳴った。なんでも食べるアラムシヤザザミでもさすがにこれは不味いと思っただのか、それをぽろりと吐き捨てる。

この茶色い物体は、かつて古代で使われていた武器が地層の奥底に眠り、錆びて変形した物。もちろん現代の技術を用いれば再生が可能で、時には優れた武器が手に入る。

当然、それら錆びた塊はハンターにとって大変貴重な素材なのだが、この蟹からすれば食べられない物ではない。

食べられない物は捨てる。それがアラムシヤザザミの選択だ。

―全国の鉾山夫ハンターさん、ごめんなさい。この作品は生き物を主点にしております。

それはいいとして、食欲を満たすべく、とにかく食べ続ける。

この道の細さならウラガンキンは通って来られないだろうし、安心してのんびりできる。

火山ゆえに時々揺れるのがネックだが、暢気なアラムシヤザザミには気になる程度。

―余談だが、もちろん食べている物の中には、お守りという不思議な加護を持つ石が混ざっている。

そしてアラムシヤザザミが火山に適応しかけていた頃。ついにメラルー達が砂原に帰る時が来たのである。

火山でしか手に入らない素材をたんまりと荷物に詰め込み、近辺の村に挨拶をしてから帰宅の準備を始める。

あの青メラルーも、一ヶ月滞在していれば安定したようで、両親に再会を約束して元気に旅立ったようだ。

肝心のアラムシヤザザミを探す為、餌を持って、火山に突入。暑さは砂原で鍛えているから問題は無い。

フロギイやりノプロスから逃げながら探すこと十数分。目的のモンスターは呆気なく現れた。

マンドラゴラの匂いに誘われ、アラムシヤザザミはメラルー達の前

に姿を現し、近づいてくる。

何事も無く出てきたアラムシャザザミに安心するが、ここでメラルーはある変化に気づいた。

—なんか、前よりゴツくなっているニヤ。

もちろん姿がめつきり変わったわけではない。ここ一ヶ月間でちらほらと見かけていたし。

だが、なんというか甲殻が二割増しで分厚くなっているような気がする。

ここの良質な鉱石を食らってきたのだろうが、それにしたって反映し過ぎではないだろうか？

そんなことを考えているアイルー達だが、アラムシャザザミは相変わらず。

好物のマンドラゴラを食べたいが為に、警戒心も無くこちらへと歩み寄ってくる。

相変わらずなアラムシャザザミにほっとすると、メラルー達は餌を使って誘き寄せる。

こうして、メラルー一行は火山の仲間に別れを告げ、無事に出発することとなった。

いつもよりもアラムシャザザミの甲殻が厚くなった分、動きが多少鈍くなっているが、旅に支障無しと気にしないでおく。むしろより頑丈になって強くなった分、安心感が増すというもの。

意気揚々とマンドラゴラを吊り下げ、アラムシャザザミの脚を前へ進ませるのだった。

ふと青メラルーが遠くの空を見つめると、そこには分厚い雲と、時節光る雷が見えていた。

大きな嵐がやってきているらしいが、なんとそこは自分達の帰り道……溪流付近ではないか。

雲の流れからして、自分達がやってくる頃には嵐が通り過ぎていた
だろうが、果たしてどうなるのやら。

アラムシヤザザミも自然と歩く速度を落としており、あの嵐に多少
なりの脅威を抱いている事がわかる。

—まあ、なんとかなるだろう。

それが、空の景色を見た後の青メラルーの見解だった。

—完—

第13話 「溪流と砂原の悲劇」

火山から出発し、早くも一週間が経過した今でも、メラルーとアラムシャザザミの旅は続いていた。

装甲が増したおかげで以前よりも帰りが遅いが、ドスファンゴの突進ですら物ともしない為に安全だった。

のんびりとした旅なので食料に不安を覚えていたが、火山で溜め食いで済んだのか、あまり問題にはならなかった。

この調子なら溪流付近での補給が少なくて済むかもしれないと考えていた。

—そう、この光景を目の当たりにするまでは。

信じられない光景がメラルー達を襲った。

歩き辛そうにしているアラムシャザザミの上では、数匹のメラルー達が揃って目の前の光景を眺めていた。

かつては緑と水が豊かな土地だったはずの溪流。そこが全て滅茶苦茶になっていた。

木々は倒れ、朽木がちらほらと転がり、地が削られ、落雷の焦げ跡が点々と見え、川の流れが大いに乱れている。

ある程度の緑や水は保たれているものの、動物やモンスター死骸が散らばっている以上、眺めるのにはお勧め出来ない。

おまけにアラムシャザザミの足が中々進まない。原因は足場の悪さと、つまみ食い。

だがまあ、ここはまだいい。むしろ、自然の驚異が爪を向けたと諦めが付く。

問題はこの付近に建てられた人々の村だ。そこはもつと酷い。

自然に調和した平和な村だったからこそ、倒壊し、朽ちて廃墟となった今の光景は堪えるものがある。

メラルー達はつまみ食いで足を止めているアラムシャザザミの上で呆然としていた。

少し前まで元気な村人達と触れ合ってきたのだから、まさかこんな事になっていとは思ひもしなかったのだろう。

―川魚を分けてくれたご主人、どうしたのかニヤ……。

青メラルーがそんな事を考えていると、ある声が聞こえてきた。ニヤ―ニヤ―という、自分達と同じくアイルー科の獣人族の声だ。

どこにいるのかと見渡していると、すぐそこまでこちらへ近づいてくる、数匹のメラルー達の姿を発見。

―とりあえず、生き残りが居たようでほっとしたメラルー達であった。

ここから先は、メラルー達の会話が続きます。

アラムシヤザザミは砂漠へ旅立つ為に食事を取って動かないので、空気だと思ってください。

「一体全体、どうしたんだニヤ？」

「どうしたもなにも、嵐が襲ってきたんだニヤ」

「それは見たら解るニヤ。ただの嵐にしては強すぎやしニヤいか？」

「そうなんだニヤ。あまりにも強いから、数日前から村人皆が警戒していて、ユクモ村に避難したぐらいなんだニヤ」

「あ、そうなのかニヤ？ということは皆無事なのかニヤ？」

「無事だニヤ。だから安心していいニヤ。ハンターさんも残らず避難したニヤ。俺らは逃げ遅れたけど、洞窟に隠れて難を逃れたんだニヤ」

「一安心だニヤ……それにしても、そんなに強い嵐だったニヤんて、まるで古龍並だニヤ」

「そうニヤ！俺らは見たんだニヤ、雲に隠れていた古龍の姿を！」

「マジかニヤ!?……空に浮かんでいた気球はそういうことだったんニヤね。この嵐の爪跡も納得だニヤ」

「そうなんだニヤ。遠くの大陸から来たっていう老人ハンターが、もしやと思って避難前に連絡したらしいんだニヤ」

「この大陸にも古龍が居たとは……仲間にも伝えておかニヤいと」

「けど、実は古龍以上に厄介なことになっているんだニヤ〜……」
「どういうことニヤ？古龍が居るっただけで大問題じゃニヤいのか？」

「古龍も嵐も、今はどこかへ行ったみたいなんだニヤ。そしたら、この間、ドボルベルグを黒焦げにしたっていう噂のモンスターが出たんだニヤー！」

「ニヤ、ニヤんだってー!?ハンターさん曰く、メチャクチャ強い奴なんじゃ……ニヤ、ニヤニヤニヤっ!?」

「ニヤ、ニヤんだ!?急に蟹が慌しく動き出したニヤ!?」

「ちよ、餌釣り係り、マンドラゴラで……ニヤにーっ!?マンドラゴラ見せても反応しニヤい!?どういうことだニヤ!?」

「そ、そういえばそのモンスター見たの、つい昨日だったんだニヤ……遠目だったけど、物凄く怒っていたニヤ……」

「えーっ!?それってかなりヤバ……ニヤ、スピードアップした!?やっぱあのモンスターに脅えているのかニヤ!?」

「ちよ、本当に大丈夫ニヤのかこの蟹!?」

「この間も怯えて走っていたから、今回も止まらニヤいかも……ええい、このまま砂漠へ行くけど、一緒にどうかニヤ!?」

「あのおっかないモンスターから逃げられるニヤらどこでもいいニヤー！俺らも連れて行ってくれニヤー！」

「りよーかいニヤー！このまま全速力で溪流を脱出するニヤー！はいよー、カーニーー！」

―任せておけー!

なお、上記の台詞はイメージです。アラムシャザザミが掛け声と共に鍬を振り上げ、猛ダツシユしたので。

こうして、アラムシャザザミ(とメラルー達)は、全速力で溪流から逃げ出した。

そして彼らが溪流の領域から脱した後、先ほどまでアラムシャザザミが佇んでいた場所にはある姿が。

それは、溪流を荒らした元凶である嵐龍アマツマガツチによって、縄張りである霊峰を追い出されて苛立っていたジンオウガだった。やはり、アラムシヤザザミの危険察知能力は異常なほどに優れていた、ということだろう。

そしてようやく砂原へ到着。途中ハプニングもあつたが、行きと同じ期間で帰ることができた。

メラルー達どころか、なんとなくなのだがアラムシヤザザミも、故郷の光景を眺めてほっこりしている。

とりあえず、旅も終えたところで、アラムシヤザザミはここで解放することに。

短いようで長かったが、暢気ながらも頼りになる奴だったと、メラルー達は思った。

旅の荷物をヤドから降ろし、アラムシヤザザミにマンドラゴラを与えて労わることにしよう。

だがしかし、メラルー達は失念していた。

数ヶ月も砂原を離れ、家族としばし仕事を忘れ、アラムシヤザザミの甲殻が増したことへの安心感が原因と見られる。

そしてアラムシヤザザミ自身も、火山による適応力と、甲殻類故の脊椎動物以下の知能の低さ故に忘れていた。

この砂原における、もう一匹の支配者の存在を。

その支配者は、アラムシヤザザミが居なくなつてもなお闘争心を滾らせていたことを。

そしてその支配者は、滾らせた闘争心を満足に晴らせる相手が得られず、相当苛立っていたことを。

―甲高いディアブロスの叫びと共に、アラムシヤザザミとメラルー達は空を飛んだ。

ちなみにディアブロスも鍛えていたようで、パワーが二割増しだっ

た。

少なくとも、重装甲の鎧蟹を突進だけで吹っ飛ばしたのだから間違いは無いはず。

それからのことは多く語れないが、それはもう物凄い攻防だったという。

溪流に暮らしていたメラルー曰く「嵐なんか屁じゃないぐらいに激しかった」とのこと。

後日、鉱山夫ハンターが気まぐれで採掘してみたアラムシヤザザミの甲殻がハンターギルドに贈られたらしい。

複数の鉱石が複雑に、そして絶妙なバランスで混ざり合った素晴らしい鉱石だと研究者は驚愕の結果を示した。

そしてこの貴重な鉱石を「ザザメタル」と名づけ、鉱山夫ハンターの新たなターゲットとして睨まれるようになる。

もつとも、大抵の鉱山夫ハンターは未だ防具が整っていないので、返り討ちは確定である。

ひび割れた甲殻にツルハシを振るう方がまだ被害が少ないとの情報もあるので、そちらをオススメする。

—完—

第14話 「鬼ヶ島への挑戦・前編」

時が経つのは早い。自然からみたら短い時間でも、生命からすればとてつもなく長く感じることも短く感じることもできる。

そんな時の中でも、生き物は確かに生き続けている。進化し続けている。中には絶える者もいる。それらを踏み越えて生きていくのが、彼ら生命だ。

生き延びた同士が戦いあう宿命がこようものなら、戦って勝ち取り、生き抜く。それが生命に与えられた宿命であり、義務。生き抜くための条件。

―モンスターとハンターの戦いも、その宿命と義務に乗っ取った、命がけの戦いに違い無い。

今、ユクモの集会所にいるハンター達が揃って同じ方向を見つめていた。

かつてはハンター不足で悩まされていたここユクモ村でも、あるハンターが配属されたのをきっかけに、多くのハンター達が募つてきた。

旧大陸出身の者から新大陸出身の者まで幅広く、中にはロツクラツクやモガの村を中心としていたハンターまでやって来ている。

それらのハンターは、ロツクラツク周辺やモガ村周辺におらず、ユクモ村周辺にしか現れないモンスターの素材が目当てなのが多い。加えてハンター故の、新たなモンスターに挑戦したいという高いチャレンジ精神。これに尽きるだろう。

―そしてそのチャレンジ精神は、より高みを目指す意欲の源でもある。

―そんなハンター達がざわめいている理由は、とある4人のハンターの姿があったからだ。

1人は、パワーハンターボウIIを担ぎ、ペッコUシリーズで身を固めた、黒い眼帯が特徴的なガンナー。後方支援を主軸にした、フリーの雇われガンナーとして有名な男だ。名はラクサジー。

自称「デイフェンスに定評のあるラクサジー」。ちよつと性格にクセがあるのが難点。

1人は、黒轟竜と覇竜の素材で作られた狩猟笛を持つ、バンギスシリーズで身を固めたゴツい男。右肩から左脇にかけて巻かれている赤いスカーフに映える牙が並ぶ口のマークを見れば、皆がどよめく。

彼は轟竜と恐暴竜を主なターゲットとしたギルド旅団「レックス」の主力とされている有名なハンター。名はグエンガ。

イビルジョーを怨敵とし、イビルジョー殲滅を喜びとする凶悪無比な男。

そして残る2人。この2人こそが大半のどよめき、そして視線を奪っていた。

彼らはかつて、とあるハンターと共に、ユクモ村の災厄……古龍種アマツマガツチを討ち取ったコンビなのだから。

神々しい荒天シリーズで身を固めた美しき女ハンター・アザナ。恐らくユクモ一の巨乳の持ち主でありながら、その闘争心と勇ましさは真に漢らしい。

金色に輝くゴールドルナシリーズで覆われた長身のハンター・カリガ。大柄であるグエンガを越える2mの長身と、年に似合わぬあどけない顔が悩みの種。

そんな2人は、ユクモ村所属のハンターとして勤めて10年のベテラン。ユクモ村でこの2人は知らぬ者は居ない。

そんな豪華メンバーが揃ってどうしたというのか。

少なくともアザナとカリガのコンビでアマツを狩れる程なのだから、よほどの相手なのだろう。

そんな4人組を見つめる（一部男は揺れるナニをだが）中、彼ら受付へと足を進めていた。

「こんにちは。凄いいメンツですねぇ。どのクエストを受けるんですか

？」

長年受付嬢をしてきた彼女から見ても凄いらしく、思わず息を零してしまったほど。

本音を零した後、己の仕事をなるべく、彼らのリーダー格であろうアザナに声を掛ける。

「鬼退治へ行く」

その瞬間、彼女ら4人と受付嬢を除く、全てのハンター達が叫びを挙げた。

先ほどの言葉が信じられないと皆が耳を疑うが、それならこんな凄腕が集うのも無理はないとどよめく。

—鬼退治。それは「あのモンスター」に挑むということだから。

「ひよっひよっひよ。ついにヤツに挑むのかね？」

そんな周囲のどよめきざわめきを無視して、落ち着いた様子で受付嬢と打ち合わせをしていたアザナ。

そんな彼女に声を掛けたのは、常に酒を飲んでいる小柄な老人。ユクモ村のギルドマネージャーだ。

「ええ」

そんな老人に対して、アザナは素っ気無く返事を返すだけだった。だが老人も彼女の性格を理解しているようで、「ひよっひよっひよ」と笑いながら話を続ける。

「長かったようで短かったなあ。お前さんの一番の目的だったから仕方ないか」

「その為の12年間です」

「そうか。チミはその果てに何を望むのかね？」

「勝利」

「ひよっひよっひよ。相変わらず素っ気無いのお。じゃが、それでこそチミらしい」

そういつて老人は酒を飲んで、酒臭い息を吐く。

受付嬢から「島へ行く気球を出すので、しばらく時間がかかる」と聞き、皆にそれを伝える。

自由時間ということで、ラクサジーは女をナンパしに、グエンガはひとつ風呂浴びてくると言いつて温泉へ向かつていった。

受付前に残されたのは、アザナとカリガの2人だけだ。

「苦勞を掛けるな」

「何を今更。アザナさんについていく。それだけで僕は十分です」

「……そうか」

長年コンビを組んできた二人だが、こんな短いやりとりも昔から変わつていなかった。

互いを理解し合っているからこそ、余計な言葉は不要。それだけで2人は成り立っていた。

……カリガとしては、それだけではないのだが、それはまた後に話す機会があるので、そこで話そう。

「ああ、よかった。まだ残つていらしたのですね」

聞き慣れた声を耳にして2人が振り向けば、こちらへと歩いてくる女性の姿があつた。

ユクモ村の村長だ。妙齢でありながら知識が豊富で、多くのハンターや村人に慕われてきた。

口数の少ないアザナは軽く頭を下げ、彼女の代弁者であるカリガが村長に挨拶をする。

「お久しぶりです、村長さん」

「ええ。お久しぶりです。先日の嵐龍討伐のご協力、本当にありがとうございます」

「よしてくださいよ。そのお礼を言うなら、僕らを呼び止めた彼に言つてください。そういえば、彼は元気になっていますか？」

「ええ。元気になっていますわ。つい先日、崩竜の討伐を達成したそうですの」

「本当ですか!? やりますねえ、あいつも。それが聞けてよかったです」
「ええ。本当に嬉しい方ですわ。……話を交えますが、ついに……?」
「ええ。アザナさんの夢でしたから」

「そうですか……あの子についてはどの程度知っていますか?」

世間話のように軽い雰囲気から一転、村長は神妙な表情でカリガに問い掛ける。

村長の言う「あの子」の脅威性と強大きな噂程度で知っているが、彼女が知りたいのはそんな些細な情報ではないだろう。

「かつてヤツに挑んで負けてきたというギルドの一員を勧誘しました。ヤツにリベンジすると言って、戦い方や特徴は彼が洗いざらい吐いてくれましたよ」

このままではギルド「レックス」の名折れだと張り切っていた彼の、勇ましいまでの誇り高さ。

だからこそアザナは、凶悪だと名高いハンターを信用し、荒々しくも気前のいい彼の素顔を知ることが出来た。

互いに素顔を晒したから、彼は話せるだけの情報を提供してくれたのかもしれない。

「そう……それでしたら、私が伝えることは少ないようですが、あえて言わせてもらいますわ」

そういつて村長は、カリガとアザナの両者を見比べてから、彼女が知りうる情報を伝える。

「数年前から発見された、ユクモ村に近い、山一つしかない小さな島。そこは何故か大型の肉食モンスターが存在しない上に、自然の恵みで満ち溢れていますわ。」

皆こぞつてその島を手に入れようとなりました……。しかし、それは全て無駄に終わりました……。そこに住まう支配者が、それを許さなかったから」

一呼吸置いてから、村長は黙って聞き続けている2人を前に、話を続ける。

「その支配者はかつて、なんらかの理由で遠い大陸から迷い込んだ、小さなモンスターだったそうです。」

そのモンスターは新たな地で強く成長し、強大なモンスターとなりました。かの『ユクモの魔王』こと片角のディアブロスと互角に渡り合い、食物を求めて多くのフィールドに姿を現してきました。

一部では守り神として崇められているほど温厚で暢気な子ですが、そんな子が選んだ島……『鬼の住む楽土』を荒す者には一切の容赦はないと聞きます。

かつて彼に挑み、辛くも勝利を収めたハンターは、楽土の所有者として君臨し、富と名誉を欲しいがままにしたようです……1年の間まででしたが」

勝利を収めて島を手に入れたというのに、何故1年間という期限付きなのか。

その理由を村長は告げる。そのモンスターを知る者なら誰もが知っているであろう、最大にして最悪の特徴を。

「彼は殺せません。殺そうとした所で彼は身体の一部を捨てる。一時的にその者を恐れ、捨てた体を囫に逃げ延びるだけです。

だからこそ、勝利を収めた1年後、彼はその島へ舞い戻り、島の支配者として再度君臨するのです。その術を手に行っているモンスターは、世界広しと言えど、彼を含めた三匹のみ。だからこそ、彼らは古くから生きながらえることができました」

ハンターだけでなく、様々なモンスターが渡り歩くこの世界で、たった三匹のみが生きながらえている。

それだけでも驚愕ものだが、彼らも野生を知るハンターだ。有り得ないことなど有り得ない。

それこそ、これまでにいくつも発見されている変異種というモンスターの存在が、その意味を明らかにしている。

亜種という分類のモンスターは数多けれど、変異種の存在は数が少ない。

突然変異で姿を変えたという彼らは、亜種や原種とは違った力を手に入れ、今もなお生きながらえている。

その例が、『ユクモの辻斬り侍』ことツジギリギザミであり、『神出鬼没の無法者』ことアグナコトル希少種。

彼らも突然変異で生まれた数少ない生き残りで、強大な力を持ってユクモに君臨している。

—それはヤツにも言えることだ。

「解っていますよ。それを知っておきながら、僕達は戦うことを決めました。ラクサジーもグエンガも、それは解りきっています」

心配そうに見つめてくる村長を前にして、カリガは柔らかな笑顔を浮かべる。

本来ならモンスターから弱き者を守る為に存在しているのが、彼らハンターと呼ばれし者。

しかし彼らは、時には相手が自分達では敵わないような力を持つていようとも、戦いを挑むこともある。

その代表格と言えるのが、彼の相方である、闘争心盛んなアザナだろ。

「カリガ、気球船の準備が出来た。すぐに出発する」

受付嬢と話していたらしいアザナがカリガを呼び止める。

了解、と軽く返事を返してから、再び村長へと顔を向ける。

「心配しないでください。ヤツに敗れたからといって、怪我は負えど死にはしません。それに俺達は、勝つつもりで行くんですから」

そういつてカリガは、村長に軽く別れの挨拶を述べた後、アザナの元へと向かう。

どうやら他の2人を呼び止める為の話し合いをしているらしく、すぐに二手に分かれて移動し始めた。

そんな2人の様子を見ていた村長は、不安そうな顔を一転させ、くすりと面白そうに笑う。

—いつだつてあの2人は、一緒に無茶なこととして帰ってきましたものね。

そんなことを考えてしまったから、クスクスと笑い声が止まらなくなってしまう。

村長の笑う様子を眺めていたのは、酒を口に加えているギルドマ

ネージャーのみ。

そんな彼は、若いつていいねえ、と呟いて、また酒を飲むのだった。

—12年間、この時を待ち続けていた。

ヤツと初めて出会ったのは、私がユクモへ来たばかりの頃だった。その圧倒的な防御力を持ったモンスターは、暢気でありながら、世間を闊歩するだけの実力を秘めていた。

最初見た時から、戦いたいと思っていた。だがヤツは、私のことなど眼中になかった。装備を多少整えて挑んだとしても、無視するだけ。

ヤツが支配者になる以前—ユクモ中を渡り歩いていた頃、幾度も私は挑み、無視された。

その都度、過去に一度コンビを組んで以降に相方と呼べる仲間になったカリガに止められたのは懐かしい。

だが、今回はそうはいかない。

あれから強くなった。武器も防具も、全て強者から奪い鍛え上げた一級品だ。

幾つものモンスターを討伐してきた。情報を徹底的に調べた。仲間を集めてきた。

—ここは、ヤツが住まう島……『鬼が住まう楽土』。

気球から降り立った小さな島は、とても美しい自然が保たれていた。

木々が緑色に染め、至る所にキノコが生え、川の水は澄んでおり、草食種や獣人族が静かに暮らしている。

これらを脅かすようなモンスターは少なく、居たとしても狗竜程度でしかない。

こんな豊かな地でありながら、何故ラギアクルスやりオレウスといった強者が影ですら存在していないのか。

―それらは全てヤツの物だと理解しているからだ。

地震が起きた。私たち4人と大地を容赦なく震動させる大地震。

そんな震動が襲っているにも関わらず、モンスター達はゆつくりと移動するだけ。

しかしその移動する先は、ある場所から遠ざかっていることが明白だった。

ぽつかりと緑に穴が空いたような、地面しかない場所。そこそが、この島の主が眠る場所であり、地震の発信源だからだ。

今、その場所から覇竜アカトルムの頭が地中から出てきた。

無論、こんな地にアカムトルムは居ない。これはただの頭蓋骨だ。

地中から這い出てくるアカムトルムの頭蓋骨。そしてそれをヤドとするモンスターが姿を現す。

―鮮血のような鮮やかな赤色で統一された、幾重もの鉱石が入り混じった甲殻。

―まるで盾どころか城壁のように分厚く巨大な、鋼鉄製の鋏。

―ウラガンキン並の巨体とその体に見合う頭蓋骨を支える、強靱な4本の脚。

その巨体を睨み付ける3人の男達。

―1人は富と名誉を欲しいが為に、弓を構える。

―1人は倒れた仲間とギルドの汚名を返上する為に、旋律を奏でる。

―そして1人は戦いを終えた後に想いを伝える為に、剣を構える。

―そしてこの巨大な蟹を輝いた目で見つめているのは、1人の女性。

「今日こそ、本気で挑んでもらうぞ……」

アザナが己のハンマー……凶鏡【妖雲】を構えた瞬間、昔から温厚で暢気だったはずの蟹が動き出す。

両手の鋏を盾のように構える。これは明らかな敵意であり、威嚇行為。

——まるでアザナの挑戦を了承するかのように、鬼鉄蟹おいてつがには、鋼鉄の鋏を打ち鳴らす。

「オニムシヤザザミ！」

その叫びに呼応するかのように——鬼鉄蟹オニムシヤザザミは、両の鋏を擦り合わせ、咆哮のような強烈な金属音をかき鳴らす。

——いざ、鬼退治！

——完——

第15話 「鬼ヶ島への挑戦・中編」

やはりというかなんというべきか。

オニムシヤザザミに挑んだ経歴を持つグエンガから、事前の情報は聞いていた。

その時のメンバーの1人にガンナーが居たのだが、そのガンナーはヘヴィボウガンだったという。

なら弓はどうなるのかといえば、ある程度予測は取れていた。加えて武器の性能に重点を置かないラクサジの装備は、パワーハンターボウII。

他のメンツの武装に比べても、圧倒的にパワーが劣っているのは明確である。

すなわち。

―ガキンツ！

「うーん、なんというか、予想通りだったね」

語尾に、ごめん、と付け足すラクサジの顔には、焦りも罪悪感も大してなかった。

確かに自分は、超美人だという理由で雇い主と定めたアザナから、後方支援に徹してくれと事前に言われていた。

しかし弓矢が全てあの硬く分厚い甲殻によつて弾かれたとなると、さすがにやる気も削がれるというもの。

「だああつたらあああーとつととやることをお、しろおおおい!!」

「ぶるあああ」と叫べそうなほどに特徴的で野太い声を上げながら、グエンガが怒鳴る。

ジンオウガに吼えられてもマイペースで居られるラクサジもさすがに参ったのか、とつとと怪力の実を食べる。

彼のスキル「広域化+2」により、その力の上昇は主力であるコンビにも伝わっていく。

「ていつー！」

「どりゃっー！」

アザナのハンマー「凶鏡【妖雲】」とカリガの大剣「ハイジークムント」の溜め攻撃がオニムシヤザザミの脚に直撃。僅かな傷を造る。

鈍い金属音を立て、その衝撃が武器を伝って体に浸透していくが、今は一瞬の隙ですら許されない。

重量級の巨体であるにも関わらず、オニムシヤザザミは忙しなく4本の脚を交差させ、遠心力を用いて鋏を振るう。

2人は前転で距離を取ることでそれを回避し、オニムシヤザザミの懐へと潜り込む。懐へ潜り込まれたことで、オニムシヤザザミは脚も鋏も届かないと判断し、身を屈める。

―毒攻撃か。ジャンプ攻撃か。地震攻撃か。

―屈めた身を震わせたことで、次の行動を理解した。

「離れろおおおー！」

グエンガの獰猛な叫びを合図に、アザナとカリガは武器をしまつて後ろへと跳ぶ。

次の瞬間、オニムシヤザザミの身体から紫色の煙があふれ出し、周囲を毒霧が覆う。

幸いな事に2人は飛び込んで回避することで、毒を受けることはなかった。しばし充満された毒の中で佇むオニムシヤを見つめながら、2人は起き上がる。

「ここまでは、グエンガさんの言った通りですね」

「ああ。ある程度だが、動きは読めた」

息を切らしつつも未だ余裕のある2人が、汗を手甲で拭いながらオニムシヤを見続ける。

過去にギルドメンバー全員で挑み、オニムシヤザザミに敗北したというグエンガ。そのグエンガが解るだけの情報を聞きだし、オニムシヤザザミの攻撃パターンを知った。

基本的にはダイミヨウザザミと動きは似ているが、それ以上に攻撃

パターンが多い。

—先の、鋏同士を擦り合わせることによって生まれる金属音。あれは一度放つとしばらくは使われないらしい。

—両の鋏を地面に打ち付けての広範囲攻撃。外しても耐震持ちでないハンターは震動を受ける。

—ジャンププレス攻撃。主に懐に潜り込まれた時に使用し、咄嗟に軽く飛んで周囲を吹き飛ばす。

—同じく懐に潜り込まれた際の対策か、体を持ち上げ地面に叩き付ける、素早い地震攻撃。

—空を高く跳び、遠い所にいるガンナーですら狙い付けて踏み潰す、ハイジャンププレス攻撃。

—先ほども放った、広範囲の毒霧攻撃。身構えて震えるのがその合図だ。

—そして。

「皆、そろそろ走った方がいいよ？ 奴がない」

—そういつて忠告するラクサジーはといえば、既に狂走薬を飲んで逃げていた。

—毒霧が晴れ、いつのまにかオニムシヤの姿がないことを確認してから、3人も同じく走り出す。バラバラになって走り出した途端、そいつは地中から現れた。

—アカムトルムの頭蓋骨が。

—まるで生き物のように口を開いた状態で地中から現れ、ハンターに食らい付くヤド噛み付き攻撃。

—走り続ければ当たるとは無いが、もし止まればヤドに噛み付かれ、大ダメージを負う事になる。そのためにも、潜っては噛み付くを繰り返すヤドから懸命に逃げ出すのだ。

—最後にはハプルボッカの如く出現し、地面に着地して周囲を見渡す。

—オニムシヤザザミが宙に現れた時点で接近済みで、3人のハンター達が武器を構える。

—それを知った彼が次の行動を取るより先に、それらは振り下ろされ

た。

—そして、ハンマー、狩猟笛、大剣の同時攻撃を受け、脚一本にヒビが入る。

甲高い音が響いた。アザナ、カリガ、グエンガの三人はその音に対し反射的に距離を取った。

しかしその音がオニムシャザザミの叫びだと知ったのは、彼が口から泡を吹き、脚を交互に地面に打ちつけているのを見たからだ。

—オニムシャザザミは次の行動を取るべく、両の鋏を打ち鳴らす。「グエンガ！」

「間に合わんっ！」

アザナがグエンガに聴覚保護の旋律を頼むには、あまりにも遅かった。

オニムシャザザミの巨大な鋏がくつつきあい、それを上下逆方向に動かし……。

—ギユイイイイイイ!!

鋏同士を擦り合わせ、鼓膜を破るような金属音をかき鳴らす。

幸いなのは耳を塞げばある程度軽減されるが、両の手が塞いでしまいうデメリットがある。

この間にオニムシャザザミは何をしでかすのか。至近距離で耳を塞いでいるからこそ、耳を塞いでいる三人は焦っていた。

特にグエンガ。彼はこの先の、オニムシャザザミの行動を知っていたから。

—今、鮮血のように赤かった甲殻が、徐々にオレンジ色に染まっていく。

徐々に赤に黄が混ざりオレンジになっていく鋼鉄の甲殻。三人が

危険を感知し離れていったのを合図に、天辺から足先までオレンジ色に染まる。

それを確認するかのようにはオニムシャザザミは体を揺らし、鋏を振り上げる。

本来なら重くゆつたりとした動きを見せていたが、今は違う。

鋏全体で叩き付けるような攻撃ではなく、鋏の先端をハンターに向け地面に突き刺す。

それだけならまだよかったが、これが連続で、しかも素早く交互に襲ってくるのだからたまらない。

「これが!？」

「ああそうだーこの色だーこの色になってから急激に攻撃力が上がりやがった!」

そんなオニムシャザザミの連続攻撃から逃げる為、アザナとグエンガは並んで走る。

グエンガはこの光景を目の当たりにした事がある。色が変わって何が変わったかといえば、その攻撃力。

攻撃の速度が上がるだけでなく、一発一発の攻撃力が最初期とは比べ物にならない程に高まっている。

—実際、カリガが鋏で遠くまでぶっ飛ばされていたし。(回復薬グレートで対応)

さらに攻撃パターンも増加されている。後方へ向け一気に跳ぶヤド突進、ジグザグに歩きながらの連続攻撃など、特異固体の盾蟹と同じ行動があった。

「それにしても、一体どういう仕組みだ……?」

何故、甲殻の色を変えた程度であそこまで変化が生じるのか。

オニムシャザザミがアザナとグエンガを追いかけていることを良い事に、カリガは治療を続けながら観察していた。

アマツマガツチのように見た目が変わっていくのは見たが、ここまです変化が激しいのはある意味で異常といえる。

「体をよく見てみなよ。何かが埋め込まれているだろう?」

ラクサジーからそう言われて、カリガは目を凝らしてオニムシャザ

ザミを見る。

確かにオニムシャザザミの甲殻には、所々がデコボコとしており、その小さな突起が発光している箇所があった。

そういえば、体の色が変色した時から発光していたはず。

「あれは護石だ。恐らく鉱石に混じっていくつも食らってきたんだろうね。なら話がわかるよ」

後方支援に回り、オニムシャザザミの攻撃をあまり気にしなくて済むからこそ解る。

ラクサジューはこれまでの変化や、オニムシャザザミの生態を考慮してきたからこそ、その結論にたどり着くことができた。

「オニムシャザザミの更なる特質。それが……」

「護石の力を使って、自身を強化している……？」

「オニムシャザザミの脚が2人によって一部破壊された今、金属音を鳴らしながら青へと変色していった。」

「鬼との戦いは、まだまだ続くようだ。カリガは2人の元へ駆けつけながら、そう思った。」

—完—

第16話「鬼ヶ島への挑戦・後編」

―たかが護石、されど護石。

ハンター達の間で伝えられている言葉だ。ただのお守りと思つて侮るな、という教えである。

その価値の高さは、高い効能を及ぼす貴重なお守りを狙つて世界中のハンターが炭鉱夫と成り果てるほど。

故に人々はお守りの価値観に差が出てしまい、効能が低いからという理由で捨てるハンターが続出している。

―だが、忘れてはいけない。例え低くても、確かな効能を引き出すのがお守りというものだ。

そんな護石の効果を最大限に生かすモンスターが存在していると、近年研究者によって明らかになった。

それこそが、楽土に君臨する鬼こと、鬼鉄蟹オニムシャザザミ。彼はアラムシャ期の頃から火山地帯にも足を運んでおり、鉱石を食らつて甲殻の硬度を上げていた。

もちろんその中には護石も含まれており、これが溶けてザザメタルとして甲殻に混ざり合うことがある。

その溶けて混ざり合つた護石が、オニムシャザザミの戦闘状態に応じた効能を発揮する。

大人しいオニムシャザザミが攻撃を受け、追い払つてやろうと興奮すれば攻撃的な性能を発揮する。

その相手が強い存在だと知れば、防衛本能も働いて毒物を扱うようになり、状態異常攻撃の効能を上昇させる。

さらに強い存在だと認識すれば、防衛本能がさらに高まって防御体勢を取る為、防御能力が大幅にアップする。

このように、自身の戦闘意欲や生存本能に過敏に反応し、それに似合つた護石の効能を引き出す。

世界広しといえども、護石をこのような事に使うのは、モンスターの中ではオニムシャザザミただ一匹だけだろう。

―そして最後に。

オニムシャザザミは命の危機を感じた場合にのみ発動する形態がある。

それこそが彼を倒せる時が近づいてきた証拠でもあり、鬼の怒りを意味する。

「はああああー！」

—バギャン！

アザナのハンマー攻撃がオニムシャザザミの鋏に命中。防御形態で身構えていた為に弾かれると思っていたのだが、今はそうではない。

部位破壊のダメージが蓄積されたこともあり、鋏の強度に限界が生じたのだろう。

スキルの発動や溜め攻撃が合わさったことにより、その大きくて分厚い鋏に深い割れ目を与えることに成功したのだ。

先ほども片方の鋏に大きなヒビを入れることに成功した為、これで足と鋏を全て破壊したことになる。

—ここまでくれば、鬼が激昂するのに充分だった。

—ギユイイイイイイイ！！

またしてもオニムシャザザミが鋏を擦り合わせ、金属音を上げる。前もってグエングから聴覚保護の旋律を受けたから軽減されたものの、剣士一同は警戒のために距離を取る。

至近距離ではその凶体故に全貌が明らかにできなかったが、距離を取ることでその全貌が明らかになる。

そして3人は、オニムシャザザミの最大の変化に気づく。

—鬼は鉛色に変色し、口から泡を吹き、怒りに震え甲殻から湯気を放っていた。

「まさか、怒っている……?」

アラムシャ期から観察と視察を繰り返してきたカリガでも、この反応は驚きだった。

ダイミヨウザザミにも、怒り状態になると口から泡を吹き出すことがあるので、それに酷似していた。

かつてオニムシャザザミを仕留めたというハンターですら、怒り状態を見せなかつたと聞いていたのに。

グエンガもラクサジーも怒り状態であることを理解した以上、警戒を強めなくてはならない。そう思った。

しかし、アザナが何よりも目につけたのは……その甲殻の色。皮肉なこと、その鉛色は、アラムシャ期の頃と色合いがそっくりではないか。

かつて自分が果敢に挑んだにも関わらず、全く相手にされなかったあの頃。

そんな日々を思い返していたからこそ、何故か動きが止まり、オニムシャザザミの鋏が振り上げられていることに気づけなかった。

「アザナさんっ!」

そんなアザナに向けてカリガが叫ぶ。

しかし、心配は無用。アザナは鋏が振り下ろされるよりも早く横へ移動。

巨大な鋏が地面に打ち付けられて深くまで食い込む。それをアザナは逃さず、ハンマーの一撃を加える。

まるで流れるような動きで鋏の動きに合わせて避け、毒攻撃をかわし、一撃を加える。

しかしオニムシャザザミもただ黙っているわけにはいかない。

怒り状態故にその行動速度は速く、護石の加護か、いくら動いても疲れている様子がない。

さらに今までの攻撃パターンが全て混ざっており、鋏攻撃にいたっては地割れを起こし地盤を叩き起こす程。

何よりも一撃のスピードが増しており、素早く避けるアザナを的確

に狙いつめるほどだ。

アザナが避け、オニムシヤが打ち付け、そこを狙ってアザナのハンマーが叩き付ける。

重量感を思わせないような動きを鬼が見せ、強力で振り回しているとは思えない動きを狩人が見せる。

一撃でも食らえば即死級のはずのその攻撃を、アザナは紙一重でかわし、攻撃を加える。

甲殻にヒビが入り、確かに攻撃を受けているにも関わらず、オニムシヤザザミはなおも怒り状態を保って攻撃してくる。荒々しく激しい攻防が尚も繰り広げられていた。

「すげえじゃねえか……」

「いやあ、強く美しい女性っていいよねえ」

そんなアザナとオニムシヤの戦闘を目の当たりにしていたグエンガとラクサジの一言。

もはやサポート要らなくね？と思えるほどの動きに魅了すら覚えてしまう。

さすがに毒といった状態異常に陥った時はラクサジがサポートするが、その凄まじさ故に、援護したくてもできない。

「アザナさんの夢でしたからね」

呆気に取られている二人とは違い、カリガはいたく冷静だった。

長年彼女とコンビを組んでいるからだろうが、それにしたって落ち着いている。

——いや、戦闘経験が豊富なグエンガは察していた。

カリガは疼いている。そわそわとしており、しかし其の場でじっとして戦う様子を見ていた。

すぐに入らないのは割り込む隙を見つける為であり、動きを見極めようと見続けている。

「アザナさんは常に上を目指す人なんです。戦い抜くしかできない不器用な方なんですけど、そこがかっこいいんです。そんなアザナさんを見ていると……なんていうか……」

ぎゅつと拳を握るカリガ。しかし、多くの危機に直面し、轟竜のような気迫を見つけてきたグエンガは、カリガからある気配を感じていた。

「血が騒ぐんですよ」

闘志。溢れんばかりの闘志がカリガの全身から滲み出していた。

今は防具で身を包んでいてわからないが、カリガは確か中性的なあどけない顔が特徴の青年のはずだ。

そんな彼が、ティガレックスのような気迫を醸し出していることに、グエンガは驚いていた。

「カリガ！手伝え！」

「今行きますっ！」

アザナからの命をうけ、カリガは走り出す。

先ほどまで混ざる隙も無かったはずが、カリガは難なく入り込み、アザナと同じような動きで攻撃を加えていく。

流れるようなチームプレイ。そして2人から醸し出す闘争心。獣のような掛け声。

—似た者カップル……。

遠くから二人を眺めていたグエンガとラクサジーは、そう思わざるを得なかったという。

また、その動きの速さや気迫に負けたのか、グエンガは戦闘に参加したくても出来なかったという。

もはやこの場は主軸2人に攻撃を任せて、2人はせつせとサポートに徹するのだった。

—そして太陽が水平線に傾き始め、世界をオレンジ色で染める頃。人間とモンスター。男女2人と蟹1匹。両者とも体力とスタミナの限界だった。

攻撃を避け続けたアザナとカリガだが、やはり一撃を受けてしま

い、ついに回復アイテムと砥石が切れ、息切れしている。

対するオニムシャザザミは、長期戦故か、動きが鈍くなり、甲殻全体にヒビが入っていた。

ちなみに、グエンガはほどほどに参戦、ラクサジーは結局手出しできず、回復とサポートに専念。

アイテム量も制限時間も残り僅か……ここで勝たなければ。

まずはオニムシャザザミが鋏を振り上げ、振り落とす。当初とは比べ物にならないほどに遅くなってしまったが、それでも威力は充分。

体力切れを起こした2人だがなんとか避け、動きが遅いことを理由に各々の武器に力を込める。

「これで……！」

「終わらせる！」

最大パワーを込めた大剣とハンマーが鋏に激突。

痛々しい音を立てて鋏と大剣がひび割れた甲殻に食い込み、体液が流れ込む。

―そしてついに、苦しそうにもがくオニムシャザザミにある変化が起こった。

武器が鋏の甲殻に食い込んだのを合図に、全身の甲殻のひび割れが大きくなっていく。

ビキビキとまるで地割れのように甲殻が割れていき、崩れ落ちる。

そしてオニムシャザザミが苦しそうに鋏を振り上げて下ろした直後、それは起こった。

―なんと割れた甲殻を脱ぎ捨て、大きく後方へと跳んでいったのだ。

これがユクモ村の村長が話していた、オニムシャザザミの生き残る術。長き戦いで割れていった甲殻を脱ぎ捨て、逃げる技……俗に言えば空蟬の術である。

脱いで新品となった甲殻をさらけ出したオニムシャザザミは、追求の暇も与えずに地中へ避難。

ハンター達を恐れるようにしてその姿を消していったのである。

ようやくオニムシャが自分達から逃げたと知った頃になって、皆が騒ぎ出した。

念願を叶え感極まる者、仲間の仇を討てて満足する者、ザザメタルを頂こうと剥ぎ取る者。

中でもアザナは心の底から感動を覚え、しばらく動けなかつたりしたほどだ。

この脱皮の殻から回収することのできる4つの宝石をギルドに届けばクエストはクリア。さっそく？ぎ取るべく各々が行動を開始する。

「あつた！ありましたーっ！」

既に皆が達成の証である宝石―ザザジュエル―を回収し終えたところで、カリガが声を荒げる。

その手に掲げられているものは、黒い真珠のような球体。しかし片手では収められないほどに大きい。

グエンガもアザナもそれを見て首を傾げるが、ラクサジーは驚愕のあまり目を見開いた。

「そ、それはまさか……『黒き鬼のナミダ』!？」
ラクサジーの言葉に頷くカリガ。

黒き鬼のナミダ―碧玉や紅玉に勝るとも劣らないという希少価値の高い素材。

かつてオニムシャザザミを討ち取ったハンターは、この真珠を手に入れたからこそ島の支配者となったのだ。

この真珠を大型モンスターの前に掲げると、なんとモンスターが警戒して近寄ってこないのだ。

一説では、この黒い真珠はオニムシャザザミの魂が込められているのか、楽土に限り島中のモンスターが警戒するという。

これによつて楽土の安全は保たれる為、この黒き鬼のナミダを所有

したものは、楽土の所有権を手に入れるといわれている。

楽土の自然は豊かであるため、その島の恵みを分けてもらおうと訪れる者や、地域探索の為に訪れる者は多い。

つまり、楽土を所有することができれば、1年間は豊かな生活を送ることができるという脅威の素材なのだ。

—それをカリガが手に入れた。

ラクサジーにとっては涎が垂れるが、金より勝利や達成感を欲していたアザナとグエンガにとっては無縁な話だ。

カリガもアザナと同様……というか同一人物のはずだ。信頼の關係上、契約金などには五月蠅いが。

それなのに何故欲していたのか。新しい武器でも作るつもりなのだろうか？

そんなことを考えていてだんまりとしていたアザナの前に、カリガが立ち止まった。

身長差故にアザナはカリガを見上げる。どういふことか、カリガがヘルムを脱ぎ捨て始めた。

あどけない表情が紅く染まっており、何故か緊張で震えている。もしや緊張がほぐれた所為で風邪でも引いたのだろうか。アザナは少し心配してしまう。

—その後、カリガは想いを伝えることに成功したが、男2人の爆弾攻撃を受けて吹っ飛ばされたことをここに記す。

—完—

第16. 5話 「鬼ヶ島の秘密」

―鬼を追い払い、ある狩人が想いを告げている頃。

楽土と呼ばれる島は、実は未だに謎が多い。というのも、一度は鬼鉄蟹を退け島を手に入れたものの、わずか1年では探索が隅々まで行き渡らない為である。

そもそも楽土とは、オニムシヤザザミがそこへ移り住んだからこそ発見できたものだ。だからこそ豊富な自然や古代遺跡を発見できたともいえる。

だからこそハンターズギルドは、オニムシヤザザミ撃退の為にクエストを発注し、その証である黒玉を手に入れる必要があった。

黒玉のおかげで大型モンスターが警戒し陸地に入り込まないとはいえ、海に住まうモンスター達には通用しないという欠点もある。

楽土周辺の海には、意外にも多くのモンスターがうろついている。エピオスを始め、ラギアクルス、ガノトトスなどといった大型の水棲モンスターまでもが、楽土の恵みを求めてやってくるのだ。

幸いな事に、陸地に住まう大型モンスターはオニムシヤザザミただ一匹で、しかもちよつかいさえ出さなければその恵みを分けて貰える。

逆にここを縄張りとしようとしゃばるものなら、オニムシヤザザミが襲い掛かり、海に叩き落とされるのがオチだ。

だからこそ楽土の陸上には鬼を除く大型モンスターが存在せず、平和な自然界が保たれている。

逆に言えば海中には大型モンスターがいくつか存在しており、海を渡ろうとすれば危険が伴う。

―とある海域を除けば、だが。

実はこの楽土周辺の海底には、多くの古代遺跡が沈んでいる。

大昔は陸上だったのか、或いは海底に築いた都市なのかはわからない。

いが、神殿のような町並みが存在している。

今は全て海の藻屑となって崩れており、人間ではなく魚やモンスターへの住処となっている。

しかしそれらは考古学者から見れば涎が垂れるような考古学的遺産であり、過去の歴史の一部を知る重要な手がかりでもある。

残骸の中には宝と呼べるような物も眠っているかもしれないのだから、今後の調査次第では期待が持てそうである。

そんな海底遺跡に人々が気づかなかつたのは、先も言った大型の水棲モンスターの存在もある。

そしてもう一つの理由が1年間という僅かな期間だ。陸地ばかり目を向けていて、水中深くまでは人の手が回せなかつたのである。

再びオニムシャザミが追い払われたことにより見つかる可能性が高まるが、それは置いておこう。

その海底神殿を道なりに行き、楽土へと向かう先に、そこはあった。楽土を人工的に掘り進んだような洞窟。その奥の奥……楽土の中心部へと続く暗き道を進んでいく。

下へ下へと続くその道は、発光体を持つ海藻類しか灯りが無いため、古代から住まう鮫や奇妙な魚が泳ぎまわっている。

―まるで奈落の底に繋がっているような暗闇の道。その最深部にそこはあった。

岩壁に突き出た水晶とピュアクリスタルが楽土から漏れる僅かな太陽の光を受け、乱反射と増幅を繰り返して照らされた空間。

そこはモガの村にあるという海底遺跡と酷似しているが、規模が違っていた。

まるで楽土の地面を円筒状にくり貫いたような空間は、中央の舞台を眺める為の歌劇場のよう。

岩盤に張り付くように築かれた遺跡は、水以外の脅威とは無縁であったのか、当時の面影が綺麗に残っていた。

そして極め付けは上下の空間。上も下も果てしなく遠く、上には輝く光が、地面には奈落の闇へ続く割目が存在していた。

時を刻むのをやめてしまったかのような空間の中央。そこで唯一時を刻んでいる存在……ある巨大な生命体が陣取っていた。

―ナバルデウス。

ラギアクルスに酷似した巨体を持つ、未だに解明されていない古龍種だ。

確認されている固体といえば、白き大海龍ナバルデウスと、その亜種……金色に染まる皇海龍。

だがこの深き眠りに入っているナバルデウスは、そのどちらでもなかった。ラギアクルスと同格の大きさを誇るが、原種や亜種に比べると小さく見える。

深遠のような限りない黒に近い青。その硬い皮膚には幾つもの傷があり、見る者に貫禄を与えさせられる。

ただの幼生体なのか、それとも別の生き方を選んだ亜種なのか。それは彼だけが知っている。

ふと、ナバルデウスは覚醒したかのように一気に目覚め、上を見上げる。

―上からオニムシャザザミが降ってくる。それも隕石と紛うことない速さで。

ナバルデウスは、最初からその落下を読み取ったかのように中央から少し移動する。

その直後、オニムシャザザミは海の底へと落ち、海底遺跡を大きく揺らした。

もうもうと煙が漂う中、オニムシャザザミは何事も無かったかのように姿を現した。

鋼鉄の身体を持つオニムシャザザミにとって、深海の水圧だろうか急降下による落下だろうかへっちゃらである。

加えてこのオニムシャザザミは、なんと海中にだって適応可能だ。

元は蟹だとはいえ、凄まじい適応力である。

やがて自分の重みで出来た穴から這い出ると、浅瀬へと続いていく洞窟へと足を進める。

水中だからかいつもよりも早く移動しており、どこことなく、早くココを出たいという焦りを醸し出していた。

一方のナバルデウスはといえば、突然の来訪者に驚きはしたものの、襲うことは無い。

なんだこいつか、と言わんばかりにオニムシャザザミの姿を確認した後、再び中央に戻る。

実はこのナバルデウス、以前にもオニムシャザザミに会ったことがある。といっても今回のように、お互いに闘争心はなく、通り過ぎただけなので何も起こりはしなかった。

海で暮らすナバルデウスにとって、陸地に住む生物のことなど気にも留めない。それに自分から縄張りから出て行くのだから、襲う理由もないし、関わる理由もない。

眠いからさつさと帰れ、と言わんばかりに尻尾を軽く振り、オニムシャザザミを見送った後で深い眠りに付くのだった。

その島が、鬼の住む楽土と呼ばれていることに間違いはなかった。ただ間違えたことといえば、支配者は二匹存在していた、という誰も知らない事実。

陸地にはオニムシャザザミが、深海にはナバルデウスが支配者として君臨していた。

ただ、このナバルデウスの存在を知るのは、恐らくずっと先になるだろう。

何せ彼が居る場所は深海の海底遺跡だ。人の手が入るには相当の時間が掛かることは間違いない。

—自分から上へ登ってくるのなら話は別だが。

ともあれ、ナバルデウスは今もなおここで眠っている。

いつしかハンターが襲ってくるという考えすらなく、ただ己の時間を生きていく。

人が海に住む鬼の存在に気づくのはいつになるのか。それは神の
みがあることである。

さて、話は逸れてしまったが、オニムシヤザザミはようやく日の光
を目の当たりにする。

ようやくとはいうが、海底都市にたどり着くのかかった時間は数
十分程度でしかない。

そのままオニムシヤザザミは海底都市の道を、割と早いペースで歩
いていく。

目指すは大陸。楽土以外の、自分の食欲を満たすことのできるどこ
か。

オニムシヤザザミは海を歩きながら、今日も今日とてのんびりと生
きていくのである。

—完—

第17話 「海は広いな大きいな」

—海は広い。

一説では世界の七割は海で出来ているというのだから、その広さは半端無いと理解できるだろう。

また、人類は主に陸地で活動している種族。船で海を渡るとはいえ、大海原のど真ん中に長居するようなことはない。

その為、海竜種や魚竜種といったモンスターは陸地の近くに生息しているものを中心に調査している。

—つまり、海には、ハンター達が見たことの無いような生き物が沢山いるということである。

楽土を旅立ってからしばらくした頃、オニムシャザザミは海底を歩き続けていた。

海の底といっても、海面からの光は届いているし、適度に生き物達の姿が見えている。

とはいえ、ここは大海原のど真ん中。歩けど歩けど砂漠のような光景がどこまでも広がっている。

それでもオニムシャザザミは、元々海に住む甲殻種だったことを生かし、大海原を渡り歩くのだった。

そんなオニムシャザザミの元へ、あるモンスターの影が近づいてきた。

—クアルセプス。

晶竜と呼ばれる海竜種に属するモンスターで、鉱石を食べて水晶を纏い、蓄電能力を持つようになる。

そんな彼らは、幼生時は海中に暮らし、成体になると陸地へ上がり地上で暮らすという変わった生態を持つ。

このクアルセプスも、水晶を纏っていないことや大きさからして、水中から陸地へ上がる頃のようなのだ。

そんなクアルセプスの幼生体を追いかけていたモンスターは、本来

なら陸地に住むはずの種族だった。

ガノトトス——に似た姿をしている魚竜種が4〜5匹の群れを構成してやってきている。

それは——青いドスガレオスとガレオスであった。

砂漠に住まうはずの彼らが、海中を悠々と泳いでクアルセプスを追いかけている。

普段なら有り得ないと思うだろうが、思い出して欲しい。彼らはかつて水中に生息していたが、長い年月と大きな環境変化を得て、砂へ適応した種族。

進化の分岐点が生まれ、砂に適応したものの、そのまま水中に生息し続けたものと分かれても可笑しくは無い。

その証拠に、このガレオス達の足は陸地のよりも足が小さく、鱗が砂色に染まる前の美しい青で彩られていた。

——ガレオスの原種……通称「さめりゆう鮫竜」である。

そんな鮫竜達は、数にものを言わせ、自分達よりも一回り小さいクアルセプスを獲物として狙っていた。

つまりはこの幼いクアルセプスは、海のハンターとも呼ばれるガレオス達から逃げ惑っていたのだ。

そして隠れる場所は無いかと逃げながら探していたら、オニムシャザザミを見つけ、そこへ逃げ込もうとしたと。

もちろんオニムシャザザミはそんなことは気にしていないし、気づいてもいない。

それをいい事にクアルセプスが急いで向かい、僅かに口が空いたアカムトルムのヤドに入り込む。

少々狭いが、これでガレオス達が入り込めなくなった上に手出しできなくなつた為、良しとしよう。

だがガレオス達も、せっかくの獲物を見逃すほど甘い連中ではない。

オニムシャザザミの周りを囲み、どうにかしてクアルセプスをヤド

から引きずり出そうと様子を見ている。

この時になって初めてガレオス達の存在に気づいたが、それでも無視して先を進むことにする。

オニムシャザザミの強さや意志など関係ない。ガレオス達にとつて重要なのは、ヤドからクアルセプスの幼生体を引き出すことだ。

とりあえずガレオス達はオニムシャザザミのヤドに近づき、出て来いと言わんばかりに突いてみる。

しかしアカムトルムの頭蓋骨は重く大きいので、ガレオス達が体当たりを仕掛けようとも外れたり壊れたりすることはない。

中に居るクアルセプスの体に衝撃は走るが、それでも安全であることには違い無い。

そしてその衝撃はもちろんオニムシャザザミにも伝わり、さすがにうつつとおしいと感じてきている。

いい加減に追い払ってやろうかと思っていた……次の瞬間。

—赤い彗星がガレオスを搔つ攫った。

もちろん、海の中に彗星なんてありえない。高速で潜行し、今しがたガレオスを銜えたその正体は、赤いガノトトスであった。

これは完全に海中のみに適応した種族で、食性の違いにより鱗が赤く、ガレオス同様に原種よりも足が小さい。

もしこの大海原を遊泳するガノトトスに名をつけるとすれば「こうすいりゆう紅水竜」だろう。

そんな紅水竜が、オニムシャザザミに群がっていた ガレオス 餌 を見つけ、食らいついたのだ。

ガノトトスの3倍の潜行速度を持つ彼からすれば、ガレオス一匹を不意打ちで仕留めるぐらい朝飯前である。(今は昼頃だが)

首をしつかりと銜えて絞め殺した後、横取りされないように泳いだまま食すのが紅水竜の食べ方だ。

とりあえず一匹捕まえたら満足したようで、そのまま通常の3倍の速さでどこかへ行ってしまった。

つまり、相変わらずオニムシャザザミ（とヤドの中に居るクアルセプス）は鮫竜の群れに絡まれたままである。

とつとと出せー、と言わんばかりに体当たりをしたり、圧縮した水を吐き出すなどして攻撃を仕掛けるガレオス達。

リーダー格であるドスガレオスも、負けじとオニムシャザザミのヤドに向けて体当たりしてはいる。

しかしオニムシャザザミの重さと硬さは半端ではない。ヤドも壊れる様子は無く、ガレオス達の攻撃を物ともせず悠々と歩き続けた。

……が、さすがに苛々してきたのか、ガチガチと鋏を打ち鳴らして怒りを露にしている。

—そして我慢の限界が解かれた。

オニムシャザザミから黄色い霧が広範囲に広がっていく。

それをモロに食らったガレオス達（とヤドの中にいるクアルセプス）が痺れて浮かんでいった。

オニムシャザザミが得意とする、広範囲の状態異常攻撃である。今回は麻痺毒。

さすがに麻痺毒を受ければ黙るといふもの。静かになった頃を見計らって急いで其の場から走り出す。

—しかし、海の脅威はまだまだ続いていたのだ。

実はオニムシャザザミの歩いていた箇所は、砂漠のような砂地ではなく、ゴツゴツとした岩場だ。

しかもあちこちに希少な鉱石が地面から生えており、オニムシャザザミにとって丁度よい食事場所となる。

そんな大地が揺れ始めたのだ。それでもただの地震ではない。まるで大地が動いているような……。

「いや、実際に動き、浮かんできたのだ………ジエン・モーランが。」

そう、鉱脈が埋まっていた大地は、実はジエン・モーランの背中だったのだ。

それもただのジエン・モーランではない。これも原種とは違う進化を選んだ、峯山龍の変異種。

太古に起こった大津波によつて沈んだ砂漠……そこに生息していた古龍種。

——「孤島龍^{ことうりゆう}」。それがこの『大海原を泳ぐ島』の別名である。

海底では岩場として、海面では島に擬態して潜んでいるという海の古龍種。

ナバルデウス同様に異常な肺活量を持ち、殆どを海底ですごしているという。

そんなジエン・モーランだが、海面を泳ぐ小魚の群れを狙って浮上してきたようだ。

——背中にオニムシャザザミ（とヤドの中で痺れているクアルセプス）を乗せて。

水面に顔を出し、水ごと小魚達を飲み込みながら遊泳するジエン・モーラン。

その古龍種の背中で、鉱石を食らいながらのんびりと居座っているオニムシャザザミ。

なんともシユールで目立つ光景だが、あたりには人っ子一人いないのが事実。

しかもこのまま行けば旧大陸の海域にたどり着く。なんとも美味しい展開ではないか。

こうしてオニムシャザザミは、突如として現れた孤島龍の背に乗っ

て旧大陸へ向かう。

背中のヤドに幼いクアルセプスが入っていることを知らずに。

クアルセプスにとつても旧大陸にいけるのなら好都合なのだが、果たしてどうなることやら。

二匹（一匹は成り行きで）の旅は続く。

—完—

第18話 「猿蟹対面」

—ふわあ……暇だなあ……。

と言っているかのように、ババコンガは欠伸をしながら背中を搔く。

海岸近くの木に背中を預けて座り、海を眺めながら体中を搔く。なんとも暢気な光景だろうか。

ここは旧大陸の最東部にある密林の海辺。太陽の光を受けた植物たちは活き活きとしており、この地の豊かさを物語っている。

程よい湿度が多く、キノコ類を生やし、モスやブルファンゴがそれを食べる姿が多く見られる。

そんな密林に住まうババコンガは、腹を満たし、やることをやり終えたらしく、暇そうにしていた。

このババコンガは中々の強さと大きさを誇っているらしく、ここしばらくの密林全体を縄張りとしている。

つい先ほども、それなりの腕を持つハンター集団を返り討ち、それどころかフンまみれにしてやった程だ。

だからこそこのババコンガは優越感に満ち溢れており、のんびりと過ごしていた。

そんなババコンガが、興味が湧いて身を乗り出すほどの物が現れた。

かなりでかいダイミョウザザミ……オニムシャザザミである。

ここら付近の海域でジエン・モーランの背から降り、海からこの海岸まで上がってきたオニムシャザザミ。

そんな彼は、のっしのっしと歩き続け、この密林の主であるババコンガの横を平然と通り過ぎていった。

警戒心どころか敵対心の欠片ですら見せずに歩くその姿は、ふてぶてしくもある意味での貫禄を見せ付けていた。

ババコンガもそんなオニムシャザザミを見て圧倒的な何かを感じられるが、それ以上に好奇心が疼く。

ババコンガは好奇心が旺盛なモンスターでもあり、興味を持てば

ちよつかいをかける困り者である。

しかし、流石のババコンガも躊躇はあった。オニムシャザザミに対する威圧感や劣等感などではない。

過去に何度かヤオザミにちよつかいをかけては痛い思いをしてきたからだ。

その辺に生えていたキノコを食べているオニムシャザザミの背中を見つめるババコンガ。

威嚇もなかったとはいえ仮にも己の縄張りを侵しているというのに、ババコンガは悩む一方だ。

いや、ババコンガはオニムシャザザミに対して警戒はしている。ただ。

― 触るぐらいなら別にいいよな？

なお、上記の台詞はイメージです。

ババコンガは次へ移動していくオニムシャザザミに続いてゆつくりと歩き出す。

付かず離れずの距離を保ちながら、ババコンガは覇竜の頭蓋骨を見ながら後を付いて行くのだった。

それに気づかずに、食べられる物はないかと適当に歩くオニムシャザザミ。なんと奇妙な光景だろうか。

「黒き神」とも「火山の暴君」とも呼ばれている覇竜・アカムトルム。亡き者となって頭蓋骨となったとしても、その名に恥じぬ迫力を見せ付けている。

しかし桃毛獣には、そんなの関係ねえ、と言わんばかりに触りたがっていた。

触りたいのだが……一応はオニムシャザザミを強そうな敵だと認めめたのか、警戒して触れようとしてない。

一方のオニムシャザザミはいえ、攻撃してこないことをいい事に、旧大陸ならではの大好物を捕食していた。

過去にもここへ来たことがある彼は、キノコと生肉を同時に食べられるモスを気に入っており、積極的に食している。

毒ではなく、銕で一撃死させてあげるあたり、彼なりの弱肉強食が見える気がする。

そしてついにババコンガが動いた。結局触ることにしたのである。その圧倒的な強さを見せ付ける頭蓋骨を、まずは鼻で匂いをかいで見える。潮の香りがした。

続いては長い爪で小突いてみる。食事に夢中でいることもあって、これぐらいなら気づかれならしい。

次は眼に当たる空洞に手を突っ込んでみる。何か無いかと手探りで探してみる。

—直後、激痛がババコンガを襲った。

これにはババコンガも、ババコンガの叫びを背後から聞いたオニムシヤザザミも驚いた。両者ともにほぼ同時に動いたが、ババコンガの方が早かった。

突っ込んでいた手を引っ張り出し、その勢いで後ろへごろごろと転がっていく。

しかし、もし引き抜くのが遅かったら、オニムシヤザザミのバツクジャンプヤド突進を受けるところだった。

条件反射も含めて咄嗟の攻撃だったとはいえ避けたのだ。運のいいババコンガだ。

だがババコンガはそれどころではない。今も尚、手を噛み付いて離れない何かを振り払おうと手を振って暴れている。

その何かとは——クアルセプスの幼生体であった。

不運の事故でヤドに入りっぱなしだった彼は、突然入り込んできた手に思わず噛み付いてしまったのだ。

やがてババコンガのパワーに負けて振り払われたが、その拍子に地面に着地、草むらに紛れて逃げていく。

—この後、このクアルセプスは立派な成体になることをここに記そう。

ババコンガは怒り狂って我を忘れていた。先ほど噛み付いてきたモンスターの子を見失い、完全に頭にきたようだ。

こうなったらあのヤド野郎をぶっ潰して……そう思っただけでババコンガは後ろを向いた。

—アカムトルムのヤドが目の前にあった。

—そして彼は、空を飛んでいき、お星様となったのだ……。

オニムシャザザミの必殺技の一つ……「水ジェットヤド突進」。

高圧縮の水を地面に向けて噴出することで得た推進力で、強力な突進攻撃を生み出す。その威力は、大きなババコンガを空高くまで吹っ飛ばすほどである。恐ろしい。

彼も突然叫ばれたことでビックリした上に、せつかくの食事を邪魔されたこともあり腹が立っていたのだ。

そうなってしまえば、事の発端であるババコンガに攻撃したくなるというもの。天誅、である。

事を終えて周囲を確認した後、また食べる為にあちこちを回り始める。大きくなった以上、胃袋(?)が大きくなるのは当たり前。まだまだ食べる。

とはいえ、食欲の塊であるオニムシャザザミでもイビルジョーのように考え無しに食べるわけではない。

ほどほどにキノコやモスは残すし、雑食性だから様々な物を少しずつ食べるだけで事足りるからだ。

長旅で空腹だった胃袋を満たすことができたオニムシャザザミは、またゆつくりと歩き出す。

今回はキノコを主に堪能したから、次はもう少し質のいい鉱石を食

べようというのだ。

目指すは火山、あるいは旧火山。今日もオニムシヤザザミはのんびりと歩くのだった。

こっそりと木陰で隠れ、オニムシヤザザミの後姿を見る一匹の獣人種の姿があった。

とてとてと、時々隠れながらも、しっかりとオニムシヤザザミの後へと付いて行くのだった。

—完—

第19話 「奇面族の子、現る」

わちきは、ブツチャーという奇面族でヤンス。チャチャブーでヤンス。チャームポイントは、イヤンクツクのクチバシで作った鎧兜風の特製お面でヤンス。

元々は樹海で仲間と共に暮らしていたんでヤスが、わちきは結構前から旅に出ているんでヤンス。

最近の奇面族は旅に出る者が多くて、友であるチャチャとカヤンバに続いてわちきも旅に出たんでヤンス。

わちきの旅の目標・・・それは強いモンスターの素材でお面を作ることでヤンス。

成人の儀式もまだ終えていないでヤンスが、わちきの強さへの追求は伊達ではないでヤンス。

より強いモンスターの素材でお面を造り、そこで初めてわちきは強いチャチャブーとして修業するのでヤス。

わちきはこれまでにいろんなモンスターを見てきやした。ドスファンゴ、ドスランポス、ババコンガ、イヤンクツク……。

イヤンガルルガやクシャルダオラに偶然出会った時は死ぬかと思っただでヤンス。

今のところ、活動範囲を密林に留めているでヤンスが……身の安全的な意味で。

そしてわちきはついに出会ったんでヤンス。わちきが知る限りで最強と呼べるモンスターを。

長老から聞いたことがあるとはいえ、まさか実在しているとは思わなかったでヤンスが。

その名はオニムシャザザミ。ここいらを支配していたババコンガを吹っ飛ばせるほどに強いモンスターでヤンス。

わちきは、是非ともオニムシャザザミの甲殻からお面を造りたいんでヤス。もちろんわちきが倒せるような相手じゃないのは解つていやす。

今まで作ったお面も、ハンターが討伐して帰った後、倒されたモン

スターから剥ぎ取ったものだし。

で、オニムシヤザザミについてきてここまで来たでヤンスが……。

バサルモスが、まるでボールのように鋏で転がされているのを見てもしまったでヤンス。

ここは火山。言わずと知れた、優れた鉱石が眠っている危険地域でヤンス。

どうやらオニムシヤザザミはここで取れる「エルトライト鉱石」が気に入ったみたいなんでヤンス。

で、その鉱石を取り込んでいる岩竜バサルモスに狙いをつけたんでヤンスよ。

だからバサルモスはオニムシヤザザミから逃げようと、ああして転がって逃げようとしているんでヤンス。

普段なら睡眠ガスや熱線で抵抗するんでやしようが、オニムシヤの前じゃ無力でヤンスからねえ。

そしてオニムシヤザザミの食に対する執念が凄まじいのなんの。

ゴロゴロ転がって逃げようとするバサルモスを懸命に追いかけて、齧ろうと必死になっているでヤンス。

やがて根負けしたかのようにバサルモスは回転を止めたでヤンス。

逆に、もうどうでもいいやと思ったのか、どっしりと俯けに構えるバサルモス。

まるで「背中からガリガリいつちやつてくたせえ！」と言っているかのようにヤンス。漢でヤンスね……！こいつが雄か雌かなんて、わちきにはわかりやしませんが。

オニムシヤザザミは、遠慮なく、と鋏でバサルモスを押さえつけながらガリガリ齧り始めたでヤンス。

そりやもーガリガリと。よくあんなに易々とかじりつくことができるでヤンスね？

しかし……バサルモスですら安易に降伏の姿勢を見せるとは、さすがオニムシヤザザミ！

一見するとほのぼのとした食事風景でヤンスが、どことなく貫禄があるでヤンスよ……！

—決めたでヤンス！わちきはオニムシャザザミの旦那についていくでヤンス！

オニムシャザザミの旦那は満足したらしく、バサルモスを置いてどこかへ行こうとしているでヤンス。

バサルモスは安堵したようにゆっくりと地面に潜っていくでヤンスが……あ、待つて欲しいでヤンス！

どうか、わちきにお面を作らせて、一緒にオトモさせて欲しいでヤンス！

そしてその強さを間近で見せて欲しいんでヤンスよ！オニムシャザザミの旦那あゝ！

—こうしてわちきとオニムシャザザミの旦那との旅が始まったんでヤンス！

—なんだろう、このちっこいの……。

上記の台詞はイメージです。足元でちよこまかと動いているチャャブーをオニムシャザザミが見ていたのです。

—完—

第20話 「登場！わがまま第三王女！」

ハンターたるもの、まずはハンターズギルドから発注したクエストを受けなければ狩猟はできない。

しかし一言でクエストと言っても、依頼主によって内容は様々。討伐はもちろん、採取を目的としたクエストもある。

人の数だけクエストがあるといっても過言ではない為、ハンターは様々なクエスト内容を見ることがなるだろう。

そして多くのクエストをこなしてきたベテランハンターなら、誰もが一度は目撃しているはずである。

多くの依頼の中でも特に高難易度な依頼内容が記されたクエスト……通称「鬼畜クエ」の数々を。

グルメや収集家はもちろんの事、どうしても良い理由で高難易度クエストを依頼する者、果てにはこの世の者とは思えない相手からの依頼までもある。

そんなクエストの中でも、特に有名とされている依頼主がいることをご存知だろうか？

―溶岩竜ヴオルガノスの魚拓がとりたいたから狩るのじゃ

―雌火竜リオレイアを飼いたいから捕まえるのじゃ

―かわいいウラガンキンがいるから狩ってくるのじゃ

やけに特徴的な語尾が気になるかもしれないが、そこはひとまず伏せて欲しい。

これだけでもその依頼主のぶっ壊れた精神を感じるだろうが、これだけで侮るようではいけない。

―寒いから金獅子ラージャンの毛皮で外套を作りたいたからラージャンを狩るのじゃ

―帽子にするから眠鳥ヒプノックの尾羽をとってくるのじゃ

―寒くてやってられないからベリオロスと戦うのじゃ

……という、理由が滅茶苦茶な依頼は数知れず。数多く居る奇妙な依頼主の中でも、その破天荒っぷりはトップクラスに君臨するだろう。

上を目指す為にクエストをこなしていくハンターなら誰もが目にする、恐ろしい程の難易度を誇るクエストの数々。

—その鬼畜クエストの依頼主の名には必ず『わがままな第三王女』とだけ記してあるのだ。

「なんと……とうとう出よったか……」

慌しく移動する衛兵達の話聞きつけ、眉間に皺を寄せる一人の男。

彼は白い髪に白いカイゼル髭を生やしている初老だが、その体は未だ老人という粹に収まらないほどに逞しい。

それもそのはず、このセバスチアスゲン、今でこそ執事という職についているが、かつてはハンターを務めていた。

現に、頬に三本の爪痕を堂々と残しているワイルドな面構えをしているが、その身体には立派な執事服を着ている。

ではどこに仕えているのかという……驚くなかれ、ここは王国、それも城のど真ん中だ。

オアシスを背に聳えるこの王国は『砂漠の大都市』と呼ばれ、数多くのキャラバンが行き来している為に貿易が盛んである。

彼はその王国に仕える、言わば『王宮専属ハンター兼執事』という大層な人物なのである。

最後に誰に仕えているのかといえば……いや、これは後にわかることなので、伏せておきましょう。

「この情報が姫様に届けば、またワガママを申し出るに違い無い……！」

かつてはハンターとして多くの修羅場を体験し精神的にも逞しくなった彼だが、今はそれどころではない。

『ある情報』を聞いた途端、慌てて衛兵に守秘義務を与え、己が仕えている姫の下へと向かう。

それほどまでに事体は深刻であり、我が「姫」の性格上、興味を沸くような内容だったのだ。

情報が伝わっていないことを祈りつつ、セバスは静かな足取りで、しかし急ぎ足で「姫」の部屋へと向かう。

「時に爺よ、わが国に近い砂漠に、オニムシヤザザミが出たそうじゃない？」

―時既に遅しとはこの事だと、セバスは深い溜息を吐きながら思った。

大人の男性ほどの大きさを持つプーギーのぬいぐるみや等身大アイルー人形などが飾られたファンシーな部屋。

王女に与えられた広い個室の中央に置かれたキングサイズベットの隣には、机と椅子が置かれており、声を上げた者はそこに座っていた。

学者向けの難しく分厚い本を広げている少女は席から立ち上がり、セバスと向き合った。

年齢は14歳だが小柄で、しかし太りすぎず痩せすぎずといった健康的な肉付きをしている。

メガネをかけているがこれは読書の為につけてあるだけで、実際の視力は2.0もあるという。

強気そうな青い目と広いデコ、そして金髪の縦ロールを一對垂らした髪型が特徴的な、典型的なお嬢様タイプ。ちなみにつるぺた。

―この少女こそ、ハンター達にとって悪名高いとされる、『わがまな第三王女』なのだ！

まあ、それはともかくとして。

表は冷静を保っているが、内心はかなり焦っており、一筋の汗を額から垂らすセバス。溜息を零すのを懸命に堪え、まずは落ち着いた口調で王女に問う。

「失礼ですが、その話をどこでお聞きになられたのでしょうか？」

「なに、見張りの者がざわざわ騒いでおつてな？ つい耳にしてしまったのじゃ」

—給料削減を考えなければならんな。

姫の個室前には見張りが二名おり、その者達が騒いでいたのを聞いてしまったのだろう。

とりあえずその者達の制裁を考えると、今はこの姫の対処をどうにかせねば。

「で、どうなのじゃ？ オニムシャザザミは出たのか？」

「左様でございます。現在は砂漠付近をうろついているだけで被害はございませんが……」

「爺よ、さっそくオニムシャザザミ討伐の依頼を発注するのじゃ！」

解かっていたとはいえ、ここまで単刀直入に言われるとさすがに感慨深いものを感じるセバスであった。

いつだって姫はワガママなのは知っていたが、相手の苦勞を全く考えていないのだから恐ろしい。

しかも聞いた所によると、撃退したハンターの一人は、あの嵐龍の素材で出来た防具を纏っていたという。

そんな素晴らしい装備をつけた凄腕ハンターが4人もいて撃退がやっつとだ。もし討伐して持って帰れと言われたら、どれだけの被害が出ることやら。

「何、心配するでない」

悩んでいたセバスを前に、王女は自分がするわけでもないのに自信満々に頷いてみせた。

「ハンターに任せておけば、万事解決なのじゃからな！」

—そう、これこそが、ある意味で王女の一番困った所なのだ。

王女は幼少の頃より、専属ハンター・セバスの昔話を聞いて育ってきた。

心踊るような冒険、モンスターとの激戦、仲間との出会いや別れ、突然の死、神秘溢れる古龍種の恐怖……。

経験豊富なセバスの昔話を誰よりも楽しみにしていたのは、他でもないこの第三王女だった。

だからこそ王女は、ハンターに憧れ、ハンターが強く誇り高い者だと知った。

同時に、ハンターは目的とクエストがあつて、初めて狩りに出てモンスターと出会うものだとも教わった。

王女は無理難題な望みを発注してきた。ハンターならできると信じて。ハンターならどんなモンスターでも狩れると信じて。

結果的に依頼は達成されるのだから、余計にハンターへの信頼が高まってしまふ。中には死んでしまった者も居るが、それが王女に伝わることには無い。

王女にとつてハンターとは、依頼を必ず果たし、どんなモンスターにも打ち勝つヒーローなのだ。

そんな王女になってしまったからこそ、セバスは王女の執事に任命されてしまったのだ。

しかしセバスが王女の面倒を見るようになったからこそ、彼女は(若干)まともになったとも言える。

ワガママな彼女だが決して権力に頼ろうとはせず、己の力のみで我を通す高い行動力を持つ。

おかげで城内の誰からも気づかれずに街に向かい、今では「影のガキ大将」として子供達から慕われるほどだ。

そんな王女だからこそ、あえて渴を入れるのがセバスである。

「なりませんぞ姫!」

「な、なんでじゃ!?!」

「オニムシャザザミは、下手をすれば古龍にも匹敵するという大物です。ハンターはよくてもギルドがそれを認めはいたしません」

「……秘密裏に」

「ネコート殿を困らせなさるな。相手が大物過ぎますぞ」

何せ彼女は、過去に「老山龍の全長を自分の手で測ってみたいから捕獲するよう依頼するのじゃ」と言つてのけた強者。

古龍種に捕獲は不可能だと知っているはずなのに、どうしてこんな

依頼を申し付けたのか、セバスには解からず終いだった。知る必要もないが。

下手に出れば押し切られること間違い無しと、確固たる姿勢で挑まなければならない。

―と、思っていたのだが。

「……………」

王女が目頭に涙を溜め、顔を真っ赤にして堪えている。

―い、いかん!!

セバスが宥めよけとした…………次の瞬間。

震動が城を揺らし、爆音が城内どころか城下町にすら響き渡り、城で飼っているモンスター達が跳ね上がる。

城下町の人々は一瞬だけ驚いた後、「ああ、また第三王女か」と納得して各々の仕事に戻った。

今もなお叫び声は轟き、城を軽いパニックで多い尽くしていた。

(くううううう…………お嬢様の泣き声は溜まりませぬ…………!)

とっさにつけた耳栓で助かったものの、衝撃波によつて壁に激突したセバスがよろついて立ち上がる。

そう、彼女が城内の者達から恐れられている最大の理由は、この泣き声である。

その泣き声は、かの『大咆哮』を放つ黒轟竜に匹敵するほどの音量を誇ると言われている。

この泣き声を聞いてしまえば最後、大半の従者は辞表届けを出す

いわれ、逆にこれに耐え切ったものは絶大の信頼を寄せられ、彼女の侍女やセバスがそれに該当する。

とにかく、こうなった王女の前で取る行動はといえば、ただ一つ。

―ボタン

とつとと部屋から出ておくに限る。

未だに城が彼女の咆哮によって揺れているが、流石に半壊まではしないので置いておくでしょう。

(さて、この後どうするべきですか……)

ただでさえオニムシャザザミが襲来してくるかもしれないからと城が慌しいのに。

セバスは大音量の震動を体に受けながら、困ったように溜息を零して城内を歩き出す。

あの様子からして、泣き止んだとしてもまた脱走しかねない。ひとまずは精銳を集め、姫の監視をさせておくでしょう……そう思い、セバスは頷く。

―そして翌日。

―またしても王女が脱走した。

―「オニムシャザザミを見に行く。心配するな」と手紙を残して……。

―完―

第21話 「鬼鉄蟹と奇面族の生態」

ワガママ第三王女が行方知れずになって国中が慌てふためいている頃。

国が慌てる原因の一つであるオニムシャザザミが、近辺の砂漠で何をしているのかというと。

―ドヤア。

―ま、参りました……。

同種であるダイミヨウザザミ相手に縄張り争いをして勝っていた。

太陽の光が降り注ぎガレオス達が悠々と泳ぐ砂漠のど真ん中で繰り広げられる、甲殻種同士の戦い。

戦いとは言いが、お互いに傷一つ無く、それでいてさほど時間も取らずに終わっていた。

弱肉強食が掟である大自然の中で生きるモンスター達だが、なにも力ばかりが全てというわけではない。

いくら生存競争が掛かっているとはいえ、無闇に同族同士が争って種が絶えてしまつては元も子もないからだ。

かといって縄張りを侵され、食や身の危険が迫つてしまうようではいけない。難しい話だ。

そこでダイミヨウザザミが自分の縄張りを賭けてやるのが、大きさの競い合いである。両の鋏をこれでもかと言わんばかりに広げ、より大きい方が勝者となる単純な争い方だ。

ちなみにシヨウグンギザミは好戦的な性格をしている為、同族だろうが戦うことになる。

で、普通のダイミヨウザザミよりも二周り大きいオニムシャザザミが勝利を掴んだ、と。

すぐごと寂しげに立ち去るダイミヨウザザミを後に、オニムシャザザミは悠々と食事にありつくのであった。

まあオニムシャザザミは放浪癖(?)がある為、すぐに縄張りを返してやるだろう。そもそもオニムシャザザミは、その食欲を満たす為に各地を点々と回っているに過ぎない。

楽土というお気に入りの縄張りがあったとはいえ、その頑丈な身体と高い適応能力があれば一定の場所にこだわる必要も無い。

何よりも、今以上に強くなるには各地を回る必要がある。そうオニムシャザザミの経験が語っているのだ。

伊達で幼少の頃より波に揉まれ、新天地に移り住んで逞しく生きてわけでない、ということ。

もつとも、他者の縄張りに堂々と踏み込む辺り、このオニムシャザザミは意外とふてぶてしい奴なのかもしれないが。

さて、彼の旅路はそんな簡単な理由で始まっている。

楽土を強者（ハンター）に乗っ取られた以上、より強く、より美味しい物を求めて世界を回る。

そんなオニムシャザザミだが、最近になって新たな変化が生じた。

それが、己の足元でキーキーと鳴いている小型モンスターが存在である。

足元を見れば、イヤクツクの嘴を被った獣人種……小柄なチャチャブーが大量のガレオスの肝を持っている。

砂竜ガレオスから獲れる砂肝は珍味として有名で、オニムシャザザミの味覚にも見合ったご馳走だ。

それらが全て血まみれということは、今さつき獲ったばかりの新鮮な物だということ。血まみれなのは倒した後で解体したから……だと思いたい。

チャチャブーはそれを置いて距離を取ると、オニムシャザザミはここぞとばかりに食し、味を堪能するのだった。

このチャチャブーの名はブツチャー。強さを求めオニムシャザザミに付き添う奇面族の子供である。

もちろんオニムシャザザミはその名を知らない。ブツチャーは人語を話せないし、話せたとしてもオニムシャザザミがそれを理解できるわけがないからだ。

それでもブツチャーはオニムシャザザミに付きまとい、彼に美味し

い物を献上してくれる。

さらにはヤドに巣を作ろうとするランゴスタを追い払ったりするなど身の回りの面倒まで見てくれる。

もちろんブツチャーにも見返りはある。

オニムシヤザザミの行動力と強さは、各地を移動し、様々なモンスターを返り討ちにしてきた。

いわばオニムシヤザザミはブツチャーにとって、移動手段であり用心棒のようなものだ。

だがブツチャーにとって一番の目的が……オニムシヤザザミの甲殻の破片である。

奇面族は様々な物を収集しそれで面を作るといふ習性がある(例えばそれがゴミにしか見えなくても)。

だからこそ、ブツチャーはオニムシヤザザミの甲殻の破片を集めるのを日課としているのだ。

こうして、いつしかオニムシヤザザミとブツチャーの間には共生に似た関係を築くことになる。

ブツチャーとしてはオニムシヤザザミを慕っているのだが、肝心のオニムシヤザザミは気づかぬまま。

それでもブツチャーに攻撃を仕掛けない辺り、気に入ってはいるようだ。

「キー、キー！ (あつちに行くでヤンスー!)」

ぶんぶんと鉦を振り回し、オニムシヤザザミに群がるゲネポスを追い払おうとするブツチャー。

彼らの狙いは食事のお零れ……つまりブツチャーが献上した砂肝の余りを横取りしようとしていたのだ。

せっかく苦勞して集めた物を横取りされてはたまらないと、ブツチャーは張り切って鉦を振るう。

その小柄な体に似合わぬ怪力を目の当たりにしたゲネポス達は呆気なく退散。

オニムシヤザザミの食事も終わったのを見て、ふう、と安堵の溜息

を漏らしたブツチャー。

日差しを避けるために大きな岩の陰に移り、二匹は一休みすることに。

「お〜」

「………キ？」

気づけば、ブツチャーの隣にはオニムシャザザミを見上げている少女がいた。

小柄な体でありながら多くの荷物が入っている巨大なリュックを背負い、暑さから身を守る為に外套を纏っている。

手には空になったクーラードリンクの瓶がもたれているが、肌は汗でぐっしよりと濡れていた。

ブツチャーは何度か人間……ハンターを見たことがあり、彼らの強さや習性もある程度は理解している。

しかしこのような小さく細い人間は初めてみた。なので興味が沸き、じーつと見つめることに。

「や、やっつと見つけたのじゃ………大きいのお」

少女はゼエゼエと荒い呼吸を繰り返しながら、しかし報われたかのように笑みを浮かべて見上げている。

ここに来るまで、相当な苦勞をしたのだろう。こんな広く暑い砂漠を練り歩いてきたのだから当たり前だが。

やがて、少女は糸が切れた操り人形のように日陰の中で倒れこみ、ブツチャーを驚かす。

ブツチャーは恐る恐る倒れた少女に近づくが、顔を見て納得した。寝息を立てて寝ていたのだ。

（なんでヤンスか、コイツは……？）

ハンターやモンスターのように襲いかかるわけでもなく、勝手に倒れた小柄な人間。

敵意が無いからと攻撃はしないが、得体の知れない生物に首を傾げるブツチャーであった。

オニムシャザザミといえば、我関せずとばかりに日陰で昼寝を始めていた。

—これが、ワガママな第三王女とオニムシャザザミとブツチャーの出会いなのであった。

一方その頃、そんな第三王女の王国は何をしているかといえは。

「オニムシャザザミの位置はまだ掴めぬのか!？」

「現在、王女様探索隊はドスガレオスに襲われているとのこと!ネ
コート殿を経由に、ハンターに依頼を発注しておきます!」

「そんなことよりも国内の防衛対策を整えるのだ!ありつたけの兵を
城壁に集めろ!」

「何を言う!王女の無事が最優先であるぞ!」

「オニムシャザザミを討ち取ったというハンターからの返事はまだか
!？」

「そんなことよりこんがり肉食べたい」

「ダメだこいつ早くなんとかしないと・・・」

周囲の騒々しさと慌しさに、セバスIIチャスゲンは眉間を揉む。

過去に一度、楽土を追い出されたオニムシャザザミがどうやってか
この旧大陸に渡り、好き勝手に行動していた時期があった。

これといった縄張り意識を持たないオニムシャザザミは自ら攻撃
するような事はしないし、好んで何かを破壊したりするわけではな
い。

だが彼の被害は、通る為に邪魔な障害物……街や建物をいくつか破
壊する事はあった。地形が悪かったといえはそこまでだが、この王国
もその例外ではない。

なにせ城の後ろには巨大なオアシスがある。そのオアシスの存在
に気づき、水を欲して王国にやって来たモンスターは多い。

その度にハンターギルドに依頼し、ハンターに撃退または狩猟して
もらっていたからこそ、今まで大きな問題にはならなかった。

しかし今回は違う。旧大陸でも有名なオニムシャザザミがこの城
に向けてやって来るのだ。

そのオニムシャザザミの対応だけでも慌てる要因になるのに、さら

に追い討ちをかけるようにして王女が失踪。

騒動という騒動に拍車をかけ、今のように城内が慌しくなっている、というわけだ。致し方ないことだろう。

とりあえずその要因を一つでも解消しようと、同僚達を落ち着かせるべく、セバスは大声を発する。

「静かにせぬか！ 姫様の搜索ならワシが行くから」

「お待ちください」

その落ち着いた声に、セバスが大声を上げたにも関わらず周囲の人々は声の主を探す。

声のした方角・・・すなわちセバスの方へ部下や將軍の視線が向かうが、セバスは違うといわんばかりに首を振る。では誰が待ったをかけたのだろうか？

「ここです、ここ。セバス殿の足元です」

先ほどと同じ声ができるが、周囲は何故足元なのかと困惑し、全員が視線を下に落とす。

そこにはコートのようなものを着込んだ一匹のアイルーが居た。周囲の殆どが「誰？」と首を傾げる中、セバスは強張った顔を崩す。

「おお、ネコート殿、よく来てくださいましたな」

「噂の甲殻種が再び現れた他、国の一大事となれば黙ってはいられませんからな」

セバスはネコートにあわせるようにして屈み、言葉を交わしつつ握手をする。

一方で周囲の人々は、ネコートという名に小さな衝撃を受け、小さく声を交し合う。

ネコート・・・ポツケ村でよく見かける、上位のクエストを依頼してくれる謎の多いアイルーだ。

所謂「表向きには言えない頼み」を多数依頼しており、ハンターズギルドに深く関わっている奇妙な存在である。

ネコートはこの国との関わりも深く、現在絶賛行方不明中の「第三王女」との繋がりもそれなりにあるという。

いわば第三王女のワガママの原因の一つとも言えなくもないが

……ハンターズギルドとしても国相手には迂闊に逆らえない、ということだろう。

「ところでネコート殿、待つてくれとは……」

「オニムシャザザミはまだ砂漠にいるので、本腰の為の時間稼ぎはできるはず」

そういつてネコートは椅子から机へと跳び移り、失礼と理解しつつも、机の上に広がる周辺を記した地図を凝視する。

そしてオニムシャザザミが出没しているという砂漠に手をあて、皆の注目を集める。

「まず、搜索隊の邪魔になるであろうドスガレオスを狩るハンターを雇い、ついでにオニムシャザザミを監視するようお願いしています」「ついででオニムシャザザミの監視を？」

「王女様はオニムシャザザミを探しに行くにあつたので、必然的に砂漠に足を運んだことになります。オニムシャザザミとドスガレオスが同一エリアに出没しても可笑しくありません」

確かに、とセバスが頷き、遅れて周囲の者達もネコートの解説を静かに聞く。

「あの王女様のことですから、オニムシャザザミに接近する恐れもある。ならドスガレオス討伐と同時にオニムシャザザミを観察し、王女の姿を発見次第調査団に伝えるようにしておくべきです」

「そして王女搜索隊の包囲網も広げておくと……なるほど、ドスガレオス掃討だけでなく、自由に動ける視点も用意しておくわけですね」

搜索隊は搜索活動に専念しているとはいえ、モンスターに対する自衛能力が無い他、団体行動故に自由度は低い。

ハンターならフィールド外に出ない限り自由に行動できる為、ひよんなことから王女を見つけられる可能性も高い。戦う力もある為、下手をすれば搜索隊以上に期待が持てる。

とはいえ、ハンターは己の命を守る為に全力を尽くして戦うのだ。王女を見つけたからといって救出に手を回せるかといったら怪しいだろう。

だからこそ、王女の救出ではなく、周囲の情報収集に力を貸しても

らう。これだけでもハンターと捜索隊に対する難易度はグツと下がるだろう。

ハンターはドスガレオスとその群れの掃討、捜索隊は王女の捜索にあたる。

両者の肝となるのは「オニムシャザザミと王女の情報収集」。それを理解できるだけの判断力を求めることになるだろう。

「既にドスガレオス掃討の依頼を受けたハンターと会いましたが、腕と経験は確かです。私が保証します」

「ありがたい。では私達はオニムシャザザミ撃退の依頼を発注しましょう」

「承りますニャ・・いえ、承ります」

気恥ずかしそうに言い直すネコートに和んだのか、先ほどの慌てぶりが嘘のように朗らかに笑う人々。

というのも、人は具体的な案が纏まればすんなりと行くものだ。率先する内容が一つ減れば、次の案を進めることができる。

—では続いて、オニムシャザザミ撃退と国の防衛、それぞれのハンターを雇うかを検討する。

—完—

第22話 「第三王女を捜せ！」

― 捜索隊視点 ―

はあ……嫌だ嫌だ。なんで俺らが砂漠のど真ん中にいるんだろうな……俺が乗っているアプトノスが不機嫌そうに見えるよ。

そりゃ、俺たち捜索隊は捜す事がお仕事だから仕方ねえんだけど……オニムシャザザミがいるって解かっていると不安でしかないぜ。

こんな日中の砂漠で、あのワガママな王女様を探し出せなんて……一時期、ドスガレオスに襲われて大変だったのにさ。

ハンターさんがドスガレオスを引き受けてくれたから、今は比較的安心して探せるけどよ……。

「隊長、オニムシャザザミを発見しました」

俺の部下が目標を見つけたようなので、そちらに双眼鏡を向けてみる。ちなみに俺、見た目は無精髭の生えた親父だが、こうみえても隊長なの。

うへえ、いるいる。でつかいオニムシャザザミが、のっしのっしと暢気に歩いているよ。心なしか、のほほんとしてんねえ。

しかもそのまま歩き続ければ、王国にたどり着いちやうじゃん。やっぱオアシス目当てなんかね？

歩いているだけならまだ無害なんだけどなあ……盾蟹よりも大人しいって聞いたし。

それでも俺達はオニムシャザザミを見張っておく必要がある。何故かつつと、王女様があいつを捜しているに他ならねえ。

王女様が残したっていう置手紙には「オニムシャザザミを見に行く」とあったから、オニムシャザザミを見張っておけば王女が見つかるかもしれん、というのがセバスさんの案。

ネコートさんの助力もあって、今ドスガレオスとその群れを狩猟しているハンターさん達にも、王女が見つかったら報告するようお願いしている。

国の都合で巻き込んだように恐縮したんだが、ハンターさん達は気にしていない様子だった。これも依頼だからって諦めもあったが。

良い人達だったなあ。

「隊長、戻りました」

お、別の捜索隊が戻ってきたな……あー、やっぱ駄目か？顔に出てるぞ。

「お疲れさん。……で？王女様は見つかったか？」

「いえ……残念ながら」

やっぱりな。

捜索隊の目の見える所に居ないどころか、王女がまた飛び出したと聞いた時から解かつてはいたが。

王女って良くも悪くも運と頭が良いから、一度飛び出すと中々見つからず、それでいて確実に生き延びてきた。

モンスターが蔓延るこのご時世に、王族とはいえお子様が練り歩いて無事に帰還するだなんて、普通ならありえん。

けどまあ、ありえないといったら嘘になる。

王家より受け継がれた加護か何かがあるんじゃないかって言われているぐらいの強運と、元ベテランハンターのセバスさんから学んだサバイバルと調合の知識。

これらが合わされば、例えば子供といえども生き残る可能性の方が高くなるのは必然。

もし彼女が王女でなくハンターとして、いや探険家とかになったら間違いなく名に残る人物になれただろうに。つくづく憧れちゃうよ、王女様の才能には。

「……隊長？これからどうしますか？」

おつといけねえ。ボーっとしちまったか。

「王女捜索隊はこれまで通り探索を続ける。俺達はオニムシヤザザミの観察と將軍への報告の二部隊に分かれて移動する」

「了解しました！」

元気良くて結構！活き活きしているねえ。

とてつもないワガママで放浪癖があるのは面倒だが、なんだかんだで慕われているね、王女様。

さーてと、嫌だが俺は將軍閣下にご報告に行きますかね……つと。

……まさかだが、王女は今頃オニムシャザザミのヤドの中に入っていたり……しないよな。さすがに。ただだけタイミング悪いんだよって話だ。

―王女視点―

ほほお、オニムシャザザミのヤドはチャチャブーの住処となっていたのか！オニムシャザザミが歩く度に大きく揺れるのは面倒じゃが、中々に広いの！

それにしても、奇面族を見たのは初めてじゃ。このチビは少々変わったおるが……。

本によると大変危険な獣人種とされているらしいが、最近は人間に友好的な者も見つかっているという。

このチャチャブーもそうなのだろうな。わらわをすぐに襲うことは無かったし……。

「ハグハグ」

わらわが厨房から拝借したこんがり肉をやったら大人しくなったしの。

チャチャブーとは肉が好きだと聞いていたが、まさかここまで大人しくなるとはな……よく見てみれば、アイルーに劣るとはいえ、中々かわいい奴ではないか。

「決めた！貴様はわらわの子分になるのじゃ！」

「キ？」

チャチャブーが首を傾げてこちらを見た……と思ったら、ゲップしてきよった！汚っ！

まあ良い。アイルーなどに比べると人語に乏しいらしいし、そこは勘弁してやるとしよう。

とりあえず後でマナーを教えるとして……今は内部探索じゃな！

ここはガラクタまみれで面白いのお〜！ほお、この変な形の石なんぞ興味深い！

「キ〜、キ〜！」

「ええい、離さぬか！」

なんじやなんじや、途端にわらわに抱きつきよつて！わらわにケモナーの趣味は無いぞ!?

いや、こやつにとつてのお宝を盗られると思つて警戒しておるのか？・・・この変な石も含め、どう見てもゴミとしか思えんが。

しかし、そんなの関係あらぬわ！わらわの物はわらわの物、子分の物もわらわの物じや！

「キー！キー！」

「いた、いたたたつ!？」

痛い痛い！ぬう、見た目によらぬ怪力よ！ポカポカ殴られただけでもメチャクチャ痛い！

……そこのお主！わらわは身体を鍛えているスーパーなレディじやから、子チャチャブーぐらいなら平気なのじや！だから気にするな！

にしても危ない奴じや！チャチャブーとはいえ無礼であるぞ!？じやが貴様が手を出すというのなら……。

念のためにリュックに取り付けていた、この装備が役に立つとはな！さすがわらわじや！

「フッフッフ……よかろう！わらわが直々に相手してやろうぞ！」

見よ！爺から授かりし武器、片手剣を！わらわでも扱いやすい軽い素材で出来た一品じや！

決して、爺の手作りのナイフと盾というサバイバル道具的な装備ではないぞ？ホントじやぞ!？

とにかく、ベテランハンターの爺より学んだ片手剣術の実力、この剣で見せてやろうぞ！さあどこからでもかかって……おろ？

「キキ？キー！キッキキー♪」

あー！こら貴様、何わらわのリュックを漁っておるのじや！いくら貴様から見たら珍しい物でも……ギャー！わらわの替えのパンティーがあー！

「止すのじや、返すのじやー！」

「キー！キー！」

「こ、こら！それを被るでない！変態か貴様は!?返すのじや返すのじやー！ええいこの、暴れるでない！子分の癖に生意気なー！」

—第三者視点—

アカムトルムの頭蓋骨の中でそんな珍騒動が繰り広げられている頃。オニムシャザザミは、風の流れに乗ってやってくる水分を頼りに歩を進めていた。

あらゆる環境に適応できるようになったとはいえ、生きる以上、水分は必要不可欠。より多くの水分を得ようと、果てにあるはずのオアシスマで脚を運んでいる。

なにやらヤドが微妙とはいえ揺れているようで気になるが……放っておいて先を進むとする。

やがてオニムシャザザミは、王国へと続く峡谷へとたどり着いた。この壁のように聳える谷とその間にある狭き道こそが、王国を守ってきたといつても過言では無い。

もしこの道なりに続く谷間が無ければ、老山龍や砦蟹の行く先を理解し、砦や砲台を配置することは無かったのだから。

それでもオニムシャザザミはオアシスを目指すべく、谷間にそって歩いていく。

しかし……オニムシャザザミも確認できないほどに遠い先には、ある者達が陣取っていた。

「あ、ありのままに今までの経緯を話すぜ。

俺達は確か、クック先生に会いに行く為に新大陸から旧大陸に渡る船に乗っていたんだが、途中出会ったネコートさんに連行され、オニムシャザザミの足止めとして半ば強引にクエストを受けさせられたんだ……。

緊急クエとか、集会所クエとか、そんなチャチなもんじや断じてねえ。もつと恐ろしい、ネコートさんの片鱗を味わったぜ……！」

「謎よ、ミステリーよ！」

「ジエン……違った、自演乙」

ドスンと音を立てて大タル爆弾Gを道端に置きながら、レウス装備の男は呆れたように二人に向けて呟いた。

そんなツツコミなど聞いていないかのように、自分のタル爆弾を置き終えたレックス装備の男とナルガ装備の女はネタを演じている。

ナルガ女のは聞き覚えがあるが、レックス男のは世界の理を超えたかのようなネタだが……ここは置いておこう。

レックスXにガンランスを装備した男はドドル、ナルガXに弓を装備した女はミラー ज्या、レウスXにハンマーを装備した男はダリー。

彼ら三人は、イヤンクツクを愛するハンター達だ。見た目は似ているが、今の防具と装備は旧大陸使用のものに着替えている。

彼は丁度ドドルの言った通り、イヤンクツクに会いたいと喚く二人の為に旧大陸に渡ろうとしたのだが、途中でネコートに頼まれて依頼を受けることになった。

それがオニムシャザザミの足止め。相手はあの有名な巨大甲殻種ということもあり自分達でも不安には思うが、あくまで足止めが良いという。

だからこうして罠代わりに爆弾を設置しているのだが……果たしてこれが通用するかといえは怪しい。頑丈な上にタフな奴だから。

「ダリー、あなたも思うわよね？これはミステリーよ！」

「知るか。足止めとはいえ国の一大事なんだし……ドドル、ミラー ज्याを止め」

「謎や！ミステリーや！ネコートさんばないの！」

「ドドル、お前もかー！」

緊張している自分が馬鹿みたいじゃないか。そう思ったダリーは、今もおふざけている二人を怒鳴りつける。

こんな二人だからこそ緊張しすぎることは一切なく、いつもの調子でクエストを受けることが出来たのだが……怒りの方が多いのは致し方ないだろう。

こんなんでオニムシャザザミの足止めができるんだろうか……ダリーはゲンコツを喰らって大人しくなった二人を前に、憂鬱げな溜息

を漏らした。

そんなハンター達が準備を進めていることを知らないオニムシャザザミはいええば。

アカムトルムのヤドの揺れが徐々に大きくなってきて、それどころではなかった。

歩みを止めるほどではないが、少々やかましいと思えるほどに面倒がっている。

こんなときにあのチャチャブーは何をしているのだろうか、少し苛立ちを覚えてしまう。

それでもオニムシャザザミは歩みを止めない。オアシスに辿り着いて水分を補給すれば、少しは苛立ちがおさまるだろうと思って。

さらにそのアカムトルムの頭蓋骨内部では。

「こんのー！大人しくするのじゃー！返すのじゃー！わらわのお気に入り
のポリタン人形ーっ！」

「キー！キー！キー！」

「キーキーではないわ、このたわけ！」

相変わらず王女とブツチャーが物の奪い合いを繰り広げていたの
であった。その先を行けばハンターと遭遇すると知らずに、ドツタン
バツタンと。

「それは食べては駄目なのじゃー！爺達お土産にと思って手に入れた
ガレオスイカじゃぞー！」

「キー、キー！」

子供とはいえチャチャブーを押さえつけられる辺り、この王女も只
者ではない。

とはいえ、やっているのは子供の喧嘩に違い無いが。

—完—

第23話 「王女と蟹とハンターと」

オニムシャザザミとハンター三人組が激突しようとしている頃、オニムシャザザミのヤドの中では、ある珍騒動が幕を降ろそうとしていた。

「…………ふ、貴様なかなかやるの」

「キ、キイ…………」

土埃でボロボロになった王女と、奇面族のブツチャーが倒れている。王女の顔はボロボロで、しかし満足そうに笑みを浮かべ、隣で倒れているブツチャーを横目で見ろ。

ブツチャーのイヤンクツクの嘴で出来たお面も少々ヒビが入っているが、今はすっかり大人しくなっている。

物の奪い合いと争奪戦を繰り返し、ついにお互い体力が尽きてしまったからだ。

それでも二人は満身創痍と言った感じでデコボコする床に突っ伏し、小さく笑っていた。

「貴様の右パンチ、中々効いたぞ」

「キキキ、キイキキキ（姐さんのドロップキックもな）」

王女は大層ブツチャーを気に入り、ブツチャーに至っては王女を『姐さん』と呼ぶ程。

言葉を交わせぬと解かっている、互いに語るのをやめなかった。

「しかたあるまい。貴様に免じてモノを漁るのをやめてやるか」

「キー（これ、返すでヤンス）」

そしてついに、あのワガママの代名詞とも言われた王女が諦め、奇面族相手とはいえ自分から物を返すという行動に移した。

ブツチャーも手に持っていた片手剣の盾を王女に手渡す他、奪ったガレオスイカや、被っていた替えの下着など、王女の物と思われるものは全て返品する。

そして王女は其の場で座り込むとブツチャーと目線を合わせ、互いにじっと見つめあう。ブツチャーの目は解らないが、王女は真剣に相手を見つめていた。

「……貴様とはよい友になれそうじゃな」

「キキイ（人間、お前悪い奴じゃなさそうでヤンスね）」

そう言つて、二人は小さな手を差し出し、きゅっと握手を交わす。

—今ここに、奇面族と人間の壁を越えた友情が誕生したのであつた……。

「さて、そんなこんなで色々あつたが」

ところ変わつて、王女とブツチャーは頭蓋骨のとある穴から顔を出し、周囲を見渡していた。

ズシン、ズシンと震動が体と鼓膜を襲うが、それでも景色を目の当たりにすることは容易い。

「一体どこへ向かつておるのかのお？」

「キイ」

オニムシャザミの左右を谷が囲んでいるが、それだけではわからない。自分が砂漠に向かつていたルートとも違うようだ。

二人が今顔を出しているのは頭蓋骨で言う目の部分なので、オニムシャザミの前を見ようにも見えづらいのだ。

すると王女は、なんと穴から身を乗り出し、ロープを命綱にしてヤドに登り出したではないか。

小さい身体をしている王女がそんな大胆な行動に出るとは予想しなかったのか、ブツチャーが驚いている。

それでも王女は、幼少の頃より遊びと家出を繰り返したが故の体力を以つて、するすると上へと登つていく。

「ほお、絶景かな、絶景かな！ちよつと怖いが……」

「キキイ（危ないでヤンスよ）」

ブツチャーが慌ててよじ登る中、王女はヤドの天辺にまでたどり着くことに成功。

ロープを身体とヤドの尖った部分に巻きつけ、体を固定。サバイバル知識が成す技である。

「む……おお、あそこに見えるは我が王国ではないか！」

「キッ」

ようやくと隣にたどり着いたブツチャーが何事かと首を傾げる。

王女が何を見つけたのかといえ、オニムシャザザミの行く先にある物……それは彼女の住処である王国だったのだ。

もつとよく見えるようにと王女は背負っていたリュックから双眼鏡を取り出し、その先を見る。

ふと双眼鏡で見つけたのは、巨大なタルを道の真ん中に置く三人の影。彼らの装備や武器を見る限り……。

「あれは……ハンター!? うおおお! 生のハンターを見たのは始めてじゃ!」

双眼鏡を目につけたまま王女は大はしゃぎ。その様子にブーツチャーはビクッと驚くが、それでも王女は歓喜を抑えられなかった。

実は王女は王国を出てからオニムシャザザミに出会うまで、一度たりともモンスターにもハンターにも、王国で働く人間ですら遭遇していない。

王女のとんでもない程の豪運と狡賢さが為す技なのか、王国から忍び出て街へ降り、行き着けの店から旅の支度を買ひ、まんまと脱走したのである。

そして道中は危険なモンスターと遭遇しておらず、捜索隊にもガレオス討伐中のハンター達にも見つかることなく、オニムシャザザミの所へ辿り着いた。

―ゲネポスが近づけばガレオスに襲われ、ガレオスが近づけばダイアブロスに襲われるという謎の不運があったが、彼女が知ることはない。

そんな彼女の幸運や知恵を持ってしても、一度たりとも本物のハンターに出会ったことは無い。精々、絵や写生でしかその姿を見たことが無いのだ。

故に、絵で見たような装備を着込んでいるハンターを生で見るとこれが初めてで、王女にとって衝撃的だった。オニムシャザザミに出会った時よりも嬉しい。

きつとわらわの為に爺がクエストを依頼してくれたのだと信じて止まない彼女は、彼らに向けて大きく手を振る。

届くはずがないとわかっていても、せめて少しでも解かりやすいよ

うにと声を張り、手を振る。

それを横から見ていたブッチャーは、何で手を振っているのだろうと首を傾げているのだった。

その頃、ダリー、ドドル、ミラー ज्याのハンター三人組はといえば。

「……ねえ、あんな所に女の子がいるんだけど」

高い視力が自慢のミラー ज्याが、遠くに見えるオニムシャザザミのヤドにいる、大きく手を振って存在感をアピールしてくれた王女を目撃する。

それを聞いたドドルとダリーは大タル爆弾を置いた後、呆然とミラー ज्याを見詰めていた。目を丸くしている様子からして、信じられない、と言っているようだ。

「……ねえ、確か第三王女の特徴って、金髪ロールが入っていたわよね？ 後、デコが広いって」

「ついでに言えばつるぺたらしい」

「あ、確かに彼女つるぺたっぽい」

ドドルの指摘に、そういえばと呟いてミラー ज्याが言葉を繋ぐ。

そしてしばしの沈黙。その間にもオニムシャザザミ接近の証拠である地鳴りは近づきつつある。

やがてダリーが沈黙を破るようにしてポツリと呟く。

「おふぎけ無しな？」

「もち」

それは悪ふぎけ&ネタ大好きなクック馬鹿ツプルへの忠告だった。

「やべーよ！ なんだあんな所に居るんだよ!？」

「セバスさんの言っていたまさかの展開ってありえないと思ってたけど、マジだったの!？」

「第三王女の偉業は噂で聞いていたが、あそこまで行くと馬鹿にできんな……」

事前にセバスという依頼主から王女の特徴を聞いていたとはいえ、まさか本当にオニムシャザザミと共に行動していたとは。

驚愕の事実を前に、普段はおちやらけている二人ですら驚愕し、ダ

リーは逆に第三王女に感服すらしている。

だが、そこはベテランハンター。今の状況を打開すべく落ち着きを取り戻す。

「……で、マジでどーするよ？もうタル爆弾置いちゃったし……」

ドドルは道の真ん中に置かれた大タル爆弾G×6を指差して二人に問い掛ける。

脅しのつもりで置いた大タル爆弾Gだが、万が一でも王女が爆発に巻き込まれてしまつては一大事になる。

だからといってオニムシャザザミ足止めの任を解くわけにも行かない。さてどうすべきか、と考えていた所へ。

「とりあえず、この中の誰かがセバスさんに報告しに行かないか？王女の情報が手に入り次第、伝えて欲しいとも言われていたし」

「あ、それもそうね」

「そーいやそっか」

ダリーの提案に、先ほどの困惑っぷりが嘘のように納得するミラージャとドドル。思わず手ポムしてしまつたほど。

この三人組の中で一番の常識人、というダリーの立場は伊達ではなかった。いや、狩猟中なら三人とも真面目なのだが。

しかし、ここで新たな問題が発生する。

「……で、誰がセバスさんに報告に行つて、誰と誰がオニムシャザザミの相手をすんの？」

「「……」」

ミラージャの何気ない指摘を基点に、一気に三人の空気が固く重苦しいものとなり、静寂が襲い掛かる。

その静かさは、遠くで歩いているオニムシャザザミの地鳴りがやけに五月蠅く感じるほど。

—この後、三人の迫力と気力溢れるジャンケン（三回勝負）が始まる。

当然のことながら、オニムシャザザミは三人の死活問題を掛けた小

さな戦いを知る由も無く、平然と先を進んでいる。

ついでに言えば王女とブツチャーはといえば。

「……調合成功！クラーラーミートの完成じゃ！」

「キー、キー！」

「慌てるでない。ほら、お前の分だぞー」

「キー♪」

アカムトルムの頭蓋骨の中で、調合書を開きながらクラーラーミートを作成し、それを分け与える王女と、その分け与えられたクラーラーミートを大層美味そうに頬張るブツチャー。

蟹と王女と奇面族は、ハンター同士の争いが起こったことなど知らず、暢気に時を過ごすのであった。

—完—

第24話 「ハンターVS鬼鉄蟹、開幕？」

ハンター三人による壮絶なジャンケンの結果、敗北したハンターは……。

「これに狩ったら俺、クック先生に会いに行くんだー！」

「これに狩ったら私、ドドルと街中デートするんだー！」

「……マジで？」

かかってこいやオラー！と言わんばかりに武器を展開するクック馬鹿ツプルこと、ドドルとミラー ज्या。

レウス装備のダリーは急遽そこらへんで雇ったネコタクに頼み、報告する為に王国へ向かって行った。ガッツポーズが印象的だった。

ジャンケンの結果とはいえ、趣味と思考が合う二人がこの場に残れたのは良い方なのだろう。この二人なら充分な力が発揮できるからだ。

覚悟完了した二人に対し、オニムシャザザミはゆっくりとマイペースで歩んでくる。

二人と一匹の距離は徐々に見える範囲にまで近づき、気づいていないかのように六つの大タル爆弾Gへと歩いてくる。

ミラー ज्याは持っていた弓を構え、弦を引く。オニムシャザザミが爆弾のすぐ傍にまで近づいたら矢を放ち、発火させる予定だ。

爆発させたら王女はどうなるんだと思うだろうが、王女が現れた地点はヤドの上側……爆発範囲よりギリギリ外に位置している。

双眼鏡で見えていなかったとはいえ、視力の高いミラー ज्याの見解もあつてギリギリ爆発に巻き込まれないはずだ。振動は受けるだろうが……。

王女の安全を優先するよう頼まれた上に、オニムシャザザミ自身は大して危険だとは言えない。

なにせオアシスを目指しているだけだから、餌を使って王国を迂回させることだってできる。大量の餌を必要とするが。

ここはダリーだけでなく二人も撤退し、王国に報告するのが正しい判断なのだろう。

しかし、現在の王国は緊急事態に陥っている。国のお偉いさんとは
もかく、モンスターを碌に知らない国民は不安にしている者が多い。
いくら噂では大人しいオニムシャザザミとはいえ、モンスターには
違い無く、街を破壊しかねない力があると聞けば怯えてしまう。

老山龍や岩蟹が山脈の間を闊歩していると聞くだけでも、いつこの
国に襲ってくるかと人々は恐れ、その度に国が宥めて治めようとして
いる。

そんな人々を放っておけない。それがダリーを含めた、二人の心境
だ。

おふぎけが多く、趣味でイヤクックを狩猟したいと言い出す彼ら
だが、根っこは人を守る為に狩りの道を選んだハンター。

時には不安に怯える者達を安心させてやりたいという自己満足が
彼らを動かすことだつてある。

故に足止めを続行。しかし王女への被害を最小限に抑えるため、ベ
ストな距離で誘爆させる必要があった。

ミラージャが弦を引き、オニムシャザザミがタル爆弾に近づくのを
待っている。その前ではドドルがランスを構えており、彼女の盾と
なっている。

効果は薄いだろうが、流石に大タル爆弾Gを六つ同時に爆破すれ
ば、怯むなりして撤退するかもしれない。

そしてオニムシャザザミが大タル爆弾Gに接近。気づいているの
か気づいていないのか……恐らく後者だろう……足取りは変わらな
い。

オニムシャザザミの身体が巻き込まれ、王女がいるだろうヤドに爆
発が及ばないような距離を見出すべく、ミラージャは瞬きもせず睨
みつける。

―そして、矢が放たれた直後、大爆発が山脈に響き渡った。

オニムシャザザミの甲殻は未だに強化され続けている。

突然変異によって得た特異体質は、食した鉱石を徐々に甲殻へと滲

ませて混合させ、甲殻の硬度を上昇させている。

また、それを繰り返すことで甲殻が徐々に厚くなり、表面の古い甲殻を盛り上げて自動的にはがす役割もある。

そして良い鉱石を食せば食すほど、その鉱石を主成分にして混合を繰り返し、より良い甲殻を構成していくというトンでも仕様となっている。

もちろん旧火山で食したバサルモスの甲殻も反映されている為、甲殻はかなり強くなっている。

加えて鉱石以外にも様々な物を食べている。肉、虫、草、木の実、そしてキノコ……雑食性である彼は何でも喰らいつき、栄養としてきた。

つまり何が言いたいかというと……大タル爆弾G×6の爆発に耐え切ったのだ。

「嘘おっ!？」

「マジかよっ!？」

もしかしたらという予想を裏切った展開に、ミラージャとドドルは驚く他無い。

もちろん無傷というわけではない。甲殻の表面に数多の焼け跡や罅割れを起こした。

とはいえつても、オニムシャザザミにとつてのダメージは、生命の危機には至らないほどのものようだ。

凄まじい威力を誇る爆弾を6つも浴びながら多少のヒビと焦げを残す程度というのだから、その高い防御性を物語る。

しかしオニムシャザザミにとつて一番恐れたのは、爆発ではなく爆音である。

爆発による衝撃は音にも影響を与え、激しい振動と風圧が体中に響き渡り、恐怖心を植えつける。

では何故音で恐怖を覚えるのだろうか？その答えはモンスターにある。

この世には爆炎のようなブレスを吐くモンスターもおり、それを吐けるモンスターは大抵強者として君臨している。火竜などがその例

だ。

よつてオニムシャザザミにとって爆発とは強敵の出現に他ならない。甲殻にヒビが入った以上、危機感を抱くのも同然。

故にオニムシャザザミの取った行動は――。

―ボコボコボコボコ……

地中に潜って逃げる、である。

「……逃げた？」

「かな……？」

一時は襲い掛かってくるのではないかと構えていた二人だったが、正直言つて拍子抜けだった。

とはいえ、構えを解いて楽にしていいかといえはそうではない。もしかしたら地中から攻撃してくるかもしれない。

そう思つて身構えたまま、周囲に気を配る三人。固いはずの地面に潜れるだけの力を持っている以上、油断ならない。

そう思つて構えていた二人に、ゆつくりとした振動が襲い掛かる。来るかと二人の距離を近づけて固まるが、揺れはすぐに収まったものの、揺れは後方へと向かっていく。

徐々に遠ざかつていく揺れを追うかのように後ろへと振り向き――その理由を知る。

「地中を伝つて王国に向かうつもり！」

ミラー ज्याの言うとおりでた。オニムシャザザミは地中を移動して困難をすり抜けようとしていたのだ。

ドドルが「しまった」と言つてオニムシャザザミの行く方角を……正しくは王国のある道へと見る。

「このまま地中潜行して行つたら、砦ごとすり抜けるんじゃないやねえだろうな……!?!」

砦蟹や老山龍に無く、鬼鉄蟹にある特徴――それは地中を移動する能力。いくら山脈に立ちはだかる砦でも、地中深くまで防壁を張っているわけではない。

もしこのまま地中を移動しようとするならば、砦をも通り越して王国に向かいかねない。

—とりあえず、ミラージャとドドルがすることといえば。

「へい、ネコタクシー—」

ミラージャの呼びかけに、どこからともなく「ニヤニヤニヤ〜ン」と鳴いて、アイルー達が台車を牽いてやって来た。

「急いで砦に向かってくれーギャラは弾むぜー!」

台車に乗り込むドドルの発言を聞いて、目にゼニーコインを光らせるアイルー達。

こうして、二人のハンターを乗せたアイルーの台車は猛スピードで砦に向かうのだった。

一方、ヤドの中に居る第三王女とブッチャーはどうなったのかといえは。

「あいだだだ……」

「キィ〜……」

気絶していた。

当然といえは当然だが、爆発の衝撃はヤドにもしつかりと届き、軽い少女と奇面族を浮かして頭をぶつけてしまったのだ。

やっと王女が目覚めて起き上がろうとするが、自慢のデコに大きなタンコブが出来て軽く涙が滲んでいた。微かに震えても居る。

けど泣かない。だってわらわは強い子だもん。今にも泣き出しそうなのを必死に抑えようとする少女であった。

で、ブッチャーはといえば……。

—王女のスカートに頭を突っ込んでいた。

「ど、どこに顔を突っ込んでおるのじゃ貴様あーっ!?!」

—ガインツ!

「ギツ!?!」

とりあえずその辺にあった骨でブッチャーの頭を殴る、顔を真っ赤にした第三王女。

しかし頑丈なお面をつけたブッチャーには効果が薄く、逆に目を覚

ますだけに終わった。

ちなみに目覚めたブツチャーが直後に見たものは「デフォルメしたアイルーの顔」だとか。

「しかし爆弾をも防ぐとは驚きじゃ！流石は噂の蟹野郎じやのお！」
ペシペシと足元の床（頭蓋骨）を叩く、すっかり機嫌を直した王女。
これでも褒めているらしい。

ずっとヤドの中に居る上に暗くなったので、ボコボコと掘る音は聞こえるも、外で何が起こっているのかは解らない。

今もなおオニムシャザザミは鋏と脚を上手く使って地中を潜行している為、外に出ようとも出られないのが現状だった。

ハンターはどうしたのだろうなーとか思うが、今となっては見えな
い。もしかしたら一戦交えて撤退したのかもしれない。

無事だと良いなーと思い、今は居ないハンター達に向けて手を振ったのだが、最後まで分らず終いだった。

まあそれは良い、とヤドを登り、進路方向の先を見る。

あそこに見えるは王女が住まいし王国。やっとの思いで帰ることができたのだ。

「オニムシャザザミはきつとわらわを城へ送り返してくれるの
じゃな！」

そう信じて止まない王女はご機嫌だった。

そしてある事を思い出した王女は、傍らにいる奇面族の子を見や
る。

「キー？」

どうしたんでヤンスか？と言わんばかりに王女を見上げるブツ
チャー。

いずれ別れが訪れると解かっていたが、いざ別れの時が近づくと思
うと寂しさがこみ上げる。

本来の彼女なら、嫌がっついていようとも「わらわのペットにしてやろ
う」とワガママを言って持って帰るだろう。

彼女はモンスターや城の者達になら無茶な事はできるが……友達

には無茶を強くない主義なのだ。

「……お前ともお別れじやな。短い間だが、楽しかったぞ」

「……キー……」

手を差し出す王女の寂しげな表情を見た時、全てを悟ったブツチャー。

顔が無いから表情こそないものの、悲しそうな声色を上げてから、差し出した手をキュッと握る。

―種を越えた友情が、いつまでも続くと信じて……。

この時、一人と一匹は忘れていた。

このオニムシャザザミが、なおも王国へ向けて脚を進めているということを。

しかし、王国には、ある切り札があった。

元ハンター執事ことセバスの知識と人脈を駆使し、ある二人組のハンターが雇われたのだ。

つい最近になって、鬼を楽土から追い返したという伝説のハンターを……。

―完―

第25話 「ハンターVS鬼鉄蟹、再戦！」

―オニムシャザザミが王国に近づいてくる。

足止めを任されたハンターが城に帰還してそう伝えると、国はオニムシャザザミの来襲を国民に伝えた。

モンスターを詳しく知らない国民達はオニムシャザザミに身の危険を感じ、急いで避難を開始する。

そんな国民を誘導しつつ、城ではオニムシャザザミに対する緊急会議が開かれていた。

ここまで早急な対応が出来たのも、全てはセバスとネコートのおかげとも言えよう。

両者ともにある意味で似通った信頼を受けており、前者は経験豊富な執事として、後者はハンターズギルドの中で最も繋がっているからだった。

セバスは執事でありながら、元ベテランハンターとしての知識と経験というアドバンテージがある。

その知識故に第三王女をあのような子にってしまったという汚点もあるが、国王は彼の提案を待った。

王女搜索も重要なことだが、今は国の危機だ。オニムシャザザミの対策を優先するべく、国王はどんな対応を取るのかと尋ねた。

そしてセバスは、国王と将軍達に答える。最初から食料で誘き寄せると考えていた将軍達にとって、驚きの答えを。

「この事態を想定して、事前にオニムシャザザミを討ち取ったというハンターを呼んでおきました」

―そして、彼らは招集された。

彼らとは、ユクモ地方において伝説の域に達している名高いハンター二人組の事だ。

ユクモ地方の霊峰に出没した古龍・嵐龍アマツカグツチ、そして鬼鉄蟹オニムシャザザミを討ち取った強者として。

女の名はアザナ、男の名はカリガ。二人とも旧大陸出身ではあるが、若くして新大陸に乗り込み、実力を持ってして富と名声を手に入

れたハンターだ。

今は楽土の所有者として、多くの商人や学者達から収入を貰っている身分だという。しかもセバスが聞いた「ある噂」によると……。

王国前の、城門へと続いている山脈にそびえ立つようにして建っている砦の前に、三つの人影が立っていた。

門番も見張りも今はここにはいない。超巨大モンスターを迎え撃つ為のこの施設に立っている一般人はそうは居ないからだ。

さて、砦の前に立つ三人の内の一人は、王国専属ハンターにして第三王女直属の執事・セバス。いつもは執事服を着込んでいる彼だが、今は違っていた。

かつて彼がハンターを務めていた頃、長年愛用していたというモノブロXシリーズを着込んでいる。

ポツケ村の専属ハンターとして幾多ものモノブロスとその亜種の激闘を繰り返した、謙虚な彼が唯一誇れる証だ。

もう一人はアザナ。オニムシャザミを撃退した、凛々しくも美しい女ハンター。ちなみに未だに胸が増量ty（略）

装備しているのは優雅な蒼天シリーズだが、その手に持つハンマーだけは違っていた。

過去に鬼鉄蟹の素材を研究した工房が、この度の撃退によって得られた素材によって作られた最新武器なのだ。

オニムシャザミの甲殻を余すことなく注ぎ込んだハンマー……その名も「オニゴロシ」。硬度による防御力と切れ味の長さが自慢だ。

最後にカリガ。アザナのパートナーにして、細めでありながら身長2mを越える大柄なハンター。

ゴールドルナシリーズを着こなし、やはりオニムシャザミの素材で出来た大剣を手にしている。

加工困難と思われた金属質の甲殻を削り、刃としての機能を見出した傑作だ。名は「オニギリ」。

そんな彼らが砦の前で何をしているのかというと。

「なんと、ご結婚の噂は本当でしたか。おめでとうございます」

「……改めてそう言われると恥ずかしいんですが」

セバスから祝言を貰い、それをカリガが恥ずかしそうに返す。これからオニムシャザザミがやって来るというのに暢気なことである。

しかしアザナは、蚊帳の外と言わんばかりに仁王立ちで構え、まっすぐと前を見ていた。

相変わらずの無表情だが、うつすらと喜びがこみ上げている。宿敵を待つ狩人の目だ。

オニムシャザザミを楽土から撃退してしばらく経った後、アザナとカリガはめでたく夫婦となった。

なったのだが……アザナもカリガも、ハンターを辞めてはいない。楽土の収入がありながらハンターを続けるのは、オニムシャザザミの存在だった。

「完全に討伐するか体が限界を迎えるまで辞めない」と言ったアザナと、それに再度惚れ込み、今もなお相手として付いて行くことを決めたカリガ。

こうして二人は、夫婦でありながらハンターを続けているという、奇妙な二人組とも噂されるようになった。

そんな噂を聞いていたセバスは、年寄り故か、若き夫婦を盛大に祝おうとお節介を焼きたくなったのだ。

「では私がお世話になったポツケ村で式を挙げませんか？落ち着いていて静かな、私も大好きな村ですのでオススメですぞ」

「いえ、ですから今はそんな話は……」
「来たぞ」

しかしそんなセバスのお節介を余所に、凜としたままのアザナは二人に声を掛けた。

徐々に大きくなっていく振動を感じ取った三人は、肉眼でその姿を確認することができた。

微かに見えるほどに遠い地面からボコリと出てくる紅い巨体。間違はなくオニムシャザザミであった。

地中から這い出てきたオニムシャザザミには多少ながらも焦げやひび割れが残っている。

ダリーというハンターからの情報によれば、王女がヤドに居ると

解っていないながらも、追い出しを狙って爆弾を使ったという。

アザナとカリガはともかく、彼女の執事であるセバスは気にしていない。

一番の理由が

「爆弾如きでどうにかなる姫様ではございませんからの」

……と笑って言うてのけた執事を三人が見た時は、どこか達観したようなものを感じたそう。

ところで何故地中に潜行していたオニムシャザザミが砦の前に出てきたのかお解りだろうか？

ドドルとミラー ज्याの二人組の方が先に砦に到着したから……ではない。ネコタクといえども間に合わなかったのだ。

その理由は、アザナ達の先に置いてある物——オニムシャザザミの好物とされるキノコ類の山があるからだ。

これは事前にアザナ達が依頼を受け、セバスと相談していた時に、もしかしてを考えて提案された案だ。

オニムシャザザミは甲殻種の癖に匂いに敏感で、空腹時となれば一目散に食べ物のある場所に向かう習性もある。

いくらオニムシャザザミといえども、鉱石ですら見つからない山脈では食べ物に困る事もあるだろう。

というわけでオニムシャザザミは真つ先にキノコの山へと向かい、アオキノコやら特産キノコやらを食べ始める。

目の前にハンター——それも楽土で戦った強豪——を前にしても遠慮無しの食いつぶり。流石オニムシャザザミだ。

しかしこれも計算の内。その様子を見たアザナとカリガはセバスに顔を向け、セバスが頷く。

そしてハンター夫婦を差し置いてセバスが走り出し、オニムシャザザミへと向かっていった。

その頃、第三王女とブッチャーは。

「ぜー、はー……い、息ができるとはこんなにも素晴らしかったのか……」

「キ、キキイ……」

髄骸骨でいう目に当たる空洞から顔を出し、新鮮な空気で深呼吸していた。

地中を潜行していても奇跡的に土や岩がヤドの中に流れてくる事はなかったが、息が物凄くしにくかった。

これで第三王女は、当たり前前にあるような物でも凄く大事なんだなあ、と学んだのだった。

「姫様——」

「む？」

ふと聞こえる声。ブッチャーはしきりに周囲を見渡すが、王女は声が聞こえた方角からして下だと判断し、見下ろす。

そこには厳つい鎧に身を纏い、火竜から作れたガンランスを背負っている男が手を大きく振っていた。

一見だけなら誰なのか解らないのが基本だろうが、第三王女は違っていた。

「……おお、そこにおるのは爺ではないか!? おーい！」

ぱつと嬉しそうな表情を浮かべ、応じて大きく手を振る第三王女。

王女の視力の高さによる判別もあるが、王女は一度セバスにせがんで装備姿を拝んだ事があるのだ。

「姫様あー！今の内にそこから降りてくださいれー！」

「嫌じゃー！」

余りの即答に、二人の事情を知らないはずのブッチャーがズッコケる。第三王女の爽やかな笑顔が眩しいぜ。

ことさらワガママと反骨精神は立派な第三王女を説得するのは至難の技だ。親しいとされる爺やことセバスでも例外ではない。

しかしセバスは、今回限りのとっておきの切り札があった。

「オニムシヤザザミを撃退しにきた伝説級ハンター殿が来ておりますぞー！それも二名も！」

「で、伝説級ハンターじゃと!？」

さっそく食いついてきた。そしてセバスはトドメを指す。

「今なら近いところから観戦できますぞー！さあ私の所まで降りてきて

「くだされ！」

「行く！降りる！待っておれ爺よ！」

といって飛び出す事はなく、ロープを使って慎重に、しかし素早く降りていく第三王女。

さすが何度も城から飛び出て身勝手に探検しているだけの事はあり、少女とは思えぬ行動力と体力を持つ。

するとヤドから下っていき、最後は適度な距離からセバスに向けてダイブ。

対するセバスはこれを両手で軽々と受け止め、オニムシャザザミから距離を取るために王女を脇に抱えて走り出す。

「姫様、私も含め、城中の皆が心配しておりましたぞ？」

「心配かけてすまなかつたな。しかし楽しかったぞ！」

反省はしているが、それ以上に楽しかった。セバスの額から汗を垂らさずにはいられなかった。

姫のこういう素直さは子供ではあるが、自分が迷惑をかけているという自覚も（少なからず）あるというから困り者だ。

それはさておき、とセバスは立ち止まって翻り、王女を地面に降ろす。

その先に見える光景を見て興奮したのか、王女は嬉しそうに目を輝かせ、子供のようピョンピョンと跳ね始めた。

これを見たセバスは、仕方ない、とばかりに肩を竦める。彼にとって王女は大事な上司であり、可愛い孫も当然なのだ。

王女にとって生まれて初めての——本格的な狩猟を目の当たりにするのだから。

二人のハンターが武器を持って身構え、キノコを食べ終えた甲殻種がハンターに向かい合う。

両者は武器を握る手に力を込め、オニムシャザザミは強豪を前に鋏を打ち鳴らし防御姿勢を取る。

アザナの表情は凜としつつも口角が釣り上がっており、カリガもへ

ルムの下で寧猛な笑みを浮かべる。

知ってるか？笑みって元々は攻撃的な意味なんだぜ？今の二人がその例だ。

—いざ、再戦の時！

—完—

第26話 「ハンターVS鬼鉄蟹、決着！」

第三王女は興奮の連続だった。

「ガンバれー！ガンバるのじゃーハンター達ー！」

自分が戦っているわけでもないのにジヤブをしながら応援する第三王女は、普段以上に子供っぽく見える。

王女がここまで熱中することはあまりない為、爺やことセバスはヘルムの下で微笑んでいた。

とはいえ、距離が空いているとはいえ危険には違い無い。

何せ、巨大な甲殻種オニムシャザザミと二大ハンターとの激しい戦闘が繰り広げているのだから。

岩の前で行われている戦いは、激戦と呼ぶに相応しいだろう。

通常であればハンターは人数が多いほど有利になる。しかしこの戦いは人によつては足手まといでしかない。

巨乳を揺らすも無駄の無い動きでオニムシャザザミの一撃と脚の間を縫いながら、溜め込んだハンマーで殴りかかるアザナ。

高い防御力と切れ味を保てる硬度が自慢の大剣で受けて流し、滑り込むようにして一撃を放つカリガ。

そんな二人の攻撃を連続で受けても揺らぐことなく、次々と槌のような鉢を振り回すオニムシャザザミ。

機動性と防御性という二極の戦い方でありながら、互いを邪魔することなく、パワフルな一撃を確実に当ててくるハンター。

その三つを持つ上に状態異常を宿す霧を噴出す事のできる、多彩かつ堅実な戦い方を見せるオニムシャザザミ。

長年の経験を持つ元ハンター・セバスから見ても、熟練された動きと優れた身体能力を持つ事が解る。

自分があの場合に入ろうものなら、ブランクや歳の事もあつて一撃死するのがオチだろう。それほど高次元なのだ。

「キー、キーキーー！」

ちなみにセバスは、観戦がてら、何故か王女の元に現れた子供のチャチャブーを相手にしている。

このチャチャブーの被り物の防御力が高いことこの上なく、双剣では中々有効な一撃を与えられないのだ。

「爺！そのチャチャブーはわらわの子分なるぞ！相手にするのは良いが、殺しちや駄目なのじゃ！」

しかも王女のこの言い様。どこでどう知り合つたのかは解らないが、王女はこのチャチャブーにご執心の様子。子分扱い云々は子供の発想だろう。

獣人族とはいえ害があると区別しているだけマシではあるうが、こつそりチャチャブーの方を応援している辺り、微妙な気分になる。とにかくチャチャブーがぶん回す杖が地味に痛いので、双剣で相手をすることに。

老人とはいえ、彼も立派なハンターには違い無い。チャチャブーと思つて侮らず、ヒットアンドウェイで戦う。

幸いなのは、あの二人と一匹の間に割り込まなかつた事か……いや、このチャチャブーも割り込めないと解っているのかもしれない。

一方のアザナといえば。

「ぐあっ!？」

やはり楽土との戦いに比べると厳しく、その身にオニムシヤザザミの一撃を喰らつてしまった。

剣を盾のように構えて突進する攻撃は致命傷にはならずとも、正面からの攻撃を完全に防ぎ、ハンターを吹っ飛ばす程の威力がある。

かの嵐龍の防具を纏っているからか、致命傷にはならずとも、砦の壁に背をぶつけるほどに飛び、骨を幾つかやられてしまう。

しかし水を求めている上に先ほどの爆弾で珍しく気が立っているオニムシヤザザミは容赦しない。

すぐさま敵を見据えて剣で叩きつけようとするオニムシヤザザミを前に、痛みを堪えてアザナが走る。

岩の壁を削るように粉碎するが、敵が居ないと解るとすぐさま方向転換し、見つけ次第彼女に向かって歩き出す。

剣を乱雑に振りながら走るその姿は、まるで癩癩を起こした子供の

よう。かなり苛立っているのが解る。

珍しく最初から本気を出しているオニムシャザザミに喜びを隠し切れないアザナだったが……だからこそ名残惜しいと思う。

今回の依頼はあくまで防衛。温厚で餌があればそちらに引き寄せられるとはいえ、モンスタには違い無い。

捜していた王女も見つかったことで、オニムシャザザミを王国から遠ざけることが優先だ。

出来ることならもう一度本気で戦いたかったが、今の一撃を受けた以上、下手をすれば命を奪われてしまう。

冷静にそう判断したアザナはハンマーを背負ってそのまま逃走。オニムシャザザミの矛先が逃げるアザナを捕らえ、追いかけてくる。

これだけオニムシャザザミが怒りに任せて追いかけるのは珍しいが、絶好のチャンスだ。

今のアザナは砦の壁に沿うようにして並走している。オニムシャザザミもそれに続いている。

そしてオニムシャザザミはある場所を通り過ぎる。

そう、この壁……つまり砦の正面には――

「今だカリガー！」

「はいっ！」

砦の上から聞こえる相棒^{カリガ}の声と、遅れて轟く甲高い音。

――砦の正面には、撃龍槍が実装されている！

――ガシャンっ！ガゴオンっ！

パイルバンカーと呼ばれる技術が取り込まれた撃龍槍はオニムシャザザミの横を直撃。

ハンターとしてクエストで何度か見たことがあるとはいえ、至近距離で観るとその威力と衝撃は凄まじい。

だがそれよりも驚愕したのはオニムシャザザミを見てからだ。いくらなんでも撃龍槍なら……そう思っていた。

撃龍槍はオニムシャザザミに突き刺さることなく、衝撃で遠くまで

吹っ飛ばしたただけだった。

ひび割れこそはある。くつきりと杭で打ち込まれた痕もある。オニムシヤザザミは倒れたままもがいているが……。

それでも老山龍や砦蟹は深い傷を負い、下手をすれば深々と刺さることだってある。なのに吹き飛ばすとは。

それだけ撃龍槍の威力の高さとオニムシヤザザミの頑丈さが拮抗していたのだろう。ビリヤードの原理そのものだ。

そしてオニムシヤザザミが起き上がると、ガラガラと回転する撃龍槍を見て跳びあがり、一目散に逃げていったではないか。

下手をすればディアブロス以上の攻撃力を持つ近代兵器だ。桁違いの威力を目の前にすれば逃げるのも当然だろう。

逃げるオニムシヤザザミの背を眺めていたら、横からトテチテと走る妙なチャチャブーを見かけた。

……あのチャチャブーはなんだろうと思ったが、放っておくことにしよう。

アザナは正直助かったと思っている。オニムシヤザザミの性質を考えれば、撃龍槍で倒せずとも、戦意を消失させ逃げるだろうと考えていた。

今の一撃で逆ギレを起こし再び襲い掛かってくるのではないかという不安もあつたが、予感的中してよかつた。

「アザナさん、ご無事ですか？」

緊張が解けてへたり込んだ所へ降りてきたカリガがやってきた。

「無事ではない。肋骨を何本かやられた。これではハンター稼業がよろそかになる」

本来なら骨折の激痛で苦悶の表情を浮かべるのだろうが、表情の硬いアザナは別だ。身体は痛がつているが。

しかしカリガは、これはこれでラッキー、と思つてしまった。

婚約して豊富な資金があるのに、アザナは一向に休養を取らなかつたのだ。夫婦としての生活すら送っていないし。

「うむー見事であつたハンター達ー！というか凄かつたのじゃー！」

ふと響く幼い声に二人が振り向けば、そこは嬉しそうに、しかし偉

そうにつるんとした胸を張る少女の姿が。

後ろにはセバスがいるが、困ったように肩を竦めている。どうやらこのデコ娘が第三王女のようなのだ。

「かのオニムシャザザミと真つ向から戦うとは見事なものじゃ！褒美ならいくらでも」

—ごげんっ

その小さな頭に、アザナの拳骨が落ちてきた。

「これは国王や国民、そして誰よりもお前を案じていたセバスを心配させた罰だ！王女とは言え子供が出ていい場所ではないんだ！まずは反省しろ！」

「アザナさん、気絶してるんで無理です」

命を粗末にしないタイプのハンターであるアザナの怒りを前にカリガが止める。

アザナが我に戻った頃には、頭から煙を上げて倒れる王女と、氣遣って頭を擦るセバスの姿が。

この後やってきたダリー・ドドル・ミラー ज्याの見た光景は……。

「あ、ありのままに今起こった出来事を……」

「そのネタはもういい」

「けどコレって凄い光景よね、ある意味で」

呆然としている三人の前では、涙目になった第三王女をガミガミと叱るアザナの姿が。

横では「割り込めませんというか割り込んだら死ぬ」と言わんばかりに縮こまっている男二人が。

子供とはいえ王女を前に遠慮なくオカン属性を發揮し叱る様は『命知らずのアザナ』の噂に相応しい光景であった。

とにかく、三人が思っただけの言葉は一つ。

「「ぎ」まあ W W W」

彼らもまた、王女の鬼畜クエストの被害者だったのだ。

その後は大騒ぎだった。

一つは、オニムシャザザミを追い返してくれたハンター達を国中がお祝いして。

一つは、第三王女が元気な姿で帰還した事で城中（特にセバス）が喜んだとして。

そして一番の理由は、オニムシャザザミに襲われなくて良かったという安堵感だった。

その日は国中を挙げて、ハンターを、そして帰還しお土産まで持ってきた王女を祝して祭を開いた。

オニムシャザザミ用に残しておいた食料をパーツと使い、飲めや喰えや歌えやの大騒ぎとなった。

ついでにアザナとカリガの結婚を公式に知った人々は、結婚祝いだと言っただけの大勢の隠居ハンターが盛り上げた。

もちろんクック大好きトリオも食いつき、それなりに交流があったこともあり、（二名の）質問攻めのオンパレードだった。

有名なハンターが結婚したというのに、二人は大っぴらにしたいと隠していたのだから、知らない者の方が多かったからだ。

この日を境に、「アザナとカリガ、伝説ハンターコンビの電撃結婚」が広まったとか、広まらなかったとか。

はつきりと言えることは二つある。

一つは、アザナは負傷と恥ずかしさのあまり、しばらくクエストに出ることがなかったという。

もう一つは、第三王女がしばしの間、まるで嵐の後の静けさを物語るように大人しくなったという。

王女は迷子中に負傷したのか、自慢のデコと頭頂部につかいた

コブができていたそうなの。

ちなみに騒ぎの原因であるオニムシヤザザミは、現在は遠く離れ、行方知れずだという。

哀愁漂う背中の中のヤドの頂部では、一匹のチャチャブーが寂しげに王国がある方角を見つめていたとか。

—完—

第27話 「沼地における甲殻種」

沼地と呼ばれるフィールドがある。正式名称は「クルプティオス湿地帯」。ここは一年の降水量が多く、湿気も多い地域だ。

そのうえ夜になると気温が低くなり寒冷地帯となる他、一部には毒沼と化する程の毒素や瘴気が渦巻く。

その濃度は高く、毒性を持つゲリヨスや睡眠ガスを放つバサルモスが主な生息モンスターだと言えば解かるだろうか。

寒気が身体を襲う上、下手をすれば毒素が身体を蝕む。

オマケに背丈の高い草木が生える地帯は面倒だし、沼地によく見かけるブルファンゴやコンガ、ガブラスが地味に邪魔となる。

討伐や鉱石目的で向かうハンターにとっては油断できないフィールド……それが沼地である。

もちろん、こんなフィールドでもモンスターは普通に生息する。

毒素が全体を蝕むわけではないとアプトノスが歩き、ブルファンゴやモスがキノコを食す為にあちこちを探す。

そんな草食種を狙ったイーオスやゲネポスが洞窟を駆け巡り、それを追い返そうとババコンガがフンを投げる。

寒い洞窟内であろうとも健気に生きる彼らは、まさに人間とは比べ物にならないほどの適応力を持っていると言えるよう。

むしろこの地帯はキノコがあちこちに生えている為、ある意味で食料も豊富と言えよう。

こんな毒の沼でも自然の恵みは広がっているのだ。環境が違い食物の種類が変わる程度でしかない。

そんなキノコを求め、オニムシャザザミはこの地に足を踏み入れた。

話は急に変わるが、ダイミョウザザミは基本的には暖かい地方を好む。

オニムシャザザミも例外ではなく、極端な寒さに弱いのか、凍土や

雪山に足を運ぶことはない。

それは人間側にも周知されており、逆に雪が降り積もる地域に暮らす人々はオニムシャザザミの存在を微かにしか認知していない。

だが、意外にもオニムシャザザミは沼地に足を踏み入れた。

そこに、菓子ではない、本物のキノコの山があると本能的に理解しているからだろうか？

オニムシャザザミの食欲の高さを知っているハンターならそう判断しても可笑しくは無い。

甲殻種には寒さに強い種が存在しており、寒冷地への適応が不可能というわけではない。

雪が降る地方に甲殻種の姿を見た者は居ないだろうが、沼地の洞窟なら見たことがあるだろう。

シヨウグンギザミやアクララヴァシムがその一例。いずれも低温の地域にも生息する甲殻種である。

シヨウグンギザミに至っては火山地帯にも生息する他、沼地の毒を体内に宿す特異個体が現れる程。

そしてオニムシャザザミの適応力は、それら以上の適応性の高さを秘めている。

かつて新大陸に迷い込んだヤオザミが、長い年月を掛け、多くの苦難を乗り越えてここまで成長したとなれば当然だろう。

食料を求めて西へ東へと足を運び、暖かい海辺や灼熱の砂原地帯、火山や溪流にも適応してきた。加えて幼生の頃から毒キノコ類を食してきた為、免疫力もずば抜けている。

そんなオニムシャザザミが沼地に適応できるかと問われれば……イエスと答えられる。

オニムシャザザミは、毒素渦巻く沼の中でも平然と歩き続け、薄暗い大地を散策している最中であつた。

元を考えてみれば、ダイミヨウザザミも夜の砂漠という寒冷に耐えることが出来る。

オニムシャザザミにとって、過剰な水分も、毒素も、そして湿気に

よる冷え込みもどうということはない。

好奇心で寄つてたかるコンガ達を気にせず黙々とキノコを食し、満足に至っている。

そんなオニムシャザザミのヤドの中では、ある野望が成就されようとしていた。

最近オニムシャザザミにとって有益な存在と認識されつつある、しかし忘れがちな獣人種……奇面族のブツチャーである。

彼はオニムシャザザミのヤドを自分の住処とし、日々オニムシャザザミに珍しい食べ物を献上し、外敵から守ってもらっている。

いわば一種の共生ともいえるが、ブツチャーにとってオニムシャザザミとは強さの象徴——憧れなのだ。

そんな彼は、密かにオニムシャザザミの殻を集めることを日課としていた。

ひび割れから零れ落ちた殻の破片をコツコツと集め、少しずつ溜め込んできた、一見するとゴミの塊にも見えるそれら。

それらを奇面族の技術(ブツチャーは手先が器用なのだ)でまとめ、作り続けてきたものがあつた。

ついに、ついに出来たでヤンス……わちきにとって最強のお面が！

破片とはいえ異常に硬い殻を必死で加工し、手を傷めてでも削り続けた最高の一品。

それこそが、真っ赤な鳥兜に見える、オニムシャザザミの殻から創り上げたお面である。

ブツチャーがズツシリと重いそれを両手で掲げると、嬉しそうに踊り出す……が、重いのですぐ止めた。

ブツチャーにとって最強といえるオニムシャザザミから出来たお面を自ら創り上げたのだ。喜びは人一倍だろう。

名づけるとすれば「鉄壁のお面」。どんな攻撃にも耐えられそうな強いお面だ。

さつそく装着しようと、今被っていたイヤンクツクのクチバシのお面を脱ぎ捨て、鉄壁のお面を被る（この間、僅か0・1秒）。

紅く重い鳥兜を被りフラつくブツチャーだが、彼は体で喜びを表現していた（どんな様子かは想像にお任せします）。

だが、ここでブツチャーにある異変が起こる。

お面を被って喜んでいたと思いきや、突然ピタリと立ち止まってしまふ。

どうやらオニムシャザザミの素材で作ったお面の影響か、ボーっとしているようだ。奇面族の性格がお面に影響するとはいえ、ここまでとは。

沼地でのんびりと過ごしているオニムシャザザミと、そのヤド内でぼーっとしているブツチャー。

そんなオニムシャザザミを、ある影が見つめているとは、この時二匹は知る由もなかった。

—完—

第28話 「変異種VS特異個体」

モンスターは日々変化している。同じモンスターが居たとしても、その差は成長次第で大きく変わってくる。

若い個体から熟練の個体との差はモチロンのこと、生息地の環境や強敵の有無によっても、その違いはハッキリと出てくる。

他にも長い年月や生まれつきの強さなど、様々な原因が加わることで、モンスターの強さに変動が生じてくる。

その中でも特に厄介なのは……突然変異による急激な進化であるう。

そういった急激に変化した個体も存在しており、それらは二種類に分かれている。

一つは、何らかの理由により、進化への道を自ら変える事で異なる種となった「変異種」。

急激な環境変化や食性の変化によって進化したモンスターは、どれも原種とは違った生態系を持つ。

もう一つは、本当の意味での突然変異によって進化した「特異個体」。

見た目こそ原種に近いものの、姿形どころか身体機能などが大きく変わり、まったくの別物として捉えられるほど。

いずれも強大な力を持っているとはいえ、両者には違いがある。

変異種は、自ら進化の道を変え、並大抵ならぬ努力や忍耐、そして適応力によって成長した「努力せし者共」。

特異個体は、努力も何もなく唐突に進化への飛躍を遂げた「才能ある者」。この言葉に限るだろう。

進化への道は競争とはいえ、突然変異という奇跡もあれば、努力すれば導き出される答えもあるということだ。

そんな特異個体モンスターだが、実は様々な所で確認されている。イヤンクックやバサルモスなど意外にも幅が広く、あちこちでハンター達が狩猟に励んでいる。

いずれも通常種とは実力も攻撃方法も違う為、同じと思って侮って

はならない。

さて、沼地における特異個体の一体を挙げるとしたら、シヨウグンギザミ特異個体だろう。

シヨウグンギザミは沼地でも発見されているが、進化の都合上ガミザミにあつた毒腺は消え、毒を吐く機能を持たない。

特異個体の場合、その毒腺が異様に強化されており、腹を毒から保護する為にグラビモスの頭殻を必要とするほど。

瘴気渦巻く沼地だからこそその進化なのだろう。もちろん力も強まっており、古龍種に匹敵するとされている。

そんなシヨウグンギザミ特異個体は、己の縄張りを侵す大型モンスターを許さなかった。

自身より一回り大きい上に己と同種ではあるが、同種だろうとも容赦なく襲い掛かる好戦的な所は変わらない。

その相手とは、もちろんオニムシャザザミである。

キノコを食しているだけとはいえ、彼の縄張りを侵したことには変わりなく、襲われても仕方ないというもの。

だがオニムシャザザミは、驚くことに逃げることなく、シヨウグンギザミ特異個体と戦う事を選んだ。

理由は三つ。食料を欲していた事と、同じ甲殻種であつたということと、相手の威圧感を感じ取つたことだ。

甲殻種となると互いに縄張り意識が合致する為、それが戦いに発展することもある。

何よりも大きさ（というか腕の長さ）でいえばシヨウグンギザミが圧倒的なため、力づくという選択を選ぶ他なかった。

そんな二匹の争いは、意外にも白熱したものだった。

強震を起こす程の力を秘めた鎌爪が、右から左へと次々に振り下ろされる。

物凄い金属音を響かせながらも両の鋏で受け止め、溜め込んだ力を一気に解放、鋏を突き出す。

モロに受けて後方へ吹っ飛ぶものの、距離はさほどなく、むしろ怒りを買ってしまい連続攻撃へのキツカケを生む。

左右からの鎌爪の攻撃を身構えてガードしつつ、水のジェット噴射で押し出すものの、決定打にはならない。

逆にシヨウグンギザミが距離を置いて毒ブレスを噴射。これも鋏で受け止めるものの、たまらず地中へ潜る。

シヨウグンギザミが連続攻撃しているのに対し、オニムシャザザミはガードを中心に重い一撃を繰り出す。

どちらも一撃の度に重々しい音が響き渡るため、その力強さや甲殻の硬さが伺えるだろう。

オニムシャザザミは防御を支点に強化されている為、甲殻は頑丈であれども動きはシヨウグンギザミに劣っている。

シヨウグンギザミは攻撃を支点に強化されている為、攻撃方法や力は優れていてもオニムシャザザミの甲殻に傷はつけにくい。

互いに地中からの攻撃や毒腺を持つものの、戦い方や性能はまったく違っていた。

特に問題なのは毒の強さの差だ。オニムシャザザミは幼少期から毒類を食していた為に蓄積し耐性がつけられてきた。

対するシヨウグンギザミ特異個体は毒腺の強化という進化を歩んだ為、その濃度や量はオニムシャザザミより優れている。

ましてやオニムシャザザミはスピードが劣っている為、必然的に毒ブレスや毒霧を浴びることとなる（水圧自体は問題ない）。

さらに時間帯は夜。沼地の瘴気が充満されるこの時間帯はより毒の濃度が高まり、追い詰められる起因となる。

よって、オニムシャザザミの身体は徐々に毒に侵されていき、ピンチを迎えている。

いくら防御性能が高く様々な毒を扱えるからといっても、猛毒を大量に浴びればいずれ毒に蝕まれるというもの。

シヨウグンギザミもダメージを負っているとはいえ、このまま時間が過ぎれば勝者は確定するだろう。

そんな時、彼が動き出した！

フアンゴにも劣らぬ勢いで走る一つの小さな、しかし不釣り合いな大きさを持つ影。

それは大量の解毒草が入った巨大背負子を担いで走る、奇面族のブツチャーだった。

重たいはずの鳥兜風のお面を被ってもなお、ピンチなおニムシャザザミに向けて走っている。

—キー、キーキー！

両者ならぬ両蟹が一時休戦と言わんばかりに疲労を見せているのをキツカケに、ブツチャーはおニムシャザザミの前で止まる。

「さあこれを食べてくたせえ！」と言わんばかりに地面に置くと、すかさずおニムシャザザミは鉢で背負子ごと掴んで食べる。

疲労でふらついていた身体が一転、立派に構えるほどに元気な姿を取り戻すことに成功した。

すかさずブツチャーは背負子を背負い、逃げ出すようにして走り出すのだった。

ブツチャーがこのような行動を取ったのは、彼の被っている「鉄壁のお面」のおかげである。

その性質はおニムシャザザミの本能や生態に強く反映されているからだ。

つまり、生存本能と防衛本能が高く、どの食物がどのような作用を促すかを本能的に理解できる。

そこへおニムシャザザミへの尊敬の意識が加わった為か、彼は毒を治療できる解毒草を持つてきた、ということだ。

しかも自身より遥かに大きい背負子にギユウギユウに詰め込むほど沢山。採取率の高さも優れている証拠だ。

そんなブツチャーの支えもあって、おニムシャザザミは毒状態から回復、多少疲れているものの戦闘態勢に入る。

対するシヨウグンギザミも身構え、自慢の鎌爪を広げる。効果的だった毒プレスを放たなかったのは、毒腺の貯蔵が切れたのかもしれない

ない。

—こうして二匹の甲殻種は、さらなる戦いを繰り広げるのだった。

有効だった毒が切れたシヨウグンギザミであったが、それが無くともオニムシャザザミの相手としては充分だった。

盾蟹に比べると細く、切れ味を重視した鋏だが、その細長い脚に詰め込まれた筋肉は想像以上のものだったらしく、威力は絶大。

その力強さは、オニムシャザザミの甲殻のあちこちに軽微な凹みとひび割れを生じたほど。

なにせ嵐龍の素材を用いて作られたハンマーですら、連撃してやっとなにせとひび割れを起こしたのだから。

だがしかし、勝者はオニムシャザザミだった。

重厚なオニムシャザザミの攻撃を前に、流石のシヨウグンギザミもボロボロになって負けを認めるしかなかったのだ。

全身にひび割れを残し、名残惜しそうにオニムシャザザミに背を向けて歩くシヨウグンギザミ。

好戦的な彼がココまで大人しく敗北を認めるのも、甲殻種ならではの縄張り意識に乗っ取ったからだろうか？

なにはともあれ、この沼地の縄張りはオニムシャザザミが手に入れた。

頭の上で勝利を祝うかのように踊るブツチャーを余所に、その辺で見つけたキノコを食す。

オニムシャザザミもシヨウグンギザミもボロボロだが、直に治ることを約束しよう。

硬い甲殻といえども、元を考えれば外骨格。時が経てば治るのは生物の基本だ。

今回でお分かりになったと思うだろうが、この世に絶対の生物などいない。

最高クラスの堅さを誇るオニムシャザザミにだって相性の悪いモ

ンスターは存在している。

猛毒性の高いシヨウグンギザミもそうだが、同じく猛毒性の高いゲリヨスは別格。毒を吐く量と濃度が段違いだからだ。

もしブツチャーの助けが無ければ、毒に対する危機感が強まり、逃げて生存できたとしても縄張り争いには負けていただろう。

そういう意味では、ブツチャーは共生状態にあるとオニムシャザザミは認識をより深めることとなった。

仮にテオ・テスカトルが存在していたら、オニムシャザザミは一目散に逃げていただろう。

溶岩より熱い龍炎や放射ブレスで熱され、「上手に焼けましたー」状態にされるのがオチだからだ。

ましてや自身よりも強大な力を持つと明確に知れている古龍種が相手となれば、逃げて当然であろう。

世の中は広い。特異個体や変異種がいるとしても、その上が存在しているかのよう。

いくら唐突な進化を遂げたとはいえ、純粋な力の差や老熟したモンスターが弱いわけが無い。

この世を生き抜くのに必要なことは、生き抜くための「諦めの悪さ」なのかもしれない。

—人間もモンスターも、生きることには必死なのだから。

—完—

第29話「朗報」

噂とは浸透しやすく、そして広まりやすい。

人混みというネットワークは、下手をすれば正規の情報公開よりも伝達力に優れ、瞬く間に人々に伝えられていく。

特に、世界中を回り、多くの人々と交流し情報を交換する、ハンター達のネットワークは凄まじい。

故に、沼地にオニムシャザザミが出現したという噂が、行商人や調査隊に広まるのはそう長くない。

オニムシャザザミがショウグンギザミ特異個体を沼地から追い出したという事実は、情報として逸早くドンドルマに伝えられた。

ついでに言えば、オニムシャザザミのヤドに奇妙なナリの奇面族が居るといふ噂を、面白おかしく伝えている。

そして極めつけの特ダネは——オニムシャザザミが負傷しているということ。

その情報はハンターギルドだけに留まらず、キャラバンや商人、そしてハンター全てに伝えられ……いや『漏れてしまった』。

本来なら優先されるべき真偽を置いて、モンスターの素材を糧としている商人やハンターにとって、その情報は宝を掘り当てることよりも貴重だった。

ここで誤解を招かないよう言っておくが、この情報を求めている彼らは討伐を目的としていない。

実はアラムシャザザミとして新大陸に生息していた頃から、ハンターギルドはさほど危機感を感じておらず、大きな対処はとっていないかった。

ある意味で知名度の高いモンスターでありながら何故軽視しているのかといえば……そのモンスターの性質を考えれば当然だろう。

食欲はイビルジョー級で雑食性——されど生態系を狂わすようなことはしない。

寒冷地帯を除くあらゆるフィールドに出没する——されど縄張り意識も敵意も持ち合わせていない。

防御力は恐らく全モンスター中トップクラス——だからこそ並大抵の攻撃は通用せず、攻撃されても無視する。

極めつけはその性格——食いしん坊で暢気な、よほどの事でもない限り攻撃してこない大人しい奴。

上記の特性がある以上、実力の高いモンスターでありながら、危険度はランポスよりも低いとされている。

もはやモンスターのようでモンスターでない変わった奴だが、それでも迷惑をかけるときがあるので、撃退依頼もいくつかは出ている。

むしろ行商人の間では、他のモンスターに襲われた時にオニムシヤザザミを盾にする事で難を逃れられるとして、ありがたい存在と伝えられている。

オニムシヤザザミ撃退クエストがあるが、それは楽土の調査や恵みが目的だからだ。そもそも「撃退」であって「討伐」ではないし。

強いて言えば、キノコ菜園や農村に近づく彼を追い返す簡単なクエストぐらいならある。受けるのは熟練ハンターぐらいだが。

それでもハンター達は、こぞつてオニムシヤザザミに関するクエストを受けようと、常に目を光らせている。

その理由は、有名なモンスターを倒したという名誉や征服感ではなく……素材そのものにあった。

非常に頑丈な甲殻種として知られているオニムシヤザザミだが、その素材が広く出回っていることはない。

上記でも申し上げたように、その甲殻はとてつもなく頑丈で、加工どころか？ぎ取りですら困難とされている。

過去二度に渡り大量の殻を手に入れているが、一度目は研究資材としてギルドが、二度目は討伐したハンター四人が大半を独占している。

現在は職人達の苦労が結ばれオニムシヤザザミの素材を用いた武器が作られており、よりその貴重度が増している。

そんな貴重な素材ではあるが、手に入れる方法は討伐だけでなく、なんと採掘でも出来る。

甲殻にヒビがあつた場合、そこへピツケルを打ち込めばヒビが広ま

り、甲殻の一部を採取する事が出来る。

オニムシャザザミを遠ざける仕事を完遂するのはもちろんのこと、運がよければ採取しようと狙うハンターが多いのだ。

―さて、勘の鋭い方もそうでない方も、もうお気づきだろう。

情報によるとショウウグンギザミ特異個体との戦闘が激しく、元気であるものの、至る箇所にはひび割れが生じているらしい。

このひび割れというところがポイントだ。甲殻を割るほどの強敵への脅威ではなく、幸運を掴んだようなチャンスとして。

その情報を逸早く手に入れ、チャンスに変えようとしているのが、意外なことに商人だ。

モンスターの素材は武器や防具だけでなく、商売としても使われる。硬い素材が必要となることもあるのだ。

防御力の高さに定評のあるオニムシャザザミの甲殻となれば、その硬度は太鼓判物間違いなし。

研究し終わった故にギルドからの規制もなく、上手くすれば宝の山に変えることも夢ではない。

―故に、ドンドルマやメゼポルタでは、オニムシャザザミの依頼と噂で溢れかえっていた。

「おらーそこどけチビー！」

「ひえっ!？」

後方から慌しく走ってくるグラビドDシリーズで覆われた男の声を聞き、慌てて其の場を離れる小柄な少年。

チビと呼ばれるには充分な背丈である彼を跳ね除けると、我先にとクエストボードに向けて走り去っていった。

周囲を見渡せば先ほどの男のように急いでいるハンター達が大勢いる為、それらから逃げるようにして其の場を離れる。

「ひゃく……やっぱ都会はおつかねえとこだべな」

妙な訛りを口走る、頭以外をゲリヨスSシリーズで覆った、一般の男性よりこぢんまりとしたこの男。

先ほどチビと言われても仕方ないほどに背丈が低く、下手をすれば14〜15歳ほどに見えるが、これでも22歳だ。

スポーツ刈りされた黒い髪に丸顔といった体力系な顔をしているが、その表情には落ち着きが無い。

「ガラダ、こっちだよ」

ふと背丈の低い少年―ガラダの名を、聞き慣れた声と呼んできた。その声を頼りに視線を彷徨わせれば、横長のカウンター席に座っている二名のハンターの姿があった。

オウビートSシリーズとハピメルSシリーズを装備している男女だが、頭部は外して脇に置いてある為、素顔は遠くからでも解かる。

一人は何故かチョンマゲをしている黒髪の若い男で、もう一人は紫の豊かな髪をした妙齢の女性だ。

ガラダは仲間であり友人である彼らを見てほつと息を撫で下ろすと、せこせこと逃げるようにしてそちらへと向かう。

二人はガラダよりも背丈が高いが、20代としては普通の背丈に分類できるので、ガラダが低いだけと判断できる。

「まだドンドルマには慣れませんか？」

柔らかな微笑を浮かべて女性が尋ねるが、ガラダは恐縮しているように首を素早く振る。

「やっぱ、おらのような田舎もんには合わねえみてえだ」

しよんぼりと下を向くガラダを見て、青年は首を傾げる。

「最初ここで会った時に比べたら随分マシになったと思うけどねえ：？」

そんなことはねえですだ、とガラダは慌てて青年の言葉を否定する。

ここまで来ると病気だな、と青年が軽く笑うが、女性が軽く膝で小突いて忠告したのでやめた。

もう一人の仲間が居ればそんなガラダを叱咤して励ましていただろうが、今はとある理由で居ない。

こんな時こそ彼が居て欲しかったのになあ、と青年は頬を搔く。
青年フィジクと女性ラメイラがガラダと出会ったのは、丁度一ヶ月
前の事か。

メゼポルタを中心に、フィジクはヘヴィボウガン、ラメイラは片手
剣を持ってそれなりの活躍をしていた。

そこそこの依頼を受注できるようになり、斬撃だけでは苦戦するか
らとハンマー使いを探していた。

そこで出会ったのが……田舎者だからとガラダの悪いハンターに絡
まれたガラダと——もう一人の少年だった。

その少年はとても喧嘩っ早い上に負けん気が強いので、絡まれてい
て困っていたガラダを助けようとして暴れた。

複数の不良ハンターを圧勝し、ガラダを叱咤しつつも励まし、お互
い田舎モンだからと仲良くなった。

そんな二人を暖かい目で見っていた所、背中に背負っている狩猟笛と
ハンマーを目撃し、二人をスカウト。

そして今に至る——ちなみにその少年はといえば。

「うおーい！」

周囲が迷惑しそうな大声をあげ、ぶんぶんと豪快に手を振る、ギザ
ミスシリーズを纏う少年が現れた。

ツンツンした赤髪に、喧嘩慣れしているのか、整った顔つきには数
多くの古傷が残っている。

背には狩猟笛を背負っており、もう片方の手には紙束を丸めたよう
なものを握り締めていた。

そんな少年の怒号のような呼び声にびくりと身を震わせるガラダ
と、またかよ……と言わんばかりに首を振るフィジクとラメイラ。

狩猟笛を背負っている彼こそが、ガラダと共に仲間になったハン
ター・バルデトである。

「バ、バルデトさ」

「さん付けはよせよガラダ！そーナヨナヨしてんなって！」

ハンマーを背負っているということを考慮していないかのように、ガラダの背中をバシバシと叩くバルデト。

豪快に笑いながら強めに叩いている彼にとっては励ましののだが、相変わらず慣れないのか、ガラダは焦り気味だ。

そのやり取りは四人で組む頃から変わっていないので、傍観しているフィジクとラメイラは苦笑いするしかない。

それでいてパーティとして成り立っている上、険悪にならずむしろ仲良しなのだから、不思議なものだ。

そんな中、ところで、とバルデトは二人組みに視線を向ける。

「それよりよ、三人ともこれ見ろよ、コレ！」

脇にガラダの頭を挟んだままテーブルに向かう（ガラダはキツそうだが加減はされているようだ…）。

なんだなんだと二人は席を寄せ、ガラダはなんとか解放してもらい席に座る。

バルデトがバンと音を立てて紙を卓上に広げると、三人はそれを見てみる——どうやら受注内容が記された用紙のようだ。

「どれどれ、次はどんなクエストを……っ?!」

「チヨ、バルデト、これ……!」

「ふふん、驚いただろ?」

驚愕するフィジクとラメイラを見て首を傾げるガラダを余所に、バルデトは嬉しそうに笑みを浮かべる。

—そのクエスト内容自体は簡単なものだが、注目すべきは、主なモンスターの一覧である。

—その中でも、特に注目を集めるモンスターとは……。

「とうとう手に入れたぜー！オニムシャザザミが出てくるクエストをよ！」

—
完
—

第30話 「ガラダというハンター」

唐突だが、ここでガラダという名のハンターについて紹介しておく。

彼は変わった経歴を持っており、ハンター歴は1〜2年と浅いが、それ以前はある職人だった。

ハンターになる前の彼は、なんと鍛冶職人として働いていたのだ。2〜3年程度の雑用だったが。

元鍛冶職人の彼が何故ハンターになっているのかといえば、それは彼の仕事先に起因している。

彼は、ドントルマよりも遠く離れた山村に暮らしており、ドントルマに通ずる小さな鍛冶屋で働いていた。

近隣に生息するモンスター素材を加工して武器や防具を造る。他の鍛冶屋と全く変わらない仕事だった。

しかし彼は、そこで働く父の後ろ姿と鍛冶屋の雰囲気当てられ、見習いとして働くようになった。

だが親方の竜人族は、厳しい・いかつい・恐ろしいの三種が揃った頑固親父で、ガラダの腕を認めることはなかった。

幼少の頃より鍛冶の様子を見て来た彼の才能は若くしてそれなりにあつたのだが、それでも親方は首を縦に振らない。

しかしガラダは、親方の反応を当然だと理解し、さほどショックを受けることは無かった。

一言で職人技と言っても、技量・経験・才能・勘……人間の技能の中で一つでも僅差があつたのなら、それは大きく異なってくる。

その技を己の物にする為に何よりも必要なのは、己を見極める事……ズバリ日々の繰り返しに他ならない。

ガラダの父ですら、才能がありながらも親方から扱かれ続け、10年掛けてやっと弟子として働けるようになったと聞く。

鍛冶屋職人とは、いわば長年の努力によってようやく道が切り開けるという難問。

ハンターと鍛冶職人どちらが難しいかといわれれば、真つ先に後者

を選ぶほどに難しいとされているのだ。

そんな親方だが、ある日ガラダに試練を言い渡した。

今日も鉄鉱石で刃を作れと言われるだろうと、ガラダは金槌を持って親方の前にやってきた。

そして親方は、ごく当たり前のように彼に言うのである。

「今日からハンターやれ」

この時のガラダの驚愕っぷりは、父曰く、幼少の頃に初めてドスファンゴに遭遇した時よりも驚いていたという。

既にハンター登録を（本人が知らない内に勝手に）済ましたという、戸惑うことも断ることも質問することも許されない状況だった。

親方から渡されたのは、ハンターの署名、親方の紹介状、それと親方から譲り受けたウォーハンマー……それだけ。

「なんか閃くまで帰ってくんな」

その三つを持った彼は、親方に蹴られて外に放り出され、親方からそう言われたらしい。

啞然とする彼を慰めたのは、彼の父と、ドントルマまで彼を連れていくという村長の息子さんだけだった。

こうして彼は、親方を除く村人全員から見送られ、ハンターとして（強制的に）旅立ったという。

『親方は昔ハンターだったら嬉しいが、モンスター素材を見たら急に自分の防具が造りたくなつて、その日から鍛冶屋になったそうだ。』

お前は体が頑丈だし運動も出来るからな。ハンターとしての素質を見出したから、あんなことをしたんだろうよ』

ドントルマまで送ってくれた、村長の息子さんからの言葉が頭の中で木霊する。

ガラダがハンターとしてドントルマに降り立った頃から今まで、彼と親方の言葉を忘れた覚えが無い。

ガラダの村で親方を知らない人は居ない。小さな村だから当たり前だろうが、ドントルマでもその名は少なからずも知られている。

彼の伝説も幾つか御伽話のように聞かされたことがあったが、だからといって何故自分がハンターとして出ることになったのか。

小さな村で育った彼は都会であるドントルマはめまぐるしく、来たばかりのころは不良ハンターにも絡まれたりと、当初から散々な目にもあった。

そんなガラダを救ってくれた上に今でも仲良くしてもらっている彼も、実は未だに慣れていなかったり……。

「おいガラダってば！」

「んだべっ!?!」

思考と回想という名の海に浸っていたガラダは、突如として脳に届くようになった声に思いつきり怯む。

驚愕の後の空虚感によってようやく周囲が見えるようになったガラダは、改めて目の前を見る。

そこにはギザミUヘルムがドアップで映っており、それがバルテトだと解かると途端に萎縮してしまう。

しかしバルテトは、ガラダと同じ年だとは思えぬほどに、見て解かるほどにビビっているようにも遠慮はしない。

「んだべ、じゃねーよ！話聞けつてのまったくー！」

「すす、すまねえべバルテトさ……」

「だからさん付けはよせつて！」

完全に萎縮しているようだが、バルテトは無遠慮にガラダの背を強めに叩く。

これが苛めているわけではないのは互いに理解しており、決して仲が悪いわけでも上下関係があるわけでもない。

これはバルテトにとっての激励であるし、ガラダが怖がりだということやバルテトは知っている。だからこそガラダは、これ以上謝ることを止め、話を続ける為に尋ねることにする。

「は、はいだべ……そ、それで、なんの話だったつぺか？」

「あのさ、お前つてどーしてそんなに気絶させんのが得意なんだ？」

そういつてバルテトが振り向くと、そこには、既にフィジクとラメイラに狩られたフアンゴの姿があった。

このフアンゴはガラダのハンマー攻撃によって気絶し、そこへ二人がトドメを刺したことにより倒したものののだが……。

ハンマーの当て方が物凄く上手く、ピンポイントで脳震盪を起こし、スタンさせる。

そんなガラダの動きを見て思ったことをバルテトが尋ねると、フィジクとラメイラも同意するかのように頷く。

「えっと……親方からの教えで『自分の打ちたい所を打てるようになれなきやアカン』つて教わったんす。だから、なんつーか、慣れてるつていうか……」

ただでさえアイアンストライクという大きなハンマーを、慣れているという理由での確に頭部を狙う。

ちよこまかと動くランポスですら狙つて出せるのだから凄いものだと、ガラダを除く三人は思う。

だがしかし、彼の話には筋がある。ただ熱い鉄を叩けば良いというわけではない。まずは打つべき場所を見つけ、そこを的確な力で打つ。

目と力を鍛えてきたからこそ、その技をハンマー使いとしての応用とすることができたのだ。

確かに動き回る獲物の頭を狙うというのは大変だが、鍛冶をやり続けてきた忍耐力は諦めを知らず、執拗に狙う。

ハンターとしての経験も生かされてきた頃合になると、避けながら頭を狙う、という芸当ができるようになってきた。

「つくづく、彼を仲間に入れることができてよかったと思うよ……」
「私も同意するわ」

そんなガラダをスゲースゲーと言いながら背を叩くバルテトを見て、フィジクとラメイラはしみじみと呟く。

何せ彼は今まで、背が低いだの、弱そうだからだのと言われて仲間

外れにされてきたのだ。

それがどうだ。彼は的確にスタンを狙うハンマー使いとして、ラメイラとフィジクにとって無くてはならない人材となっていた。

ハンターは見た目で決まらない。同じ装備でも一見すれば上位なのかわからないし、実力だって測りきれない。

人々が集うハンター界において、上級ハンターについてきて素材にありつく初心者ハンターだっている。

故に、優れた装備⇨熟練ハンターとは限らない。何事も実際に見てみないと解からない、ということだろう。

「オレは？ねえオレは？」

「大丈夫よ、バルテト君も頼りにしているから」

「もちろん！任せとききなよペチャパイ姉ちゃん！」

「ペチャパイ言うなあー！！」

さて、話は戻すが、今回彼らの目指す相手は「ひび割れたオニムシャザザミ」だ。

この呼称はそのままの意味で、シヨウグンギザミ特異個体との戦闘で全身がひび割れていることを指す。

すぐ下には新しい甲殻が再生しつつあるので問題は無いが、ハンター達にとっては柵から牡丹餅状態。

商人達がこのひび割れから甲殻や鉱石を採取しようとクエストを依頼し、それをハンター達が受注する。

いわば採取クエストに等しいのだが、お零れでオニムシャザザミの素材が手に入られるのは美味しい。

もちろんフィジク達も素材を求め、ここ樹海にてオニムシャザザミを探している。

群がるランポス達を蹴散らしつつ探索を行った結果、ようやく見つけたのだが……ここからが問題だった。

「……寝てるな」

「……んだな、寝てるっぺな」

あのバルテドですら静かに眺めている先には、二匹の大型モンスター姿があつた。

身体中に鋭い棘を生やしている、古龍にすら打ち勝つといわれる飛竜種・エスピナス。

霸竜の頭蓋骨を背負う、世界中に防御力の高さを知らしめている甲殻種・オニムシャザミ。

その二匹が仲良く並び、木陰の下でグウグウと暢気に眠っているのである。

本来なら大型モンスター同士となれば縄張りを主張して争うものだが……この二匹なら話は別。

エスピナスもオニムシャザミも攻撃的ではなく、むしろ外敵が諦めるまで防御に努めるタイプだ。

故に互いに敵と判断せず、このように並んで眠っている。並んで眠るのは偶然であろうが。

しかし、片方は丸まって、片方は無防備に鋏を下ろしどつしりと眠っている様子を見ると、とても強いモンスターには見えない。

この様子だと、タル爆弾を爆破させても起きはしないだろう。何せ両者ともある意味で頑丈なモンスターなのだ。これには敵意が抜けても仕方ない。

とはいえ、強いモンスターには違いないため、四人は慎重に観察を続け、頃合を見て近づく。

この時はハンターとしての自覚もある為かバルテドも静かに移動を開始し、眠っている二匹に近づいていく。

四人がまず棘竜に接近して間近で観測するが、エスピナスは起きる気配もなく、グーグーと寝込んでいる。

一方のオニムシャザミも、ひび割れた甲殻があるにも関わらず、プププウと眠気泡(?)を吐き出して眠っている。

「なんか拍子抜けすんなこいつら見てっと」
「けど好都合だ。このまま採掘してしまおう」

あまりにも堂々とした昼寝を前にバルテドが啞然とするが、フィジクはピツケルを片手に採掘を始めようとする。

観察していた時はピツケルの音で起きないかとガラダが心配していたが、眠りが深いようだから大丈夫だろうと推測。

フィジクがピツケルを振り落とし甲高い音を立てるが、それでも二匹は起きる気配が無い。

「どうやら読みが当たったようね」

「まずはザザメタルを五個採掘して、その後は皆で採掘しようか」

目覚めぬ巨体を見て改めてほっとするラメイラだが、フィジクは最初から気にしなかった様子。

ゴオゴオというエスピナスの軀をBGMに、ピツケルでひび割れを砕く音が樹海に響き渡る。

―だが、世の中そんなに甘くは無いようだ。

―キー、キーキー！

「……なんだっぺ？」

交代でラメイラが採掘しようとした時、ガラダが辺りを見渡す。

どこからか聞こえてくる声に耳を傾けて周囲を見渡すものの、中々見つからない。

横で見つからないなら上か？とバルテドが大きな覇竜の頭蓋骨の頂上を見上げる。

―そこには、太陽の光を背に、キーキーと喚いている奇面族の影があった。

―そして、ここからがこのクエスト最大の難所であることを、四人は知らなかった。

―完―

第31話 「ブツチャーの強襲」

オニムシャザザミといえば、最近ハンター達の間でウワサになっているモンスターが別にいる。

それがオニムシャザザミのヤドに住まう奇面族の子供……ブツチャーである。

奇面族はガス弾や地雷などを作ることでできる高い知能を持っていることで有名だ。

彼がオニムシャザザミのヤドに住まうのも、外敵から身を守る手段なのだろうと容易に考えられる。

だが、このブツチャーが非常に面倒な相手となる。

奇面族ならではの賢さ故か、様々な手段でオニムシャザザミを誘導する知恵を持っているのだ。

誘導といっても移動ではない。オニムシャザザミの攻撃本能を刺激させる、という厄介なものだ。

その一例を、これからご紹介するでしょう。

「……な、なんだっぺか、このチャチャブー……？」

ザザメタルを採掘していたガラダ達四人の前（というか頭上）に現れた奇面族の子・ブツチャー。

ヤドの上を陣取っていたかのように立っていたが、突如として飛び降り、四人の前で綺麗に着地。

そしてそのまま目の前でボーツと立ち止まっているのだ。これにはハンター歴の長いフィジクやラメイラも首を傾げるしかない。

普通なら奇面族となれば問答無用でこちらに襲い掛かってくるのだが、このブツチャーに限りソレがない。

むしろ、着地しておいてなんでボーツと突っ立っているのか質問したいぐらいだ。しかし下手に刺激して襲い掛かっても困るのがフィジクとラメイラの考えだ。

ところがどっこい。この中にいる喧嘩腰ハンターは容赦しなかった。

「どりゃー！」

バルデトの たたきつける こうげき！

ーゴツン

こうかは いまひとつの ようだ。

「なにやってんのー!?」

バルデトの行動にフィジクとラメイラは叫び、ガラダに至っては拳動不審に陥ってしまった。

面倒なブツチャーが大人しくしているのならそれでいいはずなのに、どうしてこんなことをするのか。

それはバルデトの押し強さに関係していた。

「だってポーっとしてんなら攻撃して追いついた方が早いじゃん。いつ攻撃してくんのかわかんねーし」

よほど仮面が硬かったのか、ジンジンとする手を振りながら答えるバルデト。

好戦的というか、考え無しというか……フィジクとラメイラはバルデトのこういつた所に悩みを抱えていた。

しかし対する奇面族はといえば、狩猟笛で頭を狙ってぶっ飛ばされたにも関わらず、ゆっくりと起き上がっている。

どうやら平然としているようで、むしろ叩かれたことによつて意識を取り戻したようだ。どんだけ硬いのやら。

やがてブツチャーは思い出したかのようにまたキーキーと鳴き叫ぶ。

ブンブンとハンマーのような杖を振り回しているところからして、どうやら出て行けと言っているようだ。

しかし払うようにして其の場で振り回しているだけなので、四人は何が言いたいんだろうと首を傾げるばかり。

するとブツチャーはおもむろに腰みのに手を伸ばし、黒い球体のも

のを取り出したではないか。

それが何なのか解からないが、四人は身構える。この時ばかりはバルデトも慎重に出るべきだと考えたからだ。

ブツチャーは四人のことなど知った事では無いとばかりに、手に持ったそれを上に向かって投げける。

—キインツ!

(音爆弾!?)

突如として鳴り響く高周波に一同は思わず耳を塞ぐ。

辛うじて冷静であったフイジクが、先ほどの高音を耳にしたことでブツチャーが投げた物を理解したが、時既に遅し。

眠っていたオニムシャザザミとエスピナスが、突如として響いた高周波によって目覚めたのである。

爆音とは違う耳障りな高音は二匹の防衛本能を刺激し、まどろみをすっ飛ばして一気に覚醒へと導く。

喧嘩っ早いバルデトを除く三人はその様子を見て不味いと瞬時に察し、バルデトを押さえ込んでオニムシャザザミの陰に隠れることに。

オニムシャザザミはだらしなく下げていた鋏を瞬時に合わせ防御姿勢に入り、

エスピナスは丸まっていた状態から直に首を伸ばし、キョロキョロと慌しく周囲を見渡す。

幸いなのは二匹ともオニムシャザザミの死角に隠れているハンター達を見つけられず、何事かと思渡すだけに留まったことか。

それでも急な音に驚いた上に眠りを妨げられたことには違いなく、エスピナスは珍しく苛立っている様子。

エスピナスはグルルルと喉を鳴らす程に怒ってはいるが、オニムシャザザミが犯人だとは思っていない様子。

そんなエスピナスですら無視して防御姿勢のままにいるオニムシャザザミの傍らには、ハンター四人が隠れている。

ちなみにバルデトは戦う気満々で手足が動いているのだが、フイジクとラメイラに羽交い絞めされ、ガラダに口を塞がれているので無理

だった。

モガモガと暴れるバルデトを押しさえつけながらこちらに気づいていない二匹の様子を見て、三人はほつと一息。

しかし、ここでまたブツチャーが面倒を起こす。

「キー・キキー・キー！」

なんと、四人の傍でカツンカツンとオニムシャザザミの足を杖で叩き、注意を引き寄せているではないか！

青年とはいえ力強いバルデトを押しさえている為に手で止めることは出来ず、声を上げることもできず。

無言で慌てる中、ブツチャーは彼らがここにいることを知らせるようにして鳴き、音を立てる。

—オニムシャザザミではなく、エスピナスに向けて。

エスピナスはその耳障りな音を聞いてそちらへと首を向ける。

そこにはオニムシャザザミの陰にじつとしていたハンター四人と、こつちだこつちだと言わんばかりに跳ねる奇面族の姿。

普段なら温厚でハンターですら目に留めないエスピナスだが、眠りを急に妨げた苛立ちからか、四人と一匹に向けて咆哮を上げる。

「ゴガオオオオオオ！」

—よくも起こしてくれたなあー！

なお、上記の台詞はイメージです。

とにかく、眠りを妨げた高音はハンターの仕業だと思い込んだのか、エスピナスはハンター達に敵意を振りまく。

こればかりは羽交い絞めにしていたバルデトの拘束を解放し、武器を持って身構えるしかない。

「チツキシヨ、あのチビすけ！」

やっと解放されたことにより呼吸が安定したバルデトだが、彼は苛立って天を見上げる。

その視線の先には、ヤドの天辺で挑発の踊りを舞うブツチャーの姿。ザマーミロといわんばかりである。

そんなバルデトの舌打ちですらエスピナスは無視し、翼を広げ、怒りをあらわにし咆哮を上げる。

ちなみに、オニムシャザザミは「我関せず」とばかりに防御姿勢を崩さなかった。

—完—

第32話 「見れば解かること」

かつて見習い（という名の雑用）だった頃のガラダは、鍛冶屋の親方にこう問いかけた事がある。

「親方、どうしてモンスターの素材で造った防具には力が湧くんだべ？」

加工されたパーツを手を取って黙々とレイアSヘルムを組み立てる親方の背を、ハンターとなつた今でもハツキリと覚えている。

陸の女王と呼ばれる雌火竜リオレイア。その甲殻や鱗から作られた防具を纏った者は、凄まじい生命力を得るとされる。

モンスターの素材で造られた防具は、どれもこれもが不思議な力を宿し、ハンター達に個性的な力を与えることが出来る。

しかしそのメカニズムや仕組みは未だハツキリしておらず、職人の技と経験が問われる、ということしか解かっていない。

だからこそガラダは聞いてみた。どうしてモンスターの素材で造られた武器や防具には力が宿るのか。

そして親方は、振り向くことなくこう言った。
「見てりやわかるようになる」

ただそれだけしか言わず、黙々とレイアSヘルムを組み立て、布を縫い上げていく。

親方の後ろからその作業を眺めていたが、一つ一つの手作業がとてもスムーズで、無駄がないように思える。

今思えば、あの素早い作業は経験や理論の問題ではなく、「見てりやわかるようになる」ものなのだろうか？

しかしそれは、人の作業や物の構造を指しているようには思えなかった。親方という人物を知った自分なら、そう思えた。

何を見れば解かるようになるのか。それが鍛冶見習いにして見習いハンターのガラダが今でも思っている疑問だった。

忘れていたようだが、討伐クエストと採取クエストでは目的が違

う。

上位以上になると採取ツアードでもモンスターが出没することがあるが、大抵のハンターはそのモンスターを相手にしないだろう。

立派な防具が欲しい為にモンスターを多々狩るハンターが多いだろうが、忘れてはならない。ハンターとは決してモンスターを殺す職業ではないのだ。

個体数調整の為に狩猟はもちろん、必要以上の殺傷を控え、大型モンスターの目を掻い潜って必要なものだけを採取する事だつて立派な仕事だ。

故に、憤怒したエスピナスを前にフィジク達の取る行動は……。

「フィジク、採掘終わったか!」

「オツケ!」

「じゃあ次は私ね!」

三人は怒るエスピナスを誘導し、その隙に一人が防御姿勢のままにいるオニムシャザザミから採掘する。

怒ったエスピナスは確かに強いが、それを相手にする必要は無い。今回の狙いはただ一つ……ザザメタルの回収にあるからだ。

ここで納品だけと言わないのは、彼らもまたザザメタルの採掘が目的だからだ。一つでも多く採取しようと躍起になっている。

最新鋭と噂されるオニムシャザザミ武器であったり、未だ開発されていない防具の為に貯蓄であったり、単に金儲けであったりと、四人それぞれの野望がある。

その為にはエスピナスをオニムシャザザミから遠ざける必要がある。採取中に邪魔されたり、エスピナスを恐れて逃げてしまつてはたまらないからだ。

なので、現在はラメイラがピツケルを持ち、残るフィジク・バルテド・ガラダの三人がエスピナスに対峙する。

エスピナスが採掘中のハンターに気をとられないよう、戦闘の原因は自分達ではないので不本意なことだが、武器を手にして戦いながら誘導する。

もちろん目的は狩猟ではないので、ひきつける程度に攻撃を仕掛

け、逆に攻撃されそうなら即座に納刀して逃げる。

こうしてラメイラはピッケルで確実にザザメタルや甲殻を採掘していくのだが……またしても。

「キー…キーキー…」

「ふぎっ!？」

オニムシャザザミから降りてきた奇面族の子ブツチャーが、助走の勢いで頭から突っ込んできたのだ。

これを横っ腹から受けたからには、か弱い(?)ラメイラは吹っ飛ばしかなかった。

「ああもう!…しっこいわね!」

吹っ飛んでも流石はハンターか、すぐに体勢を建て直し、ブツチャーを追い出そうと片手剣を振るう。

持っていた杖で防ぐも、ブツチャーは再び杖を振り回して突進、ラメイラと戦闘を開始する。

先ほど採掘したバルテドやフィジクもそうだったが、このブツチャーがしっこいのなんの。

バルテドはこのブツチャーに対し狩猟笛で応戦、見事スタン状態にして気絶させることに成功した。

バルテドの採掘が終わりフィジクと交代した途端、ブツチャーは復活し、今度はフィジクに勝負を挑む。

最初は状態異常弾で黙らせようとするが効果がなかったので、通常弾で吹き飛ばし、脱退させることに成功。

そしてラメイラの番となり……またしてもブツチャーが戻ってきて妨害に入る、というわけだ。

タダでさえ頭にかぶっている鳥兜のような仮面が硬いのに、ここまですら回復力が高いとも思わなかった。

モガ村の年季の入った専属ハンターから、二匹の奇面族の子に助けられてばかりいたと聞いたことがあったが……奇面族は子の方が強いのだろうか？

とにかく、ブツチャーは杖を我武者羅に振ってオニムシャザザミから近付けないようにしている。

防御しながら地道に攻撃する片手剣とは相性が悪いのか、片手シールドを構えて防御しているしかなかった。

そこへ。

「よいしょっ！」

ーゴゲンツッ！

「ギツッ！」

掛け声と、鈍い金属音と、奇面族の断末魔。

目の前のブツチャーと背後で暴れているエスピナスばかりに気を取られていたからか、さらにその後ろにいた存在に気づけなかったようだ。

フラフラとして最後に突っ伏して倒れたブツチャーを見てから、防御の姿勢を解き、その打撃音の正体を知った。

「ガラダ君？」

「ごめんよチャチャブー君……あだだ、コイツめっさ硬いっぺなあ……」

ハンマーを片手で持つて肩に掛けながら、もう片方の痺れている手を振るガラダの姿。

直に後方を見れば、怒り暴れるエスピナスの周囲を走り回るガラダと、遠くから狙撃するフィジクの姿。

牽きつけている方は問題ないようなのでホッとしたが、ラメイラは直にガラダを見て、メツと小さく注意した。

「援護は嬉しいし、確かにこのチャチャブーは手ごわかったわ。けど私でもなんとかなるし、自分の与えられた役割はしっかりしないと」叱る様はまるで姉のようだが、気の弱いガラダは「す、すみません」と咄嗟に謝ってしまう。

咄嗟とはいえ、エスピナスを牽き付けるといふ役目も重要だと理解はしていた。だからこそ怒られても仕方ない。

しかし、この助けは失敗を呼ぶことになる。エスピナスがオニムシャザザミの前にいるガラダとラメイラに目をつけてしまったのだ。

オニムシャザザミの存在などただの岩だと思っっているかのように二人に釘付けで、そこに敵がわかると知って走り出す。

「ちよ、こら！待ちやがれ！」

「二人ともそつち行ったぞ！」

エスピナスを追いかけるバルテトとラメイラ達に忠告するフィジク。どちらが適切な判断かは一目瞭然だろう。

エスピナスは追いつけないバルテトなど気にする事なく、慌てふためいているガラダとこちらを睨むラメイラに向けて突進する。

「こつちー！」

「へあつ？」

慌てている人は強引に引つ張った方が良い。ラメイラはガラダの手を引き、咄嗟に動き出す。

動き出した先は後方。オニムシャザザミの背後に回り込み、エスピナスの突進を受け止めてもらおうという魂胆だ。

肝心のオニムシャザザミはいえは防御姿勢のまま。直撃は免れない状況であり……。

ードゴンツ！

強烈な音が周囲に響き渡る。

大型モンスター同士の激突は音だけでなく振動をも引き起こし、周囲の鳥が驚きのあまり一斉に飛び立つほどだ。

ラメイラとガラダは耳を塞ぎ衝撃から身を守り、遠くから見ていたフィジクとバルテドは目を丸くした。

オニムシャザザミは微動だにせず、エスピナスは鼻先の角を折って地面に伏した。

エスピナスの象徴でもあった角がポツキリと折れているだけでも重大だが、それだけではない。

力なくグツタリとした様子からして、どうやら頭の骨か首の骨にヒビが入ったようだ。

古龍種に生存競争で打ち勝ったとされる、下手をすれば火竜よりも強大とされる飛竜・エスピナス。

全身に生えた棘と重厚な甲殻に覆われたその体から繰り出す突進

は、鎧竜グラビモスとは違ったパワーを示すのには充分。

オニムシャザザミはそれに耐えるどころか、エスピナスの角と骨をへし折った。

しかもその突進を受け止めたにも関わらず、軽く地面にめり込み、鋏の表面に僅かなヒビ割れを残しただけ。

それでもオニムシャザザミは心配なのか、鋏の間から触覚を伸ばし、凭れ掛かっているエスピナスに触れて確かめようとしている。

重厚過ぎる身体と甲殻、それに見合わぬ度を越えた心配性。

鉱石を取り込み防御に防御を重ね、鉄壁という二つ名に相応しい頑丈な身体を手に入れた。

竜を越える鋼鉄の身体。甲殻種故の雑食性により生き延びた生命力。世界の広さを知ったからこそその臆病さ。

噂に違えぬその性質と身体を、ガラダはその背後から見ていた。焼き付けるようにして目撃した。

ゾワゾワする。なんて硬いんだ、なんて重いんだ、なんてこうも臆病であり続けるのか！

その頑丈な甲殻を―その大きな鋏を―その分厚い全身を―その臆病すぎる性質を――。

―どうすれば、防具として再現できるのだろうか。

「ちよ、こらまでオニムシャ！逃げるなつてのー！」

「っ!？」

バルテトの声と同時に思考に浸っていたガラダが動き出したのは、一種の本能だったのかもしれない。

オニムシャザザミが地中へ潜ろうとしているのを見た瞬間に手が動き、懐にしまっていたペイントボールを投げつけたのだ。

地中に姿を消す寸前にペイントが命中。臭気と煙だけを残してオニムシャザザミは地中へと潜っていく。

後に残されたのはハンター四人と、気絶しているエスピナスとブツチャーだけ。

幸いな事に今のエスピナスは力なく伏せているが、回復するのは時間の問題だろう。ブッチャーは未だに目を回しているが。

ハンター達にとつての今の問題は、これからどうするのか、である。「よくやったよガラダ。さて、これからどうしようか？」

「オニムシヤザザミの噂を考えると……既に遠くに逃げてしまっているかもね」

フィジクの問い掛けに対し、ラメイラは残念そうな顔をして答える。

オニムシヤザザミを事前に調べていた彼らは、彼(?)が再びこの狩猟地に見えることは難しいのではないかと推測する。

依頼目的であるザザメタルの個数も揃っているし、今回は諦めた方が良いのでは……そう考えていたのだが。

「まだいるはずだす！探すっぺー！」

その考えに至らず訴えるのが、ガラダだった。

「ちよ、今日は随分と張り切ってんなあガラダ」

いつもなら自己主張を控えるはずのガラダの気迫に思わず身を引く三人だが、それでもバルテトは感心したように言う。

それにガラダの言う事は正しいようで、嗅げばペイントの臭気がまだ漂っているのが解かる。

「驚いたな……オニムシヤザザミの事だから、てつきりこの場から逃げ出しているものかと……」

「エスピナスが気絶したことで、今この場に居る頂点があいつに入れ替わったから余裕が出たとか……?」

「いや単に腹が減ってたんじゃないの？」

——ありえる。

「とにかく探しに行くだ！まだ採掘できるかもしれないねえべー！」

必死なガラダの訴えに三人は無言で頷き、四人は脱兎の如く走り出す。未だに目を回しているブッチャーを置いてけぼりにして。

「何か……何か解かる気がするんだべ……!」

ハンターとしても、鍛冶屋を目指す者としても。己の道を見出せるような何かを、あのオニムシヤザザミは持っている。

其れを理解したいが為に、ザザメタルを欲している自分がいる――
いや、オニムシャザザミを知りたい、が正しいか。

――今ここに、オニムシャザザミへの挑戦者が増えた瞬間だった。

――完――

第33話 「世界一硬い防具」

モンスターを狩るハンターを統一しているのは、ハンターズギルドに他ならない。

モンスターも我々と同じ自然界に存在する生命であり、弱肉強食の世界で争う敵であり、共に自然を生き抜き競い合う同族である。

だからこそ必要以上の狩猟を禁じ、ハンターランクを設け、ギルドナイトを派遣することで、ハンターとモンスター両方の生存を図っている。

もちろんモンスターの情報収集にも力を尽くしており、危険度の設定、狩猟場の管理及び確保など幅広い調査を行っている。

最近では知識不足が故に、偶然の出会いで狩猟を試みる欲深いハンターなども居るが、そこは管理外だろう。

そんなハンターズギルドは、オニムシャザザミという甲殻種を稀有なモンスターとして認知しているらしい。

独立の種とも同種とも言いがたい「亜種」とは違う、原種から進化したとされる「変異種」。

イビルジョーによる食物危機や何らかの事情による急激な環境変化に対応し、進化してきたモンスター達の総称だ。

その種類が徐々に増えているという報告はあるが、未だハンターギルドの調査が浸透しておらず、生態はともかく進化の基準ははっきりとしていない。

そんな謎の多い「変異種」という定義が決まったのは、オニムシャザザミの存在が大きい。

新大陸であるユクモに突如として現れた甲殻種モンスター。その発見は奇しくもユクモ村創設とほぼ同期であったという。

発見したのは、かつて新大陸のユクモ地方に乗り出した当時の漁船の子孫からの情報だ。

食用ザザミ一匹が漁船から逃げ出したという記録があり、そこから鬼鉄蟹に進化した可能性が高いと学者達の結果が出た。

いかに新大陸が広くとも、現時点で確認されている甲殻種は三種類

のみで、しかも個体数でいえば三匹だけだ。

それが鎧蟹アラムシャザザミであり、刀蟹ツジギリギザミであり、氷晶蠍アクラ・アシユラである。

ツジギリギザミは非常に高い危険度を誇り、アクラ・アシユラは隠蔽と潜行が上手く発見が困難とされている。

しかし鎧蟹アラムシャザザミが成長した甲殻種、オニムシャザザミは別だ。

変異種の代表格とも言える彼は堅く臆病でありながらも、その存在は常に露見されており、ギルドでも常時報告が取れている。

さらに複数の鉱石を体内で合金し甲殻に反映させるという特殊性は、世界に一匹という事実が無ければ、捕獲して研究しておきたい所。そして合金された甲殻は武器としての素材だけでなく研究用としての素材としても貴重な物で、売買しようとするれば高い金額が表示される。

最近新大陸の火山地帯に稀に出没するというウラガンキン変異種の素材の方が高いが、それでもハンターから見れば大金には違い無い。

しかも鍛冶屋職人達が防具の開発を計画中との事でその需要はより高まり、ハンター達の期待も増していく一方。

まさに生態的にも商売的にも価値がある、非常に稀有なモンスターといえよう。

所変わって樹海の奥地では、一人のハンターがせつせとツルハシを振るっていた。

ゲリヨスSヘルムを装備している為に見た目は解からないが背丈は小さく、まだ年若い青年であることがわかる。

臆病なスポーツ刈りの青年。それがガラダという元鍛冶屋見習いハンターの特徴……のはずだった。

「おらあーおらあーだべえー！」

それがどうだ。常に自信を持ってず消極的な彼とは思えない程の鬼

気を宿しているではないか。

続いてムダムダムダアと叫ぶのではないかと思わせる程にツルハシを振るい、金属片を採掘する。

しかも相手はオニムシャザザミ。眠っているとはいえ、ひび割れた甲殻に遠慮なくツルハシを振るっている。しかもブツチャーがヤドの天辺で寝ているし。

気合を込めるように叫び、ツルハシを振るい落とし、甲高い金属音が響く。それでも眠っているオニムシャザザミ。

そんなガラダとオニムシャザザミを傍から見ているハンター……フィジク・ラメイラ・バルテトの三名は唾然としていた。

大人しい分類に入るガラダがあそこまで一心不乱になって採掘しているのだ。その豹変っぷりは驚きでしかない。

「凄い覇気だね……」

「ほんと。いくら貴重だからってあそこまで躍起になるなんて不思議ねえ」

「いつもあんだだけガッツがあつたら、もつと頼もしくなるな」

三者三様に感想を漏らすも、当人は気にせずツルハシを振るい……やがて動きが止まる。

どうやら持ちきれだけの分を採掘し終えたらしく、ザザメタル等の鉱石をかき集め始めた。

両手一杯に鉱石を抱いて、三人の元へやってくるガラダ。ホクホク顔である。

「終わりましたべー」

「お疲れ。頑張ったね」

「今まで見た事の無いぐらいに満足そうな顔してやがんなあ」

そんなガラダをやや引き攣った笑顔で向かえるフィジクと、物珍しそうな顔をして呟くバルテト。

自分でも自覚しているのか、バルテトの指摘に困ったように苦笑いするガラダ。しかし喜びは隠し切れないようだ。

そんな彼らの横で乾いた音が響く。三人が振り向けば、そこには手を叩き注目を集めようとしたラメイラの姿が。

「さてと、沢山採掘したし、さっさと納品して帰りましょうか」

「そうだな。いつエスピナスの目が覚めるか解からないし」

御尤もだとフィジクが頷けば、長居は無用だと言わんばかりに三人は走り出す。

オニムシャザザミは眠っているままだし大丈夫だとは思っていたが、エスピナスの存在を忘れてはならない。

オニムシャザザミに突っ込んで骨を折った上に気絶したとはいえ、死んだわけではないのだ。怒りの矛先をこちらに向けるかもしれない。

突っ込んだ相手が悪かったとはいえ、相手はあのエスピナスだ。それなりの経験を持つ四人組とはいえ、若人ハンターに棘竜は大きすぎる。

元々相手にするつもりは無かったが、怒りに任せてこちらをターゲットにされてはたまらない。だから早々に逃げる。

まあ、結果的に無事ベースキャンプに辿り着けたのだが。物事とは意外とあっさり終わることだってある、ということだ。

確かに途中でエスピナスに遭遇したが、逃げて姿を晦ませば済む話で、四人ともこれといった怪我はない。

ちなみに何故姿を晦ます必要があるかといえば、ただ逃げるだけではベースキャンプごと襲撃しかねないからだ。

「これでよし……っと」

ベースキャンプに置かれている納品BOXに一定数のザザメタルを入れたフィジクは、ほっと胸を撫で下ろす……が、どこか残念そうな顔をしていた。

ハンター達にはいくつか規律があり、一定以上のレア度を持つアイテムの受け渡しを禁止する、というものがその中の一つにある。

故に納品BOXにアイテムを納品して、その後減った分を仲間から分けてもらう、ということとはできない。だから出す側は少し損をするのだ。

ちなみにジャンケンで決めたのだが、それでも溜息を吐くフィジク

に三人は同情せざるを得なかった。

「一時はどうなるかと思っただけで、無事に終わってよかったわね」

「……おいガラダ、何ブツブツ言ってるんだ？」

「……皆にお願いがあるだす」

仕事が終わったからとヘルムを脱いでいたガラダは、真剣な眼差しで三人を見つめる。

先ほどまで全力でツルハシを振るっていた事もあり、三人は何も言わず彼の言葉を待つ。

「うちの鍛冶屋でザザメタルと甲殻売ってくれねえべか？市場価格の倍は払うべ」

唐突な出来事の後には唐突な事場が待っていた。ガラダの言葉に三人は声を失うほどに驚くばかりだ。

しかし両手いっぱいにはザザメタルを持ち、こちらを見つめる眼差しは真剣そのもの。そもそもガラダはこんな表情で冗談を言うタイプではないし。

ザザメタルを含め、鬼鉄蟹の甲殻は非常に高い値段で買取される。最近では移動キャラバンの竜人問屋と呼ばれる者が多く取り寄せようとしている程。

貴重な素材であるが故にその売却値段は高く、数個買おうとするものなら並のハンターの所持金がスツカラカンになるほどにお高いのだとか。

それを倍の値段で買うと言い出したのだ。一体いくらするのかわかったものではない。

「そ、そんなお金どこに」

「ハンターで稼いだお金があるべ。使ったのは防具と武器の強化ぐらだから余裕はあるだ」

フィジクの質問にガラダは答える。確かにガラダはあまりムダ使いをしない為、お金は日々溜まっていく一方だった。

「ハンターズギルドから何か言われなかな……」

「問題があつたら諦めるべが……どうか、頼んます！」

ラメイラの躊躇する発言にガラダは少し怖気づくものの、深く頭を下げて願う。

ハンター同士のレアアイテムの受け渡しは禁止されているとはいえ、自分が買うのではなく親方の鍛冶屋に売りに出せと頼むとは、色々な意味で不安でしかない。

「故郷って確かドントルマから遠いんじゃないか？そもそもガラダって親方に……」

「遠いからって諦めらねーでくだせえ！親方が怖くて鍛冶屋目指してられっか！」

勢いよく食いつくガラダに強気なバルテトも後退りせざるを得ない。え？誰コイツ？的な意味で。

ガラダの故郷は確かに遠い。そしてガラダをぽつとハンターとして送り出した親方が早々と許すわけがないだろう。

しかし今のガラダなら親方を言い負かしてしまえそうだ。バルテド自身はガラダの親方にあつたことがないが（他二人も同じ）。

「……そもそもどーしてそんな必死なんだ？」

バルテトの問いかけに、フィジクとラメイラはガラダを見て静かに頷く。

そもそもエスピナスがオニムシャザザミに突っ込んだ辺りから様子が変だつたのには気づいていたが、ここまで豹変していたとは思わなかつたからだ。

そんなバルテトの問いに、眉を深めて首を傾げ出すガラダ。言えそうで言えないもどかしさでも感じているのだろうか。

「なんつーか……オニムシャザザミを見て思ったんす！硬え防具が造りてえって！具体的な計画とかは説明しきれねえべが、とにかく造つてみてえんだべ！」

先ほどまでの勢いが途切れつつも、しかし前のような消極的な彼では無い何かを三人は感じていた。

曖昧ながらも自分が感じた事を伝えようとして必死に口を開こうとするも、それがハツキリと出来なくて苛立っているガラダ。

自分達はまだ若い。そこそこ腕が立つとはいえベテランとは程遠い存在でしかない。

しかし、ガラダと年が近いバルテトと、年長者とはいえ若いフィジクとラメイラは、今のガラダを見て思う。

「世界一硬え防具さ造りてえんだべ！」

—これが、夢を見つけ、その夢に向かって走り続けようとするハンターなのだろう……と。

樹海よりドントルマに帰宅した四人はきつそくガラダの故郷に立ち寄り、表向きには鍛冶屋に売り渡したということにして、ガラダに売却。

親方や鍛冶屋の弟子達に事情を説明したところ、親方は「そうか」とだけ言って、仲間達はガラダの金で買ったものだからとガラダに押し付けた。

三人がこれからどうしようかと話し合う中、ガラダだけは職場に赴いて作業着に着替え、ザザメタルの溶鉄作業に入る。周りに目を向けていないかのように、熱心に。

三人はその後姿だけ見て、静かに別れを告げて去っていった。ガラダは静かに「じゃあ、また」とだけ呟いた。

そう、確かにガラダは故郷に戻って鍛冶を始めたが、これは別れではない。

ザザメタルや甲殻は数十個という数を誇るが、これだけで防具が造れるなどとは思っていない。むしろ少ない方だと、この時ガラダは考えていた。

そもそも完成図ですらまだ出来てない中、まずはザザメタルを溶かしてみる事から始めようとしている。失敗の連続になることは覚悟の上だ。

それでもやってみなければ解からない。まずはザザメタルの本質を見極めること。その為にも、高熱に耐え、変形させることから始めなければ。

そしてザザメタルを集めるには、ハンターを続ける他ない。

慣れ始めてきたハンターを続ける方が、手っ取り早く防具となる素材や金を集められると思ったからだ。フィジク達にも話を通してあるし、続けることは困難にはならないだろう。

それに鍛冶を続けるのなら体力づくりと防具の見解を広めるのは必須。ハンターを続ければ広い世界を見て、知識を蓄えることができるはず。

しかし今後は、ハンター稼業と鍛冶屋としての修行、そしてザザメタルの加工と三つの工程に追われる日々に見舞われるだろう。

それでもガラダは、ザザメタルの加工を主に修行とハンター稼業を続けている。時には辺境の地へ赴き、地中に暮らす勤勉な一族に教えを請いもしたという。

あの甲殻種の頑丈さをこの目で見た感動を形にする為に。世界一硬い防具を目指す為に。ガラダはあの日から、弱い自分を変える事が出来たのだ。

――鍛冶屋で修行を続ける傍らでハンター稼業を続ける彼は、後に「鬼神」と呼ばれる防具の製作第一人者となる。

ちなみに、オニムシヤザザミはエスピナスから逃亡し、新たな地へ赴いたという。

自分からぶつかってきたのに、エスピナスは傷ついた怒りをオニムシヤザザミにぶつけようとしている。

怒ったエスピナスはとても怖い。オニムシヤザザミはブツチャーをヤドに入れ、すたこらさつさと逃げ出したとき。

さてさて、鬼を象る蟹は、次にどこへ向かうのやら。

――完――

第34話「覇とGの世界」

この世には、想像もつかない力と体格を持つモンスターが多数存在している。

それこそ、人間が決して敵わないと思わせるほどに凄まじい見た目を持つモンスターが多い。

逆に見た目や声の変化により威嚇し、身を守るモンスターもいる。灯魚竜チャナガブルや彩鳥クルペッコがその一例だ。

そんな見た目の中でも一番解かりやすいのは、やはり体の大きさだろう。

大きい体は武器にもなり、圧倒的な体格や質量は防御にも攻撃にも適用できる。さらに敵が小さければ小さいほど、その差による一撃はより重くなる。

老山龍ラオシャオロンや砦蟹シエンガオレンが齎す被害を考えれば納得できるだろう。彼らは歩くだけでも害を及ぼすのだ。

小さな動物達にとって、大きな動物とはいるだけで脅威として捉えられる。そして大きな動物は小さな動物を容易く捻じ伏せる。

そう、身体が大きいモンスターとは、一種の勝利条件なのだ。

オニムシャザザミは生まれて始めての危機感——絶体絶命のピンチとやらを覚えた。

4人のハンターに楽土を追い出された時や、ユクモのディアブロスに襲われた時など屁ではないほどのピンチを味わっている。

逃げようにも逃げ切れず、自慢の防御力が通用しない。いつもなら勇敢なブツチャーですら、ヤドの中の隅で震えていることだろう。

彼は今、灼熱の光注ぐ大砂漠のど真ん中で、ある巨大なモンスターに襲われていた。

名はオデイバトラス——通称「弩岩竜」と呼ばれる、セクアーヌ砂漠に出没する飛竜種だ。

オデイバトラスはアカムトルムやウカムルバス同様にワイバーン

レックスの骨格を持ち、飛竜種であることが疑わしい程に凄まじい巨体を誇る。

その巨体に見合う食欲はイビルジョーに匹敵するほどの環境破壊を齎し、獰猛な性格はあらゆる獲物と障害物をまとめて喰らい尽くすという。

噂ではこのセクアーヌ砂漠は太古の昔にオデイバトラスが暴れまわった影響も一因しているとあり、その脅威が古龍に匹敵するのが解る。

そんなオデイバトラスにとって、ダイミョウザミよりも大きいオニムシャザザミはご馳走そのもの。見た事も無いモンスターだが、獲物には違い無い。

なんでも食らうという顎でオニムシャザザミのヤドに噛み付いてはいるが、骨とはいえ元は覇竜と呼ばれる強者の頭だ。

中々歯が通らないが、それでも亀裂は走っている以上、頭蓋骨と殻が割れるのは時間の問題だ。

食べられる部分を食べる為にヤドと甲殻を噛み砕こうと力を込め、逃げようともがくオニムシャザザミを手で押さえつけている。

対するオニムシャザザミは、オデイバトラスがアカムトルムのヤドに噛み付いている為に身動きが取れないという事態に陥っている。

しかもオデイバトラスは身体の下半分を砂に入れることで固定しており、オニムシャザザミはもがこうとも砂を掻き分ける程度に終わってしまう。

ここしばらく砂漠を放浪していたからか高圧水プレスも使えず、蓄えている毒も麻痺も睡眠もオデイバトラスには通じない。自慢の鋏も背中には届かない。

こうしてもがいている間にも、奇跡的にオデイバトラスの噛み付きに耐えているとはいえ、ミシミシという嫌な音が徐々に大きくなっていく。

これをピンチといわずなんとするか。このままではヤドを破壊され、自慢の甲殻を噛み砕いて食われてしまう。

しかもこのオデイバトラス、オニムシャザザミが遭遇したこともな

い『覇種』と呼ばれる分類に当たる。

もう駄目だと思われた——その時。

オデイバトラスとオニムシャザザミの動きが止まった。

オデイバトラスは顎に込められていた力を維持するように止め、オニムシャザザミは振り回していた鋏と足をピタリと止める。

まるで石像のように動かないのには理由がある。それは動きを止めざるを得ない「何か」を感じたからだ。

その原因は、二匹の頭上を飛び交い、二匹の前に降り立った。

二匹が感じている「何か」とは、人間でも測れるような「感覚」——生命の危機と強者の気配だ。

二匹は目の前に降り立った飛竜らしきモンスターの気配に『怯え』、その気配から感じ取れる絶対的な差を前にして『警戒』しているのだ。そんな謎のモンスターを前にして、最初に動き出したのはオニムシャザザミ。

甲殻種特有の防衛本能がフル稼働したからか、なんとアカムトルムの頭蓋骨を捨てるという強引な手段を見出したのである。

弱点である柔らかい身にブツチャーがしがみついており、「なんじゃこりやー！」と言わんばかりに叫んでいる。お気の毒に。

そしてオニムシャザザミは未だ動きの無いオデイバトラスと謎のモンスターから逃げるように地中へ避難。軽くなった為か、潜行速度も上がっている。

次に行動したのはオデイバトラス。謎のモンスターがゆつくりとこちらへ向けて歩き出している。

オデイバトラスは銜えていた頭蓋骨を捨て、巨軀を支える前脚をばたつかせ、謎のモンスターに向けて砂上を泳ぎだす。

弩岩竜、それも覇種たるプライドなのだろうか。ただならぬ気配とプレッシャーを前にしても怯むことなく、吼えながら向かってくる様は勇敢さですら垣間見る。

何倍もの大きさを誇り、自然環境を破壊したとさえ言い伝えられる

巨軀の飛竜種——弩岩竜。

砂上の楼閣の異名を持つ巨大なモンスターが口をあけて襲い掛かる様は、まるで岩山が命を持って怪物となったかのよう。

砂の津波を起こしながら大口を開けて迫る弩岩竜。

それを前にしても、黒い竜のようなモンスターは微動ですらせず弩岩竜を紅い眼で睨み続けていた。

冒頭でもあったが、巨軀とはそれだけで武器となる。圧倒的な質量は攻撃にも防御にも役立ち、巨大な腕や脚はそのまま筋力となって攻撃力と安定性を増す。

しかし、それだけが全てというわけではない。自然界に置いて身体の大きさなど、多種多様な能力の内の、一種の利点でしかない。

世の中にはいるのだ。目で見て解る力ですら凌駕する、目には見えない不可解な力というものが。

オニムシャザザミが砂漠から逃げ出した頃——オデイバトラスは死んだ。

その赤い巨軀はより赤く染まり、頑丈だった甲羅は卵の殻のようにポロポロと崩れ落ち、破片という名の残骸が砂漠の上で広がっている。

砂上の楼閣は崩れ去った。完全なる崩壊という名の死を持って。その残骸は月明かりに照らされ、奇しくも鮮やかな赤を彩っていた。そんな赤の残骸の頂上には黒い影が居た。

月光を余すことなく受け止めようとしているかのように黒い翼を広げ、月に向かって首を伸ばす。

そして咆哮——月まで届かんばかりの咆哮は、遠くの砂漠に居るアクラ・ヴァシムやディアブロス達に恐怖を植え付けていた。

対して黒い竜の傷は少ないが、あの巨軀を前に僅かな傷となるとおかしい。腕による一撃を受けたとしたら怪我どころではないはずだから。

しかしこの黒き竜——通称「刻竜」に常識など通用しない。少な

くとも人間が築き上げた「常識」など、力を持ってねじ伏せられるのがオチだ。

そもそもこの黒き竜には名前がつけられていない。それだけ解明されている情報が少ないのだ、この黒き未確認生物は。

あの巨躯をボロボロになるまで打ちのめし、覇種という選ばれた生き残りを無残な死体に変貌させる。

それでも、この世界から見れば刻竜あれぐらひなどまだまだ序の口でしかない。

伝承であって欲しかった生物、大自然をも凌駕しかねない強大な敵……それこそ『G級』の世界は果てしない。

——それでも挑む気があるというのなら……越えていけ。『G』の世界へ。

ちなみにオニムシャザザミはといえば。

——旧大陸怖いマジ怖い。

なお、上記の台詞はイメージです。

オニムシャザザミは(可哀相な)ダイミョウザザミから奪ったモノブロスの頭蓋骨を背負い、走っていた。

弩岩竜にUNKNOWN……広い旧大陸の『G』の実力者達を前に、暢気だった性格が打ち消すほどの恐怖を抱いていた。

完全にビビリになってしまったオニムシャザザミは、こんなところ出て行ってやる！と言わんばかりに地を走っている。

ブツチャーも二匹の気に当てられたのか、ヤドにしがみついたまま気絶してしまい、今はモノブロスのヤドの中で震えていた。

何はともあれ、オニムシャザザミは休まず走る。覇種とG級の世界から逃げ出し、生きてそこに挑戦する為に。

人間が挑むように、いずれはこの蟹も『G』の世界に挑む。それは

遠いようで、実は近い道のりのようだ。

—完—

第35話「我らの団」

——【我らの団】と呼ばれる組織がある。

こんな名前でも立派な正式名称で、組織というよりは殆どキャラバン隊として成り立っている。

主にバルバレギルドが管轄している地域で活動しており、冒険心溢れる団長の下、屋台にもなる馬車で各地を旅している。

彼らは団長と加工屋の竜人族を除き、時には大人数、時には少数と入れ替わりが激しかった。

しかしある機会を境目に組織の人数は安定し、これまでよりも【我らの団】の知名度は格段に高まっていた。

【我らの団】に一人のハンターが加入したことで、これまで謎に包まれていた『黒触竜』の生態と正体を突き止めたからである。

最終的には、かの天空山の麓にあるシナト村の伝承に記された「天を廻る龍」を討伐したという華々しい戦果を挙げる結果となった。

それらの切欠が、団長が【我らの団】を結成した理由の一つである『謎のアイテムの正体を探る事』だったのだから驚きだ。

かくして、【我らの団】の名は広く伝わり、バルバレを中心に各地を回るキャラバン隊として有名になった。

現在はハンターを含めた七名で構成されており、いずれも個性豊かでお人好しなメンバーとして慕われている。

特にアイルーが多く、ルームサービスを含めて常時七匹、ある島にはもつと大勢のアイルー達が集まっているという。

これはアイルーを愛するハンターによるものらしいが……少なくとも両の手では足りないほど居るらしい。

——そんな彼らに、ある異常事態が起こる。

その日、団長は古い友人に会うからと、旧大陸の端っこにある港に入港していた。

暖かな日差しの下、鯨のような形状をしたイサナ船が波に静かに揺れ、その珍しい形状に港の人々が群がっている。

そんなイサナ船には腹痛で寝込むハンターと船酔いで倒れているオトモしか残っておらず、甲板の上では勝手に入り込んだ子供達のはしゃぐ。

砂浜に沿うようにして建てられた港は漁村も兼ねており、質素ながらも大きく発展し、多くの人々が行き交っていた。

そんな人混みに紛れるようにして「我らの団」の各々は好き勝手に行動していた。

加工屋の竜人族と土竜族の娘はこの大陸の加工法に興味を示して見学し。

竜人間屋を営む老人は向こうの大陸でしか取れない貴重な鉱石を手に商売を始め。

料理長である糸目のアイルーが腹を空かせたお客の為に中華鍋を豪快に振るい。

【我らの団】の看板娘が資料を基に旧大陸のモンスターを独特なイラストで描いている。

そんな彼らを纏めるはずの団長はといえば、旧友と情報交換……という名目の自慢話をしていた。

そんなほのぼのとした一日の夕飯時に……そいつはやってきた。

事の切欠は料理長の屋台だった。

夕飯時になったということで、片付けがあると言って先に船へ向かった竜人商人を除いたメンバーは食事にありつこうと屋台へと向かう。

それぞれの成果を楽しそうに話し合う中、まずは加工屋の娘が、屋台に近づくとつれて異変に気づいた。

「あれー？なんか人が多くないー？」

「……やけに人が多いな」

加工屋の娘の指摘に一同は不思議そうに店の様子を見て、加工屋は声を漏らす。

確かに料理長の料理の腕前は凄いが、いくらなんでも店を囲む人混

みは多すぎるし、何より食べに来たという雰囲気ではなかった。

「スゲー」だの「なんだアイツは」だのと賞賛の声がほとんどだ。不思議に思った一同は、人混みの一番端にいる大男に声を掛ける。

「すまんが、一体何が起こってんだ？」

「おお、あんたら確かこの屋台のアイルーのお仲間だったよな？ スンゲー事になってんだ、見てやれよ！」

団長が声を掛けるや否や大男は興奮げに話し掛け、民衆も仲間が来たと知って彼らの為に道を明ける。

興味津々な女の子二人は我先にと走り出し、団長と加工屋はそれに続いて走り出す。

その先には……。

「ガツガツムシヤムシヤバリバリモグモグンガンガ」

「よく食べるニヤルねアンタ！ こっちも負けられないニヤルよ！」

高速で大量の飯を調理する料理長と、高速で大量の飯に食らい付く奇面族がいた。

料理長の調理スピードは前々から知っていたが、それを高速で飲み込む奇面族にも驚いた。

「……なんじゃこりゃ」

これには陽気で大柄な団長も額に汗を滲まざるを得ない。ソレほどまでの光景だったからだ。

「うわー、なにこの子、なにこの子!?! すっごい食べるね！」

「これはチャチャブーですよ！ ほら、私の描いたイラストに似ているこの子ですよ！」

自身の三倍もの大きさもある皿に盛られた焼き飯を掻っ込むチャチャブーを見てはしゃぐ女の子達。

加工屋の娘が応援するようにはしゃぎ、看板娘は先ほど描いたという奇妙なイラストを見比べてはしゃぐ。

そんな二人を無視し、チャチャブーは自身よりもデカイ海老をバリバリと噛み砕く。恐ろしいものである。

「あいさすまんね、通してくださいませよ」

そんな二人と二匹を見ていた団長と加工屋がある声を聞き取って

振り向く。

人混みの中から現れたのは、四匹のアイルーが担ぐ御輿に乗ってやってきた竜人商人だった。

小柄な彼は足腰が弱く、こうして御輿などに乗っていることが多い。因みにアイルーへの駄賃は30分で300ゼニー。

「おお、問屋の爺さんか。この大食いチャチャブーなら今さつき見たばっかで何が何やら……」

「それも一大事やろうが、こっちはもつと一大事やわ！とにかくイサナ船に来なされ！」

普段から笑ってばかりいる竜人商人こと問屋爺が他人を急かす。大食いチャチャブーほどではないが団長は驚いた。

きやあきやあはしやく女子二人と料理対決に燃える獣人族二匹を置いておき、団長は加工屋は運ばれる問屋爺の後に続くべく走る。

この港は交流が盛んではあるが、最も栄えているのは漁業。それに伴い、村人の大半は漁に関する仕事をしている。

この辺りはルドロスやエピオスなどは居れど、ロアルドロスやガノトトスといった大型モンスターは出没しない恵まれた海でもある。

そんな海でも夜になれば視界の悪さと荒れ模様故に危険な為、漁は基本的に朝と昼に行われる。

そして夕飯時になると魚を降ろし、各々の家に帰宅する。いわば夕飯時は、最も街に人が集中する時間帯なのだ。

そんな夕飯時に大食いの奇面族がやってくれば人々の注目を集め、船や積荷を片付けた漁師達の大半も集まるといふもの。

故に、港に向かおうとしていたのは竜人商人ぐらいであり、その事実を知ったのも彼だけだったのだ。

その驚愕の事実とは――

彼らの船……イサナ船の甲板の上に陣取っているのは、一匹のモンスターだった。

背には巨大な巻貝を背負っており、その巻貝の口は分厚く大きな鋏で閉ざされている。

ガタガタと震えているそのモンスターは、ちらりと鋏の隙間から顔と触覚を覗かせ、注意深く周囲を見渡していた。

土竜族が創り上げた頑丈なイサナ船は潰れることはないが、重みに耐え切れず浅瀬の水面ギリギリまで沈んでいる。

大きな鋏。真っ赤な甲殻。長い触角。四本の脚。つぶら(?)な目。新大陸出身の為に「その種族」を見たことはないのだが、このモンスターの特徴を現すのなら……。

「……蟹だな」

「蟹じゃろ?」

「おお、こりやデツカイ蟹だな!」

一人陽気に笑うは団長。その大きな姿を見て豪快に笑う団長を前に、蟹……甲殻種は慌てて鋏で身を隠す。

残る加工屋と問屋爺は珍しい光景に若干啞然としている。問屋爺はこれで二度目だが、未だ頭の整理が出来ていない様子。

先ほどまで甲板の上ではしゃいでいた子供達は団長と加工屋の背後に隠れて様子を伺っていた。この子供達が問屋爺に知らせてくれたのだ。

しかし団長は笑うのを止めて腕を組み、今度は困った顔を浮かべて唸る。

「しっかしまあ、モンスターが俺達の船に陣取ってビクビクしてるたあ、何事なのかね?」

流石の団長でも、麻酔で眠っていない大型モンスターを目の前にするのは初めてだ。

強さ故に自分からは襲わない飛竜種がいると聞いた事はあるが、ハンターでもない自分達がこうしている事自体が異例なのだろう。

村の子供達ですら、最初はこのモンスターに驚いていたものの、動く気配がないからか恐怖よりも好奇心が勝って観察している程だ。

経験豊富な団長と落ち着きのある加工屋ですら、イサナ船の甲板に居座っているモンスターをどうしようかと悩んでいる。

「さてよ……確か……ああー！そうやそうや！」

問屋爺が唐突に声を上げ、二人の注意がそちらへと向く。

「なんだ、何か知っているのか問屋の爺さん？」

「思い出したわいな、こいつあオニムシャザザミちゅーやつや！」

オニムシャザザミ——問屋爺の言葉を聞いて二人はあることを思い出す。

確か現在の新大陸では二〜三匹しか確認されていないという甲殻種の内の一体……それも強大なモンスターと聞いた事がある。

ハンターが加入してから今まで、陸海空を渡って冒険を繰り返した。その忙しさのあまり他の事が疎かになっていったようだ。

「わいら商人の間では結構有名なモンスターでな。元々新大陸出身ちゅーこともあつて話には聞いておつたが……」

あくまで話に聞いていた程度でしか知らなかったモンスターを目の当たりにできるとは、と問屋爺は感慨深く頷く。

商人同士のネットワークは大陸同士の間を無視する程に広い。儲けの為に情報交換するのも商人の知恵だ。

故に問屋爺はその皺の数以上の、長い間旅をしていた団長と加工屋ですら凌ぐ情報量を保有している。

団長と加工屋ですら知らなかったオニムシャザザミの情報が出てきたのもそのおかげだ。

さらに、問屋爺がうんうん唸りながら記憶の引き出しを探った所、他にもわかつた事がある。

このオニムシャザザミは大型モンスターの中でも特に大人しい分類に入っていること。

オニムシャザザミの素材は希少価値が高く、商人の間でもレアな素材として名高いこと。

何故かオトモアイルーのように子供のチャチャブーが付き纏っていること。多分あの食いチャチャブーの事だろう。

そしてオニムシャザザミはこのところは旧大陸を歩き回っていたこと。

【我らの団】が滞在しているこの港町は旧大陸の端っこにあり、この

蟹とはたまたま遭遇したのだろう。

—まあそれは兎も角。

「……で、この蟹はどうするんだ？」

長年破天荒な行動を起こす団長と付き合ってきたおかげで見に付いた冷静さを持って加工屋が一言。

ここに何故いるのかという理由は解った。次にすべきことは、この蟹をどうするべきなのか、だ。

いくら大人しい分類とはいえ仮にも大型モンスター。迂闊に扱えば暴れてしまいかねない。

村人の大半はアイルー対チャチャブーの大食い対決に夢中だし、今からどうこうすることは難しいだろう。

なので、団長はこう応える。

「さあな？」

呆気なくそう答えた団長は、これまた楽しそうに笑うのだった。

—ちなみに大食い対決の結果は。

「ゴエーッブ」

あれだけ食べておいて小山のように腹が膨れただけで済んだチャチャブーが倒れ。

「つ、疲れたニヤル……もう動けんニヤルよ……」

豪快に調理器具を振るう料理長が筋肉痛を起こして悔しそうに倒れ。

—カンカンカンカーン。

「はい勝負は引き分けですよー！」

加工屋の娘がゴングを鳴らし、看板娘が試合終了を告げた。

賭けをしていた民衆の大半は悔しそうに嘆くが、それでも二匹の健闘を称えて拍手を送るのだった。

—
完
—

第36話「オニムシャの今後」

オニムシャザザミが旧大陸の端にあるという港町に現れた理由。それは逃避だった。

元々オニムシャザザミは面倒事があると逃げ出す習性があるが、此度の危険度は今までの比ではない。

生態系を狂わし砂漠化させる程の食欲を秘めた巨大な飛竜種・オデバトラス。

そのオデバトラスを怯ませ、あまつさえ瞬く間に死滅させた
未確認生物^{UNKNOWN}。

オニムシャザザミが束になっても敵わないであろう「覇種」と「G級」の代表格が二匹も立ちはだかったからだ。

しかし、オニムシャザザミが恐怖を覚えたのはこの二匹だけではない。

現段階では旧大陸にしか確認されていないという、ディアブロスのライバル的存在の飛竜種・モノブロス。

怒っていたのか、道中に偶然すれ違っただけで怒涛の勢いをもって攻撃してきた牙獣種・ラージャン。

雷光を散らしながら飛来し執拗に攻撃を仕掛けてきた飛竜種・ベルキユロス。

強さはさほどではないが、食べようと思っていた物を片っ端から食い散らかす飛竜種・パリアプリア。

一応言っておくが、これらは全て覇と呼べるほどの強さはない。しかし(一匹を除いて)オニムシャザザミが危機感を覚えるほどには強い連中だった。

いずれも逃げ切ったとはいえ、もし逃げられなかったとしたら相当の被害を受けていたことだろう。

この世は単純な力はもちろんの事、性格・攻撃性・特異性・さらには食欲までもが優れたモンスターなど多数存在している。

そして悠々と過ごすモンスターは基本的に強く、他者を圧倒する力と攻撃性を持ち合わせているからだ。

これまで出会ってきたモンスターの大半がそんな奴らだった。故に、大抵は彼らから逃げ回って暮らしていた。

オニムシャザザミが縄張り意識故に相手をしたシヨウグンギザミ特異個体は、その中の例外でしかなかったのだ。

この時、オニムシャザザミは本能的に理解した。今のままでこの大陸を渡るのは危険だと。

オニムシャザザミは完全に侮っていたのだ。防御が硬いから。面倒事からは逃げればいいから。そしてその方が楽に生きられるからと。

このままでは、いずれ蔓延るだろう強者達を前に逃げ続け、結果的に食欲や安心感を満足に得られないだろう。

かといって早々変えられる物ではないとも本能的に理解している。

確かに彼は旧大陸出身のヤオザミから成長してきたが、その性質はダイミヨウザザミと大きくかけ離れた物となった。

食用として輸出される最中に海に落ち、ユクモ地方の孤島へ流れ着いた彼は、急な環境変化を前に防衛本能を働かせて生きてきた。

その突然変異によって変化したのが、食した鉱石を甲殻に反映させる特異性と、ひたすら守り逃げることで難を逃れるという性格だ。

前者は強い殻を手に入れる為に体が変化したもので、後者は見知らぬ土地を前に自然と身についていたものである。

生物とは自身が生まれた環境に適応するものであり、その地の暮らし方が子孫の遺伝子に組み込まれ、その地で生き抜く習性を身につける。

故に自分の生まれ故郷以外の地には上手く適応できず、しかし生き抜こうと生存本能を働かせていき、慎重に行動するようになる。

その結果、亜種のように、本来なら生息しないはずの地域に生き抜くことができるようになるのだ。

そして新たな地へ適応したモンスターは、新たな性質となって地盤を固めていくことになる。

だからこそオニムシャザザミが身につけた「非常に臆病かつ暢気な性格」を易々と変えることができない。

故に――。

「……それで、この蟹さんはいつまでイサナ船を陣取るつもりでしょうかねえ?」

サラサラとスケッチブックに筆を走らせながら、「我らの団」の看板娘は小さく囁いた。

チャチャブー対アイルーの料理対決という珍しい勝負が終えて夜の帳が降りてきた頃になつても、そいつはそこにいた。

オニムシャザザミである。彼は今もお両の鋏を閉ざし、イサナ船の甲板の上で身を固めている。

大型モンスターを間近で見られる機会は中々無いからと見学していた野次馬達も、夜になつたということで各々の家に帰つたようだ。もつとも、このオニムシャザザミはずつとこの調子で縮こまつており、見ていてもつまらないというのが理由の一つでもあるが。

今残っているのは、団長、加工屋、土竜族の娘、問屋爺、安静にしている料理人アイルー、看板娘、そしてチャチャブーの五人と二匹。彼らは今もおイサナ船に居座っているオニムシャザザミを前に立ち往生していた。

ちなみに、何故彼らの中に先ほどのチャチャブーが膨らんだお腹を抱えて立っているかといえば。

「キー、キー、キキー、キイー……ゲプツ」

「このチャチャブー、どうやら私の料理を気に入つたようニヤルよ」

「お前さん、コイツの言葉わかんのかい?」

「いんや、全然ニヤル。今言つたのはなんとなくニヤルね」

当然である。同じ獣人族とはいえ、アイルーとチャチャブーが会話を交わす話など聞いた事もない。

団長は書物やモガ村の知り合いから、幼少期に人類などと生活すると性格が軟化し、人語を学習すると聞いたことがある。

しかしこのチャチャブーは野性味が強いようで、人間っぽい振る舞いはすれど言葉は通じないし、何より本能に忠実だ。

まあそれは置いて、と団長は再度オニムシヤザミを見る。「で、皆に……：我がハンター殿とオトモはこの場に居ないが……この蟹をどうするべきかを話し合いたいと思う」

冒険者でもある団長からすれば、この世界を旅する以上、不慮の事態は日常茶飯事だと心得ている。

砂漠のど真ん中で豪山龍に遭遇しても、イサナ船完成直後に海のど真ん中で黒蝕竜と遭遇しても、それなりに対処してきた。

しかしこのように、イサナ船を堂々と占拠して佇むだけの大型モンスター、という逆に珍しいパターンはどうしていいものやら。

故に、寝込んでいるハンターを除いた「我らの団」全員で話し合いを……：と思っただけだ。

「はいはい、提案がありますー！」

スケッチを描き終えたのか、勢いよく手を挙げる看板娘。（ちなみにイラストを見たお手伝いアイルーは顔を顰めていた）

「ほい、まずは嬢ちゃんから」

「どかしましょうー！」

「どうやって」

「梃子の原理で！」

その辺で拾った木の板を手に意気揚々と提案する看板娘の目は、本気だった。

しかし鉄の材質を見ただけでも、下手をすれば以前ハンターが捕獲して持って帰った上位の鎧竜よりも重く見える。

仮にメンバー全員……いや村全員で動かそうものなら、逆に棒が梃子の原理により壊れるのがオチだ。

幸いなのは、自信満々な彼女に真実を告げる豪快さと優しさを団長が持っていた事か。

「次あたしー！」

ぴよんぴよんと跳びながら手を挙げるのは、加工屋の娘だ。相変わらず元気が良いことで。

鍛冶に置いては右に出る者はいないとされる土竜族に育てられた彼女は、良いアイディアを数多く生み出した事がある。

団長は多少の期待を込めながら、言ってみろ、と彼女に告げる。

「ドカーンとやろ、ドカーンと！」

そういつて用意したのは——四台のネコ火車と、それに跨り操縦するアイルー達。

赤いネコ火車に乗るアイルーが、いつでもいけますぜ、と言わんばかりにサムズアップしている。

なるほど、豪快な土竜族ならではの大胆な発想だ——だが無意味だ。

「下手に刺激して暴れられたら困るから、止めておこうな」

仮にもコイツは大型モンスター、しかも高硬度の甲殻を持つとされる甲殻種だ。

ネコ火車は単に脅かす為に用意されたのだろうが、砲撃が理由で驚いて暴れてしまつてはイサナ船が持たないかもしれない。

「はい」

加工屋の娘もそれを解つていたのだろう、あつさりネコ火車隊に撤収を呼びかけた。

指示を受けてテキパキと片付ける中、赤いネコ火車を片付けるアイルーだけは哀愁が漂っていた。

なら何故あんな提案をしたのかといえば、単なるノリか、あるいは出番が欲しかったのか……謎としておこう。

「次は私ニヤルね」

次に挙手したのは料理人アイルー。未だ疲れている為に上げる手は震えているが、それはさておき。

「食い物で釣ろうつて言うなら無理だったぞ？」

生物である以上、腹が減るのは道理。そして腹が減れば食べ物の匂いに釣られて動くかもしれない。

そう思った団長が捕れたての魚類を持ち込み、オニムシヤザミの前で焼いて匂いを漂わせたのだが……これも無反応だった。

食い意地が張っているとも聞いていたから効くと思つていたので、これが通じないと解つた悔しさは今も湧き上がっている。

とにかく、餌で釣ろう作戦は無駄だと告げると、料理人アイルーは

力なく手を降ろす。

「……お前さんは何か案はあるか？」

ここで団長は、一番長い付き合いですである加工屋に声を掛けてみる。ちななにに団長の横でキーキー言いながらチャチャブーが挙手しているのだが……言葉が通じない以上、聞いても仕方ないと無視。

そして加工屋は静かに首を振ってこう言った。

「……特にない、というかどうかどうすることもできない」

そう、実は団長も同じ考えを抱いていた。この事態を前に、自分達ではどうすることも出来ない、と。

仮にハンターが快調で戦うことになったとしても、村の中で暴れられたら相当の被害が及ぶだろう。

問屋爺の話では臆病で直に逃げる習性を持つモンスターらしいが、かといって暴れてもらっては困る。

陸へ逃げようものなら村に、海へ逃げようならモンスター用の柵を壊しかねないからだ。

何にしても、今は鎮座しているとしても大型モンスターには違いなく、迂闊な行動は慎みたい所。

さて、どうするべきだろうか……そんな事を（団長にしては珍しく）真面目に考えていた時。

「もうこのまま連れていったらええんとちやうか？」

問屋爺の問いかけに、団長を含むメンバー全員の目が丸くなり、問屋爺に視線が集中する。

「鳴かぬなら 鳴くまで待とう クルペッコ、ちゅー諺もあるやろ？ 動かないつちゅーんならこのまま出航してまえばええんや。

気球を使えばギリギリ海面に浮くやろし、暴れる気配もないし、なんとかなるやろ」

そういつてカラカラと笑う問屋爺もまた緊張感がなく、むしろ頭の中は商売に繋がればなーという商人ならではの欲が渦巻いていた。

商人として長く生きた竜人族でありながら、傍から見れば軽んじた発言にも聞こえるが——しかし。

「そうですよねえ」

「そうだよ、動けないなら動かさなきゃいいんだよ！」

「私は賛成するニャルよ」

「……まあ、下手に刺激するよりはいいだろう」

「よし、そうすっか！」

順に、看板娘、加工屋の娘、料理長アイルー、加工屋、順で問屋爺の意見に賛成の意を示し、団長がメを切る。

傍から話を聞いていたチャチャブーですら納得したかのように頷き、オニムシャザザミの元へ駆けつけていった。

【我らの団】は全員が個性的かつお人好しで、どちらかといえば楽観的な思考を持っている。

そうだとしても問屋爺の言っていることは間違っては居ないと、加工屋と団長は理解している。

村で暴れられるよりは、頑丈なイサナ船、それも海の上で暴れてもらった方がまだマシな結果を出せそうだからだ。

二人を含めたメンバー全員が土竜族の創り上げた船を信頼しているし、転覆程度でどうにかなるとも思っていない。

やはり楽観的な所もあるが、それでもメンバー全員の表情に負の感情は見えない。

こうしてメンバー一同は、暗いと解つていても出航の準備を急いで始める。お喋りやら観光やら騒動やらと夢中で、出航時間を忘れていたからだ。

オニムシャザザミという不安要素はあるが、闇夜の海だろうが関係なく行ける程、このイサナ船を信頼している。

何せ、ハンターが追い払ってくれたとはいえ、あの黒蝕竜の攻撃に耐え続けることが出来たのだから。

故に、いつの間にか目覚め驚愕しているハンターとオトモアイルーを余所に、いそいそと出航の準備をするのだった。

そして船を出して出航した翌朝。

オニムシャザザミとブツチャーはイサナ船から姿を消していた。

微量ながらも漂う、黒い鱗粉らしきものを残して。

—完—

第37話「鬼VS鬼」

バルバレが管理する地方にも多くのフィールドがあるが、その中に地底洞窟と地底火山という二つのフィールドがある。

これは火山活動によつて生まれた洞窟であり、場所は統一されているものの、火山の活性によつて二つの顔を見せるのだ。

火山活動が静かならばアプトノスやケルビが住まう程に穏やかな環境となり、逆に活発ならば降りるほどマグマが溢れていく。

しかし基本的には薄暗い洞窟に変わりなく、大半のエリアには影蜘蛛かげぐもネルスキュラの巣が広がっている。もつとも、火山が活性化すると居なくなるのだが。

火山が活性化する時期は厳しい環境となり、それに適応できる強大なモンスターが多数生息するようになるのだが、今はそうではない。

この時期は安定期に入っているらしく、洞窟は光蟲や雷光虫による神秘的な灯りが灯され、静かな時が流れている。

それでも大型モンスターが生息していることには変わりなく、危険には違い無い。

そんな今の地底洞窟には、わにかえる鬼蛙テツカブラが生息していた。

両生種に俗するモンスター、テツカブラ。その厳つい顔と巨大な二対の牙から「鬼蛙」の二つ名を持つ。

このモンスターの解りやすい特徴を挙げるなら「巨大な口と顎」だろうか。

動くものなら何でも獲物だと認識して襲い掛かる習性は、テツカブラの旺盛な食欲と獰猛さを物語っている。

食欲と獰猛さといえば、バルバレでも確認されている凶悪な獣竜種、恐暴竜イビルジョーにも当てはまるだろう。

しかし、イビルジョーは生態系を狂わすほどの食欲と凶暴さを秘めている。テツカブラ程度では比較の対象にすらならない。

そんなテツカブラが誇るのが、自身の身体並みに巨大な口と、岩を

も噛み砕く大顎である。

巨大な口はジャギイをも丸呑みにし、顎は自分と同じ大きさの岩をも噛み砕き、下顎から伸びる巨大な牙は岩盤をも抉る。

世界広しと言えど、テツカブラのように不釣り合いな程に巨大な口を持つモンスターはさほど居ないだろう。

そんな大顎を違和感無く発揮するパワーは、若きハンター達を苦しめること間違いなしだ。

動きが単調ではある為に避けやすいが、その分威力は凄まじく、鬼の二つ名は伊達ではないことが解る。

そのテツカブラは今、寝床であるエリア9に移動していた。

先ほどアプトノスを喰ったばかりらしく、口元は血と残りカスで汚れ、満腹なのか汚らしいゲツプをする。

彼の他にゲリヨスという競争相手がいるのだが、餌の違いと猛毒故か、今のところ衝突することはない。

また、このテツカブラは上位クラスの实力を持つらしく、牙はより雄雄しく伸び、鱗は歴戦の傷を数多く負っていた。

その堂々さたるや、ゲネポス達は道を開けるかのように逃げ出し、クンチュウは其の場で丸まって身を守る程。

幸いな事に今のテツカブラは満腹な為、動いていたとしても小型モンスターは獲物と捉えてはいないようだ。

揚々と寝床へと向かう途中、テツカブラはある物を発見する。

それは赤と白に分かれた、ゲリヨスともネルスキュラとも違う奇妙な姿をしていた。

しかしそれはゲリヨスやネルスキュラ、そしてテツカブラよりも大きく、怯える気配もなくゆったりと歩いていた。

それがテツカブラの癩に障ったのか、テツカブラは後ろ脚に力を込め、四肢を使ってドタドタと走り出す。

崖ですら跳躍し飛び越える脚力を生かした突進は類を見ない速度を誇り、さほど時間を掛けず獲物へと接近していく。

―だが、その本質故の直進がいけなかった。

―ドグシャツ！

今、テツカブラの頭角に痛撃と衝撃が走った。

横から割り込んできた衝撃は強烈な打撃となってテツカブラを襲い、推進力を上書きする程の力により吹っ飛ぶ。

耐久性に優れるはずの厳つい頭骨が粉碎寸前に陥ったことでテツカブラは痛みを悶え、誤魔化そうとジタバタ暴れ出す。

だが、敵に容赦という言葉は無かったようだ。

―ドゴ、ゴガ、グシャ、バギ

まさに滅多打ちというべきか。

跳躍しながら暴れているというのに、その一撃は着実に命中し、確実にテツカブラの命を陥れんとしている。

肉厚な身体と硬質の鱗、それらを支える強硬な骨が、その攻撃を前に粉碎という末路を向かえる事となる。

それでも、今もなおテツカブラを殴り続ける影は容赦しない。息絶えたと解るまで殴打し続ける。

鬼の名を冠する蛙を殴り殺そうとする正体は……鬼の名を冠する蟹であった。

鬼鉄蟹オニムシャザザミ。キテツガニ彼は海を越え、旧大陸からこの地に脚を運んだのだ。

背には別のテツカブラの死体から拝借した頭蓋骨を纏っており、雄しく伸びる牙と厳つい頭蓋骨が鬼の名を助長している。

そんなオニムシャザザミは、体中から黒いオーラのようなものが溢れ出ており、全身の甲殻を赤黒く染めていた。

それは頭蓋骨からも漏れており、身体から出すそれとは違い濃厚な黒い液体を溢れ出ている様は、まるで鬼が嘔吐しているよう。

その様は呪われているかのようであり、事実オニムシャザザミはかつての温厚さを失い、狂ったように攻撃的になっていた。

故にテツカブラを殴り続けるという奇行に出たのだが……そのテツカブラにも異変が訪れる。

黒いオーラは両の鋏に入っているヒビからも溢れ出ており、それがテツカブラに降り注いだらしい。

殴られ続けている最中にも黒いオーラを浴びたテツカブラは、やがて静かになり、急に動かなくなる。

一見すると息絶えたようにも見えた為、オニムシャザザミの動きが緩まったのだが……その直後。

ーゴアアアアア!

テツカブラが突如として咆哮を轟かせ、大きく跳躍。オニムシャザザミが即座に振り下ろした鋏は虚しく地面を突くだけに終わった。

オニムシャザザミは即座に突き刺さった鋏を向いて反転。後方では着地したテツカブラが身構えており、その異質な姿を目撃する。

全身に紫を混ぜたかのようなドス黒い色に染まり、目を真っ赤に光らせるという、恐怖心を掻き立てるような姿だった。

先ほどまで分厚い鋏に殴られた箇所が見受けられるが、テツカブラはそれを気にしていないかのように四肢に力を込めている。

互いに向き合う中、テツカブラは大きく口を開け、禍々しさを交えた咆哮を轟かせる。

狂気が入り乱れる鬼の咆哮を前に、オニムシャザザミは怯むことなく、むしろ両の鋏を広げて威嚇の姿勢を見せる。

ガツン、ガツンと鋏同士を打ち鳴らす様は、まるで売られた喧嘩を買って滾る不良のようだ。

その滾りはオニムシャザザミだけではなく、頭蓋骨からピヨコンと跳び出た「ソイツ」も同じだった。

頭蓋骨の頂上に立つのは、このバルバレ地方には存在しない奇面族、チャチャブーの子だ。

オニムシャザザミと共にやって来たチャチャブーにはブツチャーという名があり、烏兜風の仮面を被っている。

当然というべきかブツチャーからも黒いオーラのような物が溢れ

出ており、我武者羅に杖を振り回して攻撃性を示していた。

黒に汚染された三匹が攻撃の姿勢を見せた後、互いに突撃。

テツカブラは巨大な口を開いて突進し、オニムシャザザミは両の鋏を広げゆっくりと前進し、やがて激突する。

オニムシャザザミの鋏は頑丈な牙を押さえ、テツカブラは押さえられながらも前へと押す。

硬直状態であることを良い事にブツチャーは頭蓋骨からテツカブラの頭へと跳び移り、杖でボカスカと殴る……が、効果はいまひとつのようだ。

大人しいとされていたオニムシャザザミがここまで凶暴化した理由は、体中から溢れている黒いオーラ——狂竜ウイルスにある。

狂竜ウイルス……感染したモンスターを狂わせ凶暴化させる、未だハッキリと解明されていない謎の物質だ。

その謎の物質の根源がどこから来ているのかは解っている。

ゴア・マガラ……別名「黒蝕竜」。その存在は近年になって明らかになったが、今もなお謎が多い。

そのゴア・マガラはなんの因果か、地底洞窟に姿を現していた。

鬼と鬼の戦いを観戦するかのようになり、崖の上で濃密な黒い鱗粉を撒き散らしながら。

—完—

第38話 「悪鬼となった訳」

地底洞窟にてオニムシャザザミとテツカブラ（ついでにブツチャー）が正面衝突するより前の事。

オニムシャザザミが狂竜ウイルスに犯され、以前とは裏腹に攻撃的になってしまった理由を記すでしょう。

その為には時間、正確に言えば一週間ほど前に遡る必要がある。

その日の夜は風も雲もなく、漆黒の夜は星と月で美しく飾られ、海原は静かに波打っていた。

そんな大海原の上で、【我らの団】とオニムシャザザミ、そしてブツチャーを乗せたイサナ船がゆりかごのように小さく揺れる。

イサナ船はオニムシャザザミの重みで沈まぬよう気球を膨らませており、この浮力も加わって波の影響を減らし、より静かな時を過ごせるようになった。

そのおかげもあつてか、【我らの団】全員がマツハで眠ることができた。

夜の船旅な上に大型モンスターが甲板に居るといふのになんて暢気なのだと思われるかもしれない。

彼らは確かに楽観的ではあるが、決して旅を侮っているわけではない。

イサナ船がゴア・マガラの強襲にも耐え切ったという経験があつたからこそその信頼もあるが、それとは別の理由もある。

団長は伊達や酔狂で各地を旅しておらず、その経験と旅路は彼という人物を固める「スタンス」を生み出したのだ。

彼のスタンス——それはどんなことが起こっても受け止め対するという覚悟と余裕だ。

旅をするということは、一つの場所に留まらないこと。一つの場所に留まらないということは、一つの常識に囚われないということ。

世界を旅する以上はあらゆる危険性が生じる事を考慮しなければならぬ。予想外など日常茶飯事だ。

だからこそ団長は、如何なる事態に陥ろうともそれに対処できるだけの図太い神経と判断力を備えている。

事実、「我らの団」が今のメンバーになる以前から数多の危機を乗り越えてきた。ハンターが入ってきてからも、そうであり続けた。

備えもあるとはいえ、ハンターを含めた「我らの団」は、そんな団長を心から信頼している。その突拍子な行動に戸惑うことも沢山あるが。

—故に

「蟹は今も大人しいし、波も風も静かで、潮の流れに乗っているから寝ていてもいいだろ。……よし、全員就寝！」

「ラジャー！」

団長の掛け声に対し看板娘が元気良く返事をしたと同時に解散。各自納得した上で眠りにつくのだった。

一応、筆頭オトモが起きているのだが……彼は船酔いで随分と苦しんでいる為、アテにはできないだろう。

さて、そんな蟹ことオニムシャザザミは、月が天頂に座す頃になって目を覚ました。

彼にも睡眠欲というものがあるが、身を丸めて眠っている中、ふと目を覚ましてしまう。

何事かと触覚を揺らしてみれば、ヤドである巨大な貝から音が響いていることに気づく。

巨大な貝の頂上では、ブツチャーが杖を振るいながら踊っていた。杖を振るう際に生じる遠心力を無視するかのように、緩急をつけた鋭角的な動きで踊る。

小さく飛び跳ねたりしながらも、自身の鳥兜風の仮面や巨大貝を、杖の先端でカツ、カツ、カツと叩き付けながら音を奏でる。

これはブツチャー曰く「元気を出せよダンス」らしく、船に乗り込んでからずっと踊っている。

彼もオニムシャザザミ同様、オデイバトラスや未確認生物の姿を目の当たりにして覚えた恐怖を忘れない。

頭が悪いと自覚しているものの、彼も立派なチャチャブーだ。それなりに賢いし、それなりに理解力もある。

ついていくと決めたオニムシャザザミよりも強い存在が居ることを知り、もつと強くなれるということを理解したのだ。

彼らに出来て自分達に出来ないことはないはずだとブツチャーは思っている。いつまでも怯えているわけにはいかない。

だからこそ「元気を出せよダンス」でオニムシャザザミを元気付けようと一心不乱に踊っている。

いるのだが……それがオニムシャザザミに伝わるかといえば、とても怪しい。

むしろ絶対に伝わってない。哀れブツチャー。

そんなこんなで音の正体が解ったオニムシャザザミは安堵しようとし——再び周囲を見渡す。

それも慌しく右へ左へ、時には後ろへと振り向くなど、先ほどとは慌て具合が異なる。

ブツチャーは慌てて貝に掴まるが……どうやらブツチャーはオニムシャザザミが狼狽する理由が解ったらしく、周囲を慌しく見渡す。

—そして、それは飛来してきた。

闇夜の彼方から、夜空の星を覆い隠すような漆黒が降りてきた。

降りてきたというよりは、墜落してきたという表現が正しい程の速度で。

そして水面が激しく波打つほどにスレスレの所で曲がり、墜落時の速度を保ったまま突進して行く。

—オニムシャザザミに向かって。

—ドゴン

加速を保ったまま突進してきたことで、オニムシャザザミはもちろん、イザナ船に大きな衝撃が走る。

その衝撃は激震という形で【我らの団】に襲い掛かり、即座に反応を示す者がいた。団長である。

「みんな起きろー！」

目覚めて早々湯を入れるその姿は、先ほどまでグースカと寝込んでいたのが嘘のよう。

その一喝を耳にした【我らの団】はすぐさま目覚め、眠気を振り払いつつ動き出す。

加工屋や問屋爺はともかく、幼いナグリ村の娘や看板娘ですら、慌てはすれど若干の冷静さを持って行動している。

腹痛が完治したのか、我らの団のハンターも自身が持てる最上級の装備と武器を急いで身に纏う。

――筆頭オトモ？そこで船酔いでダウンしていますが、なにか。

混乱を避けるべく必要最小限の指示を各自に飛ばした後、団長は危険を承知で甲板へと向かう。

こうして周りが急いで事態を收拾しようとする間にも、団長はこの船の異変を肌で感じ取り、頭の中で整理していた。

轟音と衝撃、その直後に襲いかかった大きな揺れ、そして浮遊感――

――これだけでも想像できる出来事は三つ。

一つ目は、何かが飛来してきたということ。

仮にこの海域に潜む大型モンスターだとしたらその前兆……水面の揺れが激しくなるなどして目を覚ますだろう。

ここで飛来だと判断できるのは、先ほどの凄まじい衝撃。恐らくはオニムシャザザミにぶつかったのだろう。

海からの突進だとしたら勢いが足りないが、逆に高高度からの突進だと考えれば妥当である。

よって飛竜種の中でも特に飛行能力の高い火竜か、もしかすると黒蝕竜という可能性も考えられる。

二つ目は、オニムシャザザミが海に落ちたということ。

イサナ船に襲い掛かった揺れは二度あった。恐らく一度目は飛翔物体からの突進、二度目は突進を受けたオニムシャザザミによるものだろう。

飛翔物体はイサナ船に体当たりを仕掛けたつもりだったのだろうが、その結果がオニムシヤザザミに激突し、海に落ちたのだ。

この考察が正しければ、三つ目はイサナ船が浮遊していること。超重量級のモンスターが甲板から海に落ちたことで、気球の浮力を持つて海面から空へ上ったのだろう。

ドアノブを握り、冷静になるべく一瞬だけ握る手に力を込めた後、勢いよく扉を開く。

その先にあつたのは……。

「何も、いない？」

イサナ船の甲板には、何も無かつた。

いや、無かつたといったら嘘になる。無かつたのは団長が予想していたような強敵だ。

そもそも、『無かつた』のではない。……『居なくなつた』のだ。

——甲板上に微かに漂う黒い鱗粉……これが、居なくなつた者の正体を克明に現していた。

時は、イサナ船が襲撃されて何日か経過した頃。とある岬にオニムシヤザザミとブッチャーが上陸してきた。

落ちた地点から岬までの距離はさほどなかつたらしく、水平線から浮かぶ朝日が赤い全身を照らす。

そんな2匹の身体からは、黒い靄のようなものが微かに溢れ出ていた。

陸に上がるや否や、其の場で我慢できないとばかりに暴れ出し、その辺の岩を壊しにかかる。

そしてその黒い靄——狂竜ウイルス——を頼りに、あるモンスターが飛来してくる。狂竜ウイルスの根源である、黒蝕竜ゴア・マガラが。

目の前で降り立つゴア・マガラを前に、黒い靄に侵食されたオニムシヤザザミとブッチャーは闘争心を燃やし、迎撃に移る。

この時の戦闘の様子は省かせてもらうが、凄まじい物だったと記しておこう。

結果的に言えば、ゴア・マガラが負傷を負って離脱、オニムシャザザミがそれを追うようにして走って行った。

そして現在は、近接することが多かった為か狂竜ウイルスをより多く吸収し、その状態のまま地底洞窟に辿り着いたのだ。

そんなことを言っている間に、地底洞窟で行われた鬼同士の決闘が決着。

無惨に殴り殺されたテツカブラを四足で踏み締め、オニムシャザザミが勝利を祝うかのように鋏を振り上げていた。

背負っている頭蓋骨の上では、狂竜ウイルスを振りまきながら血まみれブツチャーが祝いのダンスを踊る。

そしてその二匹の上を、巨大な翼を持って飛行するゴア・マガラが飛び交い、目の前に着地する。

その姿を確認するや否や、オニムシャザザミは「やんのかコラ」と言わんばかりに鋏同士で打ち鳴らす。

―再び、激戦の時来たれり。

―完―

第39話 「黒蝕竜VS鬼鉄蟹」

ゴア・マガラ——バルバレギルドが確認した、かつて謎だらけだとされていた大型モンスターの名だ。

しかし近年になって大半の謎が解明され、ゴア・マガラの生態や特性が徐々に把握されていくようになった。

後に狂竜ウイルスと呼ばれる、黒蝕竜の最たる特徴である「モンスターを凶暴化させる黒い霧」の正体。

狂竜ウイルスである鱗粉を使った感知能力の高さと、自ら狂竜ウイルスに汚染されることで強化する狂竜化現象。

そしてこの黒蝕竜の正体が判明するのだが……それはまた後ほど記すとしてしよう。

ゴア・マガラの戦闘はその狂竜ウイルスを用いた攻撃方法も多数存在しているが……それだけが全てではない。

高い飛行能力や攻撃性などといった純粋な戦闘能力の高さも、ギルドが古龍種の線を引こうとした理由の一つだ。

もちろん狂竜ウイルスを用いたブレスや粉塵爆発などの高火力攻撃もある為、動きを見切ったからと安心はできない。

オニムシャザザミは、そんなゴア・マガラと地底洞窟で争いあっていた。

オニムシャザザミにとってこの対決は二度目である。

一度目はバルバレ地方に上陸して早々に遭遇した時。あの時のゴア・マガラは長距離飛行による疲労もあって早々に逃げ出したが。

それでも戦闘を行ったのは事実で、取っ組み合った事で密着状態が続き、大量の狂竜ウイルスを吸収する羽目となった。

その結果、オニムシャザザミとブツチャーの戦闘は大きく変わった。

滞空していたゴア・マガラが着地し、息を吸う。鱗粉による粉塵爆発を狙っての行動だ。

しかしオニムシャザザミは見逃さない。距離はあるが構うものかと走り出し、ヒビが入った分厚い鉄を盾に突っ込む。

ゴアの口から幾多もの爆発が起こり、その反動で後方へ飛ぶ。爆煙はオニムシャザザミを包み込んだが、彼は健在。

そのまま構えていた鉄を振り回すが、ゴアは反動で飛ぶ中で翼を羽ばたかせることで、オニムシャとの距離を広げる。

滞空しているとはいえ届かないわけではない。そのままゆつくりと上昇するゴアを前に、オニムシャは四脚に力を込めて跳躍。

ゴアを頭上から踏みつけようとするが、それを易々と受けるほどマヌケではない。身を捻る事で避け、超重量の身体は地面に激突する。陥没するほどの落下速度と重量を持ちながらオニムシャザザミは身を起こし、飛行するゴアを追いかけるようにして走る。

飛来したまま距離を取ろうとするゴアだが、突如として背中から微かな痛感が走る。

体躯の都合上ゴアは背中を見る事は出来ないが、その背にはなんと子供のチャチャブーが張り付き、杖でポカポカと殴っているではないか。

狂竜ウィルスに侵されている事もあり、その杖の一撃はかなりの威力を誇る。無論ゴアにとつては問題ではない。

しかし鬱陶しい事この上ないので、振り落としてやろうと高度を落とし、そのまま急上昇。宙帰りを狙う。

そこをオニムシャザザミは逃さない。高度が下がるのを見て急停止し、狙いを定め、急上昇と同時に口から麻痺毒の液を発射。

直線を描くように勢いよく射出された黄色い液体は、その勢いを保ったまま（ブツチャーごと）ゴア・マガラの背に命中。

水鉄砲を意識した攻撃故に水を多く含んでいた為、ゴアを麻痺させることは叶わなかったが、それでも墜落させることには成功したようだ。

若干の痺れを誤魔化すようにもがく中、毒性に耐性を持つブツチャーはゴアの背に立ち、身震いして水気を払う。

そのままブツチャーは背から首、首から頭へと移動して杖で殴ろう

とするが、その前にゴアが起き上がる。

再び眼前で対峙するオニムシャザザミとゴア・マガラ。黒いオーラを撒き散らす中、ブツチャーはオニムシャへと走り、彼のヤドによじ登る。

このように、大人しいオニムシャザザミにしては執拗に攻撃を繰り返している。

対するゴアもオニムシャに蓄積された狂竜ウイルスに刺激されたのか、今もなおオニムシャザザミを敵と認識している。

互いに討ち取る気満々、といった雰囲気、殺意にも似た黒いオーラが克明に映し出していた。

しかし、二匹の戦いは更なる境地へと向かう。

ゴア・マガラのもう一つの特徴として「狂竜化状態」というものがある。

黒い鱗粉を目印にする特殊な感覚器官を持ち合わせるが、このウィルスはゴア・マガラ自身にも影響を齎す。

感知能力がピークに達する頃には、ゴア・マガラの更なる脅威が猛威を振るう事になる。

オニムシャザザミは多種多様な食物を摂取しており、その中には鉱石類も含まれる。

摂取した鉱石は体内で混ざり合って新たな甲殻として滲み出るのだが、その中には多種多様な護石も含んでいる。

この護石はオニムシャザザミが興奮状態になると反応を示し、様々な恩恵を与えることができるのだ。

地底洞窟がより濃い漆黒の世界に変わるとき、二匹に変化が訪れた。

―ゴア・マガラに一对の角が生え、翼脚の爪が展開。六本脚の魔物へと変貌する。

―オニムシャザザミの甲殻に混ざる大量の護石から淡い光が溢れ出し、全身を点々と光らせる。

『狂竜化状態』となって黒い霧を広範囲に広げるゴア・マガラは咆哮を轟かせ。

護石によつてオレンジ色に変色したオニムシャザザミは、鋏を擦り合わせて不快音を発する。

ここからは、ただ力と力がぶつかり合うだけだ。

ここで一手上回るのがゴア・マガラだ。

ゴア・マガラは狂竜化すると翼脚の爪を展開し、翼としてではなく、第5・第6の脚として機能させる。

この一撃が凄まじく、後ろ脚で身体を持ち上げ翼脚を叩きつける事で地面を陥没させるほどだ。

そしてオニムシャザザミは相変わらずの弱点を抱えている。

弱点である背を隠すために背負っている頭蓋骨。これはオニムシャザザミ並に大きな物でないといけない。

そして両の鋏は背中が届かず、もしこの頭蓋骨に張り付こうものなら、潜る以外の選択肢は決定打にならなくなる。

で、ゴア・マガラはその弱点を突こうと背を目指して迂回する。

当然オニムシャザザミは阻止しようと旋回するのだが、向こうは助走により滑空、上から仕掛けてきた。

再び跳躍しようと四肢に力を込めるオニムシャザザミだが、跳ぶより早くゴア・マガラが突っ込んできた。

超重量の身体は滑空しながらの突進にも耐え切ったが、ゴア・マガラが六つの脚を駆使して引っ付こうと躍起になる。

張り付いてくるゴア・マガラをどうにかしようと思を振ったり鋏を振り回したりするが、ゴア・マガラは離れようとしなない。

前脚と後ろ脚でしっかりとオニムシャザザミの胴体にしがみ付き、その間は翼脚でヤドを殴りつける。

翼脚の力もあるが頭蓋骨の硬度もそれなりにあるらしく、なんとか持ちこたえている。どうやらこの頭蓋骨は上位種のものだったようだ。

それでもこのまま殴られれば粉碎されるのは時間の問題だろう。オニムシャも、ゴアを追い返そうと杖を叩きつけるブツチャーも必死だった。

跳ねたり体を揺らしたりして振り払おうとする蟹と、それに必死にしがみ付いて殴り続けるゴア・マガラ。まるで乗り状態だ。

だが、どうにもならないことはない。

ここは地底洞窟のエリア8。広い空間と、壁のように聳える高い崖がある場所。

それに気づいたオニムシャザザミは、バック走行で崖へと向かう。そのままぶつけてしまおうという魂胆なのだろう。

それに気づかないほどゴア・マガラは馬鹿ではない。頭蓋骨を殴っていた翼脚の翼膜を広げ、壁にぶつかる寸前に飛来。

オニムシャザザミは気づきながらもそのまま直進。壁に激突し、頭蓋骨ごと背面が岩の壁にめり込んだ。

ゴア・マガラは巨大な翼を広げ、その様子を伺っているかのよう滞空していた。まるでオニムシャの行動を怪訝に思っているかのよう。

そしてオニムシャザザミは——地面を鋏で砕きながら、地中へと逃げ出す。

弱点である背部を攻められている以上、狂竜ウイルスに侵されているオニムシャザザミも防衛本能を働かざるを得ない。

では最初からそうすればと言うかもしれないが、狂竜ウイルスによる性格の変化は著しいし、引っ付いたままでは上手く潜行できない。

その為には一度ゴア・マガラを自身から切り離す必要があり、だからこそ自ら崖に激突する必要があった。

その甲斐あって、オニムシャザザミは無事にゴア・マガラから逃げ出したのだった。

ゴア・マガラは発達した感知能力で探し出そうと翼を広げ、より高空へと舞い上がる。

この一時間後にオニムシャザザミの搜索が無駄足だと理解するのだが……狂竜ウイルスを広くばら撒けた為、それは省く。

このゴア・マガラが地底洞窟に現れた噂と報告がバルバレギルドに届き、警告を発令。

ハンターを向かわせた頃には別のフィールドに移動した可能性が高まり、全バルバレギルド所属ハンターに通達を送ることになった。

さらに【我らの団】の報告により、旧大陸にて確認されていたオニムシャザザミがこのバルバレ地方に辿り着いたことが発覚。

ゴア・マガラの再来とオニムシャザザミの襲来。

バルバレギルドにとっての悩みの種が二つもやってきたと聞き、お偉いさんは頭を抱える事となった。

今ギルドにできることは、二匹の更なる情報を収集することぐらいだ。

—完—

第40話 「原生林の者達」

長い物には巻かれる、という諺がある。

自分の手に負えないほど長いものに逆つても無駄だからおとなしく従ってしまったほうがいい、という意味だ。

「目上の者と争うことはしてはならない」という意味合いもあり、この諺の意味をなんとなくでも理解している者も多いだろう。

少なくとも、蛇などといった長い身体を持つ生物に体を巻かれる事でないのは確かだ。

原生林にある巨大な竜骨の下でオニムシャザザミがガララアジャラに巻かれている様子を見ても、この諺を連想しないように。

オニムシャザザミは狂竜ウイルスに蝕まれつつある知能の中、困るという感情が湧き出てきた。

ゴア・マガラの襲来から逃れ、地底洞窟を去ってから幾日か過ぎた頃、原生林へ辿り着いたオニムシャザザミ。

辿り着くまでに甲殻などに蓄積した狂竜ウイルスが漏れて、周りの環境がエラいことになっているが……それは置いておこう。

ウイルスを撒き散らしながら原生林で食べ歩きをしていた所、この辺りを縄張りになっているガララアジャラと遭遇。

目と目が合った瞬間にバツチコーンと電撃が衝突し、その辺に居たゲネポス達を観客に決闘が始まった。

その結果、当初にあったように、オニムシャザザミは呆気なくガララアジャラに巻かれる始末となった。

ちなみにブツチャーはゲネポス達に絡まれています。襲われているわけではありません。四方八方から小突かれて絡まれています。

ガララアジャラといえば平均でも40m、最大のものでは50mを超える長大な身体を持つことで有名。

囲い込み地中から突きあげる大技の被害者も多数存在しているが、その身体で絞めつけられていたら死亡者の数が増えていただろう。

ダイミヨウザザミより一回り大きいオニムシャザザミが相手でも余裕で巻き付くことができ、そのまま絞めつけている。

そんなガララアジャラに巻かれたオニムシャザザミは振り払うことが出来ず、非常に困っていた。

何せ自慢の鋏はきつちりとガララアジャラの太い身体で押さえられ、巻かれた重みで上手く歩くことができない。

それでも、ひび割れた甲殻と頭蓋骨が押し潰されるという結果にはならないようだが、このままでは罅が明かない。

手っ取り早く毒ガスなどで驚かせて隙を作ろうと思ったが、ガララアジャラに変化が起こった。

突如として鎌首を擡げていたガララアジャラが倒れ込み、絞めつけていた身体から力が抜け出したではないか。

その隙を逃さず鋏を押しつけてガララアジャラの輪を広げ、緩んだところで跳躍し、脱出に成功する。

しかしオニムシャザザミは本能的に理解している為、ガララアジャラから離れ、鋏を構えて防御姿勢を保つ。

自身に宿っている狂竜ウイルスの性質も、それが自分以外に伝染することも、そして伝染したモンスターがどうなるかを。

あれほど長時間に渡って密着していたのだ。黒いオーラは自然とガララアジャラにたつぷり注がれ、変化を促すことだろう。

そしてガララアジャラは目覚め……黒いオーラを纏って大咆哮を轟かせる。

彼もまた狂竜ウイルスに侵されて凶暴になったのだろう。オニムシャザザミに向ける敵意が半端無いものだった。

高周波の咆哮がひび割れた甲殻を振動させボロボロと表層が崩れ落ちるが、オニムシャザザミは知った事かと鋏を打ち鳴らして気合を入れる。

再び両者が激突しようとした時、天より第三者の姿が現れる——
ゴア・マガラだ。

どうやら地底洞窟で遭遇した時のゴアらしく、最も濃い狂竜ウイルスを持つオニムシャザザミを感知して追いかけてきたのだろう。

二匹の間に割って入るように着地したゴア・マガラは二本の角を生やしており、すでに狂竜化状態になっている。

「俺も混ぜろやー!」と言わんばかりに咆哮を上げ、両の翼脚を地に叩き付けて戦闘の意思を見せる。

このゴア・マガラの登場を見て、オニムシャザザミの全身に戦慄が走った。

オニムシャザザミは先程までガララアジャラに強靱な体を巻きつけられた事により恐怖心を思い出し、本来持っていた防衛本能を取り戻している。

ゴア・マガラの戦闘能力はオニムシャザザミの足りないザザミソでも覚える程に強いことは理解したし、ガララアジャラとの相性の悪さも経験済みだ。

そんな二匹を同時に相手をするとなれば、狂竜ウイルスに汚染されたオニムシャザザミと言えど逃げざるを——得ないわけではなかった。

何故なら、ゴア・マガラが現れたことで、再び発狂するレベルのウイルスが蓄積されてしまったからである。

濃度が濃ければ濃いほど狂竜ウイルスの症状は重くなるものらしく、これまで歩いてきた事で減った狂竜ウイルスが再度蓄積され、再び攻撃的な性格に戻ってしまったというわけだ。

つまり。

オニムシャザザミ「狂竜ウイルスには勝てなかったよ……」

——的なノリである。

そんなことで、ゴア・マガラが居ようがガララアジャラが居ようが関係あるかー、と言わんばかりに鋏を打ち鳴らし、喧嘩上等の姿勢を示すオニムシャザザミ。

元々縄張り意識で刺激されていたガララアジャラは、先手必勝とば

かりに団扇状の尾を振って鳴甲を放ち、ゴア・マガラの足元にばら撒く。

ゴア・マガラは音程度に怯えることは無い。まずは先手を取ったガララに攻撃しようと歩を進める。

しかし相手は一匹ではない。背後を見せたことでオニムシャザザミが自慢の水ブレスを発射。大量の黒い水がゴア・マガラの背に降り注ぐ。

狂竜ウィルスを染みこませたタツプリの原生林産純水による水鉄砲はゴア・マガラを水浸しにするが、軽く驚いただけだ。

ガララアジャラは瞬時に尾を振って鳴甲を発射。ゴアの身体に直撃したことで高周波が発生し、ゴアを怯ませる事に成功。

ガララアジャラはさらに寒気立つクチバシで追撃。肉を抉るような一撃はゴアの翼脚を引きちぎった。

痛みに悶えた上に麻痺で動きが鈍ったゴア・マガラを見てチャンスと思い、オニムシャザザミが跳躍。

とぐろを巻いているガララアジャラごと踏み潰そうと天高く飛び上がって行き……。

―ドツゴーン、と空を飛んでいたゲリヨスに激突。

二匹まとめて場違いな所にヒュードスン。オニムシャザザミなんか頭から地面にダイブしちやいました。

今度はガララアジャラがチャンス到来とばかりに、ゴアとオニムシャに巻きつこうと弧を描いて這いずり……。

―ベチヨ、と茶色い何かが命中。

遠巻きのパバコンガが投げってきた茶色い何かから発する悪臭に悶絶するガララアジャラ。ある意味オニムシャと巻き添えのゲリヨスより酷い。

ガララアジャラが悶えている間にゴアは復活し、オニムシャは地面

から抜けて起き上がり、気絶していたゲリヨスが起き上がる。

そこへババコンガがフライングプレスで乱入、オニムシャザザミに頭からダイブしてスタンしてしまうのだった。

そして知らぬ間に乱入することになったゲリヨスと好き勝手に乱入してきたババコンガは、狂竜ウイルスに呆気なく感染。

凶暴化した五匹の大型モンスターが入り乱れるという、大混雑バトルが勃発するのだった。

さーゲネポスの皆様、盛り上がってきたでヤンスよー！今この原生林で、激しい大乱闘が繰り広げているでヤンス！

実況はオニムシャザザミの頼もしいオトモこと、わちきブツチャーがお送りするでヤンス！空気とか言った奴、後でめるでヤンスよ？

ここ最近の記憶が曖昧でヤンスが、とりあえずあの黒いモンスターがこえーって事が解ったでヤンス。黒い靄には気をつけるでヤンスよ？

では今回のモンスターを紹介いたしやしよう！

我らが鉄壁のモンスター・オニムシャザザミの旦那！凶暴化なう、でヤンス！

その凶暴化の原因である真っ黒なモンスター！禍々しい角がカッケーでヤンス！

原生林を支配するでっかいガブラスっぽいモンスター！とにかく五月蠅いでヤンス！

黒いフンを投げまくるババコンガ、毒を吐きまくるゲリヨス！もう何がなんだか！

いかでヤンスか？解説役を買ってくれた通りすがりのクンチュウさん！

—そうですね、ババコンガのフンでどれだけ戦局を分けて戦うかがポイントだと思います。では私は逃げます。ゴロゴロゴロ。

ギチギチ言ってて全く解らないでヤンスが、ありがとうございやし

た！おたつしやで！

さあ、この中で勝利を掴むのは、もしくは生き残れるのは誰でヤン
スか!?

活目して次回を待て！

—完—

第41話 「大乱闘モンスターブラザーズ」

毒とは身体を蝕む病だ。体内に侵入した毒は内側からゆっくりと身体を殺していき、長時間に渡って苦痛と怠惰に塗れ、衰弱して死んでいく。

耐性を持たない人間にとってこの毒素は脅威ではあるが、解毒草や漢方薬などで毒素を中和することができる。もつとも、即座に対処出来なければ意味が無いが。

毒素の対処手段は解毒が有効だが、それは相当の知恵が無いと編み出すのは難しいだろう。事実、モンスターの殆どは解毒手段を持たず、厚い甲殻で防ぐしかない。

それでも「毒を以て毒を制す」というように毒が身体を回れば自然と抗体が出来る為、体力に自信のある大型モンスターなどは受けるたびに耐性を高める事が出来る。……普通の毒なら。

——上位種のゲリヨスなどが吐く「猛毒」は、通常の毒を遥かに上回る、大変危険な毒素だからだ。

突如として原生林で始まった、大型モンスター五匹という驚きの数が轟く大乱闘。その乱闘を、一匹のチャチャブーとゲネポス達を取り囲み、見守っている。

鬼鉄蟹オニムシヤザザミ、黒蝕竜ゴア・マガラ、狡蛇竜ガララアジャラ、桃毛獣ババコンガ、そして毒怪鳥ゲリヨス。種族も大きさもバラバラだった。

前者二匹は狂竜ウィルスを持参して他のフィールドから来訪したが、後者二匹は原生林を支配するガララアジャラの陰に隠れて過ごしていたらしい。

それが原因だからか、意外にも最初に脱落したのはガララアジャラだった。

赤と黒と茶色と紫という毒々しい複合色に身体を染められたガララアジャラは、オニムシヤからの激しい打撲とゲリヨスの猛毒を受

け、衰弱する暇もなく絶命。

残った四匹はそんなガララアジャラを踏み台に死闘を繰り広げることになるが、ここであるモンスターが意外にも最大の障害として邪魔することになる。

それは猛毒を吐き、閃光を放つゴム質の皮を持つ鳥竜種・毒怪鳥ゲリヨスだ。

この猛毒というのが厄介で、幾ら狂竜ウイルスに侵され知能が低下しているはいえ、本能的に毒素の恐怖を理解しているゴア・マガラとババコンガはこの毒攻撃を避ける必要があった。

無造作に、そして遠くからヘドロのような毒を吐くゲリヨスに近づくことは困難で、動けば毒の沼に引っかかり、留まれば毒が命中する恐れがある為、常にゲリヨスを捉えておかなければならない。

ここでゲリヨスの対抗馬になるのは誰かといえば、オニムシヤザザミになる……とお思いだろうか？

確かにオニムシヤザザミの毒に対する耐性は高い。生まれてからずっと毒キノコの類をも口にしており、その毒素を克服した上に蓄積してきて攻撃にも用いるようになったから当然だろう。

しかし相手は猛毒。量ではなく質で勝負を挑まれたら、ゲリヨスの毒がオニムシヤザザミの耐性を上回るのは当然だ。

そしてオニムシヤザザミも一度ゲリヨスの猛毒を受けてその本質を理解し、ゴアやババコンガ同様、防衛本能によって回避することを優先するようになる。

つまり、無敵の防御を誇ると思われたオニムシヤザザミも古龍種級の力を持つゴア・マガラも、猛毒の前ではケルビも同然だったのだ。

しかし、いくら猛毒の脅威を持つゲリヨスでも、ずっと俺のターン！にならないのは自然界にはよくある話で……。

―ベチヨリ

遠くから投げられた茶色い何かがゲリヨスの顔に直撃。視界が遮

られた上に強烈な悪臭に驚いたゲリヨスはがむしやらに走り出したではないか。

もちろん、その茶色い何かを投擲したのはババコンガ。遠距離攻撃を持つのはゲリヨスだけではないのだ。というか倒れたガララを含め、この場に居る大型モンスター全ては遠距離攻撃を持つ。

ゲリヨスがどっかに走り出したのを見送った後、ゴア・マガラとオニムシャザザミは邪魔者が居なくなったからと戦闘を開始。

ゴア・マガラは口からウイルスによる弾丸ブレス、オニムシャザザミは今しがたタツプリ補給した水を直線状に吐き出し、相殺。黒いウイルスが溶けた水が周囲に弾け跳ぶ。

ババコンガはそれを見逃さず、大きく跳躍しフライングボディブレスを仕掛ける。ターゲットはオニムシャザザミに比べたら小柄なゴア・マガラ。

しかし、ウイルスによる感知能力が上昇した今のゴア・マガラにとって、ババコンガの攻撃などお見通し。すつと後方に跳躍するだけでババコンガは地面に激突した。

その隙を突いて両の翼脚で踏みつけようと立ち上がるが、それより先に突進してきたオニムシャザザミによって遮られ、あまつさえ鋏を盾にした突撃でバランスを崩してしまう。

倒れたゴア・マガラに追撃を仕掛けんと鋏を振り上げるが、横からババコンガの頭突きを食らって横へ転ぶ。尚、ババコンガはこの頭突きでスタンしてしまった。

起き上がって一気に決めてやろうと息を吸うゴア・マガラだが、先程からずつとパニック状態で走っているゲリヨスと衝突、思い切り吹っ飛んでしまう。

誰かを倒そうと攻撃すれば第二の誰かが邪魔をし、第二の誰かを第三の誰かが邪魔をし、また別の誰かが邪魔をする。三つ巴と思えば第四の誰かが邪魔をし、もう誰が誰と戦っているのか解らないほどに乱戦していた。

狂竜ウイルスによる凶暴化も相まって本能剥き出し防御丸投げ、まさに入り乱れての大乱闘。ハンターが巻き込まれでもしたら確実に

死ぬだろう。いや本^{マジ}気で。

その余波は狂竜ウイルスと悪臭の充満という形で遠巻きのゲネポスやブツチャーに影響(具体的に言えば凶暴化)を与えているほどだ。

この事態を收拾しようとするならば勝者となる一匹を除く全てを倒さなければならぬ。元よりモンスターにとつてそれは当然の理論であり、本能が理解している。その為に戦うのだ。

しかし、事態は意外な形で終止符が打たれる——ここからは小難しい話など要らない。順を追って手短かに説明しよう。

1. 火に弱いゴア・マガラの鱗粉——狂竜ウイルスが濃霧の如く周囲を覆っていた。

2. ゲリヨスが閃光を起こそうとトサカの鉄鉱石を打とうとし、火花が散った。

3. 広範囲に広がっていた狂竜ウイルスにトサカの火花が引火した。

4. 粉★塵★爆★発

そう、テオ・テスカトルが得意とする粉塵爆発の如き連鎖爆発が、狂竜ウイルスがばら撒かれていたエリア5を包み込んだのだ。

誰が予想したかこの大爆発は、偶然遠くから原生林を眺めていた旅人ハンターによって目撃されたが、あまりの出来事に仰天して気絶してしまったそうなの。

死屍累々とはこの事か。

先の大爆発の後は見事な焼け野原と化しており、そこには大量のゲネポスの死体が散乱している。黒焦げになったブツチャーもいるが、ピクついている所からして大丈夫そうだ。

充満していた煙と引火した鱗粉が風に流され、爆発に耐え切れず焦げたまま死亡したと思われるババコンガとゲリヨスの亡骸が地べたを張っている。

そんな中で立ち上がっているのは二匹。ゴア・マガラとオニムシヤザザミだ。ただし、おおよそ無事とは思えぬ無残な姿だった。

ゴア・マガラの全身は皮膚がボロ布のように荒れ果て、オニムシヤ

ザザミの全身は甲殻全てにヒビが入っている。さらにオニムシヤのヤドは崩壊寸前にまでひび割れており、少し一撃を加えようものなら粉々に割れてしまうだろう。

両者は眼前に敵がいると解っていても手出しができなかった。それほどもで先程の粉塵爆発が効いたのだろう、命の危機だと身体が訴えているのだ。

そして二匹が取った行動とは……逃走である。

大人しく互いに背を向け、一方はフラつきながらも空を飛び、一方は気絶しているブツチャーを鉢でつまみ拾い上げて歩き出す。

古龍種級の実力を持つゴア・マガラと絶大な防御力を持つオニムシヤザザミとはいえ、あの大爆発を受けては命の危機を感じざるを得ない。そんな状態で戦えるわけも無いと悟り、生きる為に撤退する。それも野性の本能といえよう。

ともかく、余所からやって来た災害×2は去った。

原生林に残されたものは、爆発に巻き込まれ黒焦げになったモンスター達と焼け野原のみ……

かに思われていたが。

屍が広がる焼け野原の中で起き上がる者が居た。それは粉塵爆発の切欠でもある、毒怪鳥ゲリョスである。

ゲリョスは死ぬ真似をして難を逃れようとする習性があり、爆発直後に攻撃されないよう、死んだふりをして難を逃れたのだ。

身体に走る激痛を堪えてゆつくりと起き上がり、周囲を見渡すが、そこには屍の山が広がるだけ。てつきり他の大型モンスターも生き延びていると思っていたのか、ゲリョスは焼け野原の真ん中で首を傾げる。

とにかく脅威が去ったと理解したゲリョスは身体を引きずるように歩き出し、己の寝床へと向かう。ゆつくりと休んで体力を回復する為。

—
完
—

第42話 「天空山の剛毅」

天空山。太古の地殻変動によりかつてあった遺跡群が倒壊し、神秘的な雰囲気を残す山。

かつてはこの山全体の生物が死に絶え、屍の山が積みあがった大災害が起こったとされており、過去に生息していた生物が全滅したという記録が残されている。

また、この山には正体不明の長大な生物が現れた事があり、その生物が苦痛に苦しみ暴れたことで今の天空山の姿になったとも言われています。

そんな天空山の二つの伝承は、山を一望できるシナト村に古くから言い伝えられており、現在ではその伝承は事実であったと証明されている。

まあ、そんな昔話は置いておこう。

この天空山は何よりも高低差が激しい場所としても有名だ。どういう理屈でこうなったんだとぼやく程に断崖は高く、場所によっては上から岩が滝のように落ちてくる。

低いところでも段差が目立ち、跳躍力のあるイーオスやケルビが生息し、遺跡の破片と思われる断片が壁のように置かれていることも。

この断崖絶壁が多いフィールドでは足腰が発達した、あるいは飛行能力を持つ大型モンスターが有利を掴むことが出来る為、リオレウスやジンオウガなど危険度の高いモンスターもちらほら見える。

そんなフィールドには、徹甲虫アルセルタスの姿を確認することもできる。

中型モンスターに含まれるこの甲虫種は大きな角と鎌のような前脚があるにも関わらず、自由自在に飛び回る飛行能力を持っている。

とはいえ、背中に何かが引ついたらバランスを崩してしまう。落ちたくないだろうが、邪魔なので振り払おうとするだろう。

例えばそう——奇面族の子供とか。

鳥兜風のお面を被る奇面族の子・ブツチャーは空を飛んでいた。アルセルタスの角にしがみ付きながら。

どうしてこうなったのかをブッチャーは、そしてアルセルタスは覚えてないし、解っていない。だからこそ互いに混乱していた。

なんてことはない。ただブッチャーが段差から降りようと跳び、たまたまそこへアルセルタスが横切ったことで、ブッチャーがアルセルタスの角にしがみついてバランスを崩す結果となったからだ。

それでも引っ付いてしまった以上、双方の意思など関係なく、バランスを崩し暴れ馬の如く滅茶苦茶な空の旅をするしかなかった。壁にぶつからないあたり、アルセルタスも必死と見える。

アルセルタスは角を振り回すようにして飛びまわり、ブッチャーは振り落とされるものと角に必死にしがみつく。まるでロボオではないか。

そんな珍騒動を眺めているのは、奇しくも巻き添えを食らうガブラス、そして地上から見上げているイーオスぐらいだ。襲う気がないのは食性の違いだからだろう。

それにより、アルセルタスVSブッチャーの、意地を張ったロボオバトルは続行されるのだった。

さて、ブッチャーがいるということはオニムシャザザミがいるということ。

そのオニムシャザザミがブッチャーを放っておいて（いつものことだが）何をしているのかといえば、雷雲轟くエリア6で鉱石類を食らっていた。

あの原生林を包み込む粉塵爆発を受けて大ダメージを負ったオニムシャザザミは、狂竜ウイルスに侵されているにも関わらず、生存本能を働かせて逃げ出した。

テツカブラ戦やゴア・マガラ第一回戦、そして原生林の大乱闘にあの爆発。自慢の超硬度を持つ甲殻も大分ボロボロになっており、罅割れが大きく目立つ。

割れ目が多くなっていくに連れて漏れる狂竜ウイルスの量も増え、

ここ天空山に辿り着いた時は身体に蓄積されていたウイルスが全て抜け切り、前の温厚な性格に戻ったようだ。

もちろん道中はウィルスを撒き散らし様々な地域で狂竜化モンスターが増えたのだが、同じく原生林を脱したゴア・マガラもあちこちを飛びまわっている為、被害はどこも同じだろう。

これまでの道中にゴア・マガラと三度目の正直が無かったのが幸いだろうが……こういうのはフラグになるだろうから黙っておく。

さて、ここ天空山には珍しい鉱石・フルクライト鉱石とレビテライト鉱石がある。

非常に軽い物質で出来ているこの鉱石は、あの紅蓮石や獄炎石よりも採掘される事が少なく、必死で捜し求めているハンターも多い。

そんなレア鉱石だろうともオニムシャザザミに掛かれば意図も簡単に見つけ出せるのだから、炭鉱夫ハンターには羨ましい限りである。嗅覚なのか、はてまた食欲が成せる執念か。

とにかくオニムシャザザミはこのフルレビを大層気に入り、この鉱石をメインに食事続けている。恐らくは甲殻の再生と強化に繋げようとしているのだろう。

しかし当然ながら、ここ天空山にも大型モンスターが出没する。

実は天空山は火山地帯並に危険度の高いモンスターが多く出る狩猟フィールドでもあり、高低差の激しさからか火竜の姿を見かける事が多い。

バルバレ地方に出没するリオレウスはこの天空山を主な生息地としているが、それ以外のメジャーなモンスターも生息している。

―それが、暗雲から轟く雷鳴と共に姿を現れし牙竜種・ジンオウガである。

流星のオニムシャザザミも、無双の狩人ジンオウガから放つプレッシャーと電撃に気付き、食事を中断して後ろを振り向く。

そこにはゆっくりとした足取りでオニムシャザザミを睨むジンオウガの姿があり、威嚇の唸り声を上げながら電撃を漏らす。

どうやらこのジンオウガは相手に敵意がないことを理解しているようだが、それでも己の縄張りに堂々居座るオニムシャザザミが気に

入らないらしい。

痛い目に見てもらおうぜ、と言わんばかりに四肢に力を込め、超電電光虫を射出———することはなかった。

突如として地中からハサミが出現し、ジンオウガの首を挟み込み、締め上げてきたからだ。

あまりにも唐突な出来事にジンオウガも、そしてそれを傍から見ているしかないオニムシャザザミも事態を飲み込むことはできなかった。

ジンオウガは首を圧迫される事で苦しみ、なんとか振り払おうとものがき、全身から電撃を生じてハサミの主に攻撃を加える。

強靱な四肢を持つてしてもハサミは振り払えなかったが、流石にジンオウガの雷撃は効いているらしく、苦しそうにハサミが震えている。

そしてその電撃がいけなかったのだろう、ハサミは電撃を止めさせようと身を伸ばし、首を締め付けたままジンオウガを振り回したではないか。

流石に軽々と、とは言えない。しかし左右の地面に叩きつけるようにして振るハサミに振り回され、首への負担と頭への打撲が悪化してしまう。

やがてハサミはジンオウガの首を解放して地中へ逃げるが、酸素不足と首へのダメージが酷いのか、ジンオウガは力なく身を地面に伏せるしかなかった。

そんなジンオウガの目の前に、そいつは地中より姿を現した———重甲虫ゲネル・セルタスである。

重厚な身体を盾のような分厚い四足で支えているこの大型モンスターは、容易く潰される側でしかないと思われていた「甲虫種」に属している。

その体軀はジンオウガを悠々と越え、同じく重厚であるはずのオニムシャザザミとは違う物々しい風貌は、若きハンターが考えている「小さな甲虫種」の常識を覆すには充分な姿だ。

自身を振り回した張本人を前にして倒れているわけにはいかない。

ジンオウガは立ち上がりこそしたが、支える足は震えている。

しかし彼もまた各地方で強者の一柱と数えられている「無双の狩人」。弱つていようともそのプレッシャー、そして威嚇とは思えぬ電撃が全身に溢れ出ていた。

しかし、それが通じるのはそれより下の連中のみ。同じ土俵に立つ強者には強がりではない。

ゲネル・セルタスは唐突に身体の側面をジンオウガに向け、両足に力を込める。

咄嗟にジンオウガは避けようとするが、酸欠により意識が朦朧とし、足元がフラつく。

——そしてゲネル・セルタスの巨体が強靱な四肢の力により押し出され——ジンオウガを吹き飛ばした。

いくら弱つていようとも相手はジンオウガ。強靱な跳躍力を生み出す四肢は筋肉が詰められており、一部を除く大型モンスターの中でも重量はそれなりにあるはずだ。

そのジンオウガを、まるでハリボテだったかのように突き飛ばし、崖に突き落とした。先のハサミによる振り回し攻撃は、ゲネル・セルタスのパワーの一端でしかなかったのだ。

重量級から繰り出される圧倒的なパワーを持つ大型の甲虫種。故に二つ名は「重量級の女帝」。

そんなゲネル・セルタスに背を向け「失礼しました」と言わんばかりにコソコソと逃げ出そうとするオニムシャザミだが……それも無駄に終わる。

ゲネル・セルタスは背を向けたはずのオニムシャザミを敵と認め、蒸気機関のような音を立てて威嚇の意を示したからだ。縄張り意識の強さも童種に劣らなかつたようだ。

逃げようとするオニムシャザミを追うようにゲネル・セルタスは走り出す。決して速いとはいえないが、歩くだけで地面が陥没する巨重と、それを支える足の力強さを物語る。

しかし相手は甲殻種。同じ四足ではあるが機動性は上回っているらしく、ゲネル・セルタスの突進を横に移動することで避ける。

巨体に加速度が入ることによって簡単には止められず壁に激突。その一撃で壁にめり込むのだから、この一撃の重さが解るだろう。

それでも壁にめり込んでいることを良い事にサヨナラと走りだす。足の速さならオニムシャザザミに分があるからだ。

それでもゲネル・セルタスはオニムシャザザミを逃がすつもりはないらしい。壁から身を抜いて方向転換すると身構え、オニムシャザザミに向け高圧水ブレスを発射。

頑丈とはいえ先の粉塵爆発でヒビが入った頭蓋骨に命中して半壊。弱点の一部を露になってしまったではないか。

弱点が露見されたからか、オニムシャザザミの防衛本能により刺激された闘争本能を剥き出しにし、対立を決意。ゲネル・セルタスと向き合い鋏を振るう。

これまでオニムシャザザミは、防衛本能が刺激されると「種を残す為の逃走」が本能的に選ばれ、逃げることで確実に生き延びようとしてきた。

しかしここ最近では狂竜ウイルスによって攻撃性を刺激され、無くなった今もその影響は根深く残り、「優位を保つ為の排他」行為を本能的に選択できるようになったのだ。

—オニムシャザザミVSゲネル・セルタスの重量級同士の戦いが実現されようとしていた。

しかしこの時のオニムシャザザミは知らなかった。このゲネル・セルタスの真価は、圧倒的なパワーだけでないことに。

—完—

第43話 「二対の重量級」

重甲虫ゲネル・セルタスと鬼鉄蟹オニムシャザザミ。この2匹は外観的に見て似た要素を持つが、実は大きな違いがある。

この2匹に共有するキーワードは大雑把に分けて三つ。高硬度の甲殻による「重装甲」、それに伴う「重量級」、そんな身体を支える「四足」だ。

「重装甲」について話すとすれば、この2匹は性質がそれぞれ異なっている。

ダイミョウザザミの甲殻は全身まで行き渡っておらず柔らかな背部を晒している為、別の殻で隠す必要性がある。それは鉱石を複合させるようになったオニムシャザザミも同じ事だ。

対するゲネル・セルタスは関節部を除けば全てが分厚い緑色の甲殻で覆われている為、甲殻種に比べると硬度は劣ってしまうが、防御力は高いといえよう。

そして甲殻を分厚くしようとするれば身体が重くなり、「重量級」となってしまうのは当然のこと。

鎧竜グラビモスが一目瞭然だろう。リオレウスのように自由に飛ぶことはできず、装甲が増す分だけ動きは鈍くなるものだ。

このゲネル・セルタスもオニムシャザザミもそう……かといえはそうではない。オニムシャザザミは重量級ではあるが、動きが鈍いとは言いつれない。

その理由は同じキーワードでありながら違いがハッキリと解る「四足」にある。

ダイミョウザザミやショウグンギザミは甲殻とヤドの頭蓋骨、そして大きなハサミがあるにも関わらず、バランスを崩すことなく高い機動性を発揮することができる。

身体大きさに比べると小さく見える四足だが、時には空高く跳躍することも出来るというのだから、この足に込められた筋肉の量は凄まじいものといえるだろう。

そもそも甲殻種は無脊椎動物であり、芯となる骨を持たぬ代わりに

外骨格を持つようになった生物であり、柔らかな筋肉を守る為に堅い甲羅を必要としている。

そしてそれは甲虫種にも言えることであり、甲殻で全身を包むことで身を守る術を得た虫だからこそ「甲虫種」という種族名がつけられたのだ。

だがゲネル・セルタスの甲殻の下にある筋力の量は甲殻種とは比べ物にならない程に多い。それは「体を支える為」だけでなく「敵を踏み潰す為」の足だからだ。

考えても見て欲しい。あれだけ大きく大きな4本の足ならば、巨体を支える所か、脚力により推進力が上がっても可笑しくない。それにも関わらず鈍いまま。

グラビモスですら2本の足であれだけの推進力を発揮している。あの速度であの重量がぶつかった時のパワーは、ベテランハンターですら1乙する確率が高いと聞く。

つまりゲネル・セルタスの足は速度を上げる為のものではなく、足そのものに力を込める事で破壊力と走破力を上げているのだ。

また天空山は地形上、段差が多い。それを難なく上り下りできるだけの脚力は、速度よりも走破力に優れていることを物語っている。

—つまりゲネル・セルタスの足は、しつかりと地面を踏み抜く力に特化した「安定性」と「走破力」の高さにある、と言ったところだ。

オニムシャザザミが鋏を構えれば確かに鉄壁だろう。しかしその鉄壁ごと押し進められてしまつては意味が無い。

鋏を構え防御体勢でいるオニムシャザザミを、ズリズリというよりはズガガガという効果音が似合う程に押すゲネル・セルタス。

四つの太い足が地面にめり込むほどの突進は、地面を抉りながらオニムシャザザミを押し出すほどのパワーを秘めていた。

天空山で繰り返し広げられているオニムシャザザミとゲネル・セルタスの攻防。

ジンオウガを突き飛ばしたエリア6を移動し、緩やかな段差があるエリア5でその死闘は続けられた。外野のイーオス達もその戦いを見守るかのようにつまづいていた。

もはやガードしていても無駄だと解ったオニムシヤザザミは姿勢を崩し、鋏を構えたまま右へと動き、上手くゲネル・セルタスをいなし。

目標が眼前から消えたと同時にゲネル・セルタスは四足を地面にめり込ませ急停止。鋏を振るうことで遠心力が働き、動きを止めつつ方向転換に成功した。

しかし隙があるには違いなく、急旋回し正面に捉えたオニムシヤザザミは其の場で跳躍。ゲネル・セルタスの頭上に落下してきた。

モロに受けたゲネル・セルタスは身体ごと地面にめり込むが、四足に力を込めて地面から胴体を抜くどころか、勢いをつけてオニムシヤザザミを逆に吹っ飛ばす。

下から上に突き上げられたことで軽く宙を舞い、地面に落下。鋏を盾にすることで顔面直撃は避けられ、ゆっくりと起き上がる。

ゲネル・セルタスは甲殻の硬さだけではない。その巨体とパワーの元である筋肉の量も凄まじく、防御力だけでなく体力面ですら高いことで知られている。

鋳石を食らってそれを纏うオニムシヤザザミの重量もかなりある方だが、その身体から繰り出すボディプレスですら、ゲネル・セルタスには決定打にならない様子。

パワーとタフネスは圧倒的にゲネル・セルタスが上。ゲネル・セルタスを上回っているのは硬度と機動性だが、このパワフルな外敵を打ち倒すのは容易ではない。

ならばどうするかといえば……絡め手を使う他ない。

オニムシヤザザミは口から毒液を発射。機敏に動けないゲネル・セルタスはそれを大量に浴びてしまう。

しかしゲネル・セルタスは分厚い甲殻で身を覆っている為、大量に浴びても実際に体内に入る量は微量らしく、弱っている気配が無い。

飛竜種や牙獣種は甲殻や体毛で覆われていても僅かな隙間にある

皮膚から毒素が侵入するのだが、甲虫種はそうではない。繋ぎ目があるとはいえ皮膚とは違った性質を持つ為、傷をつけなければ体内に侵入できないのだ。

よって絡み手も効果は薄い。なんてこつたい。

それでもいずれは効果が出るだろうと、オニムシャザザミは天[□]空山[□]に来る前にたっぷり貯蓄しておいた水と毒素を上手く配分して吐き続ける。

時には水ブレスとして相手の足を滑らせ、時には毒や麻痺を混ぜて全身に浴びせ、動きを止める必要がある圧縮水ブレスで傷つけようとする。

ちよこまかと動きつつ遠距離から攻める。ゲネル・セルタスも高圧ブレスという必殺技があるが、水分量と命中精度ならオニムシャザザミが上らしく、上手く避けつつ戦い続けた。

すると、ゲネル・セルタスは突如として全身から蒸気を噴出す。どうやらセコい戦い方に苛立ちを覚えていたらしく、怒りのサインをあげているようだ。

そして息を吸い込むように身構えると、今度は蒸気ではなく独特の臭気を纏うガスを噴出したではないか。

その匂いは流石のオニムシャザザミの嗅覚も参るらしく、嫌そうに身を引いて逃れようとするほど。ゲネル・セルタス近隣にいたイーオスに至っては匂いで気絶。南―無―。

あまりの激臭にゲネル・セルタスから距離を置いて様子を伺うオニムシャザザミだが、空から音がしたのでそちらへと視線を向けた。

―そこには、フラフラと飛ぶアルセルタスとそれにしがみつくブツチャーの姿があった。

あのロデオバトルから軽く1時間は経過しているというのに、2匹の戦いは未だに続いていたらしい。

お互いに汗水垂らしてヘトヘトだというのに、アルセルタスは必死に前へ飛び、ブツチャーは必死に角にしがみ付いていた。

なんであんなことしてんだろーとばかりに顔（というより身体？）を傾げてブツチャーとアルセルタスを見上げ、その行き先を視線で追う。

そしてアルセルタスが着地した場所は、なんとゲネル・セルタスの真上だった。

アルセルタスが着地したと同時にゲネル・セルタスは「これで勝つる！」と言わんばかりに気合を入れだした。気のせいか、アルセルタスも両の鎌を振り回し気合を露にしていた。

なんだなんだと周囲を見渡すブツチャーを置いてけぼりにアルセルタスが羽ばたき、ゲネル・セルタスが地面を蹴って前方に勢いをつける。

するとゲネル・セルタスはほんの僅かだが地面から浮遊し、蹴った勢いと合わせることで最初期とは比べ物にならない程の加速が生じた。

その突進の勢いはオニムシャザザミが驚くほどで、横に逃げるよりも跳んだ方が早いと咄嗟に判断し、ジャンプ。

その下を潜り抜けたゲネル・セルタスはそのまま地面に着地し、四足をそれぞれの力加減で地面に食い込ませ急旋回。

勢いに乗ったままゴリゴリと地面を抉りながら旋回する様は、ゲネル・セルタスの重さを改めて思い知り、そして先ほどの突進の勢いが段違いに速い事を理解できるだろう。

ゲネル・セルタスとアルセルタス。この2匹は見た目こそ大きく違うが、これでも雌雄関係にあたる。雄がアルセルタスで、雌がゲネル・セルタス。

小柄で飛行能力が高いアルセルタス。大柄でパワフルなゲネル・セルタス。どうして雄雌がここまで違うのかはともかく、この2匹は雌雄揃って初めて真価を發揮する。

激臭のようなフェロモンでアルセルタス呼び出し、その飛行能力と兵力を手にしたゲネル・セルタスは飛竜種を圧倒するほどの戦闘能力を得られるのだ。

その一例が、アルセルタスの飛行能力を利用した、浮力を得たことによる機動性と推進力の向上。突進の性能強化はもちろん、先とは違うバリエーション豊かな攻撃を可能としている。

これはあくまで一例であり、これ以外にもアルセルタスを用いた連携攻撃は多数存在しているが……今はまだ語るべきではないだろう。

まるで兵のようにアルセルタスを付き従わせ、兵力として扱う。これがゲネル・セルタスの異名「重量級の女帝」のもう一つの由来である。

久々の強敵、それでも圧倒的なパワーとスピードを兼ね揃えた厄介な相手。

同じ突進でもディアブロスとは違う。同じパワーでもドボルベルクとは違う。例えようのない、この大型甲虫種ならではの強さを見せて付けていた。

それでもオニムシャザザミは逃げない——否、逃げるわけにはいかない。

こちらも毒液による絡め手や跳躍力という独特の戦法があり、ゲネル・セルタスはアルセルタスを 用いてパワーアップするが、元は自分と同じ「防御力とパワーで勝負するタイプ」。

だからこそ、狂竜ウィルスに汚染されて変化した野性本能が告げている——「ここで引いたら、自分の甲殻とパワーはココでは通用しない」と。

セクレヌ大砂漠で覇とG級の2匹に遭遇したことで、オニムシャザザミの世界は広がったのだ。自分はまだまだ弱い。自分はまだまだ脆い。自分はまだまだ——強くなれると。

人もモンスターも、自分が知らなかった上の存在を知った途端に「登る」という概念を覚える。それが生存本能の一つ「競争意識」だ。大自然は生き残ったが勝ちであり、最も解りやすい手段は「強さを身につけ他者を倒す」ことにある。

狂竜ウィルスによって攻撃性を刺激されたオニムシャザザミは、徐々にモンスターとしての矜持を本能的に思い出す。「敵は倒せ」と。

だからこそ、オニムシャザザミは強敵に挑む。

モンスターとして忘れていた本能を思い出す為にも。そして強敵を打ち倒し、伸し上がる為にも。

いつのまにかオニムシャザザミの鍔によじ登っていた。それに気づいたオニムシャザザミは、むしろ歓迎するかのように鍔を頭に寄せ、ブツチャーを乗せる。

—さあオニムシャザザミの旦那、わちきらのコンビネーションを見せてやるでヤンス！

なお、上記の台詞はイメージです。

イメージなのだが、オニムシャザザミは言葉を理解したかのように「よっしやー！」と鍔を打ち鳴らし、気合を入れる。

ブツチャーはその音を試合開始のゴングのように感じたのか、喜々として舞い踊る。

—さあ、第二ラウンドの始まりだ！

—完—

第44話 「天空山での決着」

ゲネル・セルタスとアルセルタス。見た目も機能も異なる雌雄関係だが、だからこそ合わさることで強さを発揮することができる。

とはいえ、この二匹の連携攻撃はアルセルタスの献身があつてこそ。ゲネル・セルタスのパワーに加えた、他のモンスターにはない明確なサポートがある。

小回りの効かないゲネル・セルタスに代わり、懐へ飛び込んだハンターを両前脚の鎌や腐食液で撃退し。

鈍重なゲネル・セルタスを圧倒的な飛行能力を用いて浮かばせ、負担を減少させて突進の勢いを増し、更には宙に浮かんでからの強烈なボディプレスを繰り出し。

時には合体を解除し、ハンターや大型モンスターの死角から突進してくるなど、多くのハンターがこのアルセルタスの阻害を受け、腹を立てたものだ。

よつて、多くのハンターがセルタス夫婦と遭遇した場合、まずアルセルタスを率先して倒すことが多い。

ゲネル・セルタス自身も強敵には違いないが、このアルセルタスを先に討伐しておくことで難易度はぐつと下がる。

しかし時間が経過すると新たなアルセルタス呼び出す為、その間にゲネル・セルタスを倒せるか否かが重要となるだろう。

—では、逆にアルセルタスの行動を邪魔してやるとどうなるのだろうか？

ゲネル・セルタスが背に乗せたアルセルタスの角を地面に突き刺そうと身を屈める。角刺し突進を繰り返すつもりか。

しかしそれは叶わず、頭を地面に激突するだけに終わった。しかしゲネル・セルタスは角が刺さったと思ひ込んでそのまま走りだした。

ゴリゴリと地面を削ろうがお構い無しに突撃するが、オニムシヤザ

ザミは平然と横移動で避ける。速さが足りないからだ。

そんなことも知らず走り続けるゲネル・セルタスの背中の上では、二匹のモンスターが奮闘していた。アルセルタスと奇面族のブツチャーである。

角にしがみつくとブツチャーは片手で持った杖でボコボコとアルセルタスの背を殴りつけ、アルセルタス自身は身を捻ったり振ったりして角を振り回す。

その間にもゲネル・セルタスは重心を固定し地面を削りながらUターンをし、二匹に遠心力が襲い掛かる。

そしてブツチャーと、身を揺すっていたアルセルタスはゲネル・セルタスから落下。

落下しても尚ブツチャーは「これでもか、これでもか！」とアルセルタスを杖でボコリ、アルセルタスは「いい加減に離れろ！」と地面の上で身体を振り回す。

さつさと飛べよ、と傍から見ていたイーオスは思う(ように見える)だろうが、ブツチャーが殴っているのはアルセルタスの背中、つまりは羽根が開く場所だ。羽根を広げたくても広げられず、地を這う結果となった。

結果的にゲネル・セルタス対オニムシャザザミに戻ってしまうが、いつアルセルタス又はブツチャーが戻るとも限らない。

ブツチャーがアルセルタスを抑えている間、オニムシャザザミはゲネルと真剣勝負が出来る。それだけでも十分なサポートだ。

改めて対峙し、両の鋏を広げ大きさをアピールし、威嚇の姿勢を示すオニムシャザザミ。

ゲネル・セルタスは両の鋏を広げたオニムシャザザミに真っ向から突進……するわけでもなく、四足に力を込めて身体を固定し、高圧プレスを発射。

巨大な水の塊がオニムシャザザミに降りかかるが、幾ら高圧とはいえ水なのでオニムシャザザミの甲殻を破壊するには至らない。まあ体は吹っ飛んだが。

お返しとばかりにオニムシャザザミも毒を混ぜた水を発射。ゲネ

ル・セルタスの水大砲とは違い直線状に放たれる水鉄砲だ。

こちらにも分厚い甲殻で守られたゲネル・セルタスには効果が薄く、オニムシャザザミのように吹っ飛ぶこともないが、それでも抑えつけられているからか面倒くさそうに直線状から逃げようとする。

貯水する器官があるとはいえ、水は有限だ。特に元々は半水生故に水分を必要とするオニムシャザザミは連続で放つことができない。

水生の要素が全く無いゲネル・セルタスでも、高圧ブレスは隙が大きい上に放つ水の量が膨大なため、頻繁に撃てるものではない。射撃戦に持ち込むことは不可能だ。

「やっぱガチンコでケジメつけるしかないみたいだな」と言わんばかりにオニムシャザザミは銃同士を打ち鳴らし、「かかってきなさいな！」とゲネル・セルタスが地団駄を踏む。

そして果敢にもオニムシャザザミから銃を広げゲネル・セルタスに突進していくのだが……。

—ゴインツ！

突如として横から、しかも銃ではなく本体の方にアルセルタスが直撃。角という小さな一点から食らった一撃はオニムシャザザミを見事スタンさせた。

しかし高硬度の壁のような存在に直撃したアルセルタスも無事ではなく、硬い角から伝わってきた衝撃は頭部に響き、同じくスタン状態になってしまう。

アルセルタスがオニムシャザザミに突っ込んだのはサポート目的ではない。

アルセルタスの背中をブツチャーが陣取って邪魔する中、地面の上で必死に羽根を広げ、振り払おうとした結果だ。

それを好機と見たゲネル・セルタスは尾を振り回して攻撃しようとしたが、そこへ。

—カツ！

―目があー！目があー！

なお、上記の台詞はイメージです。ゲネル・セルタスが閃光をモロに食らって混乱しはじめたので。

なんとブツチャーは、ハンターが使う閃光玉のようなものを作り出すことに成功したのだ！

材料は光蟲にネンチャク草。本物と違って範囲は狭い上に何かに直撃させ光蟲を潰す必要があるが、目くらましには充分だ。

その辺を暴れ出したゲネル・セルタスを見たブツチャーは力の限りを尽くして杖を振り下ろし、アルセルタスの角を部位破壊。先ほどの衝突が響いたのだろうか？

そして衝突で気絶しているオニムシャザザミを起こそうと頭によじ登り、適度な力加減でポカポカと杖で頭を殴る。ついでに元気を出せダンスも披露。

そんなブツチャーの必死の頑張りが通じたか、オニムシャザザミはハツと我に返り、起き上がる。

よいしょ、と横倒しになっていた身体を起き上がらせた結果、気絶していたアルセルタスを意図せず踏みつけてしまった。

甲殻種の脚は細く長くそして硬い為、ゲネルに比べると薄い甲殻を持つアルセルタスの身体を……ここからは語らないで置こう。スプラッタなのだ。

とにかく、アルセルタスがダウンした今、残るはゲネル・セルタスのみ……というわけにはいかなかった。

目くらまし状態から回復したゲネル・セルタスはオニムシャザザミに向き合うと、再び身体からフェロモンガスを噴射。

そう、アルセルタスは決して一匹だけではない。あるハンターの日記によると「ゲネル・セルタス一匹居たらアルセルタス三十匹いると思え」と記されているほど、アルセルタスは沢山いる。

オニムシャザザミですら嫌がるほどに臭いこのフェロモンは、遠くに生息しているアルセルタスですら呼び出すことが出来るのだ。

しかし、ここでまたしてもブツチャーの妨害行動が。ブツチャーはフェロモンの香りをなんとも思っていないのか、ゲネル・セルタスの背中を陣取り、ある物を周囲にばら撒く。

それはフェロモンとは別の意味で臭いこやし玉だった。ハンターやババコンガが使っているものを真似て作ったそれは、直撃すればフェロモンに勝る悪臭が充満する。

ベツタベツタとゲネル・セルタスに降りかかるこやし玉はフェロモンを覆いつくし混ざり合い、なんともいえぬ臭さの塊となっていく。あまりにも残酷な行いといえよう。

その匂いは広範囲に広がっていき、野次馬のイーオス達が「うわーくせー逃げろー！」と蜘蛛の子を散らすように逃げ出していく。

そんなゲネル・セルタスの今の心情を台詞とするならば――

「なにこのイジメ」

――といった感じである。

とにかく、これでフェロモンの匂いはかき消され、アルセルタスが呼び出されることはない。所詮フェロモンでしか釣れない連中ですから。

反してブツチャーは(驚いたことに)激臭も悪臭も平然としており、「やったでヤンスー！」と言わんばかりにゲネル・セルタスの上でダンスを披露。飛び降りてオニムシャザザミの元へ駆け出した。

オニムシャザザミは臭いゲネル・セルタスを相手にしたくはないが、攻撃的本能により叩くなら今しかない、ブツチャーが頭頂部に達した所で鋏を打ち鳴らす。

対するゲネル・セルタスは「こうなったらヤケクソよー！」と言わんばかりに尾の鋏を打ち鳴らし、無謀にもオニムシャザザミに突貫。

だがオニムシャザザミは脚に力を込めて高く跳び上がり、ゲネル・セルタスがその下を通過した所へ落ちて押し潰す！

―ドガァンツ！

流石のゲネル・セルタスも高い所から落ちてきたオニムシャザザミの重さに耐え切れず、踏ん張りも利かず地面に叩きつけられ、甲殻に大きな輝が入り体液が溢れ出てくる。

それでもオニムシャザザミは容赦しない。匂いのおかげで躊躇いはしたものの背中を陣取ったまま鋏で殴りまくる！ブツチャーも杖でボカボカ殴る！

ゲネル・セルタスは反撃しない……いや反撃しようと尾の鋏を振り回しヤドである頭蓋に殴りかかつてはいる。それでもオニムシャザザミは無視して殴り続けた。

大事な弱点を隠すためのヤドが破壊されるかもしれないという恐怖よりも、脅威を逸早く倒しておきたいという本能が上回ったのだろう。ヤドが破壊される気配はないが、一心不乱に殴り続ける。

かくして、ゲネル・セルタスは息絶えた。

スイカのように割れた甲殻の上で、体液まみれになりながらも勝利の意を示すかのように鋏を天に上げているオニムシャザザミは、まるで蛹から抜け出し蝶になったかのよう。

いや、オニムシャザザミはこの日より変わった……いや元に戻ったのかもしれない。

食用として育てられ、食用として船で輸送された際に大海原に落ちこち、ユクモ地方に辿り着いた。

その環境の激変的な変化に適応した彼は、鉱石を取り込んで防御力を強化させ、その防御力から異常なまでの臆病な性質となつて暮らしてきた。

もちろん暢気で食いしん坊はあったが、それは周囲の力の差を見比べるだけの知性があったからだ。自分より弱い奴は無視し、自分より強い奴から逃げ出す。これも自然の中で生き残る方法の一つだ。

しかし本来のダイミヨウザザミはこうではない。

比較的大人しいと云われているダイミヨウザザミとて縄張りに侵入者が現れれば敵対するし、攻撃されれば反撃にでる。

甲殻種とて「敵を排他し生き延びる本能」を持ち合わせており、オニムシヤザザミはその原点を思い返したのだ。

セクアーヌ砂漠で自身より強大な敵がいくらでもいることを知った。

バルバレ地方でゴア・マガラの狂竜ウイルスに感染し、狂竜化することで攻撃的本能を思い出した。

そしてこのゲネル・セルタスを打ち負かしたことで、ダイミヨウザザミとしての本能を取り戻した。

もちろんオニムシヤザザミとしての性質——生きる為の逃走本能も忘れてはいない。

そもそも弱点である背部がある時点で防御本能は働いているから、時には恐れ逃げることも重要だと、これまでの生活で理解している。だからこそ今まで生き延びることができたのだ。

しかしオニシヤザザミは、今後からは戦う道も少なからず選ぶだろう。そういう風に進化できたのだから。

これよりは、蟹が食物連鎖の強者となる為の戦いである。

頭頂部で嬉しそうに踊るブッチャーは、本能的にそれを理解したのかもかもしれない。

だが、まずは食事だ。腹が減っては生き残ることができないのが世の常。

ブッチャーも同調して腹を空かしたところで、オニムシヤザザミはゆっくりと脚を運ぶ。

鉱石類を多く食して甲殻の補強も行わなければならない為、しばらくは天空山で食いまくるつもりだ。

そんなオニムシヤザザミの姿を見降ろした一部のイーオス達は、しばらくちよつかいを出さないでおこうと本能的に決めた。

—パキ

今、漆黒より金色が生まれ来る。

—パキキ

今、闇より光が生まれ来る。

—バリバリバリ

天を廻りて戻り来よ。

「
」
!!!!
」

時を廻りて戻り来よ。

—続く—

第45話 「その頃バルバレでは」

巨大な船のような集会場を、商人やハンターといったキャラバンが集うことで形成された市場「バルバレ」。

『地図に載らない町』とも言われてはいるが、そこは大勢の人々で賑わっており、日々世界各地の情報が入り乱れている。

そんなバルバレには多くの个性的な人物がいるが、今バルバレ中の人々の注目を集めている1人の男が居た。

「師匠――師匠――！」

ランポスシリーズで身を包んだ若い青年が「師匠」と何度も叫びながら、岩竜バサルモスの翼を頭上に持ち上げながら走っている。これほど目立つ人物は居ないだろう。

まあハンターの大抵は大きな素材を背負っている事が多いので素材を持ち上げるといふ事自体は珍しいことではない。その青年が大声でワイワイ騒ぐから目立つのだ。

そんな歳若い青年を迎える人が居た。ウエスタンハットが似合うダンディな男・「我らの団」団長である。

青年は団長の姿を確認するとそちらへと向かい、素材を持ち上げたままペコリと頭を下げて会釈する。

「団長！ただいま帰りましたー！」

「よう新米ハンター！探索お疲れさんー！」

「いつまでも新米って言わないで、せめてビスカって呼んでくださいー！」

「わっはっは！お前さんはまだまだ新米さんだよー！」

どうやら青年は礼儀を心得ているようだが、団長と同じく声がデカかった。まあバルバレは多くの人で賑わう為、このぐらいが丁度良いのだろう。

ランポスヘルムを脱ぎ捨て、健康的な褐色の肌に日に焼けた金髪、そして赤い目を持つ顔を露にさせた青年ビスカは、団長を後にして他のメンバーへと挨拶に回る。

無口な加工屋に挨拶を交わし、妹のような加工屋の娘に「小さなか

けら」を土産として渡し、看板娘にハイタッチをし、料理長にいつもの感謝を述べ、商人に「ありがと300万Z!」と言って笑い合う。元氣そのものが青年となったようなビスカは、一番報告したい人に会う為にキャラバンへと走る。岩竜の翼を持ち上げたまま。

「^{シンヨー}師匠！ただいま帰りました！」

「おう、よう帰った。それとワシは師匠じゃない」

【我らの団】キャラバンの一つであるハンターとアイルー用の個室。そこにビスカの言う「師匠」は居座っていた。

操虫棍「シャドウウオーカー」の刃をカブトムシのような猟虫をつけた右手に持つ砥石で磨く、白髪と引き締まった筋肉が目立つ初老の男性。【我らの団】のハンター・ジグエである。

ハンターというよりも武士の印象を持たせるジグエは厳格な雰囲気と漂わせており、視線を変えることなく刃と砥石に集中している。その隣ではジグエと同じ姿勢でブレイブネコランスを布で磨いているオトモアイルー・トラの姿もある。無言だが、こちらは一生懸命磨いている、といった感じだ。

「見てくださいよ^{シンヨー}師匠！初のバサルモス討伐で翼を？ぎ取れたんです！」

「なぬ!?ワシが四匹目でやっと手に入れたそれを初回か!?羨ましいぞド畜生！」

さっきの厳格な雰囲気はどこへ行ったのやら、自慢げに翼を掲げるビスカに掴みかかり悔しい悔しいと連呼する爺がそこにいた。

元氣と厳格さを併せ持つこの老人こそ、現【我らの団】結成のキツカケとなり、若きハンターを育成する役目を任されている【我らの団】主力ハンターなのである。

「ふう……」

「どうしたニヤ、溜息ついて」

遠くで看板娘に岩竜の翼を見せつけ自慢するビスカを見つめているジグエに、トラは問うた。

武器磨きを終えスッキリとした表情を浮かべるトラの顔を見たジグエは、ふむ、と呟いて己の白い顎鬚を擦る。

「……ワシも歳だと思つてな」

このジグエの一声に、トラは全身の毛が逆立つほどに驚いた。

「ニヤニヤーいつも『まだまだ若いもんには負けん』と言つていたお前さんがかニヤ!?」

トラとジグエの付き合いは長い。大した年月は経つてはないがお互い解り合っている。

ジグエは老いてもなお夢を抱いて生きてきた。妻を病で亡くし、娘が遠くへ嫁に行った頃になって、ハンターになろうと決心し、旅立つたほどだ。

その冒険心と歳に似合わぬ体力と気力に目を付けた団長にスカウトされ、現在は腕利きのハンターとして、そして「我らの団」の主力として誇られている。

しかしジグエは思う。

「気持ちはな。しかし体力がの……」

そう、気持ちは若いつもりでいても、歳を重ねるにつれて衰える体力は現実味を帯びてきた。

もちろん、上位クエストを受注すれば依頼を達成し無事に帰還する自信はある。僅かハンター歴1〜2年でありながら、多くのクエストをこなしてきた経験は伊達ではない。

しかしこの所息が上がるが多くなり、しんどいと思うようになってきた。疲労の蓄積かといえそうではないと知り、自分も歳をとったと自覚するようになったのだ。

今でもハンターとして働いてはいるが、ビスカという新人を育成する立場もあり、ハンターとしての仕事の数も減ってきたといえる。

溜息を吐くジグエだが、ふと聞こえた足音に視線を移す。そこには部屋に入ってきた団長の姿があった。

「まあ歳云々はともかく、気持ちはあればそれで充分だろうさー!」

「おお、団長。お前さんは体力があつていいのお」

「はっはっは！俺なんかよりハンターさんの方がタフだろうさ！ハンターっていう仕事が疲れるだけの話さ！」

冒険心が強いことと一番歳が近いことが幸いして、出会って早々に仲良くなつた二人。

ジグエには落ち込む姿は似合わないからと元気付けようとする団長に、ジグエはカツカツカつと短く笑う。

「物は言い様じゃな」

カツカツカ、とジグエが笑うが、すぐに止める。

「……して、ワシに何の用じゃ？」

「シャガルマガラが例の場所に現れたそうだ」

唐突に真面目な顔をする二人の間柄を前に、トラは唾を飲んで話を伺う。メインオトモとして話を聞くべきだろうと。

そして理解した。『例の場所』とは、トラとジグエにとって最大の敵と戦つた場所。そこに最大の敵が再び訪れたことに。

「お前さんも聞いているだろうが、ここ最近は天空山を中心に狂竜化したモンスターが多数発見されている」

ジグエは黙つて頷いた。査定の意味を込めて。

最近では表に出ることが少なくなつたとはいえ、ジグエも名の知れたハンターだ。同業者の仲間や教え子であるビスカから嫌というほど話を聞いている。

特に原生林で起こつたといわれる大爆発事件は、元を正せばゴア・マガラを含めた大型モンスターがぶつかりあつたのが原因だと聞く。大方、広範囲に散つた狂竜ウイルスにゲリヨスの火花が散つて粉塵爆発したのでだろう。

そのゴア・マガラが各地を点々としており、最後に姿を目撃したのが天空山。間違いなくそのシャガルマガラは、徘徊していたゴア・マガラが進化したものだ。

「しかも厄介なことに、俺らが逃がした蟹さんもそこで大暴れしているんだそうだ」

「……蟹というと、オニムシャザミのことか？」

運の悪いことに変な物（ジグエもビスカも頑なに話そうとしない）を食って腹を壊したあの三日間。その日に現れたというのが蟹ことオニムシャザザミ。

団長や看板娘から聞いてはいたが、ギルドマスターから旧大陸とユクモ地方で有名なモンスターだと聞いた時は驚いたものだ。

噂では高い防御力を誇っており、その甲殻は市場で高く取引されているのだとか。基本的に大人しい事もあり、ギルドは撃退だけに留めるよう世間に警告している。

「そうだ。あいつが天空山を陣取っていて、並のハンターじゃ立ち入りですら出来ない状況になっていんのさ」

ハンターズギルドが注目しているほどの大物だ。確かに並のハンターでは太刀打ちもできないだろう。

さらに聞いた話ではあるが、オニムシャザザミも狂竜ウイルスに感染しており、凶暴性が大きく向上して非常に危険だとも聞いた。

幸いなのは、オニムシャザザミが殆どの大型モンスターを縄張りの侵入者と見て攻撃を加えている為、シナト村に大きな被害が出ていないことか。

「そんな時にシャガルマガラが出てくるのは……しかしワシよりも強いハンターが他にもおるじゃろうが」

「それがな、殆どのハンターは蟹退治に出かけちまっているんだと。しかも大抵は大怪我して帰ってくるそうだ……死者も出ている」

高く売れる甲殻を纏うモンスターは、欲に目の眩んだハンターにとって格好の獲物。そしてハンターは欲が強い者が多い。

それだけならまだいい。怪我を負おうが自己責任である為にかまわわないのだが、死傷者が出ているとなればギルドも黙ってはいない。

とにかくオニムシャザザミを狂わせているであろうウイルスの根源、シャガルマガラを討ち取る必要がある。狂竜化して困るのは決してオニムシャザザミだけではないのだ。

「とにかく確実にシャガルマガラを打ち倒せるハンターが欲しいと、ギルドマスターから伝言を頼まれてな……頼めるかい？」

団長もギルドマスターも、ジグエが年老いておりながらハンターと

しては若輩者であることは理解している。

しかしジグエは仮にも、シャガルマガラを討ち取ることが出来た男だ。シャガルマガラを討ち取った事のあるハンターは今のところジグエしかない。だからこそ確実性を求めて頼むのだ。

「あい解った」

そういうとジグエは傍らにあった操虫棍を手に取り、ゆっくりと立ち上がる。

トラもその後が続くようにしてランスを持ち、胸を張る。……愛くるしさゆえに「ドヤツ」としているようにしか見えないのが悲しい所か。

「トラ、お前さんも来てくれるな?」

「当然ニヤ」

そう頷いたトラの顔は凜々しかったが、後ろ脚がカタカタ震えていたので台無しだ。

それを指摘しケラケラと笑うアイルー達を怒鳴るトラだが、凶星を突かれた彼は滑稽でしかない。

そんなトラと愛するアイルー達をみて微笑んだ後、ジグエはカツンと昆の柄で床を突く。団長は静かにそれを見つめていた。

「さて……老いぼれ最期のクエストにならんようにせなな」

ゴキゴキと首と肩を鳴らし、ジグエは真剣な眼差しで操虫昆の刃を見上げていた。

「その前にギルドに相談じゃな」

「何のだい?」

「最悪な事態は予想しておった方が良いからの」

—ジグエが申し出る『最悪な事態』が的中することになることを、この時は知らない。

—
完
—

第46話 「鬼鉄蟹VS天廻龍・前編」

―バルバレギルドが禁足地にてシャガルマガラの存在を確認した直後の事。

「ひいひい！お助けえええ！」

今18人目のハンターが悲鳴を上げて逃げ出し、それに続くかのようになり19人目と20人目が逃げ出した。……17人目？ネコタクで送られましたが、何か？

計20人目のハンターの後姿を見送るのは、天空山を制するようになったオニムシャザザミとそのオトモ・ブツチャー。

オニムシャザザミは「やれやれやつとか」と言わんばかりに剣を下ろし、攻撃の姿勢を解いて大人しくなる。

(見たでヤンスか！あっしとオニムシャの旦那のチームプレー！)

対してブツチャーは、ハンター達の後姿に向けて胸を張って自慢する。ブツチャーがオニムシャにあわせて動いただけでもあるが。

ここしばらくは天空山の頂点として君臨し、多くのモンスターやハンターを撃退してきたオニムシャザザミとブツチャー。

というのも、オニムシャザザミ自身としては以前のようにノンビリと食べ歩きをしていただけなのだが……そうは問屋が卸さなかった。

―そう、天空山に再び狂竜ウイルスが充満するようになったのである。

生物であれば無遠慮に感染していくウイルスは天空山を支配するかのようになり、それは当然ながらオニムシャザザミとブツチャーにも襲い掛かる。

先日野生の本能が爆発したのに加え、狂竜ウイルスに侵されたことで凶暴性がショウグンギザミにも劣らぬものとなり、外敵と定めた生物を次々に攻撃しているのだ。

その選考基準は曖昧とはいえず、リオレウスやハンターといった「爪や牙、刃といった攻撃的なもの」を持つ生物に襲い掛かることが解つ

た。逆にクンチュウやケルビなどは対象外となるらしい。

そんなこともあり、これまで5チーム、計20名のハンターを返り討ちにしてきた。軽傷大怪我死傷者関係なく、逃げるか倒れるかのどちらかが決まるまで徹底的に。

尤も、ハンターが逃げ出す頃には狂竜ウイルスが大人しくなり攻撃性が沈下するのだが……その間の戦闘で大きな被害を人間側に与えるのだから迷惑である。

それを知ってか知らずか……いや、ハンターが襲い掛かる時点で攻撃本能が刺激され、オニムシャザザミは外敵を迎え撃つ為に攻撃を加えてきた。

しかしオニムシャザザミには一つの懸念があった。己の背を守るヤドの頭蓋骨である。

テツカブラの厳つい頭蓋骨を使用しているとはいえ、これまでの激戦による被害が蓄積し、随分とボロボロになってしまった。

解りやすいほどのひび割れを起こしてはいるが、幸いにもジンオウガやリオレウスによって破壊されることはない。……まあゴア・マガラが強すぎた、の一言に尽きるのだろうか。

ヤドへの不安・狂竜ウイルスによる凶暴化・そして本来の野生を取り戻したことによる攻撃本能。

これらが合わさることでもリオレウスやジンオウガに勝りかねない危険度を誇るようになり、結果バルバレギルドに注目視されることとなった。

それでもオニムシャザザミはいつものように食べ物を食べ歩こうとして……ある気配に気づく。

先ほどハンター達と戦闘を行ったエリア1。ハンター達がこの天空山の領域外に逃げ出した頃になって、その気配は感じ取られた。

それはブツチャーも同様に感じられたようで、ハチミツまみれの口元を拭い、気配のする方へキーキーと唸り声を上げている。

しかし戦闘後に高まったテンション故か、オニムシャザザミは揚々

とその方角へ足を運ぶ。

ブツチャーは「あつしも行くでヤンス！」と言っているかのように走りだし、そのままジャンプしてオニムシャザザミの頭に着地し「ガングラン行こうぜ」ダンスを披露。これは戦闘前に気合を入れるダンスだ。

そう、これは強者の気配。その正体を確かめる為にも、オニムシャザザミは行く。戦おうものなら容赦なく叩くつもりで。

しかし天空山に充満しつつある狂竜ウィルスの根源がそこにある事を、オニムシャザザミとブツチャーは知らなかった。

急に雲が出てきたことにより、周囲は薄暗くなった。

モンスターは急変する天気にも敏感だ。古龍種という自然災害の前触れかもしれないと、本能的に理解しているからである。

過去にクシャルダオラという脅威を知ったブツチャーにとって、強者の気配と天候の変化が同時に現れることで腰を引いてしまう。

オニムシャザザミもまた同意だ。気配がする方へと近づくにつれ、その存在がこれまで天空山に出没したモンスターやハンターとは比べ物にならない程の強者であることが解るようになってきた。

それでもオニムシャザザミはその先——禁足地へと足を運んだ。狭い入り口を潜った先には広い光景があった。

風が吹きぬけるここは高台かなにかなのだろうか、暗雲により薄暗くなった今では周囲の光景が見えづらい。

中央に巨大な岩があるだけのこの地に、オニムシャザザミはあるものを発見した。

黒い靄のようなものが佇んでいる。だがそれだけではない。

先ほどからオニムシャザザミの防御本能を刺激するほどの強者の気配が、その黒い靄から感じ取れる。

ブツチャーも警戒のあまり、恐怖を打ち払うかのように杖をブンブン振り回していた。

やがて黒い靄は打ち払われた——金色の翼が羽ばたいたことで。

そこにいたのは、金色の竜だった。

四つの足を地に立たせるだけでなく、広げたはずの翼が腕のように地面に振り下ろされている。

眼はオニムシャザザミを見つめてはいるが、その視線は明らかに敵意と殺意に満ちている。

そしてオニムシャザザミは本能故か理性故かは解らないが、この殺意に覚えがあつた。

天廻龍シャガルマガラ——オニムシャザザミと死闘を繰り広げたあのゴア・マガラが、生まれ変わった姿。

シャガルマガラは翼を折り畳み、ゆつくりとオニムシャザザミから見て右方向へと迂回しながらこちらを睨んでいる。

顔をオニムシャザザミに向けながら、しかし決して襲うことはなくオニムシャザザミを迂回している。

オニムシャザザミも同様に、攻撃も防御もすることなく、ブツチャーと一緒に大人しくシャガルマガラを見ていた。

まるでお互いを見知っているから故に挨拶を交わしているかのよう——そう、戦いの前の挨拶のような。

シャガルマガラは地に足をつけたまま翼を広げ。

オニムシャザザミは両の鋏を広げ。

ブツチャーは「かかつてこいや」のダンスを披露する。

——今、天空山の頂点を決める争いが始まる。

—
完
—

第47話 「鬼鉄蟹VS天廻龍・後編」

シャガルマガラ。「我らの団」によって詳細が明らかになり、古龍種として分類されたモンスター。

ゴア・マガラが成長した姿とだけあつて漆黒から純白に変色しただけでなく、「狂竜の力」と称された能力を最大限に生かして、成長前は比喩物にならない程の威力を發揮する。

生物を狂竜症に侵させる物質の散布量は暗雲のように空を覆い、拡散し周囲に散ったそれは連鎖爆発を引き起こし、更なる災害へと繋がる。

しかしシャガルマガラの何が恐ろしいかといえば、ゴア・マガラにもあつた「翼脚」だ。

この脚と翼が一体化した翼脚によって、高い飛行能力と地上走破力を手に入れた他、攻撃にも用いることもできる。ゴア・マガラの頃と比べて筋力も育った為、威力も桁違い。

後ろ脚によって立ち上がる必要があるとはいえ、この翼脚を使った叩きつけ攻撃は地面を割るほど。当たれば即死級のダメージは必須だろう。

そんな翼脚による攻撃を、全身の甲殻とヤドがボロボロなおニムシャザザミは誰よりも危惧していた。

天空山の禁足地で勃発した、シャガルVSおニムシャ&ブツチャーの戦い。この戦いはシャガルがリードしている。

シャガルマガラは脱皮して間もないとはいえ、先日までの激戦のダメージは完全に癒え、健康状態とポテンシャルは完璧。

対するおニムシャザザミは甲殻故に未だにひび割れが残っており、ここ連日の連戦による影響が今になって響いたのか、全身がボロボロとなっている。

加えておニムシャザザミのヤドもボロボロで、いくらテツカブラの頭蓋骨を使用しているとはいえ、シャガルの翼脚で叩かれたりすれば

粉碎玉砕大喝采は間違いなし。

いくら本能が剥き出しになって狂竜症で凶暴化しているとはいえ、ダイミヨウザザミの本性である「弱点を剥きだしにされることへの危険性」は無視できない。

そんなわけで、シャガルマガラが立ち上がったと解れば攻撃を中断し、そそくさと後退り一撃を回避するのは当然のことであった。

地面を割るような一撃を振り下ろしたものの、直後に発生する硬直を狙ってくるオニムシャが居ると解れば安心はできない。

シャガルはすぐさま地面にめり込んだ翼脚に力を込めて強引に跳躍。後方へと飛んで鉄叩きつけを避ける。

一撃の破壊力ではシャガルに劣るが、すぐさま鉄を振り上げる怪力をオニムシャザザミは有しており、硬直の間はほとんど無い。

しかしシャガルは息を吸い、右へ左へと黒い塊を発射。独特な軌道を描き地を這う黒煙を、オニムシャザザミは大きく跳びあがって回避。

空へ跳ぶことで地上では虚しく爆発を起こし、そのままシャガルへと急降下する。だがシャガルは翼を広げ助走を加えて滑空し、これを避ける。

このジャンププレス後の隙がオニムシャにとって最も大きく、硬い岩盤にめり込んだ身体を抜くのにもがきあがきと一苦労。

それを狙い、低空でUターンしながらオニムシャへ向かって飛ぶが……ここでまた邪魔が入る。

(実質上) オニムシャのオトモであるブツチャーだ。彼は先ほどからずーっとシャガルの背中を陣取っており、今度は頭へと移動して妨害行動を起こしたのだ。

今度はシャガルの特徴でもある角にしがみつき、あろうこと両の角を握って操舵するかのようには右へ左へと引つ張り出した。

チャチャブー特有の怪力が少なからずシャガルに響いたらしく、頭があらぬ方向へ向けられようとし、それに釣られて体のバランスを崩し始めた。

その結果、シャガルは空中で緩やかなカーブを描いてオニムシャザ

ザミを通り過ぎ、あらぬ方向へと転がり落ちてしまう。

その隙を逃すものかと地面から這い出たオニムシャザザミは鋏を向けたまま突進。スピードは無いがセカセカと急いで転んだシャガルへと向かう。

だがここでも翼脚が役立つ。強引に身体を起こしたシャガルは首を動かそうとするブツチャーを振り回して黙らせ、再びオニムシャに向き合った。

互いが向かうことでオニムシャザザミは停止。振り落とされたブツチャーはオニムシャの頭に上り、頭頂部で杖をブンブン振り回す。威嚇のつもりだろう。

仮にも古龍種相手に向き合う様になったオニムシャは、心身ともに成長したと言えよう。

しかしオニムシャが不利には違いないし、シャガルは古龍種としての誇りと余裕を醸し出している。

ブツチャーによるおジャマ攻撃は有効だが、かといってシャガルの動きを長時間封じられるわけでもないし、そもそも一度離れると取り付くまでが大変なのだ。

なので、ここは接近戦から遠距離戦に切り替える。

そうオニムシャが判断するや否や、口から大量の水を線状に放つ。ウォーターカッターのような水ブレスで一気に風穴をあけるつもりか。

しかしシャガルは仮にも古龍種。グラビモスに劣るとはいえ見た目以上の硬度を誇る甲殻は、傷がつけど致命傷にはならず。

それでも長いこと受けているつもりは無いらしく、水の勢いに乗るようにして後方へ跳び、そのまま翼脚を広げて空を舞う。

空を飛ばれたがオニムシャは何を考えてか、体の回りに紫色のガス……毒霧を撒く。

視覚を持つシャガルはその毒霧を前に突進を躊躇ったが、ここは勢いで攻めるとばかりに突進。滑空と重力により勢いは加速し、激突。

オニムシャの経験では毒が充満すれば突進を躊躇うだろうと思っていたが、それが外れて咄嗟に鋏で防ぐも、勢いが強すぎて後ろへ跳

ぶ。

そのままゴロゴロとシャガルを含めて転がっていく中、シャガルは幸運にもマウントポジションをゲット。オニムシャに身体を押し掛かけていた。

オニムシャはもがくものの、正面を地面につけた状態という非常に不味い姿勢で、鋏は体ごと押しさえつけられて動けない。しかも不運にもブツチャーが鋏を蓋にして埋まっちゃったし。

そしてシャガルはこの機会に叩き潰す、と言わんばかりに翼脚を広げ……オニムシャの最大の弱点であるヤドに叩き付けた。

腕のような翼脚だけでも威力は充分で、厳つい頭蓋骨に次々とひび割れを起こし、穴まで空く始末。叩けば叩くほど酷くなる一方。

これは非常に不味いとオニムシャは理解しているが、体全体で押さえつけられている為に上手く動けない。甲殻種ならではの体つきによる弱点だ。

—そしてついに、ヤドの頭蓋骨が完全に砕け散る音が響いた。

突然だが、オニムシャザザミの特性である金属甲殻の仕組みを覚えていたのだろうか？

挟める物なら何でも食べ、消化できないものは排出するという本来の器官は、突然変異によって消化できない金属類の成分を甲殻に反映させるといふ器官に変化している。

防御力を向上させるこの仕組みは、オニムシャザザミが非常に臆病であるからこそ、摂取した金属を次々に合成し甲殻に滲み出るようになっていいる。忘れがちだが護石も。

だが、近年はそうではない。

狂竜ウイルスによる凶暴性の強化と、野生の性である「敵を排他し生き延びる本能」の復活。

これらが合わって防御性より攻撃性に思考が偏ることで防御本能が変化し、器官に変化が訪れたのだ。

必要最低限の量で最大限の硬度を得る為に合金し、薄く硬く甲殻に

反映させ。

甲殻の量を減らした分の金属を、最も防御が低い箇所に戻す。薄れてきた防御本能が、防御を必要とする箇所に割り当ててくる為の身体へと作り変える。

ゲネル・セルタスを叩き潰したあの日から、オニムシャザザミは精神だけでなく、身体も突然変異級の進化を遂げていたのだ。

弱点である背中が開放されたことによって状況は一変。

シャガルマガラの翼脚。先端の鋭い爪が脚ごと折れたことで警戒心を一気に高めるシャガルマガラ。

ヤドが破壊されたことで露になった弱点だった物の変貌に気づかず、危険を知り急変するオニムシャザザミ。

地面から這い出てオニムシャを見上げた途端、ぼーっとしたまま動かなくなるブツチャー。

そしてオニムシャザザミは最大級の危険を体感したことにより、攻撃的本能をさらに刺激させ、更なるステップに移すことにした。

巨大かつ分厚い鋏を両手いっぱいに広げ、一気に鋏同士をぶつけあい、鈍い音を立てる。

ぶつかり合った衝撃は、ボロボロの甲殻全体に響き渡り、ひび割れを拡大させ崩れ落ちていく。

—そこから漏れたのは、これまでの鉱石とは違う金属めいた輝きだった。

—完—

第48話 「禁足地へ踏み込む者達」

シャガルマガラ討伐。このクエスト名だけでは、いかに難易度が高いかを知るには足りなさすぎるだろう。

何せ、鉄壁と名高いオニムシャザザミが狂竜ウイルス渦巻く天空山に闊歩している中、上位種のシャガルマガラを狩らなければならぬのだから。

オニムシャザザミの対応の為にバルバレも多くのハンターを集めたが、結果は全て惨敗。高い防御力に加え、ウイルスにより凶暴化しているから仕方ない。

もしシャガルマガラ一筋で狩りを行おうにも、気まぐれでオニムシャザザミが禁足地に脚を運んだらひとたまりもないだろう。

よってシャガルマガラ討伐に選ばれたハンター・ジグエはギルドに提案した。

同時狩猟も考えて、別件のオニムシャザザミ討伐に呼んだ3人のハンターと共闘させて欲しいと。

オニムシャザザミに詳しいとされる3人のハンターと同行することで、少しでも情報を得ておきたいとのこと。

さらに、上位シャガルマガラとオニムシャザザミを同時に相手にするのは4人でも厳しいが、4人もいれば生存率は上がるだろうと判断したからだ。

バルバレギルドはそれを承認した。討伐を優先したいとは言え、逸材のハンターをこれ以上失うわけにはいかないからだ。

3人のハンターは旧大陸出身で実力も高く、オニムシャザザミにも（ある程度）詳しいハンターとして、貴重な人材として扱っている。

本来ならユクモ地域で名を馳せている2人組に頼みたかったのだが、夫婦の事情を聞いて断念。おめでたとかなんとかか。

そして討伐当日。天空山上空に分厚い暗雲が立ち込める中、彼らは各々のクエストを果たしに出発する。

その日。2人は唐突に熱く語りだした。

「普通はこんなクエストを受注しろと頼まれたら断っていただろうが……敢えて言おう！受けざるを得ないと！」

「このクエストをクリアした暁には、私達は晴れてG級の仲間入りになるからよ！そして何より！」

「G級クエストではクック先生が未知の樹海以外で目撃できると聞いて！」

「……別にクック先生に会うんなら未知の樹海でもいいと思うんだが」

「だってあそこはお邪魔虫が多いんだもん！」

暗雲と雷鳴が轟く天空山でも夏の真昼のように明るくテンションの高い2人を相手に、何を言っても無駄だと再認識したダリー。

だがダリーもクック先生を愛している以上、彼らの言っていることに納得してしまうのだった。未知の樹海だとクック先生をじっくり観測できないし。

ゴールドルナ装備の弓使いミラージャ、アーティアS装備のガンランス使いドドル、ブラキS装備の大剣使いダリー。全てバルバレでの本気装備だ。

そう、彼らこそがクック先生をこよなく愛するクッククラブトリオであった。最近ミラージャとドドルがめでたく恋人になったとか。

現在はイヤンクックが頻繁に出るといふバルバレを活動拠点としており、ギルドクエストを中心に様々なクエストをこなしているベテラントリオでもある。

それに加え、彼らは何度かオニムシャザザミに遭遇したことがある。数度は採掘目当て、そして最も接近したのは王国接近時。

大人しかった時期とはいえオニムシャザザミとの遭遇回数が多く、それでいて多種多様なクエストをこなし生き延びてきたベテラントリオ。

シャガルマガラ討伐を依頼したハンターの要望に全て当てはまる、充分な助っ人であった。

つまり——彼らの受注したクエストは「オニムシャザザミ討伐」という、ある意味での死刑宣告だった。

「いやいやいや、死刑宣告は言いすぎだって」

ダリーは誰に言うつもりもなく手を高速で振って否定する——何に否定しているかって？それは言っちゃいけないえお約束ですぜ奥さん。

「この歳でまだ死にたくないわよ！せめてイヤンクック希少種が出てきてこの目で目撃するまでは！」

目に野望の炎を宿したミラージヤは力強く宣言し、直後に「超強くて格好良いクック先生が出てもいいのよ？」と謎のウィンク。

続けざまに同じくクック先生をこよなく愛するドドルが同意する。

「そうだそうだ！加えて俺は子供が出来るまで生き延びてーな」

「いいわねー！クック希少種の伝説を未来の子供達に語り継がないと！」

「未来に生きるのはいいが先にオニムシャを見つけからな」

盛り上がる2人を戒めるダリー。ミラージヤとドドルも慣れたもので、ダリーに忠告を受けた途端に静まり返った。「ちえー」と言っているが気にしない。

未来予想（いや、妄想か？）で盛り上がるのはいいのだが、時と場合を選んで欲しい。時と場合さえあれば自分も参加したいと考えているが。

彼らは今、天空山を支配しているというオニムシャザザミを探している真つ最中だった。

しかし2人のテンションを見ていれば解ると思うが、探せど探せどオニムシャザザミが見つからず、調査が難航していたのだ。

途中で彼らに絡もうとして退治された狂竜化ババコンガという不運な奴もいたが、それ以外は大きな問題は無い。いや狂竜化したイーオスがウジャウジャいる時点で問題なのだが。

そして天空山のエリアをくまなく探し、二週目に突入した頃。

「居ないな」

ドドルが確認し。

「いないわね」

ミラージャが頷き。

「じゃあ合流すつか」

ダリーが提案して2人が頷く。

こうなることは、事前に彼と行った打ち合わせ通りでもあった。

——
天空山のベースキャンプで、1人のハンターと1匹のオトモが居座っていた。

ゴアSシリーズに身を包んだ老人ハンター・ジグエと、ラギアネコ防具を着たアイルー・トラである。

1人と1匹はベッドの上に腰掛けていたが、トラは焦る気持ちを抑えるようにソワソワしているが、隣で石像の如くジツと待つジグエを見て再び動きを止める。トラはこの繰り返しだった。

バルバレギルドより上位級シャガルマガラの討伐を依頼された彼だが、目の前に禁足地への入り口があるにも関わらず、じつとベッドの上に腰掛けたまま。

しかしジグエは瞑っていた目を開き、ゆつくりと立ち上がる。向こうから足音が聞こえてきたからだ。

ベースキャンプへ歩いてくる3人の影。彼らこそジグエが待っていた、ミラージャ・ドドル・ダリーのハンタートリオであった。

「ご苦労さん。その様子じゃと……」

「うっす。オニムシャいなかったツスわ」

ジグエが労いの言葉を投げかけ、ドドルが気軽に挨拶を交わして結果を報告する。当初は年上という事で礼儀よく接していたが、ジグエの頼みもあつて敬語無しで話す事となっている。

彼らは事前に、ハンタートリオがオニムシャザザミを見つけられなかった場合、禁足地にいる可能性を考慮して、一度ベースキャンプにて合流するよう話し合っていた。だからこうして集ったのだ。

「といつとは……」

そしてこういった自体が生じた先の事を想像し、ミラージャは顔を

青ざめる。

「ふむ……どうやらこの先における可能性があるようじゃのお」

そんなミラージャに対し、ジグエは観念したかのように言葉を吐き、ドドルとダリーの背筋に冷たい物を走らせた。

先ほどから冷気のように漏れる狂竜ウイルスが、禁足地に根源が居る事を物語らせている。

そしてこの先にいるであろうシャガルマガラとオニムシャザザミに、ジグエを除く3人が妙なポーズをして絶句する。

「しかし静か過ぎて逆に不気味じゃがの」

そう……ジグエの言うとおり、禁足地の方角からは全くと言って良い程に音が聞こえてこないのだ。

もし上位シャガルマガラとオニムシャザザミが同一の場所に居ようものなら激戦になることは必須。だが激しい音は聞こえず、静かなものだった。

天空山を二〜三週してまで見つけれなかった3人組からすれば、オニムシャがここ禁足地に居るのは間違いないと思っっている為、その不気味さを改めて体感する。

「つまり……どつちかが倒されたって事になるんじゃないか？」

「あ……」

ダリーの囁きに納得するドドルとミラージャ。倒されたと聞いて思い描くのは……。

「行ってみれば解ることじゃ。それよりも準備せんとな……トラや、支度を」

「解ったニヤー！」

そんな3人組を放っておいて、淡々と狩猟の準備を始める老人とオトモアイルー。

持ち物点検、ミーティング、防具と武器のチェック……強大な敵の前に、ジグエは念入りに準備を行うのだった。

「流石爺さんハンター、渋すぎるぜ」

「けどこういってお爺さんに限って死亡フラグ多いのよね」

「おい馬鹿ども止めろ」

どこまでも緊迫した空気を苦手とし、緊張感をブレイクする。それがクツクラブカップルである。

念入りの事前準備を行ったところで、4人と1匹はついに禁足地へと足を運ぶ。

その後ろをチョコチョコとトラがビビりながら付いて来る。本来なら4人パーティーの場合オトモの同行は許可されないのだが、今回ばかりは特例である。

暗雲により周囲は暗く、初めて足を踏み入れたこともあって3人組は緊張気味だが、ジグエはその先頭を堂々と歩いていく。

しかしすぐに相手は見つかった——暗雲よりも黒い物体がそこにあつたからである。

まるで霧のように漂う黒いそれを、ジグエは以前見た事がある。シャガルマガラが狂竜ウイルスを纏っているものだ。

あれがあるということは、オニムシャザザミは……そう思っていた矢先。

「……ねえ、オニムシャザザミって角あつたっけ？」

「いや甲虫種じゃねえんだし、無いんじゃない？」

「だよね……じゃあさ、あの骨つてもしかして……」

ミラージャが震える手で指差した先を見てみると——そこには骨死体があつた。

四つの足があり、巨大な翼があり、翼には太い腕らしき骨があり、そして見覚えのある角を生やした頭骨がある。

まさか、とジグエはその死体の存在を一瞬でも否定したかった。その特徴的な骨は、明らかにシャガルマガラの物だったからだ。

ではあの黒い霧に居るは何なのか。そう思ったと同時に、黒い霧は風に流され、その影に隠れていた存在が露になる。

そこに居たのは——虹色に輝く蟹であつた。

虹色とは言うが実際には違う。金属質な輝きを放つ白を基調に、角

度を変える毎に様々な色合いと輝きを見せるといふ不思議なものだった。

恐らくは多種多様な金属が複雑に混ざり合った結果だと思われる。その輝きの一部に、貴重な鉱石と名高いレビテライト鉱石やフルクライト鉱石の色が混ざっていたからだ。

そんな不思議な光沢を持つ金属のような殻が、腕、足、体、鋏、そして背中と全身を甲殻種らしく覆っている。

しかし背中とは異質だった。体と同じぐらいの大きさを持つ巻貝のようなそれは、歪な配置で棘のような物を生やしていた。

そのアンバランスさはまるで不規則さを求めた芸術品のようにも見え、一種の美しさを醸し出している。タイトルをつけるとしたら「虹色の王冠」だろうか。

大きな鋏は軽くて丈夫な王様の盾のようである。

大地を踏み締める四つの足は立派な装飾を施した騎馬の脚のようである。

身の纏う甲殻は王族が纏う豪華な鎧のようである。

頭为天辺に上って仁王立ちしているチャチャブーの子は王の家来のようにである。

その蟹を知っている3人組はあまりの変りように驚いたし。

その蟹を知らない老人はあまりの美しさに絶句した。

かつてオニムシャザザミと呼ばれていた甲殻種は、冠^{カシムリガニ}蟹オウシヨウザザミとして、一回り小さくなって生まれ変わった。

それだけの話だ。

—完—

第49話「VS冠蟹・前編」

冠蟹^{カシムリガニ}オウシヨウザザミ。

度重なる狂竜化により身体の性質が変化し、古く分厚い表層部を排他することで得たオニムシャザザミの新たな姿。

様々な鉱石を超密度で合成と圧縮を繰り返して出来た虹色の甲殻が全身を包み、装甲が減った分だけ小さくなったのが特徴だ。

しかしこのオウシヨウザザミ、実は自分の体の変貌したことに全く気づいていない。

己の本質が攻撃寄りに変化したことで自然と防御性はなりを潜め、食らった鉱石類を無造作に甲殻へ反映させる量が減った。本蟹が知らぬ事の1つである。

その性質を最小限にすべく筋肉の表面を覆う甲殻の深層部にのみ集中させた結果、様々な甲殻と金属類が表層部の分厚い甲殻に圧縮され、深層部は超密度の甲殻となった。これも知らぬ事の1つ。

そして必要最低限となった防御本能は、表層甲殻へ滲ませる予定だった合金を、己の最大の弱点である背中に施し防御能力を向上させていた。これが最たる変化の1つ。

それらをオウシヨウザザミ自身は全くもって理解していない。人間がベッドを変えるなりして体が多少変化したことに気づかないのと同じだ。

しかし変化に気づかない最大の原因は先ほどの戦闘——天廻龍シャガルマガラから強烈な一撃を受け、ひび割れていた甲殻どころか背中のヤドをも粉碎されたことにある。

甲殻は気づいていたとしても、ヤドが破れたことで最大の弱点部位を曝け出したと勘違いしてパニックを起こし、全身の変化に気づく余裕が無くなったのだ。

ザザミ種にとってヤドで隠していた弱点部位が晒されることは死活問題。シャガルマガラを亡き者にしたのは——人間で言う「キヤー！エッチャー！」と同じ心境であった。

シャガルマガラが死亡したことで一時的に安心感を取り戻し、食す

事で落ち着く事には成功したが——それはあくまで一時的でしかない。

背面故に新たな甲殻で覆われていることを知らず、今も弱点部位が曝け出していると思い込んだまま。

オウシヨウザザミが外敵であるハンターと遭遇した途端に凶暴化したのは、ある意味で必然であった。

ドドル、ミラー ज्या、ダリー、ジグエ、そして特例として参加したオトモアイルーのトラ。

禁足地に足を踏み入れ大きく変貌したオニムシヤザザミと対峙した途端、彼は猛然と襲い掛かってきた。

未知の姿を曝け出したことで、今までの常識が覆されるかもしれないという不安が過ぎる3人のハンター。ジグエは年甲斐故の肝っ玉でなんとかなったが。

しかし、その予想はある意味で覆された。

——ガイנטツ！

「ドグバツ!?!」

素っ頓狂な叫びを上げたとはいえ、ドドルはガンランスによるガードで一撃を食い止めることに成功し、大きな衝撃を受けつつも後方へ跳ぶだけに留めた。

アーティアSと彼が持つ護石に宿る「ガード強化」と「ガード性能+2」による効果も大きいが、ドドルが素っ頓狂な声を上げるほどに

——オウシヨウザザミの一撃は軽かったからだ。

しかし考える暇はない。オウシヨウザザミは追撃を仕掛けんと、小柄になった分、前回遭遇した時よりも格段に増したスピードでドドルに迫る。

だが横からミラー ज्याによる弓攻撃がヤドに当たる部分——甲殻で覆

わかれて傷一つ負わないが——に受けたことで目標を変化。弱点を攻撃した者に容赦はしないとばかりに先ほどよりも速度を上げ、ミラー ज्याに向け走る。

セカセカと動くオウシヨウザザミを見て夜中Gに遭遇した時に似た悪寒を感じたミラー ज्याだが、前で大剣を掲げ己の盾となつてくれるダリーを信じ尚も弓を射出。

カンカンと甲高い音を立てて弓を弾きつつ、一回り小さくなくても尚大きな鋏を振り上げ、目の前に立ち塞がるダリーの大剣を押し折らんと鋏を振り回す。

その鋏による攻撃をガードで容易く受け止め、僅かな隙を狙ったダリーはガード姿勢から強引に大剣を振り上げる。

——ゴガッ！

(手応え——あり！)

ダリーは体で感じ取った意外な事実にも目を丸くしつつも大剣を握ったまま横転、鋏による追撃を回避する。ミラー ज्याもそれを見て弓を畳み、背を向けてダツシュ。

ちよこまかと動くターゲットが二つ。鋏で防御姿勢を取りつつキョロキョロと見渡す中、頭上のブツチャーがキーキー鳴いて飛び降りる。

ダツシュで逃げるミラー ज्याはブツチャーが追うと解り、オウシヨウザザミは足元をすり抜ける人間に狙いを定め出す。

しかしそれも頭上からの攻撃——ゴアS防具に身を包んだジグエの操虫棍による叩き付けがヒットしたことで怯んで止まる。

ジグエは好機とばかりにオウシヨウザザミにしがみ付き、懐から？ぎ取りナイフを取り出そうとするも、オウシヨウザザミはそれを許さないとばかりに暴れ出す。

脚を伸ばして体を上げたり降ろしたりを繰り返したり、縦横無尽に体を揺らしてハンターを振り落とそうとする動きを前に、ダリーはギャグマンガみみたいに踏んだり蹴ったりされぬよう必死で逃げる。

ジグエは全身を使って頭頂部にしがみ付くも、オウシヨウザザミはしぶとく暴れている。このスタミナから見て、シャガルマガラの亡骸

を食らったのは事実なのだろう。

それでもジグエは多くのモンスターの乗りに成功した経験を持つ。体力こそ衰えているものの、引っかかりや出っ張りを掴むなどして工夫してしがみつけていた。

オウシヨウザザミが大人しくなったのを見計らい、すぐさま？ぎ取りナイフを振りかざして突き刺そうとし――

―ガスツ！

刺さりはした……したのだが、動かない。切っ先が入っただけで、それ以上入る気配が無いのだ。

硬質だけならモンスター1と言っても過言では無いバサルモスの甲殻ですら切り裂ける？ぎ取りナイフが通用しない。

事前に懸念されていたから動揺こそしなかったが、ジグエは少なからずドツキリした。

だからだろうか、オウシヨウザザミの全身から黒い靄のようなものが溢れ出ていた事に今更ながら気付き、咄嗟に飛び降りてしまう。

ジグエはオウシヨウザザミの後方へ飛び降りた為にオウシヨウザザミは気づいておらず、飛び降りた後も暴れに暴れまくる。

黒い靄――狂竜ウイルスと思われる物が体に浴びていない事を確認した後、広がりつつある靄から逃げんと走りだす。

黒い靄がオウシヨウザザミを覆うも本体は靄の中から動かないように、チャンスと見たハンター全員は距離を取りつつ集結。

トラはなんでかチャチャブーの子と激戦……という名の一方的なイジメに発展していた。まあトラは強い子だから、チャチャブーに弄られても大丈夫だろう。

その間に4人は、これまでの戦いでそれぞれが学び体感したことを報告する。

「ふむ……聞いていた話とは随分違うのお」

仕方ないだろうが、とジグエは後付けする。

ジグエはクツクラブトリオだけではなく、オニムシャザザミと直接対峙したことのある2人のハンターから手紙越しで情報を集めていた。

分厚い甲殻による重い一撃、様々な状態異常攻撃を得意とするこ
と、護石を取り込んだことで追い込む度に変化する性能、地中からの
奇襲。

聞ける限りの情報を取り込み、オウシヨウザザミが攻撃的になつて
いるにも関わらず、上記の攻撃はあまり仕掛けてこない。

攻撃方法は似通っているとはいえ、格段にスピードが上がり、一撃
一撃が鋭くなっていることは認めよう。事実、何度か痛い一撃を貰っ
てしまった。

しかしジグエは健在だ。回復薬で応急手当を施しているとはいえ、
あの蟹の一撃を受けて致命傷にならなかった理由は――。

「あいつ、一撃が随分軽くなったな」

ガンランスという武器を扱っているからこそ、何度もオウシヨウザ
ザミの攻撃を盾で受けることになったドドルが囁く。

そう、オウシヨウザザミは一撃が軽い。だからこそドドルに限ら
ず、ガードスキルを持たないダリーの大剣ですら防げたのだ。

オニムシヤザザミは分厚い装甲を生かした防御力を持つが、その硬
度や重さは攻撃にも転じられ、一撃が強大なものとなっている。

攻撃力のソースとなっていた甲殻が大分剥がれたのだから、一撃が
軽くなるのは当然といえば当然だろう。

「だが桁違いに硬えぞ。手応えはあつたが、この装備のスキルが発動
してアレだから相当な」

しかし「軽くなった」弱くなった」というわけでは無いと伝えるべ
くダリーが言う。

ダリーの防具はブラキSシリーズで統一されており、己の危機や威
圧を感じると高い身体能力を引き出す「底力」や「挑戦者」といった
攻撃的なスキルが多い。

パニック状態のオウシヨウザザミが常に怒り続けていることで、現
在のダリーの攻撃力は桁違いなものになっており――それをオウ
シヨウザザミの甲殻は容易く受け止めたのだ。

甲殻は非常に硬いもので出来ているようで、薄い甲殻故に武器が弾
かれることはないにしても、良い素材で出来た大剣ですら傷が全く付

かないという。

？ぎ取りナイフですら切っ先しか入らないのだ。その防御力はむしろ強化されたといっても過言では無い。

さらにいえば、軽くなった分だけ素早くなり、純粋なパワーで勝負してくるといふことにも繋がる。

硬度が増して軽くなった甲殻故に動きは素早い。その性質は旧大陸の地中深くに生息する甲殻種と酷似しているのだが、彼らが知る由は無い。

そしてガード関連のスキルを持つことで並のハンターよりは防御力があるドドルを、呆気なく吹き飛ばすほどのパワー。もし以前の分厚い装甲がある状態で殴られたら即死だったろう。

この攻撃が以前よりも素早く、そして連続で繰り出すようになったのだ。移動速度が増したこともあり、油断はできない。

「それより厄介なのはあのチャチャブーよ！ほんつと邪魔！」

そんなことよりも、と言わんばかりにミラージャがヒステリックを起こす。漫画みたいに膨れたタンコブが印象的だった。

とにかく邪魔なのが、オニムシャザザミの頃から居付いているというチャチャブーの子供だ。

チャチャブーに漏れず知能が高いらしく、遠距離からチマチマ攻撃するミラージャや、同じ獣人族であるアイルーに狙いを定め邪魔を仕掛けてくる。

しかも鳥兜のようなお面が硬く、物凄いタフな為は何度追い払おうとも一定時間後には復活し、不意打ちのように邪魔を仕掛けてくるのだから性質が悪い。

さらにこのチャチャブー、オトモアイルーよりも便利な点がある。それはモンスターをも鼓舞するダンスだ。

チャチャブーがオウシヨウザザミの頭頂部でダンスを披露すると、オウシヨウザザミはやる気が上がったのか途端に張り切りだす。

やっとスタミナが減って疲労状態化と思えばチャチャブーのダンスでリセットされ、ガンナーが足を止めれば猛然とチャチャブーが迫る。厄介なことこの上なし。

「しかし何よりも厄介なのは……」

ジグエは表情を歪ませる。その視線は空を見上げ——その直後。

—ガゴンツ!

彼ら4人の目の前にオウシヨウザザミが落ちてきた。黒い靄の中で跳躍し、ここまで跳んできたのだろう。

「なんでパニック状態になっておるのかのお」

そうノンビリと言った後、4人は猛烈な勢いでダツシユ。

陥没していないのでそのままオウシヨウザザミは跳躍し、逃げる4人のハンターを追うようにしてジャンププレスを繰り返す。

跳んで、踏む。それを逃げながら繰り返すのだから、3人のハンターはギャグを挟むことなく恐怖心に駆られて走り続ける。

ハンター達にとつての謎であり、彼らが撤退できない理由。それは「オウシヨウザザミが何故暴れているか」ということ。

そもそもオウシヨウザザミ——元オニムシャザザミがターゲットとなつた理由は「狂竜ウイルスにより凶暴化し暴れること」にある。狂竜ウイルスの根源であるシャガルマガラが死亡しているのならウイルスは自然と無くなり、ザザミも大人しくなることだろう。大人しくなりさえすればターゲットとする理由がなくなる。

しかし現在のオウシヨウザザミは狂竜ウイルスに汚染された様子は無い。汚染されたモンスター特有の「黒いオーラ」が漂っていないからだ。

もし狂竜化とは関係なく、本能としての凶暴性が増して暴れているのなら、今後もギルドはこの蟹を討伐対象として捉え続けなければならない。

だがこのオウシヨウザザミの場合、外敵を攻撃する理由が違って見える。好戦的或いは徹底的のではなく、まるで怯えているが故に暴れているようだからだ。

特にハンターの誰かが後ろへ回りこもうとすれば瞬時に振り向いたり跳んだり、背後を特に気にしている事がこれまでの戦いで解っている。

兎に角、オウシヨウザザミの本質を見極める為にも戦う必要が出て

きた。

変化したとしても日が浅いはず。だからこそここで戦った方がよ
り情報を得られ、かつ生き延びる可能性が高いと踏んだからだ。

それは3人組も解っているらしく、ザザミの連続ジャンププレスが
止まったのをキツカケに再度武器を握り、構える。

どこまで戦えばいいのかと考えたが、これまで同様、ギリギリまで
粘って戦えばいい。そう判断したが故の、覚悟だ。

しかし向こうも負けてはいない。トラをケチヨンケチヨンにした
チャチャブーが鋏を構えるオウシヨウザザミの頭頂部にのぼり、気合
を入れるべくダンスを踊る。

カツンカツンと鋏同士を打ち付けて威嚇し、ハンター達を見据える
オウシヨウザザミであったが——ここで変化が起こる。

背中に背負っていた巻貝の棘が輝き出し、白を基調に虹色が混ざる
オウシヨウザザミの甲殻が変質しだしたのだ。

甲殻は白からゆつくりと赤に染まっていき、鮮やかな鮮血で染めら
れたような全身が露になる。

そして再び鋏を打ち鳴らし、地面に叩きつける。これは攻撃という
よりは相手を威嚇しているつもりなのだろうか？

——護石による能力変化。

ジグエとクツクラブトリオが、オウシヨウザザミの変色する様を見
て思い出した情報。

まだまだ隠しているであろうオウシヨウザザミの本気を死なない
程度に引き出す為、ハンター達は尚戦いを挑み続ける。

だが、ここで更なる変化をオウシヨウザザミは見せ付ける。

先ほど食したシャガルマガラに含まれる「狂竜の力」。ゴア・マガラ
時には鱗粉として流出したそれは体内または外皮に滲み出るもの。

それを骨や爪・角を除いた肉質全てを食したオウシヨウザザミに全
く影響が無いかといえば、当然NOと言える。

そしてオウシヨウザザミが進化しても、体内に毒素を蓄積し、それ

を貯蔵する器官は健在。故に本能は体内に蓄積した狂竜ウイルスを毒素として認定し、蓄積した。

大事な大事な弱点部位を守る為、強敵と定めたオウシヨウザミは狂竜の力をわが身に宿し、黒く変色するのだった。

第50話「VS冠蟹・中編」

まるで日が経過し黒色化した血のように赤黒く染まったオウシヨウザザミ。

弱点である背部を覆う巻貝の至る箇所にある棘らしき物——護石の効力が滲み出て赤く染まり。

シャガルマガラを食したことで分泌された「狂竜の力」が体中を巡る体液に流出したことで黒く染まった。

人間としての狂気ではなくモンスターとしての狂気を物語るような異様に、ハンター達は後退りせざるを得ない。

彼らも幾度と無く狂竜ウイルスを体感したことにより、その恐怖を理解している。体を蝕むようなあの感覚は、悪夢にうなされる時よりも酷い嫌悪感があるからだ。

しかし。狂竜化したオウシヨウザザミ自身は理性を削がれたわけではない。

元々の知性が高いわけではない。長期間に渡り侵食された結果ウイルスに耐性を持つようになり、体内に蓄積されたそれを適量だけ流出したことにより理性を保てるからだ。

頭頂部にジグエが乗り掛かった時に噴霧した狂竜ウイルスは、体内に巡らせる物が一部流出した、いわばガス漏れのようなもの。意図して出したわけではない。

オウシヨウザザミの体内は長きに渡り侵食されたことで、狂竜の力は毒素として認識しているが、それは己にのみ使える毒素と思いついでいるのだ。

オウシヨウザザミは、この狂竜化の力を用いて己の攻撃本能を刺激させているのだ。だからこそ殻に滲み出た護石も反応を示し、早々に効果を発揮できる。

能力アップはもちろんのこと、防衛本能ではなく攻撃本能を剥き出しにして戦う。

守る為の戦いではなく倒す為の戦い。両者の違いはモンスターが

示すとなると解りやすいほどの違いを見せ付ける。

オウシヨウザザミが跳んできた。高さは無いが走り幅跳びの如く勢いをつけて。

狙いはジグエ。先ほどから彼が放つ猟虫が視界を邪魔してくるからイラついているのだ。

「はっー」

しかしジグエは操虫昆を地面に突きたて、強引に体を浮かしてオウシヨウザザミを飛び越える。

確かに勢いは早かったが、数多くのモンスター突進や跳びかかりを経験してきたジグエにとって充分に捕捉できた。

そのままオウシヨウザザミはガリガリと地面を削って滑るも、身を屈ませて一気に跳び、空中で身を捻って方向転換して着地。ハンター3人を視界に捉える。

唯一捉えられないのは、オウシヨウザザミの攻撃範囲外から狙撃を続けているミラージャだ。

とはいえスピードも迫力も先ほどとは段違いな為、距離が離れているからといって油断はしない。こちらへ敵意が向けば即座に弓をしまい、猛ダツシユで逃げる。

ちなみにブツチャーが襲い掛からない理由は、「筆頭オトモは挫けないニヤ！」と張り切っているアイルー・トラが尚も挑み続けているからだ。頑張れトラ、ブツチャーの妨害行動阻止は君の手に掛かっているんだ！

かといって、剣士組だって必死になってオウシヨウザザミの動きを見極めようとしている。

ブツチャーの妨害が減った分だけ対処はしやすいものの、オウシヨウザザミの動きに切れが入ることで一撃一撃に恐怖を与えてくる。

まずは攻撃力の増加。攻撃力というよりは怪力という表現に近く、地面に鉄を振り下ろしただけで周囲に地震を起こし、間髪入れず次の一撃を振り回してくる。

次に跳躍力。走ることですらもどかしいと思ったのか、オウシヨウザザミは大中小関係なくジャンプを繰り返してハンター達に接近する。

そして遠距離攻撃。毒水を霧状に噴射したり、薄めた麻痺毒を細い線を描くようにして噴射したり、滞空する睡眠毒の霧を撒き散らしたりと種類が豊富だ。事前に身構えて小刻みに震える、という動作があるのが救いだらう。

だが赤黒く染まったオウシヨウザザミの何が怖いかといえば、その積極性にあるだろう。

考えても見て欲しい。ティガレックスやジンオウガ以上にドス黒く染まった多脚生物がジグザグに跳びながら迫ってくる様を……恐ろしいったらありやしない。

単純な強さを誇るラージャン、踏み抜きながら迫るイビルジョーとは違った恐怖をハンター達に味あわせ、必死になって逃げるといふ選択肢を強いてしまう。

故にハンター達は正面を避け、なるべく周りこむようにして動くのだが……理由はそれだけではない。

モンスターが攻撃性を見せる原因は様々だ。獲物を狩る、縄張りの主張、雌を巡る戦い、好戦的または本能的な排他など……その原因は、モンスターを狩れば狩るほど解ってくる。

そして戦っている中でジグエは、このオウシヨウザザミが暴れている原因が「何かを隠す為」ではないかと考えた。

オウシヨウザザミはハンターが背面へ周りこもうとするだけでもジャンプして逃げようとする為、背面に何かあるのではないかと勘繰ってしまう。

だから、まずオウシヨウザザミの背中に一撃食らわせてみる。それを目的に何度も背面へ周りこんだ。

しかしそう上手く行かないのが世の中っていうものでして。

―カキン

「ぬ」

―ガツンツ

「ぬおっ」

―スカッ

「ありゃ」

―キキキキキン

「やつぱり」

一番手はジグエ。巻貝らしき背中に操虫昆の先端が命中するものの、弾かれる。

二番手はドドル。アドミラルパルドと呼ばれる鉱石で作られたガンランスの切っ先が入らない。

三番手にダリー。大剣は動作が遅い為、振るう頃には避けられるのが大半だった。一撃は重い為、4人の中でも確実にダメージを与えられるが。

最後はミラー ज्या。どれだけ集中しても矢を簡単に弾いてしまう。せっかくのユミ【凶】の連射も弾かれては意味が無い。

そう、軽い一撃だとオウシヨウザザミは攻撃されたことですら気づかないのだ。

素早く背後に周りこんで一撃を与えてもすぐに方向転換して攻撃することから、オウシヨウザザミは背面から攻撃を受けても平気になった、と解っていない様子。

もしこのまま放っておけば、通りすがりのアイルーですら「さーちあんどですとろい！」と言わんばかりに猛然と襲い掛かるだろう。

しかしハンターの中で、オウシヨウザザミに有効な一撃を持つのはダリーののみ。それもあの硬度に気づくほどの威力を与える、となれば溜め攻撃ぐらいだ。

「なあ、後ろからドーンって出来るか？」

「出来たらやつてるだろ」

「真空波とか出せたらいいのにねー」

「俺を狩人じゃなくて超人にさせたいのかお前は」

ガッツンガッツンと鉄同士をぶつけあって威嚇するオウシヨウザザミを前に、クックラブトリオは久々に漫才を繰り出す。

そうでもしないとこの先やってけるか、という意味もあるだろ

う。狩猟時間は残り半分を切っており、下手をすればこの状態のままのオウシヨウザザミを置いて逃げなければならぬ。

そしたらこの蟹がどこまで暴れるものか解ったものではない。ハンターである以上、命が絡めば諦めも肝心だが、お人好しでもある三人組は他者の為に頑張ってしまう性質なのだ。

そして、この老ハンターとオトモアイルーも同じ。

「どーにかして奴の動きを見切らねばならぬ。その為にも、避けて避けて避けまくって、観察しまくるぞい」

息は荒いが、それ以上にやる気に満ち溢れた眼でオウシヨウザザミを睨みつけ、操虫昆を持って構えるジグエ。

アイルーのトラも、傷だらけタンコブだらけになりながら凜々しく仁王立ちしているではないか。

自分達よりも年上のハンターがそういう姿を見ると、不思議とホっとしてしまう。まだやれる、という気合が彼らにも伝染するかのよう

に。
4人と1匹がそれぞれのスタイルで武器を構えると、威嚇していたオウシヨウザザミが右の鋏を振り回し、空を切る。

まさか真空波が!?!と身構えるミラージャだが……何も起こらない。今の動きになんの意味が……。

「いや、意味はあった。

「な、なんだこりゃ?」

ドドルの体に何かがぶつかり、防具の関節部に挟まったようだ。

慌てるドドルと身構えたミラージャを置いて、囨となったジグエとダリーをオウシヨウザザミが追いかける。

それを良い事に何が挟まったのかと慌てて取り出した所。

「……護石?」

ドドルの手の平に収まる、形こそ無骨なそれは、紛う事なき加工前の護石。

なんでこんなものが?ジグエとダリー、そしてトラがオウシヨウザザミとブツチャーの相手をしていることを良い事にミラージャと一緒に眺めていた。

「ぬ!?!」

この時、ドドルに電撃走る!

「うおおおおおお!」

そして何を思ったのか、其の場で武器を研ぎ始めた!

「研ぐのが早くなった!」

そして研ぎ終わる!

「はいー!?!」

あまりにも早く終わった研ぎ研ぎタイムに驚くミラージャ!

「漫才なら後からにしろ!!!」

ダリーの突っ込みは防戦中でも健在であった。

だが、オウシヨウザザミの鋏から放たれた護石の欠片が、この戦いの鍵にしてオウシヨウザザミのもう1つの特徴を示すことになる。

それを知るのは、もう少し先。

—完—

第51話「VS冠蟹・後編」

スキル——それは、モンスターの鱗や皮などを素材として作られた防具や装飾品などに宿る、不思議な力だ。

不思議な力というのが、防具であればハンターに能力を及ぶ理由をある程度なら理解することができる。

例えば重厚かつ堅牢な甲殻を持つグラビモスの素材を使った防具なら、ガード性能が重さによってフォローされ、逆に重い防具故に鈍足となる可能性も有る。

例えばゴム質の皮で身を覆われた毒使いゲリヨスの素材を使った防具なら、絶縁性に優れた毒を通さない皮で包まれている為に毒への耐性が上がる。

素材が上位種のものであれば硬度と性能は上昇し、場合によっては下級装備にはなかった性能が身につくこともある。故にハンターは上を目指せば目指すほど、上位種の素材で作られた防具を求める。

もつとも、どうして砥石を研ぐ速度が上がったり回復薬の効能が周りにも効くんのだよと言われたら、「解らん」としか言いようが無い。

しかし、防具を身に纏っているからといって容易くスキルが宿るわけではない。スキルとは各種防具に振り分けられている「スキルポイント」という数値が一定以上ないと発動しないからだ。

このスキルポイントというのは過去に大勢のハンターや職人が結集して定めた数値のようなもので、現在は多くの鍛冶職人が防具を作る際、どのようなスキルポイントが生じるかを教えてくれる。

そして——スキルの発動は、防具や装飾品、護石などを着込んだ際に直感で理解できるらしい。

「見ろよこの研ぎ速度！」

——シャツシャツ、ピカーンッ

「確かに速いな——けどそれは後回しにしやがれ！」

ドドルが自慢げに武器を研ぐ様子を見ていたダリーは、オウシヨウ

ザザミの鋏を大剣で受け止めている真つ最中だった。

ギリギリと上から押し潰してくる力に何とか抗えているのは、彼のスキル「火事場+2」のおかげだ……つまりはちよーピンチ、ということでもあるが。

このまま押し潰してやろうかと力を込めるオウシヨウザザミだが、突如として目の前で電撃が弾けた為に怯んでしまう。

その隙にダリーはドドルを八つ当たりで蹴飛ばして脱出。それを助けた電撃の正体は蝶のような虫——ジグエが放った雷属性の猟虫だ。事前にマーキングしておいた甲斐があったというもの。

眼前でバチバチと弾ける虫が纏わりつくことで怯え出したオウシヨウザザミは、鋏を構えて目の前を閉ざし、そのまま後退。小規模の雷とはいえ眼前で弾けると怖いものだ。

猟虫による陽動が通用したとわかったジグエは操虫昆を使って音を鳴らし、オウシヨウザザミをこまめに誘導する。

マーキングが切れるまでの間、行つては帰つてのヒットアンドアウェイを繰り返し、オウシヨウザザミの意識を猟虫へと移すことに成功した。

「お二方、危険じゃが時間もないのでな。至近距離で散開して攪乱しますぞ」

ジグエは正座させたドドルを叱るダリーを尻目に声をかけ、遠くで獣人族2匹の喧嘩に巻き込まれているミラー ज्याにも手を振って呼びかける。

たつぷりと叱つて精神的にも余裕を持たせたダリーは、懲りた様子の無いドドルを連れて前線へ復帰。弓使いというだけあつて回避テクに自信のあるミラー ज्याも参加する。

4人はオウシヨウザザミの懐に飛び込むようにして散開。

足の隙間に潜り込むような回避は無いものの、周囲をウロチョロとされてはオウシヨウザミも困るといふもの。幾ら機動性に富んだ甲殻種でも四方八方、しかも時に猟虫のめくらましがあつてはターゲットを絞ることが出来ない。

攻撃を滅多にせず回避を優先するから広範囲も空振りだし、かと

いって油断していると頑強ではあるが細身である足をジグエが狙ってくるし、大振りの攻撃を仕掛けようとすれば猟虫が目の前を遮る。なのでオウシヨウザザミが出来ることは「ガードを固めつつ常にチョコマカ動くこと」ぐらいだ。鋏を閉じて目の前を塞ぎ、忙しなく足を動かして細かい移動を繰り返す。気の長くなるような防戦だが、オウシヨウザザミも弱点を守る為に必死なのだ。

このため、オウシヨウザザミは己に作用していた狂竜の力と護石の力を抑え、元の防御本能を開花。隙あらば倒してやろうという野性味を残しつつ、己を守る為に地道に防御を固めるのだった。

―ちなみに獣人族2匹の戦いだが、何故かボクシングごっこに発展していた。ジャブ、ジャブ、ロー！ワンツーワンツー、ストレート！

それは置いておいて、4人はオウシヨウザザミの攻撃を制限する為に回避を優先するも、至近距離まで近づけたからか各自の意見を述べていた。

「さっきの護石の欠片さ、すつげー強力なもんだぜ？だって砥石高速化が発動したんだからよ」

「あ、私も護石飛ばし食らったんだけどさ、私の場合はちよーつと氷に弱くなったって感じがする」

「ふむ……」

すぐそこに大型モンスターが迫っているというのに、基本避けるようにしているからか若干の余裕を4人は持っていた。年老いてもふざけていても流石はベテラン、ということか。

先ほどオウシヨウザザミが振った鋏から弾き出された護石の欠片。あれは地味に面倒なものではないかとジグエとダリーは考えている。

ドドルのアーティエスは研ぐ速さが低下するスキル「砥石使用低速化」がギリギリ発動するかしないかという数値だった。その数値を覆しプラスへと発展するとなれば、この欠片だけでどれだけのスキルポイントが詰まれているというのだろうか。

かと思えばミラー ज्याの当たった護石は「ちよーつと氷に弱くなっ

たつて感じ」と言えるぐらい、微妙に氷耐性にマイナスが振られたのだらう。飽くまで「氷耐性弱体化」が発動したわけではない。

ダリーはこの現象―仮に「護石やられ」としよう―はランダム性が多すぎる、ある意味で一番厄介な症状として考えている。とりあえずドドルが得た物は大きいからよかつたものの――と考えたところへ。

「ダリー殿、これを」

オウシヨウザザミの振り下ろした鋏を避けて近づいたジグエが何かを手渡し、それを咄嗟に受け取ってダリーはオウシヨウザザミから距離を取る。

受け取ってから気づいたが……ハンターとしての経験と直観が、この護石の欠片から大剣に関わる力が備えていると理解できた。それをよく知ろうと手に握る護石に意識を向けた。

「お主なら『集中』できるじゃろ？」

「……もちろん」

集中――オウシヨウザザミに決定打を与えられる大剣の溜め攻撃、その溜め時間を短縮できるスキル。

ダリーは意図を瞬時に理解し、ハンドサインで他の2名に指示を送る。それに頷き、ドドルとミラージャは2人の元へと駆けつける。

ハンターが一箇所に集まったのを良い事に、纏わりついた事へのイラつきもあつてかすぐさまオウシヨウザザミは身を赤黒く染め、威嚇……というよりは殺る気を見せ付けるようにして鋏を広げて接近。

ゴニヨゴニヨコチョコチョコとミラージャとドドルに耳打ちしてジグエと練った作戦を説明すると、クツク馬鹿ツプルはサムズアップで応じた。

「行動開始―」

ダリーが合図を送るとドドルは離れ、ミラージャ・ダリー・ジグエの三人は固まって武器を構える。

オウシヨウザザミはどちらかといえば固まっている連中を一纏めに叩き潰したいと思っているのか、両手の鋏を広げて接近。

動きが速いことは理解していたが、ミラージャは咄嗟に弓を構え、

オウシヨウザザミの顔を狙い打つようにして発射。オウシヨウザザミはそれに対し、広げていた鍔を合わせることでガード。

そのままミラージャは連続で矢を発射してオウシヨウザザミの視界を塞ぐ。その隙にジグエは操虫昆から発射したマーキング弾が鍔へ着弾したのを確認すると、ドドルが行った方向とは反対の右斜め前へ移動する。

視界を鍔で塞がれているからかオウシヨウザザミは気にせずこのまま体当たりしてやろうとするが——ここで足を止める。

急ブレーキを掛けたからか慣性の法則に従って後ろ半分が軽く浮くものの、脚が着地した途端に折り畳まれ、一気に跳ぶ。

オウシヨウザザミが跳んだことで見えた先には、先端から火を吹かすガンランスを構えたドドルの姿が。オウシヨウザザミは僅かな熱源を背面から感じて、緊急回避を繰り返したのだ。

ミラージャ達までの距離はあった為に竜撃砲は空振りとなるが、そこへ即座にオウシヨウザザミが振ってくる。鍔を身構え、攻撃しようとしたドドルを襲おうとするが、鍔にジグエが放った猟虫が纏わりつき、ちよつかいを掛けられた事で気がそれる。

ここまでは作戦通り——ミラージャは回避の為に反転したオウシヨウザザミを見てほくそ笑む。

危機察知も強化されたのか、オウシヨウザザミは後ろから強烈な一撃（竜撃砲など）が来ると解り、背面を守ろうと跳んで逃げ、空中で反転する癖がある。

今まではその強度故に通常の攻撃では刃が立たず、攻撃認定させてもらえなかったが、竜撃砲は別だった。だからこそ、ジグエが幸運にも回収できた『集中』の護石を使ってダリーに素早い溜め攻撃を行えるようにし、前後から同時に一撃をお見舞いする。

オウシヨウザザミの癖も相まって、今のタイミングなら確実に大剣の溜め攻撃が当たるはず——そう思っていた。

—グギユルル……

「……腹が減って動けねえ」

「あんたはボケ役じゃないでしょお!？」

なんとということか。ダリーも護石やられが生じており、それがよりにもよって『腹減り倍化【大】』だったなどは。

盛大に腹の虫が鳴った途端にダリーはへたり込む。空腹とは言わなくても、スタミナを消費する大剣の溜め攻撃は発動できないようだ。

ミラージャがへたり込んだダリーを起こそうとした時……ズウン、と音と振動が響く。

そこには、不発とはいえ一時は溜めを行おうとしていた事を察知して振り返ったオウシヨウザザミが、今まさに鋏で薙ぎ払おうと身構えていた所であった。

「ぬおおおおおおお！」

ジグエの叫びが轟く。殻が向けて一回り小さくなったオウシヨウザザミの高くはない体長を、操虫昆を使ったジャンプで跳び越えたのだ。

ギリギリオウシヨウザザミを跳び越え、自然落下でオウシヨウザザミの眼前に姿を現す。

突如として塞がれた視界に驚いたオウシヨウザザミは、眼前に現れた障害物を排他すべく、ミラージャとダリーを狙うべく振った鋏をジグエに向けた。

——ドグシャツ！

鋏の一撃をモロに受けた身体から嫌な音を立てて、ジグエは吹っ飛んだ。

「爺さんー！」

ゴロゴロと地へ転がるジグエを見たドドルは叫び、その叫びに呼応するかのようにジグエはすぐさま態勢を立て直した——右腕を抱えて。

立て直したといっても操虫昆で支えていながら苦しげだし、今にも倒れそうな程にフラついている。あれでは戦うのも怪しいだろう。

いや、それよりもオウシヨウザザミだ。ドドルは放った直後だから

竜撃砲は使えないし、ダリーはまさかのスタミナ切れ。

ダリーに肩を貸して逃げようとするミラー ज्याを、オウシヨウザザミが逃すわけがないだろう。己に背を向けたまま、オウシヨウザザミはミラー ज्याを追いかけていく。

必殺の一撃は両者とも尽き果て、ジグエは再起不能に追い込まれた……万事休すとはこのことか、とドドルは真摯に敗北を悟った。

——しかし。

「筆頭オトモはあああ——」

—ダダダダダ

「挫けないニャアアアアア!!」

—カアアアア

ラギアネコアンカー。オトモ武器の中でも優秀な雷属性を持つ、ぽかぽか村の漁で採れた海竜の端材から作られた武器。

そして筆頭オトモが「師より受け継ぎし槍さばき」と自慢げに語る、かつての師である筆頭ランサーを見習って編み出した必殺技。

アイルーとは思えぬほどの突進力から繰り出されるジャンプ攻撃に、オトモ武器で1・2を争う雷属性を持つラギアネコアンカー。

それらが合わさったトラの最高の一撃が、オウシヨウザザミの背に……そしてオウシヨウザザミそのものに届いたのだ。

バチリと背面から伝わる電撃と硬い何かがぶつかったような衝撃に、オウシヨウザザミはビックリと反応を示して急停止。

突如として止まったオウシヨウザザミを見たミラー ज्याとダリーはどうしたのかと振り向き、筆頭オトモの一撃が当たったのを見たドド

ルは口をあんぐりと開き、筆頭オトモことトラはあまりにも硬かった為武器越しに手が痺れてしまったようだ。

誰もが動きを止める中、動く影があった。トラのストレートパンチをドテツ腹に食らって気絶していたはずのブッチャーだ。

「大丈夫でヤンスか!？」と言わんばかりにオウシヨウザザミの王冠のような背に昇り、カンカンと杖で叩いて反応を確かめる。

そのブッチャーの行動が目覚ましになったのか、オウシヨウザザミは動きだした。戸惑っているように、忙しなく、そして何度も後ろを振り返りながら。

カンカンとブッチャーが杖で背面を叩くことによって、オウシヨウザザミは自分の背の異変によく気づきだしたようだ。

もしかしてと思い、オウシヨウザザミは足を大きく伸ばし、背を地面に向かって何回か打ち付ける。軽くとはいえず、ウラガンキンが地面に叩きつけるような音と衝撃が地面に走る。

オウシヨウザザミは自分の背を視覚で確認できないためにこのような行動を取ったのだが、どうやら背中が硬い何かで覆われていると理解したようだ。

それが理解した途端、攻撃性を示す赤黒い色が見るうちに消えていき、元の虹色とも白とも言いがたい不思議な色彩を取り戻す。

そして呆然とこちらを見る二人のハンターを見て思う。弱点が曝け出されていない今、この戦う気の無い相手を放って置いて逃げてもいいのでは、と。

腹は膨れているし、危機らしい危機も無いし、そもそもココは暗くて狭いし何も無い。留まる理由は何一つ無いし、戦う理由も無い。

—故に、オウシヨウザザミはブッチャーを乗せたまま地中へと潜り、別の地域へと地中移動することを決めたのだった。

まさかの展開からスムーズに結末まで進められていき、取り残されたハンターは呆然とオウシヨウザザミが居た場所を見つめていた。

ジグエも動かない片腕を抑えながらその光景を見ていたが、狂竜

ウイルスの根源が消えたことで暗雲が去り、そこから漏れる光で意識と痛みを取り戻して眉を歪めた。

暗雲の間から漏れる光を浴びてフラフラと立ち上がったトラの姿を見たドドルは。

「おトラさんと呼ばせてもらっていいツスカ？」

「……ニヤ？」

—このクエストの立役者にして勇者である筆頭オトモ・トラに、尊敬の意を示さずには居られなかったという。

第52話 「その後の【我らの団】」

禁足地で繰り広げたオウシヨウザザミとの激戦。その結末は呆気ないものではあったが、終わったことには変わりない。

狂竜ウイルスの根源であるシャガルマガラは骨となったし、食らった張本人であるオウシヨウザザミは地中へ潜ってどこかへ行ってしまった。

ジグエの狩猟対象は既に討伐されたようなものだし、クッククラブトリオのターゲットであるオニムシャザザミは姿が変わって逃げ出した。結果オーライというものである。

しかし失った物も少なからずあり、特にジグエの損失は大きすぎた。

天空山のシナト村。狂気の根源が山から消えてしばらく経った山の全貌は美しく、村に吹く風も心地よいものだった。

暗雲に包まれ狂竜化したイーオスにすら怯えなければならなかったのが嘘であるかのように、村人達は穏やかな日々を過ごしている。

大僧正もいつもの格好で皆に混ざって畑仕事に励み、農作業の疲れを【我らの団】の料理長の美味しい飯で満たす。

しかし料理長の表情は浮かばない。自身よりも大きな中華鍋を振るうが、いつもの料理長の調理姿を見ている者なら、いつもよりも調子が無いことが解る。

料理長だけではない。シナト村全体は穏やかではあるが、大僧正を始めとした、【我らの団】との繋がりが強い村人は、全員が心配そうにイサナ船を見つめていた。

そして当然の事ながら、【我らの団】のメンバーも見ると同じだった。

明るく笑う竜人間屋も、無口な加工屋も、今にも泣き出しそうな顔でソワソワしている加工の娘も、クエストボートの前でフルフル人形を抱きしめている看板娘も、全員が今は不安げにイサナ船を見つめて

いる。

シナト村が穏やかな静寂と重い沈黙の半々で満たされる中、声が轟く。

「みんなー！師匠シッヨーが！師匠シッヨーが起きたよー！」

若き青年のハンター・ビスカが慌ててイサナ船から出た途端、竜人問屋を除く【我らの団】のメンバーがイサナ船に殺到したのは無理も無いことだった。

そして押し合うようにして駆け込んだ為にビスカがソレに流され、（主に女性2名に）背を踏まれたのも必然であった。アーメン。

ジグエの意識が覚醒した直後に感じたのは、右腕の違和感だった。意識が復活したからか体からヒシヒシと痛覚が伝わり、それにより目を開いたジグエには見慣れた天井……己の部屋の天井が見えていた。

「師匠シッヨー！」

「おう、ようやつと起きたか」

嬉しそうに己の名を呼ぶビスカの声と、少しトーンを落とした団長の声、そしてニャーニャーとオトモアイルー達が騒ぐ声が聞こえてくる。

ビスカが慌てて外へ出て何かを叫んでいる中、痛みが走る体を起こす為^に右腕を動かそうとして……反応が無かった。

当然だろう。包帯が巻かれたジグエの右肩よりも先が何も無いのだから。

「……はあ、やっぱりのお」

「なんだ、意外とあっさりしてんのな」

右腕が消失したというのにジグエは溜息を吐くだけで、落ち込むことも悲しむこともしなかった。

ジグエの事をよく知っている団長とはいえジグエの反応を見て意外そうに口を挟む。それに対してジグエは「ほっほっほ」と短く笑う。「自分の体じゃからな。それにあの一撃を食らったら、こりやダメに

なつたなと悟ってまうわい」

ここ最近になって己の体力の限界を悟ったほどだ。歳の数だけ付き合ってきた肉体だからこそ、あの攻撃を受けた直後、体の一部が欠落することを悟ったのだ。

それにハンター歴は短いとはいえ、ジグエは幾多もの死線を越えてきた。古龍種や凶暴な飛竜種との戦いで生死の境目を彷徨いかねた事も多い。

当然ながら骨折や打撲、命に関わるような致命傷を受けることは多々あったが、腕一本持つてかれるようなことは無かった。

「それは置いといて、あの後じゃが……」

まあ過ぎた事を言っても仕方ない。切り替えの早い2人は本題に入ろうとして……。

「爺ちゃん起きた!?!起きたー!?!」

「お目覚めのようで何よりです!」

「……無事そうだな。よかった」

「おお起きたニヤルか!旦那の為に上手い雑炊を作ったニヤルよ!」

加工屋の娘、看板娘、加工屋、料理長がこぞって部屋に入ってきたではないか。

しかも静かにするようと筆頭オトモのトラが纏めて甲板に集めておいたオトモアイルー達もニヤーニヤーいいながら雪崩のように入室。トラが流されて大変だ。

人に加えて5匹ものアイルーが入ってきたことであつと言う間にハンターの部屋は満室、しかもワイワイニヤーニヤーと五月蠅いなの。当のジグエは揉みくちやにされるし。

「静かにせんかい、おまえらー!」

そう叫んで、ジグエは折れた肋骨を痛めてしまうのだった。

さて、場所は変わってイサナ船の甲板。ここなら広いので、ジグエ

を心配していた人が全員来ても大丈夫だろう。

右腕を失った痛々しい姿をしているが本人はいたって平常運転な為、彼を知る人は「流石は爺ちゃんハンターだ」と納得したほどだ。

しかしジグエの事を「爺ちゃん」と慕っている加工屋の娘は不安のようで、無くなった腕の代わりになるかのように傍で座っていた。

「さてと……わしが気絶している間に何があったか教えてくれんか？」

左手で泣きそうな加工屋の娘の頭を撫でながら、ジグエは自身が眠っている間の事を聞く。

まずトラは、オウシヨウザザミが逃げ出した直後に倒れたジグエを、クツクラブトリオがシナト村まで運んでくれた事を話した。

倒れた直後に3人がえつちらおつちらと担いで持っていく、シナト村の治療室へ送った後は別れたので、3人組のその後をトラは知らない。

そこで団長が代わりに礼を言おうと探した所、3人組は禁足地にあつたオウシヨウザザミの抜け殻……正確にはオニムシャザザミの甲殻をかき集めている最中だったという。

戦闘時は集中していた為に気づかなかつたが、禁足地にはシャガルマガラの白骨死体の他にオウシヨウザザミの物らしき抜け殻があつたので、報酬代わりに持って行こうとしたのだ。がめつい話だろうが、難題のご褒美だと考えれば妥当かもしれない。

ギルドが回収する分と自然に返す分、さらにジグエが回収する分は取つてあるので大丈夫だと言つていた3人組の肝っ玉に、団長は大笑いしたそうだ。

特例としてギルドと大僧正から許可を貰っているから後で剥ぎ取つてこいと団長はジグエに言ったが、ジグエは応とは言わなかつた。

続いてオニムシャザザミ、もといオウシヨウザザミの現状について。

ドドルの達筆なイラストとダリーの説明によって、ギルドはオウシヨウザザミの情報を得る事ができた。

アラムシヤからオニムシヤとなった期間も長いとは言えなかったが、まさかこんな短期間に進化するとは予想外で、ギルドも異例中の異例として、上へ下への大騒ぎ。

G級と思われる新種モンスターや千刃竜センジンリョウという危険なモンスターが発覚した今のギルドは多忙を極めており、オウシヨウザザミの行方を追うどころではない。

元が大人しい性質だということもあって、現状は放っておく事にするのだという。地中潜行した先も解らず、現在は行方不明も同然。

まあ狂竜化によつて暴走していた線が強いという結果もあり、シヤガルマガラが討伐された今は大人しくなるだろう。

そしてシナト村についてだが。

「見ての通り、穏やかで美しい山を取り戻したよ。狂竜化が治まったおかげで無闇に入りさえしなければ安全も確保できた。君と彼らのおかげだよ」

大僧じよ……いや青年の言うとおり、シナト村から見える山を見れば一目瞭然だろう。討伐に向かう前の山は禍々しい雰囲気があったのに、今ではその様子は見られないのだから。

シヤガルマガラもオウシヨウザザミも居なくなつたことで、シナト村だけでなく、貴重な素材欲しさに挑もうとして散る無謀なハンターも減るだろう。

後はジグエが元気な姿で帰ってきてくれたらどれだけ良かったか。いくら生きていれば儲かりモノとはいえ、片腕を失つたとなれば痛まれない気持ちになる。

しかしジグエはそんな周囲の気持ちを理解していないかのように笑った。

「いやいや、終わりよければ全て良し、じゃー！老いぼれの腕一本で解決したどころか……」

するとジグエは腰に巻いていたアイテムポーチに左手を伸ばし、何かを取り出した。

なんだろうと凝視する加工屋の娘に、キラリと眩しい光が差し込んでくる。

「こいつを手に入れたぐらいじゃからな」

ジグエの手に持っているものは、片手にスツポリ収まる程に小さな、虹色に光る欠片アイテムだった。

おお、と歓声を上げてアイテムを見ようと近づくと人々には、それぞれの角度に応じて様々な色合いを見せることだろう。

綺麗な輝きは濁りや汚れの無い純度の高さを物語らせ、光の反射角度によって変化する色合いに不思議な印象を与える。

「……綺麗なアイテムじゃないか」

「本当に綺麗だよ……！」

最も近くに居たが故にその輝きを美しいと捉えた団長と加工屋の娘は、じつとそのアイテムを見つめている。

団長は最初に「謎のアイテム」を拾った時の自分を思い出し、加工屋の娘はナグリ村の皆に育てられたが故の職人魂がざわめいていた。

黙って見つめている2人以外はワイワイと騒ぎながらアイテムを一目みたいと押し寄せるが、ジグエは言う。

「こいつはオウシヨウザザミの殻じゃ」

戦闘中、地面の上でキラリと光った欠片を咄嗟に拾ったジグエは、比較対象が居たことによつてその正体を知った。

何かしらの攻撃を受けたのか脱皮の際に一部が剥がれたかは知らないが、これは間違いなく、オウシヨウザザミの真新しい甲殻の一部。

美しい甲殻だと思っていたものが手に入ったことで、ジグエは腕一本ぐらいならと考えるようになったのだ。

いや、腕を失ったからといって諦めるような老人ではないのがジグエだ。

「団長よ、ワシは今日からハンターを引退する——代わりと言つてはなんじゃが【我らの団】の教官として置いてくれんか？」

ハンターは辞めるが、己の経験を生かす為、ビスカや先日入団を希望した新人ハンターを育てたい。

それにビスカには新しい夢が次々と浮かんできた。その数多くの

夢を叶えるには、【我らの団】ほど相応しい居場所はない。

「おお！お前さんが居てくれるんなら大歓迎だ！そうだろ、皆!」

ジグエが残ると知って喜ぶ団長を切欠に、【我らの団】は喜びのあまり歓声が上がリ、シナト村の人々もそれに感染されて喜んだ。

ジグエの活き活きとした目を見て安心したからか青年もにこやかに見つめているし、加工屋の娘なんか嬉し涙を浮かべて泣き始めたほど。

喜びの中心に居るジグエは団長から快く受け入れられた事により、1つの決断をする。

「娘や」

「泣いてない!」

「ほれ」

どう見ても泣いている加工屋の娘に、ジグエは夢の1つを託す。

——キラリと輝くオウシヨウザミの欠片……『冠蟹の虹殻』を。

「お前さんが持っていないさい」

「……ふえ?」

思わずと言わんばかりに加工屋は綺麗なソレを受け取った。微笑むジグエを呆然と見つめながら。

「いつかあの蟹……冠蟹と呼ぶとするか……そいつの素材が手に入る日が来るはずじゃ」

この世に絶対なんてない。

ティガレックス絶対強者も、ジンオウガ無双の狩人も、そしてシヤガルマガラ天廻龍ですら、いつしかハンターによって狩られる立場となった。

それは膨大な時と人の努力が積み上げられた結果。災害級とされる古龍種もいつかは死ぬし、討伐不可能とされたモンスターも時が経てば狩られる立場ともなる。

それは世間を騒がせている孤独な蟹も一緒だ。世界に1匹しか居ないからとギルドが無闇に討伐を依頼しないからとはいえ、生命の理に則って何らかの形で死ぬだろう。

そしていつかは手に入るはずだ——あの美しい甲殻を用いた素晴らしい防具が。

「だからコレは、お前さんにやる」

遠い未来を託すには、若くて才能がある、己が信頼する子が一番だからこそ加工屋の娘に託したいのだ。

そんなジグエの意図を察知したかは解らないが、加工屋の娘は確かに受け取った——物ではなく、想いや志といった、得体の知れない何かを。

子供や看板娘が羨ましそうに加工屋の娘の手に納まった欠片を見つめる中、加工屋の娘は呆然と美しい輝きを見つめている。

彼女の中には、泣き喚きたい衝動・職人としての期待と不安・未来を託された事への無意識の重さ・偉大と思える者から託された喜びなど、様々な感情に飲み込まれていた。

ただ、それらが決して悪いものではなく、むしろ心地よい物ですら想ってしまう。それが良いか悪いかという戸惑いも甘んじて受け止め、頭と心の中で渦巻かせる。

ジグエと団長、そしてこれからの「我らの団」を支えるであろうビスは、そんな加工屋の娘を見つめて微笑んでいた。

この日より、ジグエはハンターを辞めて「我らの団」の教官となった。

その翌日にジグエが愛する大量のオトモアイルー達を泣く泣く授けようとして新人ハンター達を困らせるのだが、それは別の話。

後、加工屋の娘がちよっぴり大人に近づいた——気がする。

— 続 —

第52. 5話 「迫り来るG級」

シャガルマガラが亡くなり、オニムシャザザミがオウシヨウザザミとなつて逃げ出した日から数週間が経過した頃。バルバレギルドは徐々に落ち着きを取り戻してきた。

シャガルマガラによる狂竜ウイルスの影響力は尋常ではないが、討伐（正確には食われたのだが）された後は脅威と言えるほどの物ではなくなつて来たのが理由の1つだ。

各地にゴア・マガラが何匹か確認されているとはいえシャガルマガラほどの影響は少なく、並のハンターでもチームを組めば討伐は容易い。ただし強いには違ひなく、油断すると被害は大きくなるので注意。

そしてある意味の問題児であるオウシヨウザザミについてだが……数週間経つた今でも行方が知られていなかった。

ダリー達クッククラブトリオの情報提供もあり、オウシヨウザザミの姿形性質までを把握している。

突つ込みどころ満載な内容だしおふぎけの多い2人がいるが、相手は幅広い地域で活躍しているベテランだ。1人は真面目なこともあり、信用度は高い。

つまり、虹色に光る甲殻という目立つ外見を持ちながら、バルバレギルドは未だオウシヨウザザミの発見例でしか報告されていなかった。

これはオウシヨウザザミの元々の性質である「行動範囲の広さ」故に各地を点々としていたことが、数多く寄せられた発見例で解つている。幸いなのは、オウシヨウザザミの行く先がバルバレの管轄内に留まっていることか。

とはいえ姿を晦ましてしまったのは、重厚な甲殻が剥がれ身軽になつたことで行動速度が上がったからではないか、とも指摘されている。ギルドがハンターを派遣した頃には居なくなるなど、その何気ない指摘は現実味を帯びていた。

続いて、オウシヨウザザミは世界に1匹しかいない特殊な甲殻種で

あること。ここまでギルドが監視に徹底しているのも、突然変異で進化した貴重なモンスターであると認定しているからだ。

この広い世界の中、バルバレが管理している地域ですら広いのだ。大勢のハンターが各地に挑んでいるとはいえ、発見例は一週間に一度あれば良い方とされている。

そして発見例に留まっている最大の理由は——ついにギルドはG級の世界へ挑む許可をハンターに与えたからだ。

連日、新たな亜種はもちろんの事、これまで見なかった動きを見せるG級と推測されるモンスター達が多数発見されている。

さらには古龍級モンスター・ウカムルバスが生息しているとされる地域までも発見している。噂レベルでしかないが、かの古龍種が一体・霞龍の目撃例もちらほらとある。

目下研究中とされている謎のモンスター・千刃竜の被害報告も多数あり、Gの脅威が迫りつつあるとギルドは睨んでいる。

故にバルバレギルドはオウショウザザミを放っておき、G級モンスターの情報とG級に挑むハンター達を集めている。

いずれ多くのハンターが挑むであろう、これまで以上の力を示すことになるGの世界に備えて。

その少年がその日の原生林に訪れたのは、偶然か、あるいは必然か。「なんだろう、これ」

周囲を見渡していたら何か光ったので、何気なくその光の正体を確かめに歩み出す。

歩く度に目に映る光が変化した為に好奇心が刺激され、少年は次第に早足になっていく。

その光の正体は、親指ほどのサイズでしか無い欠片のような物だった。しかしただの欠片というには余りにも綺麗な品物だった。

「なんて綺麗なんだろう……」

齢17歳、ハンター歴2年という若い彼ではあるが、各地を点々と

旅したからこそ解る。こんなに綺麗な物は見た事がないと。

人差し指と親指で挟まれた欠片を掲げ、光が当る角度を変えることで変化する色合いを楽しみながら、少年は小柄な外見に似合った無邪気を醸し出していた。

いつ野生のモンスターに襲われるか解らない原生林ではあるが、彼はその心配は無いと解っているからこそ、不思議な輝きを見せる欠片を見つめていた。

―何故なら彼の後方に、満身創痍で倒れているラージヤンが居たのだから。

金獅子ラージヤン。倒れているのは一般的な金獅子よりも小柄だとはいえ、ハンターどころか古龍種ですら恐れるという最強に程近い牙獣種。

無論、ジンオウSシリーズを身に纏っているとはいえ彼一人で狩った訳ではない。このエリアには居ない知人のハンターが3人ほどおり、その3人からラージヤン討伐を手伝うよう頼まれたからここに居る。

さらに言えばこのラージヤン、少年が参上した頃には既にボロボロだった。数回に解り双剣で斬ったとはいえ、放つておいても全身打撲による出血で死んでしまいそうなほどに。

最小サイズでありながら上位種のラージヤンを、ハンター達とは別の存在が殴り伏せたという事になる。知人らと共に原生林に立ち寄ってそれほど経って居ないし、必然的にその線が強くなる。

つまり、ラージヤンをも倒した存在がこの原生林に存在する可能性があるので……少年はその考えを忘れ去っている。

―知人らが駆けつけ事情を知らされる時が来るまで、少年は虹色に輝く不思議な欠片アイテムを眺め続けるのだった。

そのモンスターを狩れたのは奇跡のようなものだった。

実力もさながら、自分を除くあらゆる生命を積極的に殺すという好戦的な性格が災いし、下手をするとイビルジョーに匹敵する災害を引き起こす凶悪なモンスター。

ギルドが異例の如く高く設定した危険度故に討伐を諦めかけていたとはいえ、まさかそのモンスターを捕獲することに成功したとは夢にも思わなかった。

何でもそのモンスターに大切な物を奪われた恨みがあるからと奮起するハンターによるものらしいが、捕獲してくれたというのならありがたい事この上ない。

何せ世界に1匹しか居ないとされる甲殻種なのだ。嚴重に、そして慎重にドントルマに持つていくとしよう。

そういう思惑の元、ギルドは大陸を渡るべく船にそのモンスターを乗せ、出発したのだが……。

—よもや、大陸に到着する直前で。

「うわあああ燃える！船が燃えるううう！」

「火を消せ！早く！」

「そんなことより逃げろおめえら！斬り殺されるぞ！」

嚴重と慎重を重ねた最上級の護送船が容易く燃えていく。その事実が信じられない船員達は目の前の危機に立ち向いながら、しかし恐怖により混乱を極めていた。

船上を燃え盛る炎に嫌でも目を向ける彼らに船長は怒号を上げる。何よりも恐ろしいのは、こんな時に麻酔が切れて暴れ出した奴だから。

斬る・斬る・斬る。そう言わんばかりに奴は周囲のあらゆる物を切り裂いていき、船員達は炎と斬撃から逃げるように海に飛び込んでいく。

やがて船は沈んだ。焼け落ちたのではなく、斬り落とされて。

当然ながら船に乗せていた奴も落ちたのだろうか、ここは大陸に近

い海域だ。深いとは言い切れない海の底で生きている可能性が高い。だから船員達は泳いで逃げる。泳げないモンスターだが、水中でも生きられる可能性が高いモンスターだと知っている為に。

その翌日、バルバレギルドに凶報が伝わった。

—ユクモ村からドントルマに輸送される予定だった刀蟹カタナガニの消息が途絶えた、と。

—G級の脅威は、すぐそこまで迫っている。

—続く—

第53話 「旧砂漠」

突然だが現在バルバレが定住している地域は、かの有名な都・ドンドルマに程近かったりする。

ドンドルマ——険しい山間によって守られた、大陸の中心に聳える大都市。

谷間から吹き抜ける風は風車の原動力となり、豊富な水源は多くの人々の暮らしを潤い、山の地形がモンスターを阻む盾となる。

さらには古龍観測隊の本部である古龍観測所、古龍種ですら迎撃できる兵器の数々、そしてドンドルマ全てを仕切る超重要人物・大長老の存在もあり、このドンドルマは大陸内最大の都市として有名だ。

最大規模の街とだけあって鍛冶の技術力も高く、重要都市故にアマチュアからベテランまで、数多くのハンターがドンドルマに寄せ集められている。

現在はモンスターの襲撃によって半壊状態に陥っている為、復旧作業で数多の人々が忙しく街中を行き交っている。

だからだろうか。旧砂漠で例のモンスターが出没した事に、かの大長老ですら忙しさの余り気づかずにはいた。

ギラギラと降り注ぐ太陽光を砂の1粒1粒が余すことなく受け止め、熱を発し砂地を灼熱に変える。砂漠が灼熱地獄と化している理由の1つだ。

水があるといっても草木が無ければ熱を逃がす要素も無く、水辺から少しでも離れただけで熱したフライパンのような熱が大地から溢れ出し、不毛の土地と化している。

それでもモンスターというものは逞しいもので、僅かな餌を求めて数匹のヤオザミが練り歩いていた。こんな小さな蟹も、いずれダイミョウザザミになるのだ。

そんな砂地をグイグイと泳ぐ生物が居た。砂竜ガレオスである。

魚竜種に分類されるが、海や川を泳ぐ水竜ガノトトスとは違い、こちらは砂を泳ぐ魚竜種だ。近似種として小型の魚竜種・デルクスがいる。

エリア7を数匹のガレオス達が泳いでいるが、特に狩猟をしているわけでもなく、縄張りを主張しているのか個別に砂地を泳いでいるだけに過ぎない。

そんなガレオス達の中に、落ち着きなく泳ぐガレオスが居た。

背鰭はダイミョウザザミに食い千切られてボロボロだが、負傷とは思えぬほどに元気に砂中を泳ぎまわっている。

このガレオスはまるで速さを競っているかのように素早く泳ぎ、有り余る元気を浪費するかののように跳ねて地上を見るのが好きだった。

―ザバン、ザブン。

のんびり歩く仲間のガレオスを横切った。そのガレオスは特に気にせず歩き続ける。

―ザバン、ザブン。

餌を食べていたヤオザミを跳び越えた。ヤオザミは驚いて横ばいで逃げた。

―ザバン、魚っ眩しっ！

跳んだ瞬間、目に閃光が入り込んだ。ビククリして砂地に体をぶつけてしまった。

ガレオスを襲った閃光の正体は――蟹であった。

ただの蟹ではない。全身を超密度によって圧縮された合金で覆った甲殻種・オウシヨウザザミである。

オウシヨウザザミは隣に居るヤオザミと同じように、砂に含まれた餌を鉢でつまんで食べていただけだ。

見た目こそ違うがこのヤオザミとオウシヨウザザミが同じ存在であると、オウシヨウザザミを知る者が見たら理解はするが納得はしないだろう。

先ほどの閃光は、ガレオスが跳び上がったことで太陽光が良い感じ

に反射し、たまたまガレオスの目を直撃したに過ぎない。

つまりたまたまオウシヨウザザミの傍を跳ぼうとしたガレオスが不運だった、ということだ。故に視覚が回復したガレオスは何かを訴えることなく、逃げるようにして砂の中に潜っていった。

そして当のオウシヨウザザミも、何も知らずに餌を食べ続けている。相変わらず暢気というかなんというか……。

「キー、キーキイ（相変わらずでヤンスねえ）」

そんなオウシヨウザザミの下へ、砂色のクワガタムシのようなお面を被った奇面族の子……ブツチャーが歩いて来た。

両手で抱えるほどの量の熱帯イチゴを持っており、それを見たオウシヨウザザミは喜びを表しているかのように両の鋏を広げ、ブツチャーの元へ近づいていく。

ブツチャーもオウシヨウザザミに捧げるつもりで持ってきたらしく、オウシヨウザザミの目の前でそれらを置く。手に持つ1個は自分の分だ。

お零れを貰おうと忍び寄るヤオザミを大きな鋏で跳ね除けたオウシヨウザザミは、頭にブツチャーを乗せてムシヤムシヤと熱帯イチゴを食すのだった。

天空山の禁足地から出て行ったオウシヨウザザミは、前のように食べ歩きの旅に出ている。

狂竜ウイルスを型破りなやり方で克服し、己の背面が甲殻によって覆われたと解った事で落ち着きを取り戻し、暢気で食いしん坊な性格に戻ったからだ。

しかし過去のような臆病さは無く、時には自身に向かってきた敵を返り討ちにしてきた。原生林で突如として襲ってきた金獅子ラージャンもその内の1匹だ。

ただし防御本能は健在で、自身よりも上の存在であれば逃げる習性はある。上位種のラージャンと戦う事を決めたのは、戦った中で自身の方が硬いと本能的に理解できたから。

尤も、あのラージャンはまだ若く、もつと成熟していたらオウシヨ

ウザザミですら危うかったことだろう。それだけの危険生物なのだ、金獅子という牙獣種は。

以前の彼なら強そうというだけで逃げていた。しかし今のオウシヨウザザミは違う。

基本的に自分からは戦わず、襲われた際は戦い、状況が悪くなると逃げる。攻撃性と防御性を併せ持つようになったオウシヨウザザミは、今後の方針を大きく変えようとしていた。

……とはいえ、根はダイミヨウザザミらしい、穏やかで食いしん坊な甲殻種だ。食べ物や鉱石を求め、各地を練り歩く彼特有の性質も変わっていない。

そんなオウシヨウザザミが原生林の次に訪れたのが、ここ旧砂漠ごとデデ砂漠だ。最終的に砂漠へ辿り着くようになったのは、ダイミヨウザザミとしての本能だろうか。

昔と比べると地形がある程度変化しているが、かつて養殖用のヤオザミであった彼にとっては特に気にすることでもない。むしろ珍しい鉱石や昆虫を食べられてご機嫌のようだ。

途中で二股に分かれた角を持つ珍しい甲虫種に襲われたこともあったが、大量の麻痺毒を持っていた為か早々にオウシヨウザザミの餌となった。残りはブツチャーのお面の材料に。不幸な虫だ。

さて、そんなオウシヨウザザミは大ききこそ一回り小さくなったが、食欲は健在。

それなりにあったとはいえ獣人が抱えるほどの量でしかない熱帯イチゴを食べ終えたオウシヨウザザミは、更なる獲物を求めて周囲を見渡す。

ブツチャーもキョロキョロと辺りを見渡すが、ふと砂上に浮かぶ背鰭を見た。きつとあれはガレオスの背鰭だろう。

カンカンとオウシヨウザザミの頭を小突いて注意を惹き、振り向かせて背鰭の存在に気づかせた。

魚竜種の肝もオウシヨウザザミの好物だ。立派に伸びる背鰭からして大きな獲物だろうと判断したオウシヨウザザミは四足に力を込めて体を固定し、水ブレスを発射。

水の線が砂上に聳える背鰭に目掛けて伸びていくが……それより先に背鰭の正体が姿を現し、空を舞った。

知恵の高いブッチャーは勘違いをしていた。その背鰭はガレオスのものだと。

知識が無いブッチャーは理解できなかった。その背鰭の正体がなんなのかを。

砂の中から跳び出したのは、彼らも訪れたことが無い【氷海】に生息するザボアザギル——その亜種である「虎鮫」であった。

『G級の世界』を生き抜いた虎鮫の、無数の鋭い歯が並ぶ巨大な口が、オウシヨウザザミに迫る。

第54話 「虎鮫VS冠蟹」

下位・上位・そしてG級——ハンター達を大きく区別するとこのようにもなる。

狩猟を始めたばかりのハンター達は下位クエストから始まり、腕を上げて上位クエスト、そして狩猟と技を極めしハンターはG級へと昇っていく。

この序列はモンスターにも適用されることが多い。成熟して間も無い頃が下位、生き延びて成長していくにつれ上位・G級と認められていく。

モンスターの強さの基準は多々あるが、最も解り易いのは皮や鱗といった外皮である。

小さかろうが大きかろうが、生物とは育てば育つほど丈夫な体に育っていくものだ。弱肉強食の世界に生き抜くならば、それぐらいの成長速度が無くてはならない。

リオレイアで言えば体力や筋力の向上はもちろん、まずは全身を包む甲殻がより堅くなって「堅殻」となり、その堅殻がさらに厚みを増して重くなることで「重殻」となる。

生き抜き餌を豊富に食し外敵と戦う経験が募り、体が強く逞しく育つ。中身も当然だが、モンスターとはまず外殻が強くなっていくものだ。

さて、G級の世界となれば大型モンスターだけではなく、草食種も強くなっていくものだ。

特に乾燥地帯で見かけるアプケロスの中々の強敵で、尾を振り回す強靱な筋力や堅い甲殻を持っていた曲者でもある。

そんなアプケロスを捕食するモンスターは大抵が鋭い牙を持ち、頑強な顎を持つ。堅い甲殻を持つなら噛み砕ける力があればいいじゃない、という肉食モンスターなりのアピールかもしれない。

それは食欲旺盛な両生種であるザボアザギル亜種も含まれており、その歯の鋭さと硬度、そして顎の力は凄まじい——まあ一番目立つのは伸縮自在な胃袋だが。

そんなG級の世界を闊歩するザボアザギル亜種の口が、オウシヨウザザミに迫ろうとしている。

もしオニムシャザザミのままだったら、甲殻に噛み痕ぐらいは残っていただろう。

分厚くなっただけで鉱石の質としてはG級のレベルに届かない為、もし噛み付かれたら大きな輝が出来る可能性が高い。

しかしオウシヨウザザミは違う。薄くはあるが超高密度に圧縮し合金された鉱石甲殻は、かのエルライト鉱石にも勝る硬度を保っている。

——故に、オウシヨウザザミの鋏にザボアザギル亜種は噛み付いたまま離れず、ブンブン振り回されていた。

鋭く何本も並んだ歯は甲殻に食い込みもしないが、逆に歯が折れたり砕けたりすることはなく、むしろ顎の力だけでオウシヨウザザミの鋏に食らい付くことに成功。

邪魔つたらしいとばかりにオウシヨウザザミは虎鮫ごと鋏を振り回して放そうとするが、流星に自身よりも大きな両生種を振り払うことは難しい。

虎鮫はといえば噛み付いたまま体を捻らせるデスロールで鋏をねじ切ろうとするが、予想以上に関節部が硬かったらしく、本来なら甲殻種の弱点である関節は捻れない。

炎天下の中、右へ左へと捻るザボアザギル亜種を振り回す蟹。極めてシユールな光景である。

虎鮫の意地と諦めの悪さはたいした物だが、いい加減に飽きたらしくとうとう鋏から口を離す。

解放されたオウシヨウザザミはそのまま鋏をぶん回して攻撃するが、虎鮫は離れた際に吹き飛んで距離を取っていたので当たりはしなかった。

ならば接近してやろうとオウシヨウザザミは甲殻種とは思えぬほどのスピードで虎鮫に迫るが、虎鮫とて黙って殴られるわけではな

い。

化け鮫と呼ばれるザボアザギル原種には他のモンスターにはない能力がある。それは三段階の形状変化だ。通常状態が1つ、身に氷の鎧を纏うのが2つ、そして3つ目は空気を取り込んで膨らむというもの。

伸縮自在に膨らむ腹は空気を取り込むことで巨大な風船のように体を肥満化させ、しかし空気が詰まっているとは思えぬほどの重い攻撃を繰り出すという厄介なものだ。

亜種である虎鮫は体内の液体を瞬時に気化または液化させる能力を備えており、形状変化は2つしかないものの、めまぐるしいスピードで膨らんだりしぼんだりできる。

オウシヨウザザミの両の鋏が迫る中、虎鮫は一瞬にして腹を膨らませ、ボヨヨンと跳んで威力を殺すことに成功！

G級というだけあって分厚い皮をしており、オウシヨウザザミの超硬度と筋力を以てしても貫くことはできない。風船のように膨らんだが、人間でいえばバルーンを素手で殴るようなものだ。

そのまま虎鮫は勢いをつけて空高く跳びあがり、一気に急降下。空気が入っているとは思えないほどの重いプレスがオウシヨウザザミに襲い掛かる。

しかしそれで痛い思いをしたのは虎鮫の方。よりにもよって棘のように護石の欠片が生えた背面に腹をぶつけてしまい、鋭くないとはいえ棘が腹に食い込んでしまう。はつきり言ってこれ、チョー痛い。

ボディプレス故に腹が背面の殻に食い込みオウシヨウザザミに圧力を掛けるが、オウシヨウザザミ自体は潰され結構なダメージを受けるものの、棘が食い込んだ虎鮫の方が傷は深い。

痛みの余り口からブバつと空気を吐き出し、収縮した身体がゴロゴロとオウシヨウザザミの頭頂部から砂地に転がり落ちる。

側面を転がり落ちた虎鮫をオウシヨウザザミの振り上げた鋏が追いつきかけ、横っ腹に一撃をお見舞い。斜め上から下へ打ち込むようなボディブローだ！

分厚い皮膚を持っているとはいえこの一撃は痛い。なんとか態勢

を立て直そうとするものの、原種とは違い地中移動する事が少ないザボアザギル亜種に地中へ逃げようという考えはなかった。

そこでもう一度体内の液体を気化し、再び膨らむことで打撃の威力を抑えることに。ただし今度は後ろへ逃がすことはできない為、腹に与えるダメージは先ほどよりは痛い。

だが打撃の衝撃で膨らんだ身体が跳ねて行き、連続攻撃を避けることには成功。

虎鮫は軽く跳ねて態勢を立て直した後、正面を向いたオウシヨウザザミに口を向け、瞬時に液化した水を発射。ダメージは低いが、目くらましにはなったようだ。

大量の水を浴びて多少は怯んだオウシヨウザザミから逃げようと背を向ける虎鮫。幾多もの死闘を繰り返したが故に、時には背を向けて逃げることも大事だと本能的に理解している。

しかしここで邪魔者……ブッチャーが動き出す。

虎鮫の尾びれに引っ付き、あろうことかクワガタのようなお面が食いついたではないか。

どういう仕組みかは解らないが頭頂部の大きな鋏で虎鮫の尾びれをつまむようにして挟み、逃げようとする虎鮫を食いとめようとするのだが……はつきり言えば無意味である。

せいぜい「なんか痛いなー」と思う程度だろう。故に虎鮫は跳躍を混ぜながら距離を離し、オウシヨウザザミから逃げ出す。

一方のオウシヨウザザミはといえば、去る者は追わずと言わんばかりに興味が失せ、砂に埋もれた餌を探すべくゆつくりと歩き出す。

オウシヨウザザミは迎撃するという考えは浮かんだものの、執拗に攻撃して来ず、むしろ向こうから逃げるといっているのであれば気にしはしない。

ザボアザギル亜種は確かに強敵だ。トリッキーな動きは身軽となったオウシヨウザザミの機動性を以てしても捌ききれるものではない……が、見事耐えることができた。

耐え切れたとはいえ、次に戦えばどうなるかは解らない。だからオウシヨウザザミは虎鮫が逃げ出したと解るや否や、まずは腹ごなしを

せねばとセカセカと食べ始める。

再戦の可能性を考慮するかのように猛烈な勢いで食べるオウシヨウザザミ。

その視界にはその辺を歩くドスガレオスも含まれており、ギリリとつぶらな瞳を光らせた……ような気がする。

一方、ブツチャーはといえば。

「キー、キキキキキキ！(どうだー！オラオラオラオラオラ！)」

虎鯨の背中の上で、ボカスカという効果音が似合う程に両手で握った杖を何度も叩きつけるブツチャー。

しかし厚い皮、それも背鰭付近という砂色に染まった皮膚では杖による一撃は微々たるものだ。

それより虎鯨は今さっき喰らいついたアプケロスの肉を食るのに夢中だった。両生種ならではの食欲である。

打倒、オウシヨウザザミ！そう決めたかのように虎鯨はいつも以上の食欲を持ってアプケロスを食べすのだった。

後日、G級クエストを管理するドンドルマの大老殿に、現在の旧砂漠の状況が説明された書類が緊急で通された。

その情報の1つに現在生息している大型モンスターのリストが載せられており、危険度順に上げると以下の通りとなっている。

- ・オウシヨウザザミ
- ・ザボアザギル亜種
- ・ドスガレオス

最後あたりの名称を見た受付員はこう語る——驚きのあまり思わず噴出してしまったわ、と。

そして不幸にも、ドンドルマへ運ばれる食料や機材が載せられた砂上船が旧砂漠を渡ろうとしていた。

—
続
—

第55話 「砂上船のハンター達」

商人にとって大事なものは金でもコネでもない。他者との信用と信頼だ。

何故信用が第一に大切なのかといえば、それはモンスターが世界中に跋扈しているからに他ならない。

何せ自然災害の塊のような古龍種までいるこの時世。膨大な量の金が一瞬にして無に帰すこともあるし、結託していた大貴族が襲われてお陀仏なんてことも充分にある。

それでは何故、他者との繋がりを大事にするかといえば――「困った時はお互い様」精神だ。

世界に困っている人は大勢居る。個人でもあるし、村でもあるし、大都市でもある。救いの手を伸ばすのに大も小も無く、救いの手は多ければ多いほど良い。

誰だって失敗はする。それを補うのは自分であり、他人だ。時には他人の失敗を自分が拭うことで、自分が困った時に助けてもらう。

もちろんこの手法にも失敗はあるが、何事も失敗を恐れるようでは成り立たないし、人との繋がりは仕事以外でも大事な所はある。

その代表的なのが、商人と狩人の関係だ。

クエスト名：鯨どもの宴

依頼主：グルメな商人

メイン：ザボアザギル亜種とドスガレオスの狩猟

サブ：魚竜のキモ10個納品

ドンドルマに食糧を届けたいが、旧砂漠にザボアザギル亜種とドスガレオスがいると聞いてね。

街の皆に食糧を届ける為、2匹を狩猟してくれ。ついでに魚竜のキモを取ってきてくれたら嬉しいな。

これが成功して無事ドンドルマについたら私自慢の食材を使った

夕食をご馳走するよ。

炎天下の砂漠を、とある砂上船が進んでいた。輸送の為に設計されたものらしく、大きさからして相当の積載量が見込まれる。

甲板の上では船員達が船の行く先を定めるべく、大きな帆の操作や行く先の見張り、舵などで意外と忙しくしている。

そんな中、船内の一室―この砂上船の所有者が保有する大きめの部屋だ―では、ある取引が行われていた。

「……解った。では大きさに応じて報酬の額を変動させよう」

「まいどっ！」

落ち着きのある小太りの男と、褐色の肌を持つ女性が算盤を卓において会談していた。

ハンターであるこの女性の名はクカル。防具こそ狩猟外ということで外しているが、その背には、伝説ともされている銀火竜の素材で作られたハンマーを背負っている。

敵意が無いし親睦があるとはいえ、武器を背負うハンターを前にしても落ち着いている男の名はランボル。この砂上船の所有者にして、ドンドルマとロッククラックを行き来する商人だ。

「いやー、助かるますわ。今月も金がキツキツやねん」

「相変わらず食べるなあ。この間のディナーもそうだけど、マナーはあっても遠慮は無いし」

特徴的な口調で話す彼女に苦笑いを浮かべるランボルは算盤を引き出しにしまった。

ランボルはクカルから「サブターゲットのモンスターノキモの大きさや質に応じて報酬を上乘せして欲しい」と会談を申し込まれ、それに応じていたところだった。

クカルは、リオレウス希少種の素材で作られた防具を纏う女ハンターとしてそれなりに名は通っているが、何よりも細身でありながらかなりの大食漢であることで有名。

G級になって久しいとはいえ、常に食事で報酬を浪費してしまい、未だG級の防具を纏えないほどに貧乏しているという悲しきハン

ターだ。彼女自身は楽観的である為か気にしていないが。

そんなクカルにとって、食に関して並々ならぬこだわりを持つランボルは、同志であり「お得意様」であった。

器量が良いのか報酬の支払いもいいし、何よりも魅力的なのはクエスト後に食事に招待してくれること。大食いのクカルが食いつかないわけがなかった。

ランボルも事ある毎にクカルと出会い、気が合うどころか何度もクエストを達成してくれたこともあり、有事の際は彼女に直接依頼する事も多い。

故に、魚竜のキモが大きく質の良い物だったら報酬を増やすぐらいは認めても良いだろう。そうランボルは考えた訳である。

「ほんなら、うちは出発の準備をしときますさかい」

「2匹の狩猟とキモの納品、くれぐれも頼みますよ」

クエストへの事前準備は念入りに。軽い口調とは裏腹に……いや、G級のクエストだからこそせめて持ち物は念入りにすべく、クカルは部屋を出る。

もう1人のハンターとの打ち合わせもあるだろうから、ランボルは一言だけ言って見送った。

砂上船には布で出来た簡易的な天蓋があるとはいえ、やはり甲板が熱せられて暑いのはなんの。

風通しの良い個室から出たクカルは乾燥した熱気に眉を顰めるも、相方になるハンターの姿を探すために甲板を歩く。

多くの人々が行き来しているが探している人物の特徴は分かり易いのでクカルは周囲を見渡すだけで、ふと目に留まった姿を見て確信する。

「イリーダ、準備できとつかー？」

ハンターの為に用意したという簡易天蓋へ向かい、そこに座っている少年に声をかける。

声を掛けられた少年は後ろを振り向き、人物の姿を特定すると素早

く立つ。その手には双剣と砥石が握られており、研ぎの最中だったことが解るだろう。

「この研ぎが終わったらある程度は。クカルさんこそ大丈夫ですか？」

「うちはとつくに終わつとるわ。後は着替えるだけやで」

年上を甘く見るんやないで、と小柄な少年の頭をクシヤクシヤと撫でる。

赤みを帯びた金髪が崩れるが、元々短髪なので気にする事は無く、しかし困ったように苦笑いを浮かべている。

イリーダ。それがこの少年ハンターの名前である。特徴は赤みがかった金髪と150も満たない背丈だ。

年齢18歳になってG級ハンターの仲間入りになった凄腕ハンターで、この度クエストを同行する事になった。

最も、クカルも若いとはいえ20代後半。イリーダのような瞬く間に駆け上るハンターなど多く見て来た為、あまり驚きはしない。

それにイリーダは基本、単独行動を好まないと聞く。中には上位ハンターについていってお零れに預かろうとするハンターも多いが、彼はそうではなさそうだ。

研ぎも丁寧だし、彼が愛用しているというジンオウスシリーズの手入れもしっかりとしている。ただの成り上がりハンターなら丁寧に手入れする事はない。

「ハンターさん達、そろそろ旧砂漠に到着しますよ」

進路方向を見張っていた船員が、軽く談笑していたクカルたちに声をかける。

それを聞いたクカル達が船の先を見ると、ひたすら地平線に砂が映っていた光景に、岩山らしきものがいくつも見えるようになった。

目的地が近づいているとわかったクカルは、天蓋においてあった自分の装備を手取る。

「ほんなら着替えよっか」

「さっさとしないと着替える前に着いちゃいそうですしね」

そう言つてイリーダも手入れしていた防具に手を伸ばし、1つずつ

装着していく。

そんな中、イリーダはポケットにしまっていた物―綺麗な虹色をした欠片アイテム―を見てから、再びポケットにしまった。

―2人はまだ知らない。現在の旧砂漠にはザボアザギル亜種とドスガレオスの他に、オウシヨウザザミという甲殻種が居る事に。

斯くして、ハンター2人は停めた砂上船から降りて砂を踏み、旧砂漠へと足を運ぶのだった。

―続―

第56話「才能と欠点」

人というものは自分自身でも解らない点が多すぎる。

或いは才能であったり、或いは欠点であったり、或いは癖であったりと、自覚していない点は意外にあるものだ。

他者から見れば「いやそれは可笑しいだろ」と思える点でも、当人は解っておらず普通だと考えていることも多い。

少年ハンター・イリーダもその1人で、無自覚の欠点を多く持っていた。

砂上船から降りて旧砂漠に到着し、とりあえずエリア4に行こうと決めるまではよかった。

……イリーダの奇行にクカルが驚かされるまでは。

「ちよ、どこ行こうとしてんねん!？」

「え?こつちからなら近道できるかなと思ひまして……」

「やからってゲネポスの入り口から通ろうとするんやない!」

まさか大きく開いている道ではなく、ゲネポスといった小型モンスターが通る小さな穴を通ろうとするとはクカルも思わなかった。

しかしイリーダは慌てて止めようとするクカルの意図が解らないと言わんばかりに首を傾げており、マジで潜ろうとしているのが解る。

この奇行がベースキャンプからすぐ出たエリア1で早々に起こったというのだから、初っ端からの奇行にクカルは眉間を押さえてしま

う。

「はあ……あんさん、ホンマに方向音痴なんやな」

「面目ありません……」

クカルの言葉に困ったように頬を掻くイリーダ。まるで年上のお姉さんに叱られた子供である。

イリーダは才能があった。

ハンターとしては体が丈夫な方ではなかったが、その身軽さと器用さは軽業師の域に達しており、覚えもよかった。

重い武器を苦手とするが、片手剣や双剣といった軽い武器を持てば人並み以上の働きを持ち、双剣に至っては鬼人モードを維持し続けるほどの技量を持つ。

その才能と引き換えたかのように失ったのが……方向感覚。これはハンターとしては致命的な欠点だった。

イリーダは極度の方向音痴で、1人でクエストを達成したことは一度も無く、薬草を採って来るという簡単なクエストですら達成できなかったという。

地図を暗記しても一度たりとも目的地に辿り着いたことはなく、近道しようとして変な道を通ったり、たまたま落石などが発生して道を塞がれたり。

とにかく1人で行きたい場所に行った事は一度も無く、常に誰かを誘うか誘われるかしてチームを組んで行動することを決定付けられた。

それでいて今もその奇行は止まず、近道がしたいからと洞穴に入ろうとする上、本人は無自覚だという始末。

方向音痴であることは認めても、己の思考のズレは無自覚故に中々治らない。それがイリーダの欠点でもあった。

事前にイリーダ本人から「自分は極度の方向音痴らしく、道に迷うかもしれない」と言われていたので同行したのだが、まさかこんなだったとは。

——まあしかし、とクカルは苦笑いを浮かべる。

「ほなら、ザボア亜種かドスガレオスが見つかるまで、うちの横に付いてきいな。なんなら手繋いだるで？」

カラカラと笑うクカルではあるが、ちよつとしたからかい程度で悪気は無い。

当のイリーダはといえば低い身長故のコンプレックスを刺激されたのか恨めしい目でクカルを睨むも、子供が不貞腐れているようで、クカルはさらにカラカラと笑ってしまう。

尤も、背に腹は変えられないと理解したのか、大人しくクカルの横に付き、共にエリア4へ向けて歩き出すのだったが。

クカルは歳は若いが経験は豊富な方だ。

幼少の頃より大食いだった彼女は、肉屋の両親の手を煩わせまいと、若くしてハンターになったからだ。珍味を求めたから、と言っても過言ではないが。

稼ぎつつ様々な食材を食べようと彼女は地方各所を点々と周り、様々なハンターを見て来た。善悪老若大食少食、狡賢いのも居れば潔いのも有りと多くの人を知った。

もちろん、イリーダのように方向音痴なハンターも多数いるし、イリーダ以上に奇行を繰り返すハンターも居る。特にクエストを受注すれば「え、なにそれ」的な依頼主は沢山いる。

この世界は広い。そして同じ人でも、世界の広さに比例するかのよう

に多種多様。最初は食を満たす為にハンターになったクカルだが、今では多くの人と触れ合い、一緒に多くの物を食べてきた。

だからこそクカルは、G級に挑むには不安だからという言い分もあるが、出会った人と狩猟するのを楽しみにしているのだった。

ここで1つ言っておこう……イリーダの方向音痴は、身体の方

向音痴とは運も絡む。土砂崩れ、川の氾濫、落石など偶然も重なって通れなくなれば道に迷う事もあるう。

また、もしイリーダが北へ行けばターゲットは反対の南へ行き、イリーダが南へ引き返せば別方向へモンスターが動くと、すれ違いも多

く起こる。そしてイリーダはこれまでのソロ活動で……一度たりとも目当ての大型モンスターと出会った事がない。

ぼこり、と地中から姿を現したのは、旧砂漠に住みつくようになった甲殻種・オウシヨウザザミ。

先ほどまで獲物^{ドスガレオス}を腹一杯になるまで食べてきたからか、周りにケルビや植物があつたとしても食べようとせず、なんとなく見渡している。

すると洞穴から何か小さな声が聞こえてくる……と思えば、洞穴から獣人族・チャチャブーの子ブツチャーが出てきたではないか。

オウシヨウザザミを追いかけてきたらしく、すぐによじ登って頭頂部に仁王立ちし、あつしが見張るでヤンスと言いたいように周囲を見渡しだす。

それを知つたオウシヨウザザミは安心したかのように脱力し、灼熱の日差しによって熱せられた体を冷やすべく、木陰で一休みするのだった。

彼ら2匹が休んでいる場所はエリア1……そう、先ほどまでクカルとイリーダが居た場所だった。

しかもブツチャーが現れたのは先ほどまでイリーダが潜ろうとしていた洞穴。もう少し遅かったら頭と頭がゴツツンコしていたことだろう。

幸運か不運か、イリーダの方向音痴はオウシヨウザザミとブツチャーのコンビを避けたのである。

そしてクカルとイリーダの目的は「ザボアザギル亜種とドスガレオスの狩獵」である。魚竜のキモも目当てだが。

その目的である最初のターゲット・ザボアザギル亜種をエリア4で発見し、いざ対面しようと武器を身構える2人のハンター。

ザボアザギル亜種はハンターの気配に気付き、試合開始のゴングであるかのように咆哮を轟かせるのだった。

木陰でのんびりまったりしているオウシヨウザザミ・ブツチャーを差し置いて。

—
続
—

第57話 「すれ違う者達」

ザボアザギル亜種の真価が発揮されるのは、やはり膨張状態だろう。

原種である化け鮫ザボアザギルも空気を取り込むことで体を膨張させる能力を持つが、亜種とは大きく違っている。

原種は空気を取り込んだとは思えないほどの超重量となり、跳ねるときに氷海の氷を割るほどだ。

故に軽く跳ねるか転がるかしかできない程に鈍くなる上、膨張状態が解け空気が抜ける際に大きな隙を生じてしまう。

ところが亜種は、膨張状態こそが真の姿と言わんばかりに、通常状態と比べ物にならないぐらいの動きを見せる。

まず空を飛んだと思ったかのように高く跳びはね、やはり空気とは思えないぐらいに重いジャンププレスを仕掛けてくる。これが結構痛い。

さらに前はモチロン横にも転がる。不意打ちで横に転がった際に巻き添えを受けたハンターは年毎に上昇の勢いを辿っているとかなんとか。

しかも何度も跳ねられる。地面を割りながら、ボヨン、ボヨンと連続で跳ねてくる。これもかなり痛い。

極めつけはその頻度。これでもかと言わんばかりにコロコロ変わるし、瞬時に膨らみ瞬時に縮むと隙が少ないというオマケ付き。

亜種の放つ麻痺液がこれまた曲者で、膨張中に麻痺したら終わつたと思っても良いだろうしかも広範囲に麻痺液を撒き散らすし。

G級の亜種というだけあり、原種と似たり寄ったりだろうと甘く見たらダメだという良い例だ。ガララ亜種なんか肉質が違うし。

しかし、各地を旅し、多くの狩猟を経験してきたハンターなら対策は抜かりない。

その土地でしか生息しないモンスターは余所から来たハンターに

とって初見そのもの。故に出来る限りの対策は練るのが常識。

地形、その土地の生態系、対象モンスターの正確な情報など出来る限りの情報集は基本として、様々な道具を用意しておくのも手だ。多めの回復アイテムはモチロン、閃光玉、各種トラップ、もしもの場合のこやし玉やモドリ玉など、邪魔にならない程度に持ち歩く。

用意することに越した事などない。生死を賭ける仕事と旅を前に、生き残れる為の準備を万全にしておくのは当然のことだと、放浪ハンター達は心得ている。

上位から上がったばかりとはいえ、各地を旅したというイリーダとクカルも、その1人だった。

実に20分もの間、ザボアザギル亜種の動きを見極めるべく、回避行動と防御行動を重視して霍乱してきた2人。

その動きや地形の把握も済んだ今、先に動き出したのはイリーダだった。

「よし、乗れました!」

段差を利用して跳躍し、的確にザボア亜種の背鰭を切りつけたことにより隙が生じ、その隙に背鰭にしがみ付く。

「ほな頼むでえ!」

しがみ付かれたと知ったザボア亜種は抵抗の意を示すために暴れ出し、巻き添えを食らわぬようクカルは全速で離脱。

人間でも言えることだが、背面とは手が届きづらく、同時に視界に捉えづらい為隙が生じやすい。

それはモンスターにも言えることで、昨今のハンターは段差などから飛び降りてモンスターの背に乗ろうとすることが多い。

モンスターの背にしがみ付き、本来なら武器とは使わない、しかし出し入れが簡単な?ぎ取りナイフでザクザクと背を刺すのだ。

当然、モンスターは振り下ろそうと暴れまくり、時には咆哮で怯ませようとする。

だがイリーダも上位に入ってから乗り攻撃を覚え、その後は各地で

様々なモンスターに乗ってきた。両生種特有の動きも覚えたので万全だ。

クカルが傷ついた体に回復薬を投じている中、イリーダは隙を見てザクザクと？ぎ取りナイフで刺しまくり……。

「あ〜れ〜」

「よっしゃ、うちの出番や！」

大いに転げたザボア亜種から落ちて行くイリーダを余所に、回復し終えたクカルがハンマーを握る手に力を込めながら走る。

背中を刺されもがき苦しむ今のザボア亜種は絶好の的。意外と当てづらい頭部にハンマーの一撃をお見舞いしようと思ふ回す。

その隙に今度はイリーダが回復に回ろうと回復薬を投じる。隙があるからといって飛び込むより、傷ついた体を癒し体力を整える方を優先したいからだ。

柄を握る両手と支える両腕に力を込め、強烈なハンマーの一撃をザボア亜種の頭部にお見舞いするクカル。

手応えはある。しかしその手に感じたのは、ゲリョスのような皮の弾力と、甲殻種のような頭蓋骨の硬さ。

上位級のそれらに匹敵するが故に頭を回すことなく、背の痛みと頭部への痛みにもがき苦しむだけ。流石はG級なだけあって耐久度とタフさは桁違いだ。

続けざまに連続で叩きつけている中、ザボア亜種は横転して起き上がる。ハンマータイムはこれまでのようだ。

ハンマーを納めて走る中、ザボア亜種はクカルとは逆方向へと歩いていったではないか。

走りつつもザボア亜種がどこへ行くかと振り向きながら見ると、ザボア亜種は身を捻りながら地中へ潜っていく。

事前に調べていたとはいえ初見なので、最初は原種のように地中から奇襲をかけるのかと身構えていたが、地中移動の際の振動は遠ざかっていくのが解る。

さらに、出会って当初に投げたペイントボールの臭気がココとは別の所から匂ってくる所からして……。

「ん、エリア移動したみたいやな」

「急ぎましょう、捕食して体力を回復させてしまおうと面倒です」

「せやから、虎鮫が掘った穴から通ろうとするんやない!」

先ほどまでザボア亜種が掘った穴に入ろうとするイリーダの首根っこを掴み、ズルズル引きずってエリア移動するクカル。

食欲旺盛故に良い嗅覚を持つ鼻で臭気を辿り、ザボア亜種が移動したであろう洞窟へ繋がる入り口へと走る。イリーダを引きずって。

クカルとイリーダが洞窟へ入っていき、ザボア亜種が居なくなつたからとアペケロスが出てきた直後。

ボコリと地面が隆起し、地面を突き破って這い出てきたのはオウシヨウザザミ。体についた土を身震いして払い、周囲を見渡す。

今度はブツチャーも一緒だ。オウシヨウザザミが地中移動に居ても問題の無い、都合が良過ぎる隙間に入り込んでいた。

地中から出てきたキラキラ輝く甲殻種に驚いたアペケロスが威嚇するが、餌にするつもりだったのかオウシヨウザザミのクラブハンマーが命中。きゆうしよにあたった!

先ほどまで戦闘があつたことなど知る由も無く、オウシヨウザザミは仕留めたばかりのアペケロスの肉を食べ始める。

隣ではブツチャーが器用にも火を起こし、ハンター達がお約束で歌う歌を鼻歌で歌いながら焼き始めた。チャチャブーが器用にしたりてこれは……。

イリーダの方向音痴は思考や知覚だけの問題ではない。運も絡んでいるのだ。……しかし、それが必ず悪運だとは限らない。

確かにターゲットとしているモンスターが見つからないのなら悪いことだろう。見つけて狩るなりしなければ意味が無いからだ。

しかし彼はともかく、彼と共に狩猟へ出た者達は一部でしか知らないことがある——乱入したモンスターも遠ざかるからだ。

自然界において絶対などない。それは2匹同時狩猟のクエストで

ありながら、受注した直後に別の地域から乱入してくるモンスターなど当たり前前に居る。

イリーダはその乱入モンスター……特に乱入で最悪とされる、ラージャン、イビルジョー、そしてセルギアスにも遭遇したことはない。

故に。

「そつちに行きました！追いかけてみましょう」

「ちよ、そつちやない、そつちは砂の滝やあああ！」

2人がザボア亜種を追いかけなるべく洞窟から出れば、地中から現れたオウシヨウザザミが鉱石を求めて洞窟に入り。

「クカルさーん、早く行きましようよお」

「ちいと待ちいや……よし、魚竜のキモ、ゲットやでー！」

移動がてら小休憩にとヤシの木が茂る場所でガレオス数匹を狩り終えて移動すれば、後から来たオウシヨウザザミが？ぎ取った直後のガレオス達を食べ始め。

「お、流星は旦那やな。支給品が用意されとるで」

「ありがたいですね。持ち込めるだけ持ち込みましょう」

魚竜のキモを納品しようとベースキャンプへ戻れば、エリア1に出没したオウシヨウザザミが腹いっぱいだからと居眠りを始める。

ちなみにクカル達は砂漠の方へ移動した虎鯨を追いかけるべくエリア1とは反対方向へと走っていく。

まるでご都合主義の塊のようなすれ違いは、2人とオウシヨウザザミの出会いを阻害し続けていた。

これは幸運の方であろう。オウシヨウザザミは未知の未知。そんなモンスターが乱入したら2人として危ういだろうから。

そして2人の幸運は、意外な形を迎える。

「ドスガレオス……ですわね」

「うわあエグいわあ」

ガレオス達が泳ぐ砂漠のエリアにポツンと置かれたのは、ドスガレオスの死体であった。

既にヤオザミだけでなく、元リーダーであったことなど忘れたかのようにガレオス達が群がって死肉を貪っている。

その光景を遠くから眺めていたイリーダとクカルだが、呆然と眺めるイリーダに対し、クカルの表情は明るい。

「討伐対象がさっさとおっ死んでくれてラッキーや。せやけど、あれじゃ？ぎ取りは無理やろおなあ」

「そういう問題じゃ」

「じゃどういう問題なんや？大方、虎鮫に食われてもうたんやろ。世の中弱肉強食が常やで」

彼女は知らない。このドスガレオスを喰らったのが甲殻種であることなど。

そしてそれを知る由は無い——何故なら。

—ザバアツ！

「……っ!?ザボアザギル!」

「真打登場っちゅーやつかあ?」

すぐその地中から出沒したザボアザギル亜種を前に、2人は素早く武器を構える。

死肉に群がっていた小型モンスター達が逃げ惑う中、ザボアザギル亜種は2人のハンターに向けて咆哮を轟かせるのだった。

—続く—

第58話 「打って変わって」

最近のハンターの間では、モンスターの背中に乗ってダウンさせる「乗り状態」を狙うのが主流となっている。

何せ上手く行けば無防備な背面を攻撃できるだけでなく、その痛みを耐え切れず悶えて隙を生じるのだ。

段差があつてモンスターがそこに近づいたらとりあえず狙ってみる、というハンターも多いのではないだろうか？

—とはいえ、実際するとなれば楽ではない。

確実に乗れるわけではないし、モンスターの抵抗は厳しいし、失敗して落ちれば逆にこちらが隙を生じてしまうものだ。

モンスターの抵抗もそれぞれだが、一番厄介なのは両生種かもしれない。彼らは我武者羅に跳ねまわり、背中を地面にぶつけるのだから。

—故に。

「ぶぎゅっ!？」

「イ、イリーダーあああ!」

ハンマーでイリーダーをかち上げザボア亜種の背に乗ったのはいいが、暴れた際に背面から砂地に飛び込んだのが悪かった。

何せ逃げようとしていたガレオスと、背面にしがみ付いていたイリーダーが衝突し、砂竜と虎鮫のサンドイッチが完成してしまったのだから。

砂地なら衝撃が和らぐし、地面ならしがみつく位置をずらすなりして対策ができるが、直撃を避けようとずらした位置に偶然ガレオスおり、この様である。

振り落とす為の跳躍だったためにガレオスは幸いにも命に別状は無いが、幾ら強靱なハンターでもコレはキツイ。思わず手放してしまった。

振り落とせてホツとしたザボア亜種を余所に、クカルは砂地にダイ

ブして倒れたイリーダへ駆け寄った。

「お、おい大丈夫……やないな、傷はそこそこあるわ」

「傷は浅いぞ！」というのがお約束だろうが、それどころではない。身を起こそうとして解った。先ほど水ブレスで結構なダメージを負ったこともあり、全身打撲で力が出ない様子。

もちろんザボア亜種がそんな暇を与えない。すぐさま攻撃へ移ろうと身を膨らませ、大きく跳躍。

「やっばっ！」

しかしクカルも伊達にハンマーを振り回してはいない。小さいこともあってイリーダをおんぶする形で背負い、直撃を避けて走る。

「へい、ネコタクシー！」

どこかにいるであろうイルーに届くよう、クカルは大声で叫び、ザボア亜種のごろごろアタックから逃げまくる。

そしてクカルの叫びが届いたのか、ごろごろと台車を牽きながら走るイルー達の姿が。モンスター並の神出鬼没さである。

「後は任せた！」

「あいニヤー！」

乱暴だが背負い投げの要領でイリーダを投げ飛ばし、イルーが見事に（台車で）キャッチ！そのまま走り去っていった。

お荷物が無くなったからとハンマーを握り、こちらへ向けてポヨンと跳ねてくるザボア亜種と対峙する。

この時、イリーダがキャンプ送りになったことで、イリーダの持つ悪運が無くなった事になる。

そうなることでどうなるかといえば……乱入する奇跡あるいは遭遇できない不運が遠のいた、ということだ。

クカルを押し潰さんと飛び上がったザボア亜種の真下から別の何か飛び出てきた。

勢いよく飛び出たソレは跳び出した直後のザボア亜種の腹に直撃し、ザボアを予想以上の高さにまで吹っ飛ばす。お星様にはならな

かったが。

砂中から飛び出てきたのは……太陽光をギラギラと反射する鉱石だった。

「うお、眩しっ！」

灼熱の太陽は眩しい。それを乱反射させるもんだから、クカルが眩しきの余り目を覆いたくなるのも無理は無い。

目に入った光に眩んで目を瞑ろうにも、砂の中から飛び出てきた何かを確認すべく、どうにか目を凝らしてその正体を見る。

その正体は——蟹であつた。

虹色に輝くダイミヨウザザミ……オウシヨウザザミである。

イリーダがクカルから離れたと同時に、なぜかこのオウシヨウザザミがこのエリアにやってきたのだ。

まあオウシヨウザザミからすれば腹が減ったからやって来ただけなのだが……クカルとザボア亜種はそれどころではなかった。

「こらアカン！」

経験が語っている。この奇妙な甲殻種と自分とでは話にならないと。

己の直感を信じたクカルは地面に落ちてきたザボア亜種の事もあり、甲殻種に敵意がないのを良い事に背を向けてダツシュ。

ターゲツトはあくまでザボア亜種。しかしドスガレオスが居る事も考慮して、2匹が同時に居合わせたら逃げると決めていたのだ。

相方のイリーダと合流すべく、ベースキャンプへ向けて一目散に逃げ出したのだった。

一方、予想以上に高く上がったことで地面に叩きつけられたザボア亜種は、飛び出たオウシヨウザザミに喧嘩を吹っ掛けようとしていた。

対抗意識と縄張り意識が強く出たのか、ザボア亜種は今度こそ！と言わんばかりに飛び上がり、オウシヨウザザミを上から押し潰さんとする。

潰されたオウシヨウザザミも黙ってはいない。新たに得た戦闘意欲を再び増長させ、ザボア亜種に挑まんとまずは押しつける。持ち上げるようにして放り投げたザボア亜種を追撃せんと歩き出し、鋏を打ち鳴らして攻撃態勢をとる。

旧砂漠の第二라운드의結果は――

「虹色に光る蟹？」

「せや。どうやらそいつがザボア亜種とドスガレオスを蹴散らしたそうやで？」

ドンドルマの外れにある、旧砂漠へ続く砂の入り江。

そこに停めてあるのは商人ランボルの砂上船で、無事に旧砂漠を潜り抜けたらしく、様々な荷物を降ろす所だった。

ドンドルマに運び出している人々を余所に建つ、ランボル自慢の食材とコツクを携えた小さな料亭に3人は居た。

クエスト達成の暁に出した料理は量も味もよく、クカルは嬉しそうに食べ続けた。ランボルは慣れているが、イリーダはその食べっぷりに啞然としている。

ベースキャンプで準備を整えたイリーダとクカルが戻って見たのは、ザボアザギル亜種の死体だった。

フルポッコにされたらしく至る箇所痛々しい打撲痕が残っていた。恐らくはクカルの言う甲殻種が殴り殺したのだろう。

まあ2人である程度追い込めた為に早く倒れたのだろうが、討伐されたというのならランボルとしてはどちらでも良い。

魚竜のキモも良い状態が多く、料理の量も奮発したということだ。賞金は後日にギルドから振り込まれる。

さて、クカルが見たという虹色に輝く蟹についてだが……。

「聞いたことないなあ……」

ランボルが首を傾げて言のを見たクカルは「せやろなー」と言うだけ。

当然といえば当然だろう。現在出回っている情報はオウシヨウザザミのものではなく、オニムシヤザミのものだからだ。

何せオウシヨウザミに変化したのはつい先日な為、ギルドから情報が発信したとしても全てに行き届かせるには時間が掛かる。

しかし例外が居た。

「あの、その光る蟹についてですが……こんな色をしていましたか？」
意を決したように身を乗り出し、テーブルの反対側を陣取る2人にある物を見せ付ける。

彼の手に持っていたのは、キラキラと反射角度によつて様々な色合いを見せる欠片アイテムであった。

その光に当てられたのか、クカルとランボルは興味津々と言つたように身を乗り出し、アイテムの輝きを目の当たりにする。

「ほお……これはこれは」

「この輝き……うちが見た蟹の甲殻によお似とるわ」

食卓に並ぶご馳走よりも目立つ光は、2人の関心を独占していた。

それはイリーダも同様で、彼の握る手は宝物を扱うかのように丁寧なものだった。

「あーっ！」

突如響いた甲高い声に3人はビクリと身を震わせ驚愕する。

何事かと、偶然にも3人が同じ方角を振り向いてみれば、そこには奇妙な少女が立っていた。

3人が何事かと目を点にしているのを余所に、少女はイリーダの手に握られた欠片を凝視する。

「やつぱりそうだ！ねえ小さいハンターさん、コレをどこで見つけたの？」

「コレが何なのか知っているんですか？」

気にしている単語に対する反応や少女の正体が何者かを聞くより先に出たイリーダの問いかけ。

この虹色に光る欠片を少女は知っている様子。クカルとランボルを余所に追いやつてでも聞きたいことだった。

「知っているよ！だって——」

— そういつて少女——【我らの団】の鍛冶職人の娘が見せたものは

「わたしも持っているもん！カシムリガニ冠蟹の甲殻！」

— イリーダが持つ『虹色の欠片』よりも大きな『冠蟹の虹殻』であった。

この時、3人と1人は知らない。

この3人が、今後のドンドルマと【我らの団】、そしてオウシヨウザザミに大きく関わっていくことに。

— 新たな物語が、始まろうとしていた。

— 続く —

第59話 「ドンドルマの現状」

今のドンドルマは危機的状況に置かれている。

唐突かもしれないが、大地と緑が広がり、風が吹き、火山が滾るこの大自然では唐突な出来事など幾らでもあり、些細なことだ。

そんな些細なことですら人間にとっては時に脅威ではあるし、大自然は時に生物という形で牙を向くことだってある。

人が暮らす場所ならどこでも言えることで、険しい山脈に守られた大都市ドンドルマも例外ではない。

現にドンドルマは、先日のモンスター襲来により街全体の機能が低下しつつあった。

修復作業に出歩く人、本店が崩れたので仕方なく出店を開く人、そして治安維持に励む警備員と悪い意味も兼ねた賑わいであった。

とはいえ街が半壊したにも関わらずこれだけの人々が広場に募っているのは、それだけ街を愛しており、人々の為に復興しようと活気になっている証拠か。

だが緊急事態には違いなく、世界各地から様々な人々がドンドルマの危機に駆けつけている。

ドンドルマの頂点たる大老殿から各地へ依頼を発注し人手が増えつつあるが、中には街の復興を手伝おうと自ら足を運ぶ者も多い。

各地から物資を届けに来た商人。バルバレギルドに許可を貰い遠征しに来たハンター。遥々ロックラックからやってきた商人とハンターなど。

—そして筆頭ハンター率いる筆頭チーム、彼らから頼まれドンドルマに駆けつけた【我らの団】もそうだった。

ドンドルマの緊急事態にに応じてくれた【我らの団】を迎えた筆頭ハンターは、今日改めて例の事実を知った。

【我らの団】主力ハンターのジグエが、腕を失った事を理由にハンターを引退したという事実を。

「……聞いていたとはいえ、いざ見ると心を痛めますね」

ドンドルマの広場の片隅に停められたキャラバンの傍で、片腕を失ったジグエの姿を見た筆頭ハンターが顔を顰める。

本当に心を痛めているかのようには苦しげな表情を浮かべる筆頭ハンターだが、肝心のジグエは軽く笑いながら彼の傍に立つ。

「ほっほっほ、心配は要らぬよ筆頭君。お前さんも元気を出さんかい」
そういつてバシバシと乱暴に片腕で背を叩かれた筆頭ハンターは苦笑いを浮かべるばかり。ほっとしたようで困ったような微妙な心境らしい。

筆頭ハンターにとって【我らの団】は、大きな貸しがある事を抜きにしても、ぶつきらぼうな自分でも快く受け入れてくれる良い有人だと思っっている。

特に明るさと厳格さを併せ持つジグエは自分の事を息子のように接してくれる為、会う度に心を落ち着かせてくれる。同時に頭の上がない人でもあるが。

まあジグエに関しては置いておこう。問題は今後の【我らの団】の活動内容だ。

ここでようやく【我らの団】団長が会話に混ざる事となる。団長もドンドルマの事態を重く受け止めており、表情は真剣だ。

「ジグエ、いや教官殿が狩猟に出られない事は解ってくれたと思う。ビスカも先日ようやく上位入りし、新入りのハンターも増えたのはいいが……」

「……問題はG級ではない事だな」

団長の言葉を【我らの団】鍛冶職人が繋げる。

現在のドンドルマがすべきことは、全部で4つある。

1つ目はドンドルマの復興に必要な物資を仕入れる事。これは近隣の地域に限らず遠い場所―ロックラックやバルバレなど―から輸入される。

2つ目はドンドルマにモンスターへの侵入を許さない事。上記の輸出品護衛も含め、必要があれば周辺を荒らすモンスターを狩る必要があるだろう。

3つ目はドンドルマの補強。復興だけでも忙しいのに、大老殿は【戦闘街】の強化も狙っている。これには理由があるのだが、【我らの団】を含めた一部しか知られていないので省くとする。

材料集めや護衛などモンスターの狩猟も含まれる為、【我らの団】教官ことジグエのスパルタ訓練を受けたビスカを貸すことが出来るだろう。

そして4つ目の内容。これがG級ハンターの居ない【我らの団】にとっての痛手であった。

「G級モンスターの影ありつていうのは痛いな」

そう——ドンドルマ周辺でG級モンスターの存在が確認されたのである。

ドンドルマとバルバレの調査によると、旧砂漠のザボアザギル亜種を始め、バルバレで確認・研究された新種モンスターの亜種が各地に点在しているという。

いずれも長年生き延び新たな力を得た末にG級の世界へ突入しており、亜種と断言されるモンスターが多数確認されている。

原種以上のパワーを持つ爆弾魔・荒鬼蛙アラオニガエルテツカブラ亜種。

空中性能と耳の硬度が上昇した軽業師・白猿狐ハクエンコケチャワチャ亜種。

鎧を纏わなくなった代わりに膨張能力が異常に強化された虎鮫トラサメザボアザギル亜種。

これらの他にも亜種が存在しており、いずれもG1級、G2級の実力を備えていると調査結果で明らかになっている。

さらに亜種に限らず原種のG級も確認されており、最近の調査ではリオレウスやゾンオウガなどの姿も確認されたらしい。

飽くまで目撃情報だけで詳しい調査結果は明らかになっていないが、いずれにしてもG級ハンターの助けが必要になるだろう。

だが筆頭ハンターをはじめ、ドンドルマが頭を抱えている問題が1つあった。それが……。

「現在ドンドルマに滞在しているG級ハンターでは数が足りないのが現状だ。もし上位クエストに紛れ込んだりしたら大変なことになる」
「しかもオウシヨウザミの姿もあると来た。泣きっ面にランゴス

タって奴かね」

筆頭ハンターに引き続き、いつもは明るい【我らの団】団長ですら重い溜息を吐いてしまう。

オウシヨウザザミ。【我らの団】及びクッククラブトリオの報告で明らかになった甲殻種モンスター。

アラムシヤ オニムシヤ オウシヨウ
荒武者、鬼武者、そして王将と次々に名と形が変貌することから「進化し続ける宝物」とギルド内で囁かれている。

そんな蟹がドンドルマ近隣で目撃されたという情報を聞き、ドンドルマはコレだけで様々な問題が生じるだろうと頭を悩ませていた。

その甲殻は希少そのもので、脱皮した殻の大半を入手したクッククラブトリオが半数近くを売り払った所、物凄い金額で取引されたとも聞く。

めでたくG級ハンターになった彼ら3人を尻目に、世間はオニムシヤザザミ―正確にはオウシヨウザザミだが―の素材に目を付けるようになった。

ハンターはもちろん商人もザザミの素材を狙うようになり、ギルド暗部では闇商人や裏社会出身ハンターの取締や暗殺が絶えなくなつた。

つまり、オウシヨウザザミを狙った密猟者や密猟ハンターが挙つてドンドルマに集う可能性が出てくる。

もちろん密猟者が返り討ちに合うのはどうでもいい。許可なく挑んで死にましたと言われても、それは自業自得だろう。

問題なのはオウシヨウザザミに刺激を与えて暴れさせてしまう事と、現状のドンドルマに密猟者が募つて治安が悪化することだ。

さらに言えばオウシヨウザザミは世界に1匹しか確認されていない特別な甲殻種だ。そんなモンスターが仮に密猟者に狩猟されてしまった場合、素材は根こそぎ奪われることだろう。

その為ギルドは、オウシヨウザザミと密猟者の動きを同時に観察しなければならぬ。必要あればオウシヨウザザミを撃退し、悪事を働く密猟者を即成敗するのだ。

すなわちドンドルマは、半壊した街を復興及び強化し、治安維持を

徹底し、とあるモンスター襲来の備え、オウシヨウザザミを観察し、街中の密猟者を取り締まる必要がある。

……ぶつちやけ忙しいにも程があるだろう。大長老が過労で倒れなければいいのだが。

4名はそんな現状に頭を悩ませて唸り、傍から見ている看板娘がお茶を入れようと料理長に話を持ちかけた所。

「ハンター……教官さーん！お客さんだよー！」

明るく元気な声に一同が振り向けば、こちらへ走ってくる鍛冶屋の娘と、後ろに続くようにして歩く3人の人影があった。

「話は聞かせてもらいましたわ」

せつかくだからと看板娘から受け取った茶を飲み干し、クカルはそれをトンと卓上に置く。

クカル・イリーダ・ランボルが聞いた話は、オウシヨウザザミについての情報とドンドルマの現状。ハンターと商人にとっては無視できない話だった。

筆頭ハンターにとっても有益な情報を得る事が出来た。何しろ、2人のハンターはつい先ほど旧砂漠でオウシヨウザザミを目撃したというのだから。

しかしそれで終わりではない。経験と人脈が豊富なクカルと、ロツクラックとドンドルマに詳しいランボルは一計を案じた。

「よーするにG級の人材が足りんゆうんやろ？うちの知り合いに何人かおるさかい呼んでみますわ」

「私の方からも知人に声を掛けてみるよ。元々復興作業を手伝う為に来たようなものだし、追加の食料を取りに行くついでに連れて来よう」

要するに人手が少し増えるかもしれない程度だが、それでもいいよりはマシだろう。

陽気で人柄の良いクカルと大陸を渡る豪商である彼は良質なハンターと多く知り合っている為、一声掻ければある程度は来てくれるは

ずだ。

本来なら真面目な筆頭ハンターとしては色々と言いたい事があるが、ドンドルマの現状と自身の人脈の無さを考え、甘えることにする。「来て早々すまないな。世話になる」

「お堅い事言わんでええで。全部片付けるまで仲良おしよや、筆頭はん」

「ひ、筆頭はん……」

真面目ではあるが、片方は堅物で片方は陽気。この先この女ハンターを相手にやっていけるのかと、ある種の不安が過ぎってしまう。ランボルはといえば、さっそく竜人商人と料理長のコンビと仲良くやっている。グルメな商人として通じる何かがあるのだろうか。

一方のイリーダはといえば。

「そ、そんなに凄い蟹なんですか!？」

「そうじゃ。この失った片腕が証拠じゃぞい」

ジグエが対峙したという、イリーダが持つ綺麗な欠片の持ち主であるオウシヨウザザミの逸話を聞かされていた。

驚愕と期待で煌く眼を持ってイリーダは興味津々とばかりに話に食い込み、隣では今まで聞かされていなかった蟹の生態を知り興奮する看板娘と鍛冶屋の娘がいる。

そしてジグエは堂々と語る。オウシヨウザザミの恐ろしさを。

「背中の殻から反射光をばら撒き、鋏からは摩擦によつて発生した雷電を放ち、時には電気で熱せられた高温の鋏で殴り殺し、特殊な体液で周囲の地面を一気に冷やして氷付けにし、極めつけは口から吹き出る水で空を飛ぶのじゃあー!」

「ナニソレ本当に蟹ですか!？」

「凄い!凄いやオウシヨウザザミ!流石は王様の蟹だね!」

「是非ともスケッチしてみたいですね!教官さん、今度連れて行つてくれませんか?」

「ダメニヤこりや」

ジグエのオトモアイルー・トラは最近になって知った。ジグエは意外にもホラ話が好きなのだと。

—続—

第60話 「続々集うよ」

「まずいね」

「まずいな」

「まずいだろう」

「え？これ美味いっしょ？」

2人の男と1人の女は、先ほど買った竜頭ターギーのサンドイッチを食べている小太りの男に拳骨を落とす。

しかし周りは気にしない。何故ならここは集会所で、周りの全てはハンターであり、意識はクエストボードの依頼書に注がれているからだ。

バルバレの集会所では、今日も大勢のハンター達が集っている。

というのも、ここ最近ドンドルマに関わるクエストが続出しており、ドンドルマの状況を噂で聞いたハンター達が押し寄せたからだ。

モンスターの襲撃でドンドルマは半壊し、人手とハンターを欲している。それを聞いたハンター達は各々の目的を果たす為に集うのだ。

バルバレには無かった旧砂漠のクエストも急遽発注されるようになったこともあり、新たな狩猟場を歩もうとするハンターも多い。

この4人のハンター達もドンドルマのクエストを探していたのだが……あるクエストを見て焦りを感じたのだ。

「相変わらず鈍いぞ、ドド。……このクエストを見る」

右目に刃のようなもので切り裂かれた傷痕を携えた、ガララXシリーズを着こなす男がクエストボードを指差す。

ドドと呼ばれた小太りの男―グラビドXシリーズを纏っている―は男の指差す先にあるクエストを見る。

「……これの何が不味いん？」

クエストの内容は解った。しかし内容はありがちなもので、別段焦る必要が感じられないのだ。

持ち前の暢気さを自覚していても、大したことは無いとドドは思うしかできない。そんなドドを女は叱咤する。

「バカだねえアンタ。もしもの事があつたら価値が下がる物があるか

らだよ」

美丈夫とも言えるガツシリとした体型を持つ女はレイアXシリズスのヘルムをずらし、ギロリと鋭い目つきをドドに向ける。

ドドはその視線に怯むが、リーダー格らしい大柄な男がそれを止め、3人に指示を下す。

「そうなる前に動くぞ」

「合点！」

「へえい」

即決即断をモットーとしたレウスX装備のリーダーの決断の下、3人のハンター達は彼の後に続く。

クエストボードの依頼書を取ることも受付所に向かうこともなく、集会所を後にするために。

こうして彼ら4人組……ハンターに偽装した密猟団はギルドを後にする。

彼らが見たクエスト「ザザミ大集結！」と書かれた連続狩猟クエストの張り紙が、ピラピラと風で揺れていた。

最近の旧砂漠は環境が安定していない。

ドンドルマで発注している全ての旧砂漠に関するクエストには、大型モンスターの乱入が考慮された警告文字「環境不安定」が記されていた。

旧砂漠に出没しているというオウショウザザミに注意しろ、というギルドなりの警告である。

しかし警告しようが警戒しようが、出てくるものは出てくる。相手は生き物だもん、仕方ないよね。

なんて簡単に言うが、オニムシャザザミの頃ですら余り知られていないのに、オウショウザザミという新しい生態を知らないハンターは多い。

アラムシャザザミの頃を知るハンターは、採掘しようとしてピツケ

ルを振るってネコタク送りになった。

オニムシャザザミに返り討ちにされた事があるハンターは、攻撃しなければ大丈夫だと高を潜り、運悪く気性が荒い時に巡り会って返り討ちに合い。

どちらも知らないハンターは「ダイミヨウザザミの希少種みたいなもの」と冒険心をくすぐられ、ちよつかいを出して痛い目に合った。とにかく珍しいモンスターとなれば見てみたくなるのは、冒険心溢れるハンターの性かもしれない。

しかしこういった経験を踏むことでちよつかいをかけることの危なさを知り、オウシヨウザザミの危険性を伝えるのだ。

こうしてオウシヨウザザミの生態や特徴はドンドルマを中心に広がっていき、ちよつかいをかけるべからずと伝えられ、クエストの達成率を上げる。

そして時間が経つに連れ、ドンドルマが頭を抱えるような事態が生じた——ダイミヨウザザミの繁殖期である。

旧砂漠は今、恋の嵐ラブ・ハリケーンが吹き荒れていた。

昼はダイミヨウザザミが集い、夜はディアブロスが集う。運悪く重なった繁殖期は、砂漠を昼夜問わぬ混沌に陥れたのだ。

オマケに夜の旧砂漠では小さなディアブロスを筆頭に角竜が暴れているというが……それは別で話すでしょう。

ダイミヨウザザミならなんとかなるさと思うだろうが、甲殻種の繁殖性は飛竜種を凌駕する為、数は圧倒的に多い。

オマケにダイミヨウザザミの縄張り争いから逃げようとヤオザミの大群が犇き合い、一箇所のエリアに大量のヤオザミが集う事も。

数のダイミヨウザザミ、力のディアブロスと、どの道今の旧砂漠は危険極まりない状況だった。

まともにキャラバンが行き来できないし、砂上船も出られない。このままではドンドルマの食糧事情は悪化する一方だ。

ギルドは少しでも数を減らして通行路を確保すべく、昼と夜に分けて、上位からG級までの連続狩猟を発注。

オウシヨウザザミは夜になると大人しくなる習性だと寄せられた情報から導き出されたので、昼間は狩猟不安定と記載して。

そんな中で発注されたダイミヨウザザミ連続狩猟クエストを前に
——ある噂が広まる。

「オウシヨウザザミも恋するんでしょうか？」

緑の看板娘が何気なく放った一言は、クエストボードに殺到した密猟ハンター達を一気に検挙する切欠になったとか。

しかし何気ない一言は噂となり、1つの未来図を導き出した。オウシヨウザザミが子孫を残したらどうなるか、と。

それに危機感を覚えるのが——闇市場を行き来する密猟者達だ。

価値とは希少性からも見出せる。貴重であれば貴重であるほど高く売れるのは商売の基礎だ。

オウシヨウザザミとは世界に一匹の甲殻種。だからこそ彼のモンスターから取れる素材は、少量だろうとも大金を生み出す。

特に最近のオウシヨウザザミは攻撃的になった事もあり、昔のようにピツケルで採掘できなくなった。故に高値となる。

もし繁殖するようになったなら、オウシヨウザザミの価値はグンと下がるだろう。

そう危惧した密猟者達はこぞってドンドルマに集結し、オウシヨウザザミを亡き者にし素材を独り占めしようと思む。

徐々に数が増えていく密猟者だが、それに比例するかのようには減っていく。検挙と取り返しが大半だった。

そして同時にギルドからも注目の的となっていた。

貴重が故に研究し甲斐があるオウシヨウザザミの素材。そして何

より生殖機能は備わっているのか否か。

オウシヨウザザミは未だ謎が多い。その1つが、食欲が勝った為に衰えたと考えられていた性欲、つまり子孫を残す力だ。

もし繁殖すれば人類の危機にも繋がるだろうが、そうなることを予見して調べるのも世間の為だ。研究欲を満たす為とも言う。

そんな数多くの人々の思惑が渦巻く中、旧砂漠に潜むオウシヨウザザミはどうしているのだろうか。

第61話「繁殖期の脅威」

繁殖期。それはモンスターと生態系を最も警戒視しなければならない期間。

人間でも言えることだが、恋の季節とはいっ訪れるか解らない上に複雑な事情が絡んでくる。

経験を重ねたハンターなら一度か二度は繁殖期の恐ろしさと狙い目を理解している事だろう。

まずモンスターが繁殖するという事は、モンスターの数が増えるということ。

増えるといっても子を宿すのではなく、雌と雄が番いとなるべく同種の生物が勢揃いするのだ。繁殖はその後。

小型モンスターなら生態系のバランスからして大した問題ではないが、問題は大型モンスターにある。

単純に人間の脅威が増えるから———というだけならどれだけ簡単な話で終われるだろうか。

まず1つとして、繁殖期の大型モンスターは揃って気が立っている。

発情期とも言えるこの時期は同種の縄張り争いや恋争いの事もあつて精神的にイラついており、大人しい種でも攻撃的になることもある。

特に旧砂漠の夜間に出没するディアブロス達は解りやすい程に怒りやすくなっており、他種処か同種ですら容易く攻撃を仕掛ける事も。

己の力量を測りきった熟練のハンター程それを知っているが故に、繁殖期だけはクエストを受注しない者も多い。

気が立っているのは性欲だけではない。食欲にも起因している。

大型モンスターは大抵が大食いだ。繁殖しようと集まりに集まった彼ら—それも同種—が一箇所に集まればどうなる？当然、食べ物減っていくだろう。

食性が同じであるが故にそればかりが減っていき、やがて食糧不足

となつてさらにイライラが募つていくという悪循環。

ディアブロスなんかサボテンのみだ。縄張り争いに恋争いに食物争いの三つが繰り広げられるのは必然。

おかげでディアブロスの連続狩猟クエストは上位以上でなければ受注できない程に危険性が高まっている。

逆に日中の旧砂漠に関するクエストは多く発注され、それに比例するかのように受注するハンターも増えている。

ドンドルマが不足していたG級ハンターを、ロックラックからやつて来たG級ハンター・クカルと商人ランボルの伝手で補強したからだと思われる。

その日中に多く発注されているクエストが……ダイミヨウザザミ原種と亜種を多く狩る連続狩猟クエスト〔ザザミ大集結！〕だ。

これは危険度がディアブロスよりも低いというのもそうだが、もう1つ理由がある。

環境不安定と書かれているが、かの噂の甲殻種が日中に多数目撃されているからであつた。

旧砂漠の日中は甲殻種が犇き合つていた。

砂地には魚竜種の代わりにヤオザミがウジャウジャおり、至るエリアで2匹以上のダイミヨウザザミが争いあつている。

あるザザミは求愛行動を、あるザザミは縄張りを主張するように鏃を広げ、あるザザミらは餌を求めて体をぶつけ合う。

幸いなのはザザミ種が雑食性である為に、餌の奪い合いが比較的少ない事か。摘める物なら何でも食べるその食性が羨ましい。

そんな中、異色を放つ蟹が1匹居た——オウシヨウザザミである。

太陽光をギラギラと反射する虹色の甲殻に身を纏う、通常種より一回りも二回りも大きな盾蟹の変異種。

その巨大さと光具合は甲殻種でありながら別種であるかのよう。盾蟹の殆どはオウシヨウザザミから遠ざけていく。

それは雌も同様。一応オウショウザザミは雄で、大きさだけで見れば求愛を受け入れる事間違いないだろうが、悲しき事に彼女らは別種と捉えたようだった。

大抵のザザミから遠ざけられている当人、いや当蟹はといえよ。

今しがたアプケロスを鈍器と化した鋏で殴り飛ばし、その死骸を鋏で引きちぎって食べている最中だった。

現状のオウショウザザミは絶賛肉食フィーバー中である。

鋏で摘めるような大抵の食物は他のザザミに取られてしまった為、こうして自ら狩りをするが増えた。

むしろ日中はザザミばかり増えている為か、大型の肉食モンスターに襲われることなくゆつくり食べられるのはオウショウザザミにとっての利点である。

相変わらずの食い気だが、オウショウザザミは夜襲ってくるディアブロスから身を守る為にも栄養の摂取は必要不可欠だ。

隣ではチャチャブーことブツチャーが生肉を引きちぎり、いつ作つたか解らないお手製の肉焼き器で肉を焼いている。

ブツチャーもヤオザミやダイミヨウザザミに食物を食われた立場らしく、最近はこんがり肉がマイブームのよう。

以前なら匂いに釣られてガレオスやドスゲネポスに襲われる事もあったが、今は気軽に鼻歌まで歌って焼ける程。

「キ〜♪」

—上手に焼きましたー!

どっからかノリの良い声が聞こえたようだが、気のせいということにしておいて欲しい。

焼きあがったこんがり肉を食べようと仮面をチョイと上げて（もちろん中は見えない）食べようとし——。

—ドツゴオン!

地中から出てきた1対の角に吹き飛ばされていきましたとき。

こんがり肉を持ったまま天高くブツチャーが舞う中、ブツチャーを

突き飛ばした何かがゆつくりと地中から這い出てくる。

それはダイアブロスの頭蓋骨……それを背負っているダイミョウザザミ亜種であった。

通常よりも鮮やかな青紫色をしているダイミョウザザミ亜種は、オウシヨウザザミには及ばないが通常よりは大きかった。

そんなザザミ亜種は地中から緩慢とした動きで這い出てくる。すぐそこにはオウシヨウザザミが居るが、彼は気にせず餌を食べている。

対するザザミ亜種もオウシヨウザザミを気にしている様子は無い——他のザザミ種と違って。

そしてザザミ亜種はそのままノンビリとした足取りで日陰へ向かい、壁を背に向け昼寝を始めてしまった。

どうやらこのザザミ亜種は食事よりも睡眠を多くとることでエネルギーを節約しているらしい。

何せこの大きさだ。餌が十分に取れない以上は食欲を満たすのは難しいだろうし、無駄に体力を消費するわけにいかないのだろう。

とはいえ、先ほどの緩慢な動きを見る限り、元からノンビリ屋なのかもしれないが……まあ良いとしよう。

スヤスヤと木陰で眠っているダイミョウザザミ亜種をチラリと見た後、オウシヨウザザミは再び鋏を動かして食べ続ける。

縄張り意識の薄いオウシヨウザザミとしては、攻撃を仕掛けず大人しくしているのであればどうでもいい話だ。

——
そんな2匹の甲殻種を遠くの物陰から観察している人物が居た。

「あのダイミョウザザミ亜種は？」

「どうやらメスみたいだね」

「結構デカイサイズだな……」

「このまま放っておいた方が良くない？」

「ようやくオウシヨウザザミを見つけたんだ。放っておくのは惜しい」

「……なあ、空から何かが降ってきているんだが」
「あ？」

複数の人影は空を見上げ——絶句した。彼らの上空からチャャブーが降ってくるのだから。

この後、地面に向かって落ちて来たチャャブーに混乱した彼らは声を上げ、2匹の甲殻種の注意を寄せてしまう事になる。

— 続 —

第62話 「ハンター組と密猟組」

人がハンターとなる条件は決まった物が幾つかある。知能・筋力・技能と言った物は全ハンターに共通する義務といえよう。

だが人がハンターとなる理由は多種多様だ。金銭を稼ぐ為・何かを守る為・力を振るう為と、そのハンターの人柄や個性が表される。

その理由の1つに、モンスターを知りたいから、というものが割と多い。生物の不思議を追い求めるのも、自然の調和を図るハンターの特権だろう。

話は変わるが、大量発生が故に危険性が高いとされる大型モンスターの繁殖期にこぞって受注するハンターがいる。

繁殖期とはモンスターの生態だ。そのモンスター特有の求愛行動や縄張り争いといった、繁殖期ならではの動きが見られる。

そういった期間限定の生態を観察せんと、俗に言う研究者体質のハンターがクエストを受注し、観察と狩猟を兼任するのだ。

どこか間が抜けているハンター・デイルムレツサーの失態は、そんなハンターの存在を知らずにパーティーを組んでしまった事と、不運にもチャチャブーが空から落ちて来た事か。

時は、哀れにもブツチャーがダイミョウザザミ亜種により吹っ飛ばされる頃より前に戻す。

ダイミョウザザミ連続狩猟のクエストを受注した4人のハンターが旧砂漠に訪れていた。

ジンオウウシリーズを着込んだ真面目そうな、しかし実は間が抜けている男・デイルムレツサー。

ナルガSシリーズを身に纏う、富んだ知識と鋭い観察眼を持つ小柄な少女・イリヤロックスミス。

書士隊の一員でありながらハンターを務めているギルドナイトSの衣を着込む男・ヴァルツ。

そんなヴァルツに付いて来た、書士隊を目指す新米ハンター・リグレット。装備はインゴットS。

彼らは長い付き合いではない。受注前、パーティーを組むのを良くしと考えているデームがそれなりの理由を聞いて集めたのだ。

3人は結託前に言った。自分達はモンスターの状態を知るのが好きでハンターになったので、迷惑をかけるかもしれない。デームは大した問題ではないと笑って承諾した。

生物の生態を知るとはハンターとしても重要だと理解していたのだが——デームの失態はこの軽視から始まっていたのかもしれない。

「クカルの言っていた事は本当だったんだな。虹色に光る蟹とは……ハアハア」

双眼鏡の先に映る光景を目の当たりにし、モンスターを愛していると言って憚らないヴァルツの息が怪しい意味で荒くなる。

「ふわー、ふわー！オウシヨウザザミが、噂のオウシヨウザザミがこんな近くで見られるなんて！」

好奇心旺盛なイリヤが小声ながらも興奮している。

「すすす、凄いです、凄いです！このクエスト受けてよかった！物凄くよかったです！」

普段は引つ込み思案のリグレットが、超珍しいといわれている甲殻種を目の当たりにしてテンションが可笑しくなっている。

ハイテンションな3人に対して、デームはブルーな気分だ。ヘルムの眉間に当る部分に手を当てて溜息を吐く。

繁殖期のダイミヨウザザミを観察して時間が潰れたのは許容範囲だったが、まさかここでオウシヨウザザミを見つけるとは思わなかった。

おかげで好奇心と探究心を刺激された3人が物陰から中々動かない。未だ1匹しかザザミを狩れていない現状でコレはやばい。

「お前らな、目的を」

「あ、何か出てきた！」

「人の話を聞け！」

研究バカに抑止など無意味だった。

直後に地鳴りがディムを襲い、何事かと目の前の光景を見てみれば、オウシヨウザザミの近くでダイミヨウザザミ亜種が姿を現した。地中から這い出たザザミ亜種はオウシヨウザザミに襲い掛かることも逃げることもなく、そのまま素通りして日陰に歩いていく。

「あのダイミヨウザザミ亜種は？」

「どうやらメスみたいだね」

「結構デカイサイズだな……」

比較的冷静になったヴァルツとイリヤが観察する中、初めてみるザザミ亜種に興奮しているリグレットをディムが取り押さえていた。

幸いな事にオウシヨウもザザミ亜種もこちらに気付いておらず、一方は食事を、一方は睡眠を取って過ごしている。

「このまま放っておいた方が良くない？」

亜種がメスだと知ったイリヤが種の繁栄を考えて提案するが、ヴァルツは首を振って否定する。

「ようやくオウシヨウザザミを見つけたんだ。放っておくのは惜しい」

「……なあ、空から何かが降ってきているんだが」

今すぐにも間近で見たいと暴れるリグレットを抑えていたディムが空を見上げながら言う。

その視線の先を追うようにヴァルツが見上げた直後、奇妙な鳥兜のような何かが眼前に映る。

—ドゴンツ！

「おぶはっ!？」

—後にヴァルツは「ヘルメットが無かったら即死だった」と語ったという。

ヘルム越しとはいえ顔面に甲殻で出来た兜がぶつかってきたことにより、ヴァルツは其の場で横転し気絶。

ヴァルツの顔面に落ちて来た兜……獣人族のチャチャブーは何事も無かったかのように起き上がり、周囲を見る。

周りは唐突な出来事を目の当たりにして啞然とし、静寂が訪れていたが……。

「な、なんですかこれえええ?!」

チャチャブーという存在を初めて知った若き探求者・リグレットの叫びが轟く。

その叫びの大きさは、間近に聞いたチャチャブーも、満腹になつてボーっとしていたオウショウも、木陰で昼寝していたザザミですら目を覚まし。

——1人が気絶したまま、ハンター組は3匹のモンスターに目を付けられてしまったという。

そんなドタバタ狩猟を物陰から見ている別の組があつた。

「丁度いいな」

ガララX装備の狡賢そうな男・ギギレがニヤリと笑う。

「いや拙いだろ」

レイアX装備のガツシリとした美丈夫・カランが眉を歪めて言う。

「そんなことよりクーラードリンク飲みたい」

グラビドXヘルムを脱いで暑そうに天を仰ぐ小太りの男・ドドが言う——直後に2人からゲンコツを貰った。

「先んじたつもりが完全に遅れちまったみたいだな……だが騒ぎを起こしてくれたんなら好都合だ」

リーダー格のレウスX装備の男・レガツタは騒ぎながら体勢を立て直しつつあるハンター4人を見て呟く。

彼らは密猟団。オウショウザザミという希少価値を早期に手に入るべく、ドンドルマの包囲とギルドの目を潜り抜けて旧砂漠へと訪れた。

しかしレガツタが言うように、あの研究者ハンターを連れした4人組に先を越されてしまい、思うように動けずしていた。

何せ密猟団とは非合法どころか悪法とされている組織だ。ハン

ターに見つかれば即座に通報され、監視の目が鋭くなる処か捕まるケースですらある。

そんな中、ようやくオウシヨウザザミを見つけたと思えば別の物陰に潜んでいるハンター達を見つけてしまう始末。

だが幸か不幸か、どういう訳かは知らないがチャチャブーが彼らの頭上から落ちて来たことによりこの騒動が起きた。

「アイツらにとつちや災難だろうが、もっと霍乱してもらおうじゃねえか」

クツクツク、と声を出して笑うレガツタからは、悪人オーラがダダ漏れであった。

——
デームとヴァルツは経験がソコソコあるが、イリヤとリグレットは経験が浅い。

それでも同じモンスターを2匹同時に相手にするという経験は少なからずあるし、複数のメンバーで挑んだ経験もある。

デームはドジって忘れてしまったが、強烈な匂いでモンスターを分別できるこやし玉は常時しているし、貴重品の生命の粉塵も持っている。

しかしダイミヨウザザミ亜種はともかく、オウシヨウザザミとブツチャーが厄介だった。

「イリヤ後ろー！」

「うわっとー！」

「リグレット、そつち行つたぞー！」

「ひゃああっ!?!」

速いのだ。大きさに似合わぬ軽さを持つオウシヨウザザミの動きと、小柄なチャチャブーならではのすばしっこさが。

ダイミヨウザザミ亜種の動きは並かそれ以下だが水ブレスを多く使い、水を吐きながら曲線を描くようにして動くものだから攻撃範囲が思っていたより広い。

おかげでこやし玉を投げる暇もなく、玄人2人も経験が浅いイリヤ

トリグレットのフォローに回るのが精一杯だった。

避け、潜り抜け、距離を取ろうとする。しかし入り乱れる大型モンスター2匹と、間を縫うようにして駆けつけるチャチャブーの動きを同時に捌くのは玄人ハンターでも厳しい。

なので大型モンスターをそれぞれ盾にするようにして動くのが基本だった。盾蟹だけに。

「くそっ！逃げ道が見つかったら構わず行けよ！」

「い、いいの!?!」

「この状況なら逃げるのが先決だからな！こやし玉を狙えたらいいが、逆に返り討ちに合うなよ！あと、絶対に武器を構えるな！」

「は、はい！」

攻撃を完全に捨て、味方をフォローしつつこの場の脱出を最優先。こやし玉を投げられればいいが、それで逆上されたら意味がない。

探究心豊かな新人2人とてハンター。モンスターの脅威、特に目の前のキラキラカニの恐ろしさは直感を以て知った為、真剣に動きを見切ろうと瞬きを惜しむ。

だが、ここで更なる不運が重なりながら襲ってくる。

―密猟団が別のエリアからオスのダイミョウザザミを呼び寄せ。

―その呼び寄せたダイミョウザザミがメスのダイミョウザザミ亜種に惚れ込み。

―普段なら襲い掛かる気になれないオウシヨウザザミに襲いかかってきたではないか。

より回避が困難となったハンター4人組のネコタク送りの確率が飛躍的に上がるのだった。

―続―

第63話 「研究者と密猟者」

恋は盲目、という言葉がある。人は本気で恋すると目の前しか見られなくなるという。三大欲求の1つではあるが困ったものだ。

三大欲求により忠実であるモンスターも同じ事で、求愛行動から本番まで本気で向き合う。生物の本能とも言える。

そんなわけで、ザザミ亜種(♀)に惚れ込んだザザミ原種(♂)は、格上であるオウシヨウザザミ(♂)に戦いを挑むのだった。

—甲殻種ならではの争い方で。

そう、ザザミはディアブロスのように身と身を削りあうような争いは行わない。

両の鋏を広げ、どちらの体が大きいか競い合うか、威嚇しあって押し合うかの何れかだ。

それは雌を奪い合う争い(一方的)でも変らないわけで……。

—ソイヤア

—ドヤア

ザザミ原種とオウシヨウザザミが鋏を広げ、対面したままじりじりと近づいたり横に移動したりを繰り返す。

先ほどまでハンターを狙った混戦が起こっていたというのに、本能に従ったからかオウシヨウザザミは律義にザザミ原種の挑戦を受けている。

本来ならオウシヨウザザミの圧倒的勝利に終わるだろうが、雌のザザミ亜種を勝ち取りたいが為にザザミ原種は諦めない。

コレはハンター達にとっては好機であり、混戦に持ち込ませて逃げる予定の密猟団にとっては誤算だった。

そう……ハンター3名が研究者体質であり、ザザミとチャチャブーのみという、先ほどより難易度がグッと下がった状況でなければ。

「これがダイミヨウザザミ同士の縄張り争い方かあ！」

「いえ、雌を巡った男の戦いじゃないんですか？」

「どつちだろうとも同じ事をするんだよ。あのザザミも有効だったんだな大きさ競い」

「お前らしい加減にグボバツ！」

状況が改善されたからといって観察しだす研究バカ×3に叫ぶデймだが、チャチャブーの頭突きを腹に受けて中断。

しかもオウシヨウに比べて動きが遅いザザミ亜種が研究バカトリオに、すばしっこくて頭突きが痛いチャチャブーがデймに襲い掛かるのだからタチが悪い。

「けどヴァルツさん、確かモンスター縄張り争いって割り込むのは危ないんですね？」

「ああ。互いに戦わないからといって争いには違い無いからな。ピリピリしているから茶々を入れるのは止めておけ」

ザザミ亜種の横歩き水ブレスを潜り抜けながら問いかけるイリヤに、やってきたザザミを溜め斬りで攻撃するヴァルツが応える。

イリヤとリグレットは研究者としては未熟で資料しか見たことがない為、こういつた余裕があるときは積極的にヴァルツに学ぶことが多い。

誰にも言える事だが狩りとは不確定要素が多い。機会があれば多少の無茶があっても観察・学習するのが研究者ハンターの常だ。

「いやそこは諦めるよグヘツ！」

ダレに突っ込んだかは知らないがまたしてもデймはチャチャブーの手痛い一撃を食らう。

痛みやら怒りやらでイライラしているデймに、リグレットが発射した回復弾が命中。被弾と同時に蛍光色の液体が霧状に破裂し、デймの傷を回復する。

「大丈夫ですよデймさん、キンピカザザミも普通のザザミもコツチを無視しているみたいですよ」

弾丸をリロードしながらデймを宥めるリグレット。

彼はサポートと見張りを担当している為、常にザザミの縄張り争いを監視している。

新人心も相まって緊張感が高まり目を離すことは無いが、研究者魂

が即座に逃げるといふ選択肢を捨てた。

ザザミ同士の争いはオウシヨウザザミが圧倒的で、鋏を広げながらジリジリとザザミ原種に攻め寄っていく。

勝敗が決するのも時間の問題だろうが、幸運が重なったからか2匹はこちらから徐々に離れていく。

これならオウシヨウが勝った直後に逃げれば確実に逃げられる上、追い出されたザザミ原種を追いかけて討伐できる。

そう考えていたのだが、彼らが知らぬイレギュラーはそれを許さなかった。

―カキンツ!

「あー」

チヨコマカ動くチャチャブー相手に夢中だったデイク以外の人3人が叫ぶ。

オウシヨウザザミの後姿を見ていた3人が見たのは、要塞のような背部に張り付いた徹甲榴弾であった。

―ドゴンツ!

直後に響く破裂音と衝撃に、ダメージは全くないとはいえ、オウシヨウザザミがそれに気づいたのか動きが止まる。

動き続ける者達が多い中、オウシヨウザザミとダイミヨウザザミがピクリとも動かなくなってしまう、ハンター達は不気味さですら感じてしまう。

やがてオウシヨウザザミが振り向き、ザザミ原種がその横に並ぶ。口からは泡が吐いていた。怒り状態のサインである。

―ブシャーッ!

オウシヨウザザミとダイミヨウザザミの水ブレス! 避けるハンター、命中するのはザザミ亜種!

しかし水をぶっかけられたザザミ亜種は気にせずハンター達を追いかけ、ザザミ×3対ハンター×4の戦いに。

数だけで見れば1足りない程度だが、実際は大型モンスターに追われている人間側が大ピンチ!

「誰だ発砲した奴! ていうかりグレットお!」

「ほ、僕は知らないですよ！」

「ヘビガンはアンタだけでしょーが！何やってんのオバカ！」

「いやリグレットは違う！リグレットは徹甲榴弾を持ってきていないはずだ！」

「ヴあ、ヴァルツ先輩いい！貴方に付いて行ってよかったと心から思いました！」

「じゃあ誰がやったんだよ！」

「俺も知らんわ！ていうか逃げる逃げる！」

逃げ惑うハンター！言い争いあう仲間達！追いかけてくる甲殻種3匹！彼らの運命やいかに！

そんな混沌と化した光景を、遠くの物陰から忍び笑いを浮かべて見つめる集団が居た。密猟団である。

「ハッハア！ザマアミロってんだ！」

硝煙を漂わせるヘヴィボウガンを天に掲げ、ギギレは小気味良さそうに笑う。

直後にドドが「しー」と指を立てて言うも、ギギレは当然のように無視してガッツポーズ。ショボン。

「後は連中がネコタク送りになるのを待つだけって寸法よ。そうすれば残る人間はアタシらだけ」

カランは嬉しい気持ちを表現するように狩猟笛をブンブン振り回すが、レガツダはその狩猟笛を片手で受け止める。

「安心するのは早いぜ。一目でも見つかったらアウトだってことを忘れるな」

「へいへい」

カランの腕力も相当だがレガツダはそれを上回る。諦めたように狩猟笛を振り回すのを止め、地面に先端をドスンと置く。

とはいえ、あのザザミはハンター達に夢中で、ハンター達は逃げるので必死なのだ。こちらに気付く余裕も無いだろう。

なのでギギレとカランは楽観的に考えており（ドドは普段から楽観

的なので除外)、気が緩んでいた。

そんな余裕があるからかカランはふと足元を見てみる。

「……ん？」

「キ」

カランの足元には「やあ、でヤンス」と言っているように片手を上げるチャチャブーが。

そしてチャチャブーはヘヴィボウガンを掲げて格好つけているギレの存在を確認。

気のせいかカランは、鳥兜のようなお面の目に当る部分がキラんと輝いたように見え、顔を青く染めた。

「キー・キキキー！キイキイ、キキーツ!!」

唐突に密猟団らの前で「こいつだー！こいつらがやったんだー！」と言っているかのように甲高い声を上げる！

その甲高さに耳栓を持つギレを除いた密猟者は耳を塞ぎ、同時に拙いと判断したギレがチャチャブーを取り押さえる。

「キー・キー！」

「にやろ、やめやがれってんだ！気付いたらどうすんだ！」

子供とはいえ怪力を持つチャチャブーを押さえ込むギレ。彼は子供の頃から喧嘩慣れしていたのだ。

—だがギレは知ってしまった。オウシヨウザザミの視線が完全に密猟団に向けられている事を。

「て、撤回ー！」

ギレが叫ぶ！オウシヨウザザミがやってくる！逃げ惑う密猟団！転ぶドド！果たして彼らの運命やいかに！

●現状確認

・ハンターサイド：ザザミ亜種とザザミ原種に追いかける

・密猟者サイド：オウシヨウザザミに追いかける（ブツチャーはギレに捕まったまま）

残り時間：30分
討伐個数：1体

第64話「来る災厄」

レガツダ達4人が旧砂漠にやってきたのは、オウシヨウザザミの素材を手またはは求愛行動の邪魔をする為だ。

密猟者の利点はギルドに関連無く希少な素材を好きだけ略奪できる為、ギルドから注目を集めているオウシヨウザザミは密猟者にとって宝の山でもある。

突然変異による進化のために遺伝することはないだろうが、万が一という可能性を考慮した場合、オウシヨウザザミに求愛をさせるべきではない。

故にレガツダら四人は、オウシヨウザザミの邪魔をし、あわよくば素材を手に入れようと画策していたのだが……。

「ぶつちやけ強すぎてそれどころじゃないツスね」

「何を暢気なこと言ってるんだいオタンチン！」

密猟者ドドの相変わらぬ能天気っぷりにカランは再びゲンコツを落とす。

ヘルム越しとはいえカランは結構な怪力なのでかなり痛い。しかしドドはガンランスを手放さず、ガードの姿勢を崩そうとしない。

そしてカランもゲンコツを落とす直後に走りだし、一番苦戦しているであろうギギレを救助しようと狩猟笛を振るう。

硬くて強いオウシヨウザザミはもちろん厄介だが、一番厄介なのはチャチャブーだ。

小柄ですばしつこく、怪力による一撃も重いし、何より敵の弱点的に狙う賢さを持っている。

元々獣人族は敵に回すと厄介な相手だとハンター達は理解しており、その上位が窃盗を働くメラルーであり、パワーのあるチャチャブーだ。

故にチャチャブーの子供は、遠距離攻撃を放つギギレを執拗に狙って攻撃していた。

「キーキー！」

「ダーッ！このクソ兜め！」

普段は周りをうろつき、ヘヴィボウガンを構えた途端に杖で弾く。そのの繰り返しでとうとうギギレが切れた。

近接攻撃も兼ねてヘヴィボウガンを振り回すもチャチャブーは余裕で回避し、あまつさえ「おしりペンペン」で挑発する始末。

「野郎ぶつ殺してやラベボラッ!?!」

叫んだ直後にオウシヨウザザミの水ブレスが直撃。ギギレは横から洗い流される結果に。

「そっち行つたぞ!」

「解っているわよ!」

オウシヨウザザミを相手していた3人だが、ギギレを援護しようとカランが向かい、それをレガツダが忠告する。

甲殻種にしては速い足取りでギギレ（正確にはブツチャー）の元へと向かい、必然的にカランは追われる形に。

武器を納刀して追いかけるレガツダとドドだが、纏めて相手してやろうかと鋏を振り回して突進するオウシヨウザミには追いつけない。

必然的にカランはギギレの救助を諦め、振り向いてオウシヨウザミと向き合つて鋏攻撃を回避することに専念する。

とはいえ動きが速く、右へ左とフットワークのよい連撃を繰り返すから避けるのが大変。今まで以上に危機迫るものを感じた。

ひーつとカランが必死に避ける中、レガツダとドドが大剣とガンランスで背面を突く……が、当然のように弾かれる。

「アニキい〜！諦めましょうよお〜!」

「破片の1つでも手に入れる覚悟で挑め!」

「みみっちいッスね!」

ドドの忠告を無視して突つ込むレガツダだが、オウシヨウザザミが素早く横に回転して攻撃。

回転しながらの鋏振り回し攻撃をモロに受けたレガツダは吹っ飛び、消極的だったドドはガードでなんとか防ぎ、カランは背を逸らしてギリギリ回避。

「……逃げるよ!ドドはレガツダを連れな!」

「合点!」

前髪を掠ったカランは蒼く染めた顔でドドに命令。ドドはいつもとは比べ物にならないほどに即座に動き出した。

前後で動きがあるものだからオウシヨウザザミがドチラへ攻撃しようかと悩んだのをチャンスと捉え、ドドはレガッダを持ち上げて逃げ出す。

一方のカランはといえば「まいったかー！」と言わんばかりにギギレの上で跳ねるチャチャブーをどかさうと……。

「ほーれモスジャーキーだぞ〜」

「キー！」

持っていたモスジャーキーを遠くへ投げて誘導したのだった。このチャチャブー、食欲は猫(?)一倍であった。

すんなり引つかかったのでちよつと唾然としたカランだが、その隙にのびているギギレの肩を持って逃げようとする。

オウシヨウザザミが襲ってこないか見てみれば……彼は空を見上げて威嚇のポーズを取っているではないか。

何をしているのかと思ったカランだったが、瞬時に己の頭上にのみ風と影が通り、頭上を何か横切ったのを感じとった。

飛竜種か何かが入ってきたのかと予想したカランは空を見上げて——目を限界まで見開く。

「あれは——」

一方ハンターサイドはといえば。

「ザザミがそっち行きました！」

「ホント亜種にメロメロだねこのザザミ！」

「一気に畳み掛ける！」

「了解！」

オウシヨウザザミとブツチャーが何処かへ行ったのを切っ掛けに、クエストの難易度がグツと下がった状況に。

むしろ邪魔者が居なくなっただのはザザミも同じなのか、これでもか

と言わんばかりにザザミ亜種に詰め寄る始末。

だがハンター達の目的はザザミを2体以上狩猟すること。邪魔者が減ったとはいえ攻撃してくる彼らをザザミは許さない。

その都度ザザミ亜種はザザミから離れ、遠くから水ブレスなどで攻撃を加えていく。どうやらザザミ亜種はザザミをお気に召さなかったようだ。

こやし玉はこれまでの狩猟で使いきってしまったので苦戦すると思われていたが、ザザミが亜種に夢中で、亜種は戦闘に消極的。

亜種の動きをガンナーのリグレットが主に観察し、残る3人がザザミを集中攻撃する。この組み合わせのおかげでザザミを弱らせつつあった。

さらに亜種がザザミのしつこさに怒って水ブレスで攻撃するようにもなった為、これはかなりの好都合だ

そんな亜種の露骨な嫌われ方を目の当たりにしたからかもしれないが、ザザミはブクブクと泡を吐いて弱り出す。

「よし、弱ってきているな」

「私は失恋のショックで落ち込んでるように見えるんだけど」

「気にしたら負けだ」

「それより追いかけてみましょう！亜種は別に移動していますし」

まだ恋をしたことのない彼らだが、恋に破れた者の惨状を知って気まずくなる。しかしそんなのは人間のエゴだと割り切る。いや割り切らなければならない。

ザザミ亜種が地中へ潜り、体を引きずって逃げようとするザザミとは別方向へ移動していくのを確認してから、ザザミを追いかける。

彼らの遙か上空を飛んでいく影。その存在に気付かずに。

オウシヨウザザミが向かったのはベースキャンプに程近いエリア2。ザザミが逃げようとしているのはエリア10。亜種は恐らくエリア4だろう。

ザザミが向かっているエリア10は段差がハッキリとした場所だ。上手くすれば乗り攻撃を次々に繰り出すことが出来る。

繁殖期ゆえに予想外の乱入も考えられるので確信しているわけではないが、オウシヨウザザミが遠ざかった事もあってついつい自分達の幸運を喜んでしまう。

そしてエリア10へ辿り着くと、へばっているザザミが段差を登ろうと四苦八苦している場面に遭遇。

疲労もあってこちらに気付いていないことを良い事に、デームがハンドシグナルで仲間伝える。二手に分かれると。

貫通弾を扱えるリグレットと一撃が重いデームが後方へゆっくり近づき、残るイリヤとヴァルツが遠回りして登り前方へ。

そんなハンター達の動きに気付かないザザミはやっと上り終えたことで一安心するが、2人のハンターに気付いたことで一変、ブクブクと泡を吐いて威嚇する。

後方には既に溜め攻撃の用意を済ませたデーム。そしてザザミのヤドは、連中に大半を破壊されたモノブロスの頭蓋骨。

溜めに溜め込んだ力を解放して振り下ろしたハンマーがダイミヨウザザミの背面に直撃。

骨越しに浸透していく振動がダイミヨウザザミの体に響き、やがて振り上げていた鋏を力なく下ろし、倒れる。

とはいえ瀕死直前になって暴れる事もありうるからとハンター達は慎重ににじり寄り……ザザミの死亡を確認した。

「よっしやー！」

イリヤがガッツポーズを取った直後、彼女の喜びが波紋のように周囲に伝わり、歓喜の声上がる。

そろそろ日が暮れる頃合にやってようやく2匹目。イレギュラーの存在もあれば仕方ないことだが、やっと終わったと肩の力を抜き始めた。

「一時はどうなるかと思ったが、なんとかなったな」

「これで少しでもザザミが減るといいんだが。……よし、さっさと？ ぎ取って帰ろう」

「帰ったら素材の研究もしたいですしね」

彼らも人間だ。大自然には危険要素が沢山あるとはいえ、1つのことを達成すると途端に気が緩んでしまう。

それでも狩人特有の達成感心地よいもので、各々は思いを馳せながら盾蟹の素材にありつこうとする。

—そんな気の緩みが油断を生み、こちらへやってくる存在に気付かなかった。

突如として彼らとザザミの頭上を何か横切り、その際に生じた風から守ろうと手を遮って目を閉じる。

密集していた彼らは吹いた風とは逆の方向へと視線を向き、突風の正体を探ろうと視野を広げた。

そして見つけたのは——見た事もないようなモンスターだった。「なんだコイツ!？」

全身を包む大量の鱗は、まるで金色の刃のよう。

「鳥竜種?それとも飛竜種!?見たこと無いよ!」

空の王者リオレウスとは違う甲高い声で鳴く姿は、まるで鳥のように軽やかで、飛竜のように勇ましい。

「まさか——」

独自の進化を歩んだであろうそのモンスターは、見た目以上の獰猛さを醸し出していた。

そんな強者の印象を内外ともに見せ付けているモンスターだが、その生態ゆえに彼の存在を知る者は少ない。

しかし研究者の卵である2人は、彼のモンスターの名を知っていた。その名は——

「セルレギオス!」

リグレットが微かに残っていた書物の記憶から漁り出し、彼のモンスター……『千刃竜』の名を告げる。

それに呼応するかのように金色の竜―セルレギオスは大きく翼を広げ、刃物のような鱗を逆立てて吠えた。

「いかん、コイツには手を出すな！逃げるぞ！」

今すぐにも飛び掛りそうなセルレギオスを前にヴァルツが背を向けて走り、リグレットがそれに続く。

遅れてデймとイリヤも走りだが、セルレギオスは逆立てたまま背を向けるハンターを睨みつけ、逃がすものかと飛び上がる。

軽く羽ばたいただけで細身の身体は一気に空高く舞い上がり、どこるか羽ばたきも無く空高く留まっていた。

狙いを定めるように足を振り上げ、鋭い目がハンターを睨み……落下に合わせて翼を羽ばたかせる。

「伏せろ！」

それを一瞬でも目撃したヴァルツが叫んで咄嗟に地面に伏し、弧を描くように高速で飛来するセルレギオスが上を掠める。

彼らが見たのは、伏せた自分達の上を僅かな高さで掠った二対の爪。ヴァルツが叫ばなかったらあの爪に捕まれ……いや裂かれていたかもしれない。

外したセルレギオスだが再び空を滞空し、もう一度狙いを定めるように爪と視線を向けたではないか。

今度は掛け声の必要もない。すぐに立てない彼らはバラバラに散るように転がり、セルレギオスの爪が地中を抉る。

勢い余って地面を削りながら滑走するセルレギオス。それをチャンスと捉え強引に立ち上がって散っていく。

バラバラに散ったことで狙いを定めきれなくなってキョロキョロと見渡すが瞬時に定めたようで、イリヤに向けて地を蹴った。

「イリヤー！」

それほど経っていないとはいえ、大事な仲間が襲われたと放っておけず走りだすデйм。

全速力で逃げるべく振り向きもせず走るイリヤに向けて飛ぶセルレギオス。

しかし――。

「たあああすううけえええてえええ！」

—なんか小太りなハンターが飛んできた。それも高速で。

イリヤ以外が呆気に取られてしまう中、遠い空から飛んで来たハンターらしき男（声色から考えて男だろう）がセルレギオスに直撃。

高速とはいえたかが人間だ。僅かに注意を逸らすだけで大したダメージは与えておらず、むしろセルレギオスを怒らせてしまう。

誰だこんな事をしやがったのはと言わんばかりに声を荒げながら見渡すが、その正体はすぐに解った。

—別のセルレギオスがやってきたのだ。

「一体何がどうなっているんですか先輩!？」

「俺が知るか!とにかく逃げろ!デйм、イリヤも早く!」

ネコタクで運ばれていく小太りなハンターに並ぶようにヴァルツトリグレットが走り、疲労したイリヤの肩を担いでデймも走る。

今度はセルレギオス同士の縄張り争いに生じたらしく、地と空の両方からお互いの吠え声が轟く。

こうしてデйм達は、無事にデデ砂漠を脱出することに成功。

途中小太りな男がメラルーのネコタクで別方向へ運ばれていくのを見送り、今は混乱した頭を整理することで精一杯だった。

とにかくすることは二つ。クエスト達成の報告と——異常事態の報告だ。

セルレギオスの出現。それも2体同時。

その報告はドンドルマに新たな脅威を知らしめることとなろう。

余談だが、ダイミヨウザザミ亜種とオウシヨウザザミがデデ砂漠を

離れていく様子が観測されたとも報告された。

第65話 「悩み事と飯」

千刃竜セルレギオスが出没した。それもバルバレギルドが確認されているフィールド各地に。

その事実はギルドを始めとして大老殿に、そしてドンドルマの人々に囁かれ、さらなる脅威として人々を不安に駆り立てる……かと思えばそうではない。

何せドンドルマは、世間的に言えば滅多に現れないという古龍種が何度も襲来し、それに見事打ち勝ってきたのだ。

もちろんハンターが討伐してくれるという希望を抱いているとはいえ、古龍種が引き起こす災害への備えや心構えぐらいはある。

ビクビクしているぐらいなら少しでも補強や補給に力を注ぐ。その思考の切り替えがドンドルマの街に活気を与え、大勢が逞しく生きていけるのだ。

「セルレギオス……か」

「次から次に厄介ごとが増えるのお」

「まあこんなこともあるさー！笑ってはいられないがな！」

……まあ、モンスターへの脅威や知識をよく知っているハンターや探検家は、彼らほど前向きにはいられないが。

料理長アイルーがデカイ鍋を振るって調理する傍ら、重苦しい雰囲気にも包まれた状態で3人はため息を吐いた。

1人は筆頭ハンター。ドンドルマの警備や周辺の調査など様々な仕事を引き受けている立場故に、己ですら数度しか目撃していない千刃竜の襲来に危機感を覚えている。

2人目は【我らの団】教官ことジグエ。隻腕となった彼は「遠い地方で有名な教官服」を着込んでいる。いつもは朗らかだが、この時ばかりは眉間に皺を寄せまくっている。

3人目の【我らの団】団長は相変わらずの笑顔。しかしその豪気さが却って2人の緊張感を解し、元気づけさせてくれた。

彼らもまたセルレギオスの情報を耳に寄せていた。情報源は例の

研究者3人組―イリヤ・ヴァルツ・リグレットの3人だ。

ロツクラック出身の女ハンター・クカルの知人だという彼らは研究者の卵としてハンターを兼任しており、彼らの情報提供は実に役に立った。

まあ大老殿という知識の宝庫がある為、研究者の卵らがたまたま資料で見たという情報よりも的確かつ豊富な資料があったのだが。アーメン。

セルレギオス。非常に高い飛翔能力と縄張り意識を持ち、一度決めた縄張りを自ら出ることには滅多にない飛竜種。

リオレウスとタメを張れるという程の飛行能力と攻撃性を持つ危険性の高いモンスターが、バルバレで確認される各地フィールドに現れている。

これはハッキリいつて異常気象に近い。セルレギオスの生態と数を考えるなら尚更だ。

「セルレギオスが大勢で逃げ出したと考えれば……古龍種の再来も考えられるな」

「いや、もしかするとそれ以上の脅威がいる可能性も考えられる。気は緩められん」

「ドンドルマの強化が間に合えばいいんじゃないかな……」

老人2人の顔は厳しいが、筆頭ハンターの顔の厳しさはその上を行く。筆頭ルーキーが見たら卒倒しそうな程に。

何せ筆頭ハンターはドンドルマの警備にも貢献しており、密漁者の捕縛も仕事の内に含まれるのだが……その密漁者の影がチラホラと見えているのだ。

デイルム達の話によると、あの日のクエストで自分達以外のハンターの姿を一瞬だが目撃したのだという。

当然だが同じフィールドに複数のハンターチームを投入することは基本的に禁止している為、密漁者と考えて間違いないだろう。

風紀の乱れを嫌う筆頭ハンターにとって、自然の摂理を全く考慮せず好き勝手に生物を殺す密漁団は忌むべき存在。放っておくことはできない。

【我らの団】としてもドンドルマの助けに貢献しているとはいえ、教官は引退した我が身を惜しむ日々が続いている。

三者三様に溜め息を零していると……。

―ドズンツ！

「教官。団長。筆頭ハンターさん。竜頭ターキーが出来ましたよ」

テーブルを揺らすほどの巨大な皿に盛られた巨大な頭の丸焼き（何なのかは秘密）を置いたのは、1人の女性だった。

レイアスのガンナー装備を纏い、紅竜砲を背に持った女性ハンター。ヘルムを脱いでいるからか眼鏡をつけており、その眼はキツい。

への字口ではあるが整った顔つきをしており、金髪碧眼の可愛らしい顔つきをしている。泣きホクロが特徴的。

学院の委員長でもしていそうな、しかし背丈の高さ故に威圧感を感じさせる女性。それが彼女、【我らの団】ガンナー・リリトである。

突如として置かれた丸焼きに驚いた3人は目を点にしてリリトを見上げ、リリトは眼鏡をクイツと正して3人を見る。

「悩むのも仕方ないことでしょうが、悩んでいても仕方がないことなのも事実です。私たちにも出来る事の1つは、腹を満たして次に備える事だと私は思います」

ニヤリと笑ったりリリトはそのままドツカリと座り込み、皿に盛られていた骨付き肉を握り、豪快に噛み千切って食べ始める。

見た目は真面目系、中身も真面目、根っこは野生児。理性と野生を併せ持ち、基本的に前向きなハンター。それがリリトだ。

「……ワツハツハツハ！こりゃ1本取られたな！」

「ほっほっほ、確かにそうじゃのお。ではせっかくの料理長の作ってくれたメシじゃし、食うとするかの」

そんな豪気な態度を見せるリリトを見て笑った団長と教官も続いて肉を食べ始める。

3人を見て呆気にとられていた筆頭ハンターだが、やがて観念したように料理に手を伸ばしだす。イライラしていて腹が減っていた処なのだ。

かくして、美味しそうな匂いに宛がわれ、労働で疲れて腹を空かせた人々が集ってお祭りモードに。

料理長はそれに負けじと皆の腹を満たすため、料理をふるまうのだった。

ドンドルマの危機は近い。しかし腹を満たせば元気が出て、また仕事に戻る。

モンスターもそうだが、人間も食欲が満たされると頑張れるものなのだ。

「料理長はんー！どうかウチのオトモになってえなあー！」

「断るニヤル」

「そこをなんとか！」

なお、この料理長アイルールの料理に魅了された女ハンターが泣き続ける事になったのだが、それは別の話。

第66話 「原生林再び」

原生林。草木と水と毒沼が豊富なハンターの狩猟地が1つ。

近年発表されたG級モンスター出沒に合わせ各地にG級が出揃っているが、ここだけは比較的穏やかな生態系を築いている。

原因は昨今に起こった粉塵爆発。当時の原生林を縄張りにしていた大型モンスター2匹を爆破したためだ。

そんな原生林の現在の支配者は、あの粉塵爆発に耐えて生き残った毒怪鳥ゲリヨス。

生き延びた彼はたくましく成長し、見事G級となって上位級の大型モンスターを退かせ続けたのである。

どういうわけか他のG級モンスターが寄つてこないのが不思議だが、ゲリヨスにとっては好都合であり、のびのびと暮らしていた。

そして彼は、目の前にいるキラキラ輝くモンスターを見て、賢いが故に記憶力の良い脳裏にフラッシュバックを走らせた。

ゲリヨスはキラキラ光る物に目がなく、ハンターから無断で拝借することも多いという。

全身を宝石のような輝きで覆ったオウシヨウザザミからしたら、欲しい欲しいと言わんばかりに嘴を小突いてくるゲリヨスは溜まったものではないが。

滝が流れ、ズワロポスが屯っているこのエリアに、オウシヨウザザミは居た。

旧砂漠を後にしたオウシヨウザザミは、のんびり歩きながら原生林に辿り着いた。

餌の取り合いが激化している旧砂漠より、元々ザザミ種の好む温暖な気候である原生林が良いと判断したからだ。

それに現在の原生林は目立った脅威もなく、古龍種独特の静けさも無いこともあって好物のキノコ類をゆつくりと食べていた。

んで、どこかで見たことのある（気がする）ゲリヨスに見つけられて小突かれまくっていると。

オウシヨウザザミの薄くも高硬度の甲殻にとっては微々たるダメージでしかないが振動は伝わってくる為に非常にウザい。

かといってG級とはいえ毒を吐かず小突くだけのゲリヨス相手では攻撃する気にもなれない。この蟹は危険度で攻撃するしないを決められる蟹なのだ。

なので振り向いて水をブシューつと吐いておく。いきなり水をぶっかけられたゲリヨスは驚いて逃げ去っていく。

ギヤアギヤア騒いで走るゲリヨスを、煩いなあ、と言っているように姿を現すモンスターが居た——紫色のザザミだ。

このダイミヨウザザミ亜種、オウシヨウザザミと共に旧砂漠へと引越してきた雌の盾蟹であった。

というのも、夜にはディアブロスがあり、昼にセルレギオスという強敵が現れた事によって己の立場が危うくなったと悟ったからだ。

ちなみにこのザザミ亜種は結構な頻度で砂漠と原生林を往復しているらしく、餌を豊富に摂取できる場所を熟知している。

ザザミ亜種が良い餌のポイントを知っているからか、オウシヨウザザミとブツチャーは自然と跡を追いかけるようになる。

オウシヨウザザミとブツチャーがいるから下手なモンスターが近づかず、またオウシヨウは襲われない限り攻撃しないので、ザザミ亜種にとって彼は草食種並の扱いで放っておく。

お互い知らず知らずにギブアンドテイクの関係となり、しかし雌雄の違いによる変化は全くない。

一種の共生関係であり、同時に雌と雄の意識は全くない……人間でいう「アパートのお隣さんの関係」とでもいべきだろうか。

とにかく平和ではあった。ザザミ亜種が満腹になって寝ているのに対し、代わるようにオウシヨウザザミとブツチャーが餌にありつく。

ゲリヨスもちよつかいをかけるだけで襲うわけでもないし、ズワロポスはもちろんのこと、コンガやゲネポスも伸び伸びと暮らしている。

しかし弱肉強食の世界に、一定などありえない。

—キイイイイ!

—ズガドンツ!

空高くから落ちて来た金色が、虹色を踏みつけ轟音を響かせる。

金色ことセルレギオスは、空高くから目立つ虹色ことオウシヨウザザミに狙いを定め、急降下してきたのだ。

その轟音にビックリしたザザミ亜種は地中へ逃げ込み、気配に気づけなかったズワロポス達も大慌てで逃げ出していく。

高高度からの急速な落下に加え、鋭い爪を突き付けるような蹴りをドついでには見たが……セルレギオスは踏みつけた反動を利用し跳躍する。

—%\$#&”§——!

脊椎動物にはない独特の奇声を上げながらオウシヨウザザミは鋏を振り上げ、怒りを露わにして泡を吐く。

セルレギオスは先ほどの一撃で仕留めきれないと本能的に悟ったのだろう。現にオウシヨウザザミは元氣リンリンだし。

怒り狂うオウシヨウザザミの上空を回るようにして飛んで様子をみるが、オウシヨウザザミは見上げるだけに終わらせない。

高速で飛行しているにも関わらず足元の水を摂取し、空に向けて発射。狙いは悪くないようだがセルレギオスは難なく躲す。

セルレギオスは飛行能力に加え制空能力も高い。ただの水鉄砲如きではあたるはずもない。

だがここは原生林の中でも水が豊富な場所。弾は無限にあるといても過言ではなく、短時間の補給に長時間の射撃を可能としていた。

このままでは埒が明かないと判断したセルレギオスは高度を落と

し、あまつさえ地上に着地。

距離が離れているとはいえ体が軽いオウシヨウザザミが急速で接近するがセルレギオスは身構えたまま。

かと思えばまるで松ぼっくりのようになり、頭から首までの鱗を逆立て、ハリネズミのようになつた頭を振りかぶり、鱗を発射。

刃鱗と呼ばれるセルレギオス特有の鱗はオウシヨウザザミに飛んでいき——両の鋏の前に弾けた。

鋭すぎて肉体に刺さり続けるという刃鱗は、高硬度かつ超密度の甲殻に難なく阻まれた。

しかしオウシヨウザザミがガードする以上、そのガードは鉄壁ではなく、むしろ弾け砕けた刃鱗に一瞬の恐怖を抱いたのは明白。

両の鋏を盾に突進してくるオウシヨウザザミを見たセルレギオスは瞬時に地に伏せていた翼を広げ、その場で滞空し、蹴りを食らわせる。

視界を遮っていたことで何事かとオウシヨウザザミが衝撃を受けながらも立ち止まり、再びセルレギオスは反動を活かして飛ぶ。

再びセルレギオスは螺旋を描くようにして飛び、オウシヨウザザミは見上げて鋏を振り上げる。

一見すると一点のダメージも与えていないように見えるが、それでもセルレギオスに引きの手は考えられない。

セルレギオスは己の縄張りだと主張するように嘶き、再び高度を落として接近していく。

その千刃竜の突撃は、どこか焦りですら感じさせるものがあつた。

その頃ブツチャーは何をしているかといえば。

—ギャアギャア!

—キーキー!

別エリアでゲネポスの群れと喧嘩していた。

第67話 「冠蟹VS千刃竜」

セルレギオス。鳥のように軽やかな飛行能力と、千刃竜と呼ばれる所以である刃鱗が特徴の飛竜種。

かのリオレウスが相手だろうとも上空でタイマンを張れる程であり、その巨大な翼は伊達ではない事を示している。

火球ブレスといった特殊なブレスは持たないが、己の鱗を飛ばし獲物に突き刺す攻撃は数多の獲物を仕留めて来た。

加えてセルレギオスの特徴といえば、やはり独自の進化を経て得られた後脚だろう。

前後に2本ずつ生えた指は獲物を掴むことに特化しており、脚力と翼力を合わせることで獲物を軽々と持ち上げ、時には投げ飛ばすことも出来る。

もちろん鋭い爪を活かした蹴りも強力な為、掴まれないようにと離れていても低空からの高速キックにも注意しよう。

これらの身体機能に加え生態の特徴を総合すると、セルレギオスはとても危険なモンスターでもある。

縄張り意識の高さも相まって、その脅威は人間に限らずモンスターにも及ぶほどだ。

まあ、そんなモンスターでも当たり前のように相性の悪い相手がいるわけだが。

—ガツキインツ!

超硬度の甲殻に蹴りをお見舞いするも、その振動が足から響いて痛い思いをするのはセルレギオスだけだった。

痛みで硬直している場合ではない。すぐさま反動で蹴り上げ、襲い掛かろうとしていた鋏から逃げ出す。

多少の傷はつけられたもの大したダメージを負わず、しかし高所からの蹴りで頭を揺さぶられるような思いをしたオウシヨウザザミ。

鋏で捕まえようにもすぐにセルレギオスが自身を踏み台にして跳

ぶものだから、捕まえられるに捕まえられない。

肝心な時にブッチャーは居ないし、オウシヨウザザミは徐々にイライラしてきた。

片やヒツトアンドアウェイを基本とした飛竜種、片や絶対防御と状態異常を併せ持つ耐久型の甲殻種。

飛べる飛べないの差がここまで広がっているにも関わらず、両者とも中々攻められずにいた。

本来は毒霧を放射できるオウシヨウザザミではあるが、旧砂漠では満足に餌にありつけなかったので毒素不足だった。

原生林に訪れたのもつい最近で、主に虫類を主食にしていた。毒沼のキノコでも漁っておけば蓄積できたらうに……。

代わりに水辺であるが故に水ブレスが使い放題ではあるのだが、直線状に放たれる水ブレスは高速で飛び交う千刃竜と相性が悪かった。

対するセルレギオスは、圧倒的な力不足と防御力の差に悩まされていた。

彼奴は多くのセルレギオスの中でもG級に含まれる強者であり、その鍛えられた翼と後ろ足は伊達ではない。

だがいかにGの世界に唐突できた彼でも、オウシヨウザザミの超合金甲殻の防御力の前では、文字通り刃が立たなかった。

その防御力を無視できる方法が、初手でも使われた急降下キック。高所から落ちてからの蹴りは中々に強力だ。

しかしこの攻撃はオウシヨウザザミだけでなくセルレギオスにもダメージが入ってしまう諸刃の剣。

人間で例えるなら、鉄に蹴りを入れていようなものだ。そりゃ誰だって足と爪先が痛くなるってもんだ。

セルレギオスはグルリとオウシヨウザザミを一周し、旋回が間に合わずに背面を向いているオウシヨウザザミに向かって降下。

今度はオウシヨウザザミの背後で滞空しながら何度も後ろ足で蹴り、爪で甲殻を削ろうと試みて……逆に爪が削れた。

巻貝のような甲羅は甲殻以上に頑丈のようだ。擦り減っていく爪を惜しむように翼を羽ばたかせて距離を取る。

するとオウシヨウザザミは背面へ向けるのを諦めてそのまましがみこみ……一気に跳び上がる！

身を捻りながら高所を飛び、セルレギオスと視線を合わせることに成功。セルレギオスは吃驚仰天したようで軽く慌てていた。

自由落下する前にと、オウシヨウザザミは水ブレスを発射。驚愕して気が動転したこともあってセルレギオスは水を被ってしまう。

さらに悪い事に目に水が入ってしまった視界が悪くなり、フラフラと地面に向かって降下。それよりも先にオウシヨウザザミが落つこちたが。

地面に激突してめり込むが、どこかへ着陸しようと降りてくるセルレギオスを追いかけるべく、オウシヨウザザミは地面から這い出て追いかけていく。

どうやらセルレギオスはエリア移動するようだ。速度は遅くないし、オウシヨウザザミはセカセカと急いで移動を始める。

エリア4にてセルレギオスは不時着。ブルブルと顔を揺らして水を払い、視界を取り戻すことに成功した。

しかしオウシヨウザザミは見逃さない！助走をつけて軽く跳び、セルレギオスの背にダイブする！

—ギイイイツ！

いくらオウシヨウザザミの甲殻が軽くなったと言えども、セルレギオスを押さえつけるぐらいの重量はある。

甲殻種の特有である多脚でガツシリと抑え付け、セルレギオスは上手く翼を広げられずに地を這うばかり。

そして鋏でボコスカと殴る！刃鱗が重なりあつた鱗は中々に頑丈だが、確実にセルレギオスにダメージを与えていく。

滞空に優れたセルレギオスだが、意外にも地上走破力もある。鍛えられた翼と後ろ足で地を這い、オウシヨウザザミを振り払おうと鱗を逆立て、身を揺らす。

だがガツシリと脚で固定されたオウシヨウザザミはしぶとく、両の

鉄で遠慮なしに殴りつける。連打を受けながら耐えるあたりはG級の意地か。

とはいえ、振り払えないことは事実。

どうにかもがこうにもオウシヨウザザミは遠慮なしにセルレギオスを殴りつけ……やがて力なく倒れていく。

途端にオウシヨウザザミの動きも止まるが……その動きは勝利を確信したというより、戸惑いが混ざっているようだった。

脚で体にしがみついたまま、オウシヨウザザミは生死を確かめるようにして鉄で小突く。

ドスドスとセルレギオスの後頭部を突いていた時——セルレギオスが急に起き上がった。

ただ起き上がっただけではない。その身には黒いオーラが漏れ始め、強靱な力を用いてオウシヨウザザミを振り払おうと暴れ出す。

狂竜化現象——狂竜ウイルスによって生じた状態異常がセルレギオスに起こり、死の淵から蘇ったのだ。

セルレギオスに宿る圧倒的なパワーがオウシヨウザザミを放り投げんばかりに襲い掛かり、その身がグワングワンと揺れる。

両後脚の爪を地面に食い込ませ、大きく前後左右に揺らせばオウシヨウザザミも諦めたように離し、遠くへと放り投げられる。

着地した先には、ドス黒いオーラを纏い、真っ赤に染まった目でコチラを睨むセルレギオス。

狂竜ウイルスを撒き散らしながら、セルレギオスが咆哮して飛びかかる

はずだった。

結果としてオウシヨウザザミはセルレギオスに襲われず、セルレギオスもオウシヨウザザミに襲われなかった。

2匹に襲い掛かったのは、瞬時に目が眩む程の閃光だった。

飛びかかろうとした直後に視界を奪われたことで、セルレギオスは地に落ちてしまう。

オウシヨウザザミが鋏でガードして落ち着こうとする中、セルレギオスは眩んだ視界に戸惑う。

見えない視界に戸惑って暴れるセルレギオスの視力が回復し、目の当たりにしたものは――

セルレギオスより禍々しいオーラを漂わせる、赤紫色に染まったゲリヨスの嘴であった。

「オウシヨウザザミが原生林で確認された？」

「はい。調査隊によりますと、ダイミヨウザザミ亜種、それにセルレギオスらしき姿も確認されたそうです」

「そうか……またしてもセルレギオスか」

「あそこはゲリヨスしか大型モンスターが確認されなかったので、実際の脅威はこの3匹となるでしょう。さっそく……」

「……すまない、私の聞き間違いだろうか――ゲリヨスしか……と言ったか？」

「え、ええ……ここ暫くはゲリヨスが原生林を仕切っているようにです」

「ここ最近G級モンスターが多数確認されているというのに、ゲリヨスだけしか居ないというのは妙な話だ……他に奇妙な点はな

「あったか？」

「資料によりますと、このゲリヨスはかつて、ゴアⅡマガラが生息していた頃の原生林の生き残り」「待て」……どうかなさいましたか？」
「それこそありえん話だ。ゴアⅡマガラと同じ生息地に滞在していたというのなら、とつくに狂竜ウイルスに感染しているはず。生きながらえるはずが……」

「しかし同一個体であることは確かです。調査隊の報告が正しければですが……信憑性は高いかと」

「……まさか……いや、理論上ありえなくは……」

「……どうなさいましたか、筆頭殿？」

「直に我らの団を呼んでくれ。事は一刻を争う」

「——下手をすれば、オウシヨウザミやセルレギオス以上の厄介種になりかねん。それこそ、古龍種以上の脅威に」

第68話 「ゲリヨス極限個体」

「極限状態?」

「ああ」

先ほどの言葉をオウム返しのように【我らの団】団長が言い、筆頭ハンターが頷いた。

筆頭ハンターから緊急で呼び出された【我らの団】団長と教官ジグエ、そして【我らの団】主力ハンターのビスカ。

もう1人のハンターであるリリトはクエストで出払っており、その他のメンバーはドンドルマの支援作業で忙しいので外して貰っている。

三人の前には筆頭ハンターの他に、ハンター達の助力により建設されたドンドルマの重要施設が1つ【狂竜ウイルス研究所】の所長と助手が居る。

筆頭ハンターは元から表情が硬いが、せっかちな所長も、おっとりとした助手も今は表情が硬い。何か思い悩むことでもあるのだろうか。

その理由の1つが先ほどの言葉——『極限状態』だ。

「先日セルレギオスが発見された後、狂竜化した個体が再び増加したのは知っているだろう」

「おお。シャガルⅡマガラを討伐した以上、他所からやって来たセルレギオスから感染した可能性が高いんだったな」

狂竜ウイルスの発症源であるゴアⅡマガラ及びシャガルⅡマガラを討伐できたのは、他ならぬ【我らの団】のハンターだ。

現在は教官となったジグエがシャガルⅡマガラを倒した事で狂竜化現象は徐々に収まりつつあったのだが、ここ最近になって再発している。

黒蝕龍ゴアⅡマガラは大変珍しいモンスターではあるが、未知の樹海で度々目撃されている。

しかし未知の樹海に潜入するハンターはいずれも上位以上の実力者である為、発見された場合は即座に狩るケースが多く、感染の期間

は意外と短い。

ちなみにシャガルⅡマガラは古龍種としての生態故に今後の発見は不可能とまで言われているので論外。

だが今回の狂竜化現象の期間は長い。しかし未知の樹海でゴアⅡマガラが目撃されたという報告も無い。

奇しくもセルレギオスの大移動と重なった上、セルレギオスの群れは探索が進んでいない未知の樹海の奥地から現れていることが解った。

恐らくは他所あるいは未知の樹海に生息するゴアⅡマガラ或はシャガルⅡマガラによつて大量に感染し、それに乗つて来たのではないかと考えられる。

しかし、ここで予想外の事実が発覚する事となった。

「それに関しては先輩こと筆頭ランサーに調査を願ひ出たのだが……実は以前から原生林に限り、狂竜化した個体が度々目撃されているらしい」

「……どういうこつた？ マガラは未知の樹海でしか確認されていないって言っていたんだらう？」

筆頭ハンターの言葉に再び首を傾げる団長と、団長の言葉を査定するように頷く教官ジグエ。

団長は直接狩猟場に赴いたわけではないが、狂竜ウイルスはマガラ種からしか発しないということぐらいは解る。

そんな疑問に応じようと所長が前に出て、オホンと咳込んで周りの注意を向ける。

「実はな、狂竜ウイルスを研究していくにつれ『ある仮説』が浮かんだんじゃない……もしも狂竜ウイルスに感染したモンスターが生き永らえたらどうなるか、とな」

「……これこれ、まさかと思うが……」

ジグエが所長の言う仮説を耳にした途端、体中から汗が流れている。

狂竜ウイルスが人間に感染した場合、克服すれば絶大的な力を得られ、逆に克服できなければ治癒能力が弱体化してしまう。

上記の状態異常は知能ある種族にのみ出る影響で、大型モンスターが感染した場合は異常なまでの狂暴性が発揮される。

まあ狂暴性が極まったが故に大抵は短命で終わってしまうのがせめてもの救いだっただが……。

もし所長の言うことが正しく、そして狂竜ウイルスを宿したまま生きながらえたとしたら。

「……所長の仮説は的中した。ゴアⅡマガラとの戦闘で生き延びたゲリヨスが原生林の主として君臨し、それに呼応するように狂竜化個体が増えてきている」

「ゲリヨスが原生林の主?! ガララⅡアジャラやラージヤンもいるってこのに!?!」

これに驚いたのはビスカだ。上位ハンターとして幾度も原生林に赴いたが、ゲリヨスの影を見かけたのは少なく、それよりも強大なモンスターの姿が多い。

言つては失礼だが、鳥竜種はガルルガを除けば生態系で言う中級程度。1つのフィールドを長期間に渡って陣取るなど不可能に近い、というのがビスカの考えだ。

ならば、考えられる別の要素は1つ。

「……さっき言っていた『極限状態』か」

表情を隠すように帽子の鍔を下した団長が呟き、筆頭ハンターが頷く。

狂竜ウイルスを克服したモンスター。それは狂竜ウイルスに感染し克服した経験のあるハンターからしたら絶望に近い物を感じざるを得ない。

事の重大さを理解したビスカは顔を青ざめるが、しかしジグエだけは何かを思い出したかのように挙手しだした。

「とりあえず極限状態について解っていることがあつたら出来るだけ教えて貰えるかの?」

「もちろんそのつもりだが……どうかしたのですか?」

思っていた以上に落ち着いているジグエを見て不審に思ったのか、筆頭ハンターが訪ねてみる。

「狂竜ウイルスを克服したのは——ゲリヨスだけじゃないんだが
のお」

ジグエの脳裏には、骨だけになった天廻龍と、それを食らったであ
ろう蟹の姿だった。

セルレギオスによって運ばれた狂竜ウイルスを感知し、極限状態を
呼び覚ましたゲリヨス。

狂竜ウイルスを克服し己の力としたゲリヨスの猛攻は……凄いを
通り越して酷い状態だった。

—バギツ！バシンツ！ベシベシベシツ！

トサカから発する閃光で目が眩んだセルレギオスを襲う、ゴムのよ
うに伸縮性のある尻尾による猛打。

最初は尻尾を叩きつけるように逆サマーソルトを決め、地面に陥没
した巨体に尻尾を向けてそのまま猛烈な勢いで叩きつける。

伸縮性を活かしているとはいえ、一発叩く度にセルレギオスの鱗ご
と粉碎していく様は恐ろしいの一言に尽きるだろう。

このような攻撃が出来るのは極限状態での影響が1つ「肉質の硬質
化」にある。

狂竜ウイルスを体内に蓄積したモンスターは甲殻・鱗・外皮に関わ
らず、ハンターの武装なら容易く弾く程という驚異の硬度を持つよう
になる。

どういった理由かはさておき、ゲリヨスのゴムのような外皮も影響
を受け、伸縮性がありながら鉄のような硬度を得る事に成功したの
だ。

その結果が、この堅ゴム連打である。むろん、死にそうな程に痛い。
それでも流石はG級というべきか。セルレギオスは滅多打ちにさ
れ体の各所を陥没させながらも抵抗の意思を見せていた。

狂竜ウイルスによる精神汚染もあるだろうが、セルレギオスはゴム

尻尾の連打から抜け出し、至近距離で尾を振って刃鱗を射出。

ゴム質の皮になら斬撃の類は効果があつただろうが、極限状態になつた今は違う。

—ボヨヨヨヨッ!

硬い癖にゴムの体質が残っている為か、なんと刃鱗を跳ね返したではないか! 乱反射していくのが不幸中の幸いか。

跳ね返した事ですら気にしていないゲリヨスは地を這うセルレギオスに向かつて突進。頭突きをお見舞いする。

モノブロスのような突進頭突きを食らつて吹き飛んだセルレギオス。先ほどの尻尾滅多打ちもあつて、もはや限界に近い。

だがゲリヨスは容赦しない。吹き飛んで倒れているセルレギオスの前で息を吸い込み、腹をむき出しにして身構え……毒液を吐き出す。

吐き出すのだが……これが尋常でないぐらいに多い。

ドバドバと太い線が放物線を描く。これは猛毒と体内に蓄積した狂竜ウイルスが複合されたウイルス液であり、全てゲリヨスの腹の中で溜めこんでいたものだ。

まるで体内の狂気を全て吐き出さんとばかりにセルレギオスに降り注ぎ、まるで滝打ち修行をさせられているかのよう。

猛毒に加え狂竜ウイルスを湖の如き量で受け止めたセルレギオスは強烈な苦痛に見舞われるも、その間は短く呆気なく息絶えた。

しかしあれだけの毒素とウイルスを吐き出しておきながらゲリヨスは満足できないらしく、そのまま嘴でセルレギオスの死骸を突きまくる。

これでもかというぐらいに執拗に。亡骸まで滅茶苦茶にせんばかりに徹底的に。

鱗を細かく砕き、ウイルスと毒に染まった肉を啄み、ミンチにせんばと嘴で叩きつける。

それほど経たずとも、セルレギオスを見るも無残な亡骸へと変貌していった。

それに満足したのか、ゲリヨスは天に向けて咆哮を轟かせ、周囲の小動物やズワロポス達を一齐に散らした。

鳥竜種にあるまじき禍々しいプレツシャーと狂暴性。これが狂竜ウイルスを克服した者が持つ力である。

さて次はお前だ、と言わんばかりに真つ赤に染まった目が周囲を向けるが……探し求めていた相手が居ない。

セルレギオスに夢中になってしまい、先ほどまでそこに居たオウシヨウザザミの姿を眩ませてしまったのだ。

もちろんゲリヨスは縄張りを侵す相手を許しはしない。

翼を羽ばたかせて空に浮かび、高所から敵を探さんと原生林の空を舞う。

―果たしてゲリヨスの次の狙いはオウシヨウザザミか……それとも。

その頃ブツチャーとザザミ亜種はといえば。

「キー、キーっ！」

あっちへ行け！と言わんばかりに寄ってくるオルタロス杖を振り払う、いつの間にかハチミツまみれになっているブツチャー。

―ZZZZZZ……。

その横で、エリアーでズワロポスと一緒にお昼寝しているザザミ亜種。

―モグモグ

逃げ切れた事を良い事に木の実や虫をムシヤムシヤと食べるオウシヨウザザミ。

……マイペース過ぎるモンスターも居たものである。

第69話 「オウシヨウザザミVSゲリヨス極限個体」

狂竜ウイルスは広がりやすい。ギルドがウイルスという呼称をつけたのは、この狂竜化の感染速度に起因している。

人間や獣人族、基本的に大人しい草食種を除いた殆どのモンスターに感染し、そこからさらに別のモンスターへと感染していく。

この尋常でない感染力によって、その狩猟地の食物連鎖を通じて蔓延し、強弱関わらず狂暴になったモンスターが人類に牙を向ける。

この感染性が、狂竜ウイルスが恐ろしいとされる点の1つである。さて、この狂竜ウイルスを克服した個体、つまり極限個体について話を戻そう。

そもそもこのウイルスは体内から蝕む毒のようなもの。強大な力を得るよう身体を作り替え、その代価として生命力と精神を削るのだ。

それに克服するということは、ウイルスに耐えられるよう身体を急速に進化させるということ。体の肉質も硬くなれるし一石二鳥。

そうなる事でウイルスに蝕まれる事なく、体内に蓄積していく狂竜化の力を最大限に引き出すことができる。毒を以て毒を制す、といった処か。

これが極限状態の仮説の1つだ。体内に蓄積しきれないウイルスは外に漏れてしまう。

以上の二点を考慮すると——極限個体は、ゴアIIマガラやシャガルIIマガラのように、狂竜ウイルスを撒き散らす元凶になりえるのだ。

今、ブッチャーは本格的にピンチだった。

いかにもヤバそうな色合いになったゲリヨスが空を飛んでいたのを目撃したが、そいつに襲われているわけではない。

それでも危険には違いないゲリヨスに見つからないように注意し

ながら、ブツチャーは地中に潜る時間も惜しむように走り続ける。

何度も言うがゲリヨスから逃げているのではない……蟹から逃げているのだ。

―ブシューツ！

「キイイイイ！」

きつと「ひいひい！」と叫んでいるであろうブツチャーは、後ろから溢れ出る水をフラフラした軌道で避けつつ、やっぱり走る。

今の水を避けられたのは走りつつもチラチラと後方を振り返って見ていたからだ。ブツチャーは改めて背後の存在を見やる。

そこには、黒いオーラを醸し出しつつブツチャーを追いかける蟹……ダイミヨウザザミ亜種の姿があった。

少し前まではオウシヨウザザミと同じエリアでノンビリと過ごしていたはずのザザミ亜種。

それが残留していた狂竜ウイルスに触れた事によって蝕まれ、いつの間にか狂竜化してしまったのだ。

その時にはオウシヨウザザミは餌を求めてどこかに行ってしまった、ブツチャーはオルタロスを追いかけてまわして遊んでいた。

そして何故かザザミ亜種はブツチャーに狙いを定め、こうして追いかけてこする羽目になった、と。

小さくも力持ちなチャチャブーではあるが、流石にダイミヨウザザミを倒す程の力は無い。

それに、感染する心配は無いが、狂暴になったモンスターという物は総じて面倒だ。死を恐れない暴走、というものほど恐ろしい物は無いからだ。

ブツチャーは過去何度か死ぬような思い（金獅子とか恐暴竜とか）をしたこともあってダイミヨウザザミ亜種から逃げ続けているのだが……。

どーしてか、ダイミヨウザザミ亜種はブツチャーから目を逸らそうとしてくれない。

「キ、キキイ！キー、キキー！」

可笑しいでヤンス！なんであつしばかり狙うでヤンスか!?!……と

言っているかのようにブツチャーは叫ぶ。

通りすがりのコンガを次々と撥ね飛ばしながら猛スピードで迫るダイミヨウザザミ亜種は、その叫びに答えようと水ブレスを発射。

「キイイイー」

再び「ひいひいー」というニュアンスで叫び、水ブレスをヒラリと躲す。

チヨコマカと逃げるブツチャー。それを追いかけてようと四足特有の機動性を活かして追い続けるダイミヨウザザミ亜種。

(早く助けてくれでヤンス旦那)

……と言っているようにブツチャーが叫ぶが、それはザザミ亜種のボディプレスの轟音によって消えるのだった……。

(……こっちに逃げてくればいいのにニヤ)

そんな2匹の追いかけてこを獣人族の巣に繋がる入り口付近で見ながら、アイルーは思ったが……このアイルーには気づいていない事がある。

もしアイルーの考えたようにチャチャブーの子が転がり込んで来たら、地中を掘る事のできるザザミ亜種によって住処はメチャクチャになるだろう。

アイルーの住処の行方は？そしてブツチャーはどうなるのか!?次回を待て！

そんな追いかけてこ劇場から遠く離れた、幾多もの柱に巨大な蜘蛛の巣が広がる高台にて。

—ギョエエエエ!

ババコンガですら支えられる蜘蛛の糸の上で、より毒々しい液をばら撒きながらデタラメに走るゲリヨス。

その足元では、雨のように襲い掛かる毒とウィルスの混合液から逃

げるべくジグザグに走るオウシヨウザザミ。

地中移動も可能としているオウシヨウザザミとは言え、同じ狩猟地に居る限り大空を飛ぶ者からは逃げ切れないようだ。

小さな蜘蛛の巣に引っ掛かっていた虫をモグモグしていた所をゲリヨスに見つかり、こうして上からの強襲に見舞われてしまった。

様々な毒素を取り込んだオウシヨウザザミだからこそ、地面をジュウジュウと融かす、今のゲリヨスの毒液の恐ろしさを理解したのだろう。

融けた端から狂竜ウイルスがばら撒かれている事もあつて危険性を感じ、こうしてゲリヨスの毒撒きから逃げていたのだ。

逃げる相手を見たゲリヨスは罅が明かないと擦り減っているはずの知能で判断し、粘着性のあるはずの糸の網に頭からぶち込んだ。

やがてブチブチと巣を破りながら身体を潜り込ませ、身体全体で地面へ落下してしまう。

にも関わらずゲリヨスは即座に身体を起こし、オウシヨウザザミに向けて走り出す。

毒液を吐かなくなった、或は広がるウイルスで逃げ場を失ったからか、オウシヨウザザミは突進してくるゲリヨスに向けて反転し身構える。

鋏でガード態勢を取ったオウシヨウザザミに対し、ゲリヨスは嘴を連続で突く。

セルレギオスを挽肉にするほどの嘴攻撃を、超硬度を誇るオウシヨウザザミの鋏がしつかりとガード。硬さが違うのだよ、硬さが。

極限状態になったゲリヨスの嘴攻撃でも甲殻に傷をつけられないが、オウシヨウザザミが少しずつ後退している様子から、確かなダメージが入っているようだ。

だがダメージが入っているのはゲリヨスも同じ。嘴を通じて頭を揺さぶれるような衝撃が襲ってくる。

本来なら狂暴化した故に考えなしに突っ込むものだが、ゲリヨスは鳥竜種の中でも特に高い知能を持つモンスター。

嘴では効果が薄いと理解したが故にオウシヨウザザミと距離を取

るべく、翼を広げて後退。

多少の風圧程度では怯まないオウシヨウザザミは、ゲリヨスを追いかける。先ほどの攻撃とゲリヨスの変貌で攻撃本能を刺激されたいしい。

ゲリヨスはただ引き下がっただけではない。よく見れば鶏冠がチカチカと発光しており、後退中に閃光を放つ準備をしているのが解る。

着地と同時にゲリヨスの鶏冠から強烈な閃光が放たれるが、オウシヨウザザミは鋏で前面を塞いでいたので目晦ましにならなかった。

当然ながら前が見えない状況なので、オウシヨウザザミは勢い余ってゲリヨスとゴツツンコ。

四足故に速度が速くないので大した衝撃ではないが、ゴムの皮にぶつかったオウシヨウザザミが派手に吹っ飛んだようだ。

好機とばかりにゲリヨスは後ろを向き、硬ゴムの尻尾をオウシヨウザザミに叩きつける。

―バニヨンツ!

……なんとも区別しがたい音が響き、硬ゴムの尻尾が弾かれてしまった。

硬いとはいえゴムはゴム。硬い物にぶつかったら跳ね返っていくのはゴムの悲しき性である。

オウシヨウザザミの硬度はゲリヨスの尾を上回り、しかしゴムとしての性質故に尻尾をあらぬ方向へ伸ばしてしまった。

弾かれたゴムの尻尾は、叩きつけた衝撃と弾かれた衝撃が合わさり勢いよく伸びていき、ゲリヨスのお尻を引つ張っていく。

当然ながらゲリヨスはお尻から引つ張られて横転。悔しそうにジタバタと暴れた後、即座に起き上がったが。

それを逃すまいと鋏を広げ、それを地に突き刺して王冠のようなヤドを持ち上げ、棘のような鉱石をゲリヨスに向けて射出する。

忘れがちだが、オウシヨウザザミの甲殻が集結し凝固したヤド―通称「王冠殻」―には、数多のお守りが生えている。

装飾のようにも棘のようにも見えるこれらを射出することで、相手

に暗示をかけて様々な効果を付与する「護石やられ」を生じさせるのだ。

しかし、これは当然のことながらセルレギオスの刃鱗と同じ飛び道具として扱われる為……。

—ボヨヨヨツ！

例外なく、ゲリヨスの硬ゴムの皮によってお守り弾を反射するのだった。

それでも跳ね返した衝撃は感じたゲリヨスは「何すんじやワリヤー！」と言わんばかりに飛びかかる！

また嘴で攻撃すると思ったのかオウシヨウザザミは鋏でガードするが、狡猾なゲリヨスは予想外な行動に出た。

オウシヨウザザミの目の前でウィルス毒を吐き出したのだ。嘴攻撃かと思ったら毒攻撃だったでゴザル。

至近距離で嘔吐を食らうとか精神的にもキツイ。猛毒とウィルスの混合液という時点でキツイのには違いないだろうが。

するとオウシヨウザザミは、顔面から猛毒を浴びた後、力なく地に伏せてしまった。

途端にガクリと崩れたとはいえ、毒を吐き終えたゲリヨスはそのまま嘴でガンガンと突きまくる。

—オウシヨウザザミの身体から、自身と同様の黒いオーラのような物を滲み出しているのに気付かずに。

第70話 「極限個体の戦い」

—ムツガー！もう我慢ならん！全力でボコつたる！

なお、上記の台詞はイメージです。

極限状態となったゲリヨスのウイルスに当てられ蓄積量を超えた事で、とうとうオウシヨウザザミに変化が訪れる。

多彩に輝く甲殻がドス黒く染まり、関節部やヤドの結合部から黒いオーラが溢れ、周囲に撒き散らしていく。

内外合わせ長期間に渡ってウイルスに蝕まれた結果、ついにオウシヨウザザミが極限状態に達してしまった。

加えて異常に硬化したゴム皮のおかげで打撃が通用しなくなった事に腹を立てていたのだろう。

オウシヨウザザミはコレでもかと言わんばかりに缺を広げ、口から黒っぽい泡を吹き出して怒りを表している。

普段ならビビって逃げ出すなりパニックになるなりするだろうが、今のゲリヨスはハツスル状態。

そもそも腕を広げただけで大声を上げたわけではないのでビビる理由も無く、やんのかコラ！と翼を広げてアピール。

本来なら臆病な性格の2匹が、ここまで攻撃的になって互いを排他しようとする。それが極限状態の恐ろしさの1つだ。

オウシヨウザザミが走る！ゲリヨスが走る！そして激突し——

—バヨンツ！

ゴムの体と鋼鉄の体が触れた直後に跳ね、猛スピード＋猛烈パワーが合わさってかなりの距離を離して地面に激突してしまう。

それだけではなく、オウシヨウザザミは逆さになった状態でヤドが地面にめり込んで動きが取れなくなり、ゲリヨスはゴロンゴロンと跳ねながら転んでいく。

このような現象が起こるのは、ゲリヨスとザザミこと甲殻種が極限化した事に繋がる。

幾ら堅くなりパワーが増したとしても、ゲリヨスはゴム質のまま
で、オウシヨウザザミは狂竜化とは無縁の外骨格だ。

弾くもの同士がぶつかり合えば相乗効果によって弾きパワーが増し、こうして吹っ飛ぶ結果となるのも仕方ない。

―てめえ何しやがんだコラー！

―それはこっちのセリフやっちゅーねん！しばくでオラ！

なお、上記の台詞はイメージです。

こうしてオウシヨウザザミVSゲリヨスの、極限状態でありながらひっじょくに不毛になりそうな戦いが始まる。

……とはいえ、それぞれの攻撃に差別化が生じてきた。

極限状態になると形振り構わず攻めの姿勢に入る為に閃光といった行動阻害が通用しなくなる。

故にゲリヨスの十八番である閃光攻撃は無力となる……と解るのは人間ぐらいなもので。

―カツ！

悲しきかな、ドヤつと胸を張りながら周囲を眩ます程の光を生じたとしても、オウシヨウザザミの突進は止められない。

オウシヨウザザミの視界は強烈な白光により一時的に見えなくなるが、そんなこと構うものかと突撃を続行。一次的なものだし。

どこへ避けようとも当るようにと鋏を振り回していると、幸運にもゲリヨスを右横から殴る事に成功。

本来のゴムの性質と極限化における筋肉強化によって防御とパワーが合わさり、ゲリヨスを吹っ飛ばした。

殴りつけた鋏が反動によって弾かれて身を引っ張られる思いをするも、遠くへ吹っ飛んでいったゲリヨスに比べれば微々たるもの。

そう、極限化における硬質化の原因は、皮膚及び筋肉が増大し凝縮

したことによるもの。

甲殻種たるオウシヨウザザミは外骨格で包まれた筋肉が異常に強化され、打撃力が強化されたのだ。

ゲリヨスを殴るのにもコツがある。上からでなく横あるいは下からなら、硬化による弾力も合わせて遠くへ吹っ飛ばせる。

そしていかにゴムの皮であろうとも、地面や岩に激突すれば打撲を受けるのは必然。

弾き十極限パワーが合わさることで加速度を増したぶっ飛びは、ゲリヨスに大打撲と言う名のダメージを与えている。

だがゲリヨスにも手はある。バタつきつつも起き上がり、次の攻撃を仕掛けんと突っ込んでくるオウシヨウザザミに向けて毒を吐く。

オウシヨウザザミの許容量を越えるほどの猛毒こそがゲリヨスの基本にして必殺技……なのだが、極限化したオウシヨウザザミに怯むという言葉は無い。

ダバダバダーと毒を受けつつもオウシヨウザザミは突っ込んでいき、今度は下から上へと鋏を上げ、ゲリヨスを持ち上げる。

今度は持ち上げるといふ動作によつて弾きを見殺し、ゲリヨスをひっくり返す作戦だ。

飛ぶか走るように進化したゲリヨスはスッテンコロリンと仰向けに倒れ、その隙にオウシヨウザザミが脚に力を込め、跳び上がる。

ゲリヨスが横転して起き上がるうとした所へ——オウシヨウザザミの全体重がゲリヨスに押し掛かった！

—メキメキツ

嫌な音が響く。これは強靱な皮膚が攻撃を弾く音ではなく、身と骨が地面にめり込んでく音だ。

今度は体重によるプレス攻撃。これなら重力によつて弾かれること無く、体重を用いてじつくりとダメージを与えられる。

オニムシヤザザミ期に比べると体重が軽くなったが、中型としては小柄に入るゲリヨスにとっては効果覿面。ゴムで弾く前にめり込んだ。

ここでゲリヨスは、極限状態でありながら己の危機を直感し……バ

タリと死んだふり。

だが無意味だ。

—ドツゴンドツゴン

動けなくなつたのを良い事にオウシヨウザザミが調子に乗つて大ジャンプを繰り返す。

さらにゴム質と弾きを合わさることで高さが増し、ゲリヨスの体の半分が地面に埋まって固定されていることによりジャンプ力が上昇。

ヤベエ間違えたとゲリヨスが起き上がるうにも体の殆どが地面にめり込んでしまい、とどめの超ジャンプ攻撃が迫る！

—ドツゴオンっ！

ついにゲリヨスを完全に埋めてしまった！

強度の足りない翼と首が無残にも地面から突き出ているが、硬化＋プレス攻撃で見事に身体が地面に埋め込まれた。

それでも極限状態の恐ろしさというか、首と翼が辛うじて抵抗を示している……まったく動けないが。

だが今のオウシヨウザザミには遠慮という言葉すらない。

僅かでもゲリヨスが生きていると解つたオウシヨウザザミは、両の鋏を打ちつけ——頭部を徹底的に殴る。

右へ左へ、弾かれてもなお殴る。殴る。殴る。殴る。殴って殴って……ついにゲリヨスも息の根が止まつた。

極限化個体同士の戦いは——オウシヨウザザミが制したのだつた。

制したとしても、オウシヨウザザミの体力は限界に近かつた。

何せ猛毒をタツプリと浴びたのだ。狂竜ウイルスに蝕まれていると言つても生命の危機を感じざるを得ない。

苦戦（強さ的な問題ではない）を強いられたことで疲労した体をズリズリと引きずる中、滝が流れている水場にたどり着く。

ここでまずは水分を……と思つた所である物を発見。

—そこには山ほど積まれたウチケシの実と、それを食べるブツチャーとダイミヨウザザミ亜種であった。

恐らくはブツチャーが採って来たのだろうが、どこからそんなに持ってきたのかと言うほどの大量にある。

ダイミヨウザザミ亜種—不思議な事に黒いオーラは消えていた—は、ブツチャーの追いかけてここで減った腹を満たす為にモクモクと食べていた。

「キ？キー！キツキー！（んお？お、ザザミの旦那—！）」

オウシヨウザザミの姿を見たブツチャーがはしゃぐ。ようやく再会できて嬉しいのだ。

だが現実是非常である。極度の空腹と疲労でウチケシの実へまっしぐら！

「キキキ、キーキキー！（さあさ、沢山食べてくださいませ—！）」

何度も撥ね飛ばされるようなブツチャーではない。即座に走ってオウシヨウザザミに道を譲って衝突事故を未然に防ぐ。

食欲を優先した（というかソレしか考えていない）2匹は大人しくウチケシの実を食べ続けるのだった。

ウチケシの実—その浄化力は凄まじく、狂竜ウイルスですら浄化する程。

2匹のザザミはブツチャーの齎した大量のウチケシの実で狂竜ウイルスを浄化していく。

これにより徐々に沈静化、元の穏かな体質を戻しつつあった。いやはや、自然の力ってスゲー。

こうしてゲリヨスは倒れ、狂竜ウイルスの脅威は大人しくなりつつある。

だが忘れてはいけない。ウイルスの元凶は別に居る事を……。

—「お師匠さん」が帰って来た。

その一言が街中の人々の復興作業を一時中断させ、ドンドルマに到着したガーグア便を皆で歓迎させた。

「お師匠さん」とはドンドルマの防衛に関わる重要人物であり、筆頭リーダーの師匠でもある。

「お待ちしておりました」

「いやはや、皆そろって歓迎してくれるなんて嬉しい限りだ」

いつもお堅い筆頭リーダーだが今回ばかりは顔を綻ばせ、お師匠さんは喜んで歓迎してくれる人々に嬉しさを覚え微笑みを浮かべる。

お師匠さんの元気な姿を見て安心した人々は張り切って作業に戻り、残ったのは筆頭ハンターらと「我らの団」のメンバーだけとなった。

「おう、筆頭リーダーから話は聞いているよ。俺が【我らの団】団長で、こっちが【我らの団】教官殿だ」

「話は聞いているよ、世話になったようだね。だが今はそれどころではないので、簡潔に言わせてもらおうよ」

ガツシリと団長と握手を交わすお師匠さんだが、穏やかな笑みを消して視線を鋭くさせた。

その只ならぬ気配に当てがれたのか周りは黙って彼の言葉を待ち……驚愕の事実が知らされる。

「輸送中に逃げ出した刀蟹カタナガニが未知の樹海で目撃したと噂で聞いた。私がユクモ村から遙々やって来たのは、そのモンスターを止める為でもあるんだ」

第71話「千と二の刃」

連日ドンドルマが管理する大地に蔓延る狂竜ウイルスとセルレギオス。

その実態が仮説とはいえ明らかになった。1つは極限化個体と呼ばれる元凶^{モンスター}。その元凶^{モンスター}が未知の樹海に潜んでいる事の2つだ。

大災害の原因の1つとしてモンスターが挙げられるのはこの世界では日常茶飯事ではあるが、今回の規模と深刻度は古龍種に匹敵している。

そこで筆頭旅団の中で最も防御力に特化した筆頭ランサー率いるランサー部隊が出張。

全員をランスで統一したドンドルマのエリートで固め、最低でも確実に情報を持ち帰るのが狙いだ。

筆頭リーダーの不安そうな顔と「我らの団」の安心させる笑顔、そして筆頭オトモの「帰ってきて当たり前」という平然とした態度。

筆頭ランサーはそれらを頭の中で反芻して帰還する決意を固めた後、荷車を牽くアプトノスの手綱を握るアイルーの呼び声で我に返る。

向かう先は、目の前のアイルー曰く「最近ゲキヤバにや心配がする」、鳥と獣の騒ぐ音が絶えない未知の樹海だ。

「……酷い惨状だな」

準備を整え樹海の奥地に足を踏み入れた直後、筆頭ランサーはそう言った。

生き物が殆どおらず、辺りにはジャギイやケルビの死体がゴロゴロと転がっている。

その尋常でない数を目の当たりにした歴戦を生き延びた部下達ですら吐き気を覚える。それほどの惨状なのだ。

筆頭ランサーは黙祷を挙げてからジャギイの死体……正確には死因になったであろう傷口を見る。

それなりの太刀ですら成し遂げられない程に綺麗な切断面だ。そしてここら全ての死体が同じような傷を負っている。

「隊長……」

一人だけ別の方角を見ていた部下の声に導かれて筆頭ランサーは振り向き、そして絶句した。

樹木どころか岩や瓦礫ですら綺麗に切断され、道標であるかのように連なっている。まるで道を作るために切り裂いたかのように。

中でも筆頭ランサーが驚愕したのは、その道標の中にポツンと佇む岩竜バサルモスの死骸。当然のように首が綺麗に切断されていた。

「……セルレギオスの業とは思えんな」

恐ろしいまでの切れ味を物語る岩の表面を手で擦りながら筆頭ランサーが声を漏らす。

セルレギオスは刃鱗と呼ばれる鱗を持つが所詮は鱗だ。分厚いものを切り裂くような力は無い。

「セルレギオスとは別のモンスターの仕事でしょうか？」

「それだけではない。よく見てみる」

安易に応えた部下だが、筆頭ランサーが数歩ほど歩いてからある物を指差す。

岩や樹木の陰に隠れているように黒い靄が微かにこびり付いており、その事実を知った部下達の血の気が引いた。

「……狂竜ウイルスだ」

指先から伝わる、ゴアⅡマガラに多く関わってきたからこそ覚えていた感覚に筆頭ランサーは苦い顔をする。

この惨状を起こしたモンスターが、少なくとも狂竜化、最悪な場合は極限化している可能性が高い。それを理解してしまっただが故に。

それだけではない。耳を澄ませば木々が倒れる音や生物の断末魔らしき鳴き声が遠くより響いているのが解り、部下達を身震いさせた。

「……行くぞ」

筆頭ランサーの重い一言が部下達の震えを止め、全員が一丸となって頷いて歩き出す。

自分達の使命は出来る限りの情報を得る……この先の惨状を見て知り、それをドンドルマの仲間達に届けること。

街の為、そして仲間達の為に足を止めるわけには行かないと、使命を帯びた筆頭団は凜とした表情で歩を進めた。

皮肉な事に、まるで全てを平らにするように切り裂いて出来た道は広々としており、全員が前だけを向いていても問題なかった。

しかし筆頭ランサー達の警戒は緩まない。ここ未知の樹海には地を裂くモンスター以外のモンスターが出てくる可能性もあることに。

そしてその予感的中し——甲高い咆哮が空から響き、セルレギオスが来襲してきた。

後ろ脚の鋭い爪で纏めて裂くつもりだったのだろうが、筆頭ランサー達は其の場で跳んでやり過ごした。

地鳴りを起こすも鋭利な爪故に地面に食い込み動きが一時的に取れなくなつたセルレギオスを間近で見て、改めて気付く。

「大きい……！」

「なんと禍々しい……！」

誰かが囁いたのを切つ掛けに各々が見て思ったことを口にする。

そのセルレギオスは文献や捕獲して見た実物と比べてもかなり大きく、そして黒い。

亜種と見紛うように全身が黒ずんでいるが、良く見ればセルレギオスの体からオーラのようなものが溢れ出ている。

怒り状態のナルガクルガのように赤く染まった目、生きていながら死体を見ているような不気味さ。

「もしやこれが——」

——極限化個体。

筆頭ランサーの予想を査定するかののように、爪を地から引き抜いたセルレギオスは咆哮を轟かせた。

飛ぼうとはせず翼爪を地に着けた状態で周囲を見渡し、身構えたランサー達に戦慄を走らせる。

筆頭ランサーもまたランスを身構えてセルレギオスを睨む。ここで背を向けば殺されると理解したが故に。

もう一度セルレギオスは筆頭ランサーに向けて軽く吠え、翼を広げ後ろ脚に力を込める――

それは一瞬の出来事だった。

筆頭ランサーが目の当たりにしたのは、いざ飛び立たんと翼を広げていたセルレギオス……その翼に食い込んだ1対の刀だった。

なにを言っている、いや考えているのか解らないだろうが、彼の目に映っている地中から飛び出たものは、まさに長大な刀でしかない。

セルレギオスにとつての不幸中の幸いは刀が翼膜にしか命中しておらず、突然の不意討ちに驚くも強靱な後ろ脚を持って其の場で跳躍。

筆頭ランサーを跳び越え、地に立つ2本の刀に向けてセルレギオスが威嚇した。もはや筆頭ランサーらは眼中に無いようだ。

その声に応えるように刀は地中へと沈み、先ほどまで緊張している気付かなかった地鳴りを響かせる。

ここでまたセルレギオスが悲鳴を上げる――セルレギオスの尾を刀が切り裂いたのだ。

筆頭ランサーの記憶では、極限化した個体は狂竜ウィルスを弱める抗竜石がなければ、どんな武器でも容易く弾く程に肉質が硬化するという。

それを、細長い尻尾とはいえ傷痕を付けた。それはあの刀身が美しただけでなく切れ味も優れていることを物語らせる。

セルレギオスはその刀に向けて尾を振り回すが、その刀は即座に地中に潜って退避。穴の空いた翼膜を広げ何とか滞空する。

「各自ランスを納刀して散開！逃走しつつ揺れを頼りに避けるんだ！」

それを見た筆頭ランサーの命令は、まさかの防御ガン無視。

セルレギオスは地中に居る敵に夢中になっている事を良い事に刀

からの回避に専念する。

筆頭ランサーがセルレギオスと距離を取りつつ視界に納め、部下達が走って逃げ出す。臆病と言わなかれ、あのような化物は相手にしない方が賢明だ。

セルレギオスが低空を飛んだことで音をキャッチできないのか、地中の主は鋭い刀を露出した後、その全身を露にする。

その刀の主は——蟹だった。

黒い甲殻。異常なまでに長い腕。背には岩竜の甲殻の欠片を繋げたような殻。

筆頭ランサーはそのモンスター^{の姿に酷似したモンスター……}「鎌蟹^{シヨウグンギザミ}」を思い出す。

しかし見た目も雰囲気も大きく違っており、特に鋏の先端が鎌のような曲刀ではなく……まるで太刀のように真っ直ぐ伸びていた。

もし筆頭ランサーの出発がもう1日遅ければ、彼はこのモンスターの名を知る事が出来たろう。

その甲殻種の名は——「ユクモの辻斬^{ツジギリ}」^{カタナガニ}刀蟹^{ツジギリギザミ}。

そしてセルレギオス同様、その黒色の甲殻をさらにドス黒く染めるオーラ……狂竜ウイルスを纏っていた。

——キユオオオオツ！

——シャコンツシャコンツ

セルレギオスの甲高い咆哮に対しツジギリギザミは威嚇するように刀同士を打ちつける。

互いにターゲットが決まり、セルレギオスがツジギリギザミに錐搦みしながら突撃！刀蟹は咄嗟の攻撃に受け止めるしかない！

—今の内か

取っ組み合っている2匹を背に筆頭ランサーは走り出す。激戦の音に振り向くことなく。

筆頭ランサーの全身に浮き出る脂汗を、そして胸に抱いた恐怖心を振り切るように、ひたすら前へ。

—あのようなモンスター、どう相手にすればいいんだ……。

筆頭ランサーは、折れかけた心を何とか持ち堪えながら思う。幾度も経験した中で最大の挫折を味わいながら。

第72話 「激突する刃」

千刃竜セルレギオス。徹底した縄張り意識、高い飛行能力と鋭い爪、深く食い込めば致命傷を与える「刃鱗」を持つ飛竜種。

刀蟹ツジギリギザミ。異常と言える切れ味を持った鋏を携えた、好戦的な性格がさらに悪化したショウグンギザミの変異種。

前者が極限状態に、後者が狂竜ウイルスに汚染された状態での戦いが繰り広げられ——未知の樹海は大惨事となっている。

狂竜ウイルスによる生態系の崩壊、ツジギリギザミの刀のような鋏による自然破壊。これらが広範囲に広がっていた。

しかし狂竜化と両者の性格が合わさった二匹は自然への配慮など毛ほども考えていない。

ツジギリギザミは地中潜伏からの奇襲を諦め、堂々と黒い姿を晒したまま刀を振り回す。

翼膜が少し破けた程度では落ちない飛行能力を駆使してセルレギオスは後方へ飛び、そのまま蹴りを一発。

だが甲殻種、それも生態系で言えば古龍種に継ぐ位置に君臨する彼の防御力は伊達ではない。少々傷が入るが難なく弾く。

その隙を逃さず水ブレスを発射。高圧噴射によりレーザーのような切れ味を持つ危険なものだ。

本来なら硬い方ではないセルレギオスの鱗だが、極限個体となった彼に水レーザーは通じないらしく、水を被る程度に終わ——らなかった。

突然だが、ツジギリギザミも甲殻種に盛れず雑食性で、鉱石類をも食している。

オウシヨウザザミと違って成分を蓄えることはできないが、様々な微細の鉱石が口に付着し、刀の研ぎに影響を与えている。

口に付着した微細にして大量の鉱石——特に砥石——の欠片は水ブレスに混ざり合い、威力の向上に繋がるのだ。

その結果、極限個体の甲殻に傷をつけることに成功。ほんの僅かについた傷に大量の鉱石の破片が刺さり、セルレギオスに激痛を走らせ

る。

そんなの関係ねえ、と言わんばかりに膨大な貯蓄量を持つ水袋からありったけの水を吐き出し、セルレギオスを水だけで押し出した。

バランスを崩し倒れ込んだセルレギオスをチャンスと捉え、ツジギリギザミは連続で鋏を突き下ろす。

真つ直ぐに伸びた細く長いはずの刀の先端は極限セルレギオスの鱗刃を砕き、次々と傷痕を付けていった。

致命傷では無いにしろ傷つけられたセルレギオスは辛うじて残っていた危機感を持つて起き上がり、這い蹲つてもツジギリギザミから距離を取る。

ツジギリギザミは当然ながら追撃を仕掛けるが、セルレギオスが軽く羽ばたくだけで距離がグンと離れ、またしても空へと逃がしてしまった。

セルレギオスは逃げるといふ選択肢は無く、攻撃を伺うかのようにツジギリギザミの頭上を旋回し、ツジギリギザミは威嚇のように鋏を交差させて音を鳴らす。

やがてセルレギオスは頭を振りかぶり、刃鱗を幾つかツジギリギザミに向けて射出。中距離攻撃で削るつもりか。

そんなものではツジギリギザミの鍛えられた甲殻に傷は付けられないが、ツジギリギザミはイライラしている様子。

鬱陶しいと鋏を振り回すがセルレギオスは上空で旋回するだけ。空を飛べないって悔しいが、セルレギオスも悔しい思いをしているのだ。

するとツジギリギザミは破れかぶれのつもりか顔面を上向きにし、水レーザーを射出。

飛んでくる水レーザーに慌てて遠ざかるセルレギオスだが、もちろん当らず。とはいえ激痛のする水なのだ。恐れても仕方ない。

鉱石の微細が傷口に食いこむ激痛は未だ全身を駆け巡っており、流血こそ微量なものだが傷みによってその動きは若干拙い。

それでもセルレギオスは再び急降下、今度はツジギリギザミのヤドに狙いを定め後ろ脚を叩きつける！

ダメージを受けにくいヤドといえども衝撃に耐える術はなく、ツジギリギザミは前に向けて倒れ込んだ。

セルレギオスは隙を逃さない。ガツシリと掴んでは蹴り、蹴っては掴んでを繰り返してマウントポジションで後ろ脚を何度も叩きつける。

そして頃合を見て浮上。背面への攻撃手段が少ないツジギリギザミは空を飛ぶセルレギオスを逃してしまふ。

するとツジギリギザミは長い脚を折り畳んで力を込め、そのまま跳躍。洞窟の天井に張り付く程の力を秘めた足は高高度の跳躍を可能にするのだ。

セルレギオスへは距離も高さも足りないが、その圧倒的なりーチが補い、不意を突いたこともあつてセルレギオスに刀を向ける。

完全に不意を突かれたセルレギオスは振り回された刀に直撃。硬化と空中での直撃と言う事もあつて切られはしなかったものの驚愕した。

右肩辺りを叩かれたセルレギオスと攻撃の反動を受けたツジギリギザミはバランスを崩し、そのまま不時着。

セルレギオスはともかく重い甲殻を携え空中戦になれていない甲殻種は隕石の如く地面に落下、地面にめり込んでしまふ。

まあセルレギオスも上空から墜落したので強打を受け、さらに体勢が悪かったこともあつて右肩をさらに悪化させる羽目に。

逆にツジギリギザミは強固な甲殻と地中潜行の利点により早く地面から這い出てきた。しかもピンピンしてる。

飛竜種にとつて命ともいえる翼が言う事を聞かなくなったセルレギオスのピンチだ。極限状態によりピンチという言葉ですらないが。

ツジギリギザミは体内のある器官に切り替え、それを口から噴射、それをセルレギオスに降り注がせる。

吐き出したのは、ズワロポスなどを喰らつて得た、水のようにサラサラして純度の高い油だ。水ブレスのように威力はなく、霧状に吹かれる。

威嚇するセルレギオスの全身に浴びせた後、ツジギリギザミは刀を

交叉し——火花を散らす。

その火花が着火となり、セルレギオスを火達磨に変え、セルレギオスの悲痛の叫びが轟いた。

その火達磨を前にツジギリギザミは両の刀を掲げ——振り下ろす。

千刃竜と刀蟹の激戦が終わる頃、バルバレギルドとドンドルマでは全ハンターに緊急の知らせを発表。

筆頭旅団の調査により未知の樹海に大変危険とされるモンスターが出没、当面の樹海探索を禁止する運びとなった。

さらにツジギリギザミが狂竜化したという情報もあり、発見次第退避するように指示を下す。

しかしギルドはこの事態の真実——極限個体化を知っているが故に、事態を重く受け止めていた。

ここ最近凶報が伝えられる中、ようやく吉報が3つ届く。

1つ目は狂竜ウィルスを衰退させ極限化個体を弱体化するという『抗竜石』の開発。

2つ目は度重なる非常事態に対抗すべく街中が奮起したことでドンドルマの設備が完全に復活したこと。

そして3つ目は……ドンドルマ防衛・オウショウザザミ監視・ツジギリギザミ狩猟の3チームを組めた事だ。

——ハンターよ、ドンドルマを守りぬけ！

第73話「抗竜石」

抗竜石——狂竜ウイルスの猛威に対抗すべくドンドルマが新設した「狂竜ウイルス研究所」にて開発された特殊な鉱石。

嫌味つたらしいが真面目な所長の努力の結晶であるコレは、狂竜ウイルスを沈静化する効力を持っているという。

開発されて間もないが、各地に狂竜化個体が出現している事もあって性能を試す機会は多く、その効果はいずれも上等な結果となった。

抗竜石で使用する武器を研ぎ、その効果を付与した武器で攻撃を加えると対象の体内に蔓延した狂竜ウイルスを沈静化する。

これによって狂竜化個体を通常の状態に戻すことができ、理論上では極限個体の肉質までも元に戻すことも可能だとか。

但し効果は一時的な物であり、時間が経過すると狂竜ウイルスが活性化し狂竜化状態に戻ってしまう。

それでも、一時的とはいえ著しい身体能力強化を抑えられるとなれば万々歳。

これまで狂竜化個体に苦しんできた時期が嘘のように、多くのハンター達が狂竜化個体の討伐に成功している。

これだけのものを多く生成してくれた所長には感謝しきりというもの。

だが所長は言う——この大量の抗竜石の、もう1つの実験内容を。

「はいはい、向こう行つときーやー」

「こやし玉……つとー」

遺跡平原の大きな崖の近隣にあるエリア4にてドスジャギイの群れを追い払う2人のハンターが居た。

褐色肌の女ハンター・クカルと、赤みがかった金髪の少年ハンター・イリーダ。ロックラック出身のハンターコンビである。

この短期間でハンター活動を続けていた2人のG級ハンターとしての腕前は大きく上がり、装備を上等な物に変えていた。

ドスジャギイがこやし玉の激臭に参って逃げ出し、そのままジャギイ達も追うようにして逃走。

見届けたクカルは振り回していた銀火竜素材のハンマーの先端を地面に置き、持ち手を杖代わりにして体重を預けた。

「しんどいわあ。まあけど、ティガとかレウスが来おへんだけでも儲けもんやな」

「ですね。何せ特殊な依頼ですし」

溜息を零すクカルを見て苦笑いを浮かべたイリーダがそう言う。

彼女達——正確には他のエリアを廻っている2名を含め4名なのだが——の受けた依頼は、普段受けるクエストとは大きく違っている。

何せこのクエストのたまかな内容は、ターゲットを除いた全てのモンスターをある場所から遠ざける、というものなのだから。

「はあ、あ、狂竜化って本当にイヤやねえ。遺跡平原だって殆どが絶滅寸前やったんやからなあ」

「それでも生態系が戻りつつあるっていうのが自然の凄さですね。だからこそ、なるべく狩猟しないでくれって頼まれたんですけど」

足元に寄ってきたクンチュウを軽く蹴って転がすクカルの愚痴に応えつつ、イリーダは周囲の警戒を怠らない。

抗竜石を用いた事で生態系の崩壊は食い止められたものの、崩れかけた生態系を立て直すべく狩猟に制限が掛かる。

まあ無駄に殺生をするよりは良い事なのだが、やはり面倒くさいの一言に尽きるだろう。

クカルは視線だけを、その面倒くさい任務の原因に向ける。

「しっかしなあ……ホンマに効果あるんやろか？そもそもココに奴が通るん？」

「観察隊によると奴の行く先が遺跡平原なのは間違いないようですが……僕も正直怪しいと思いますねえ」

クカルの言い分に同意しているイリーダも眉を歪めて背後にあるソレを見る。

所長の依頼書ではこのクエストの要となっている物なのだが……正直言つて効果があるかどうか怪しすぎる。

2人がそう思いながら見ている中……2人の間の地面から、ボコツと何かが這い出て来た。

「ニャー！来たニャ来たニャー！相棒と一緒にコツチに向かつて来ているニャー！」

地中から現れたのは良い武装を施されたアイルーだった。彼はハントーに近い戦闘技術を身につけた『ニヤンター』であった。

クカルとイリーダは互いに頷き合うと、物陰に隠れようとするニヤンターの後についていき、共に岩陰に身を潜める。

そうして岩陰から様子を伺っていると、何故か背中にキノコを担いでいるアイルー——この子もニヤンターだ——が走ってくる。

そのアイルーを追いかけてくるモンスターが居る——オウシヨウザザミだった。

ジンワリと漏れるように紫色の靄が漂っているが生態系に影響を及ぼすほどの量ではない。

背にはブツチャーが乗っており、アツチだアツチだ、と言わんばかりに杖をアイルーに向けオウシヨウザザミを先導している……気がする。

「あれが冠蟹……」

「いやあ、改めて見るとほんまゴツツいやっちゃなあ。甲殻種の王様って感じや」

手に持った『虹色の欠片』とオウシヨウザザミの甲殻を見比べるイリーダと、二度目の邂逅に額から汗を滲ませるクカル、そして逃げ出した仲間のアイルーを心配するニヤンター。

そんな三者三様を他所にアイルーは必死で逃げ、目標が目の前にあると知ると地中へと潜行。そのまま逃げる算段か。

目標を見失ったオウシヨウザザミは自然とソレを視界に収める事になり、2人と1匹にも緊張が走る。

オウシヨウザザミは先ほどとは比べ物にならないぐらいの速度で駆けつけ、ブツチャーも飛び降りて並走する。

2人が夢中になっているもの——それは山のように積まれた食べ物と鉱石なのだ！

「ああ……ウチも食いたかったわあ〜！」

「ま、まあまあ、ランボルさんも身を削るような思いで提供したんですし……」

ムツシヤムツシヤと食べ物を食らうブツチャーとガリゴリと鉱石を食うオウシヨウザザミを羨ましそうに見るクカル。

腹が鳴りそうな程に涎を垂らすクカルを宥めつつ、遠慮なしに食べ物の山を削っていくオウシヨウザザミを見る。

ちなみに食べ物と鉱石の大半はランボルが用意したもので、それを他のモンスターがつまみ食いしないようにするのが2人の任務だ。

「……効くんでしょうかね、抗竜石」

「鉱石を甲殻に滲ませる性質ゆーとったけど、都合よく行くんかなあ」

抗竜石が開発される前、所長は【我らの団】教官より、天廻龍シヤガルマガラを食らった甲殻種の話聞いた。

狂竜ウイルスそのものたるシヤガルを食らうなど飛んでもない話だが、その甲殻種について所長は1つの案が閃く。

オウシヨウザザミ——正確にはダイミヨウザザミ変異種か——は、食べた鉱石を甲殻に滲ませるという特異体質があると耳にしている。

噂が本当ならば、抗竜石を食べさせた場合、その効力をも甲殻に付与できるのではないか？……と所長は思いついた。

それを再現してみようと、貴重な抗竜石の半分をオウシヨウザザミに注ぐ為、このようなクエストを発注したのだという。

「よーしよし、鉱石類にも手え出したで」

「効果が出るのは随分と先になりそうですが……そもそも量が少ない

ですし」

大量とはいえ大柄な甲殻種に対しては微々たるものだ。しつかりと口に含んでいるとはいえ効力が出るかと言われたら怪しい。

当のオウシヨウザザミはそんな企みなど知らぬとばかりに、生肉を焼いて食べようとしているブツチャーを他所にモリモリと食べる。すると……。

「……おいしい、霏がちよつとずつ減つとるで」

クカルが呆れたように、オウシヨウザザミから漏れている黒い霏が減少していく様を指さす。

それはつまり、狂竜ウイルスが抑制されているという証拠でもあるのだ……食べて間もないのに。

「た、体内のウイルスが抑えられているんですよきつとー！」

「そうやろうけど……なんや噂を聞いたとると、これもアイツのトンデモ仕様やと思わざるを得んわ」

「……確かに」

ここは抗竜石の効力を褒めるべきなのだろうが、ジグエのホラ話を真に受けたイリーダはクカルの言葉を否定できなかつた……。

「とりあえず依頼は達成や。次は……」

「狂竜化したつちゅーダイミヨウザザミ亜種を探さんとな」

第74話 「盾蟹の番い」

さて、「オウショウザザミに抗竜石を与えてみましよう作戦(仮称)」は成功した。

次にイリーダとクカル、2匹のニャンター(オトモアイルーとも言う)が向かった先は……。

「うひえー。狂竜ウイルスだだ漏れやん」

「あ、あの、離してください……(頭、頭に柔らかい何かが……っ)」

恐怖のあまり己より小さなイリーダを抱きしめながらクカルが嫌そうに言った。

当然ながらイリーダは恥ずかしさのあまり逃げ出したいのだが、ここで騒いで気付かれると不味いので大人しくしとく。

2人と2匹が隠れている物陰の先には、狂竜化ダイミョウザザミ亜種が練り歩いていた。

ザザミ亜種は鋏を前へ上げながらズンズンと前へ進んでいる。あれは「いつでも攻撃できるぞ」というサインでもある。

幸いな事に、本来なら姿を見せないはずの生物に怯えた草食種やイーオス達がスタコラと逃げ出し、ザザミ亜種の前に敵は居ない。

だが生態系が回復しかけた遺跡平原にコレはキツイ。1匹でも他に感染したら完全に生態系が崩壊する可能性だってある。

その為、クカルとイリーダはオウショウザザミの餌付けに成功した後、同時に出没したあのダイミョウザザミ亜種を討伐するのだが……。

「いくら抗竜石があるっちゅーても、なんべんやっても相手にしたくないやつちゃ」

これまで狂竜化個体と鉢合わせになった経験は何度かあるが、何れも嫌な思い出でしかないのでクカルは嫌そうだ。

それはイリーダや歴戦のニャンターである2匹も同意らしく、G級であれば難易度の低いザザミ亜種が相手でも抵抗を覚えるほど。

抗竜石の効力を得て狂竜化個体を狩猟できるようになったとはいえ、高い攻撃力と精神汚染による猛攻はG級防具を持ってしても怖いも

のだ。

「ですがこれ以上ここの生態系を壊させるわけには行きません。やるしかないんです」

何気なくクカルの抱擁から抜け出したイリーダが渴を入れる。ニヤンター2匹も「ニヤー」と掛け声を上げてやる気を見せた。

ハンターとはいえ年下が頑張ろうとしているのに、年上の自分が怖気づいてどうするんだと恥ずかしくなってくる。

「……っしや！頑張らんなー！」

ちよつと気合を入れようと自分の頬を軽く叩き、ドンドルマの為に頑張ろうと意気込む。

そうしてクカルは苦勞して討伐したG級銀火竜の素材で作ったハンマーを、イリーダは同じくG級の獄狼竜の素材で作った双剣を構える。

いざ不意討ちを仕掛けんと物陰から出ようとしたその時——ザザミ亜種の前方の地中から何かが這い出てきた。

「……げっ、オウシヨウザザミ!?!」

なんとということか。アレだけの食糧の山を全て平らげたのか、ザザミ亜種の眼前にはオウシヨウザザミが立ち塞がってきたではないか。虹色に輝くオウシヨウザザミは狂竜化したザザミ亜種の敵意をコレでもかと刺激し、お互いに盾のような鍔を振り上げて威嚇している。

意気込みを入れた途端にコレとなれば流石にクカルは下がるしかないが、イリーダはある点に注目していた。

「……なんかあのチャチャブー、変なお面していますね?」

「はあ?あのチャチャブーがどこに……ほんまや。よー見つけたなあ」

あれだけキラキラリンに目立つ甲殻種にポツンと佇むチャチャブーの子を見つけ出した。

しかし先ほどまでは鳥兜のような面をつけていたはずなのに、今は青い面はしている。

そのチャチャブーことブツチャーはオウシヨウザザミの頭頂部か

ら飛び降り、あろうことかザザミ亜種に突撃。

小さくても敵には違いないとザザミ亜種は水ブレスでも噴きつけようとするが、ここでオウシヨウザザミが襲い掛かる。

至近距離まで近づくと蓋をするように鍔で覆い被さり、そのまま体格差を利用して押し付ける。

加えてパワーにも差が生じている為にザザミ亜種は見事に押さえつけられ、水ブレスを打つてもオウシヨウザザミには効果が無い。

「ザザミ亜種を押さえつけた？」

「なんやあのキラキラガニ、襲つとるんかいな（性的な意味で）」

まだ若いイリーダは驚き、経験豊富なクカルはちよつと顔を赤くして2匹の甲殻類の取っ組み合いを見る。

そこへブツチャーが飛び掛り、圧倒的とはいえ僅かにでも抗うザザミ亜種の頭頂部を指すようによじ登っていく。

頭頂部へ辿り着いたブツチャーは、片手に杖を振りかざし、片手には袋が握られている。

そして押さえつけているからと、其の場で舞を披露。チャチャブーならではの奇怪なダンスを見せ付ける。

先端が青白く染まる杖を、袋から漏れる青い粉がダイミヨウザザミ亜種に降り注いでいく。一体何がしたいのだろうか？

その謎の舞の効力は、目に見える結果として現れ、二人を驚愕させる。

「……おいおい、ウチは夢でも見とるんか？」

「僕も見えています……狂竜ウイルスが衰えていますよ」

ダイミヨウザザミ亜種の身体から漏れる狂竜ウイルスが減っているのである。

ブツチャーが踊り粉を撒くほど効果は上がっていくらしく、徐々に甲殻の色ですら明るくなっていく。

オウシヨウザザミの拘束に抗う力も弱まっていき、徐々にその気性は穏かなものになっていった。

やがて完全に取り除かれたのだろう、ブツチャーは「一仕事やってやったぜ」と言わんばかりにお面の汗を腕で拭う。

ウイルスの大半を浄化されたダイミヨウザザミ亜種は「助けてー」と言わんばかりに足をバタつかせ、オウシヨウザザミがそれに応じて離す。

ーハー、ヤレヤレ

ーこつちのセリフだつっの

なお、上記の台詞はイメージです。

オウシヨウザザミから解放されたダイミヨウザザミ亜種はどっかりと体を地面に下ろす。解放されて一安心、といった感じだ。

対するオウシヨウザザミも疲れたように鋏を下ろし、あろうことかダイミヨウザザミ亜種の隣に座り込んだではないか。

ダイミヨウザザミ亜種もそのままオウシヨウザザミに寄り添い、静かに佇む。ブツチャーも空気を読んでヤドの中でお休みだ。

その姿はまるで、リオレイアとリオレウスの慎ましい夫婦愛を見せて付けるかのよう……！

「……クカルさん」

「言わんといてえや！ウチは、ウチはあのダイミヨウザザミ亜種を狩る気になれん……！」

2匹のオトモアイルーも「ラブニャー！ラブだニャー！」と興奮気味。

モンスター、それも甲殻種が寄り添う姿など滅多にみられない光景を目の当たりにしたクカルは頭をブンブンと横に振っている。

まあイリーダもあんな2匹を見たら狩猟するのを躊躇う程である……そもそもオウシヨウザザミという特異モンスターが居る時点で躊躇しているのだが。

しかし考えてみると、あのチャチャブーの青い面はウチケシの実で作られたものだろうか？

ロックラックではオトモアイルーのようにチャチャブーを連れられたハンターがおり、その恩恵は計り知れないとも聞いているが、ここまでは。

それも野性であるはずのチャチャブーが狂竜化個体を鎮めたのだ。

これは狩猟するより残して報告すべきではないだろうか？

—考える事は山ほどあるが、ここは1つ。

「ドンドルマの事もありますし、ひとまず戻りましょう。オウシヨウザザミが居る時点で成功率の低い依頼ですし、諦めます」

「せやな」

何故かハンカチを食いしばって眺めていたクカルがイリーダに賛成。

ドンドルマに迫っているという古龍種の撃退も可能な限り手伝う必要もある為、生存を重視して帰還することもギルドは考慮していた。

今がその時だろう。狂竜化個体をチャチャブーが鎮めたという異例も報告すべく、2人と2匹はそそくさと退散する。

—2匹の甲殻種は、やがてグースカと寄り添いながら眠るのであった。

—空の果てに雷鳴を轟かす暗雲が広がっているとも知らず。

—完—

第75話 「密漁ハンターの不運」

狂竜化ツジギリギザミが徘徊しているので立ち入り禁止区域に指定された未知の樹海にて。

「どうしてこうなった」

ガララX装備の狡賢そうな男・ギギレが首を傾げる。

「私が聞きたいよ」

レイアX装備のガツシリとした体つきの女性・カランが額に青筋を浮かべて言う。

「帰りたいツスよお兄貴い」

グラビドX装備の小太りな男・ドドが物凄い勢いでガタガタ揺れている。ビビってんのや。

「かといって引き下がる事もできん」

レウスX装備のリーダー格・レガツダはそんな3人を宥めようとしている。

しかしこの場に居る、未知の樹海を淡々と歩く彼ら全員は同じことを考えている……今すぐにでも帰りたい、と。

密漁ハンターがどうして嫌々ながら未知の樹海に入っているのか。事の始まりは、意外にも数日前までさかのぼる。

オウシヨウザザミを狙って旧砂漠に乗り込んだ彼らは、千刃竜セルレギオスの奇襲を（主にドドが）受けて仕方なく撤退。

当時はセルレギオスもレアなモンスターだった為、レガツタ達は諦めの悪さも手伝って再度旧砂漠に挑もうとした。

だが当時のドンドルマは混乱を極めていた。何せ己の縄張りから動かないはずの千刃竜が旧砂漠に、それも2匹同時も現れたと聞いたのだから。

さらに、海路を渡って護送していた刀蟹カタナガニが逃げ出したとの報告もある。ただでさえ忙しいのに過労死しそうだ。

修復作業がほぼ完了した今は、ドンドルマ護衛や周辺の狩猟を頼む

為のハンターを掻き集める必要があった。

そんなドンドルマを仮の拠点にし続けたレガッタ達の不運はここにあった。

1. レガッタ達がドンドルマに帰還。
2. レガッタ達が速攻でギルドのお偉いさんに捕まる。
3. 「ツジギリギザミを足止めするように」と笑顔で依頼される。
4. 現在に至る。

ちなみにレガッタ達が密漁ハンターであることは既にもバレており、ギルドは敢えて知らぬふりをして依頼してきた。

入手ルートは怪しいとはいえ防具はG級素材が使われた本物であるし、何よりアイルーの手も借りたい程ハンターが不足していたのだ。

さらにレガッタ達は違法ハンター。しかも洗いざらい調べていたギルドナイトの報告によれば、彼らの悪行は極刑から逃れられない程のレベル。

そしてツジギリギザミの恐ろしさは筆頭ランサーがお墨付き。並のハンターなら即死級の相手だからと依頼を断るのも可笑しくない。普通なら逃げ出したいた状況だろうが、そうは問屋が卸さない。

広大な樹海はひとたび入ってしまうと、ギルドが派遣した移動手段でなければ脱出は困難。

ギルドの監視が無いからと逃げ出そうとすれば確実に迷い、良くて餓死、悪くてモンスターに捕食されるのがオチ。

かと言って助けを求めようにもツジギリギザミ出沒により立ち入りを禁止している為、例えば同業者でも入ろうとしないだろう。

そんな状況下に置かれたら大抵は逃げる事を諦めるのだろうか……彼らが目の当たりにした光景を見たらそうは思わなくなる。

「ナニコレエ」

ドドが青い顔でそう言う。

彼らの目の前では、木や石、遺跡といったあらゆる障害物が綺麗に斬り裂かれていた。

それはもう見事なぐらいにスッパスパ。切れ味ゲージ紫の太刀だ

ろうともここまで綺麗に切断できない……はず。

どう見てもツジギリギザミの作業なのだろうが、見事なまでの荒れ具合である。邪魔する者は何でも斬る、といった感じだ。

石ですら綺麗に斬り裂く爪を持つツジギリギザミ。きつとドドの持つガンランスの盾ですら切断してしまうだろう。

そんな凶悪極まりないモンスターを、道具ハメと証拠隠蔽が得意なだけの密漁者が、せめて足止めだけでもしなければならぬ。

後ろを行っても地獄。前を行けばそれ以上の地獄が待っている。

つまり——「ツジギリギザミの刑に処す」と宣告しているようなものである。

「とにかく死ぬなよ、お前ら。盾が減る」

「人間盾ですね解ります」

「ドド……」

「なんでそつと肩に手を乗せるツスカ姉御オ!？」

こんな殺伐とした中でも普段の雰囲気崩さない。彼らも何気現場数を踏んだ熟練者なのだ。

任務を少しでも果たして帰れさえすれば刑が軽くなり、上手くすれば全うな生活を迎えられるかもしれない。

そんな淡い期待を抱きつつツジギリギザミを探す彼らは、見事にギルドの飴と鞭で調教されてしまったようだ。

——
そうこう言っている間に。

「お、黒い蟹発見」

双眼鏡を片手に持つギギレが黒い甲殻種の姿を確認し、皆がその先に視線を向ける。

もし夜中であつたら間違ひなく溶け込むようなドス黒さを持つ甲

殻種——ツジギリギザミである。

「ひえええ出たあああ」

「黒い布を被ったアイルーを見たような声で叫ぶんじゃないよ恥ずかしい」

「カランの姉御だつて足震えているじゃないっすか、あでっ」

「アタシのは武者震いだよ！」

「どうでもいいから静かにしろ」

ドドとカランの漫才(?)をレガツタが止めると、途端にシンとなる。流石ボス。

物陰からツジギリギザミの様子を伺っていると、どうやらツジギリギザミはお食事中的のようだ。

刀を折り畳んだ鉞のような鋏がチョイチョイと地面を突き、口に運ぶ。それを延々と繰り返している。

穏やかに見えるが、背後には斬りたての切りかぶや岩だったものが道のように広がっている。先ほどまで散々暴れていたのだろう。

とりあえず腹が減ったら大人しくなるという事が解つたので、頭脳派のギギレはメモを取る。勿論この情報は売ります。

「しっかし、コイツなんでドンドルマに向かっているのかねえ」
「こんなに無差別なのになあ」

斬り裂いた道を辿るとグネグネしているが、少しずつとはいえドンドルマに近付きつつある。

ツジギリギザミを恐れて他のモンスターが逃げ出す事もあり、このまま放置すれば今夜にもドンドルマに着きかねない。

だからこそ自分達を囿(または生贄)として差し出したのだろう。ほんの少しの足止めになるかも怪しいが。

いや、確かに足止めにはなるのだ——ツジギリギザミの生態を考えれば。

「ブベツホオオオ!!」

ビツクーンと身が跳ね上がる程にドツキリしたレガツタ達が何事

かと音源を探る。

先ほどの奇声の正体は、齧ったこんがり肉を片手に噴出したドドの物であった。

「誰っすか傷みかけのこんがり肉を荷物に入れたの！すっげえマズイっす！」

どうやら空腹に耐えかねてこんがり肉を食べようとして、ハズレを引いたのだろう。

食に煩いドドが怒りを露わにするほど不味かったのだろうか……別の意味で拙かった。

彼らがドドを叱りつける又は黙らせるよりも先に。

—シャコン、シャコン、シャコン

食事中だったツジギリギザミがコチラの存在に気づいてしまったのだから。

そしてツジギリギザミの性質は、動く物はなんでも敵と思い、執拗に攻撃を仕掛ける事。

余談だが、ギルドは真つ当なハンターには寛大だが時には非情な一面もある。

ドドの荷物に痛みかけのこんがり肉を仕込んだのはギルドの関係者であり、こうなることを予想していた。

故に、ツジギリギザミを引きつける、という事には成功したのだが……。

—必死過ぎて、空に雷雲が広がるドンドルマに接近していることを、彼らは知らない。

—
完
—

第76話 「鋼龍襲来」

クシャルダオラ——それも最も気性が荒いとされる錆びた個体——が接近中との報告があった。

予兆は随分と前からあった。先日にもその姿を現したこともある……即座に退散していったが。

故に本格的な襲撃に備え、各地から資材を集め、近づくモンスターを退け、街を修繕し防衛兵器を新設した。

誤算だったのは、そのクシャルダオラが筆頭ハンターにとっての仇敵である事と、強大とされる甲殻種が二匹もバルバレ管轄内をうろついている事か。

元より古龍種とは神出鬼没かつ強大な種族ではあるが、頭部に傷を負ったクシャルダオラはその一歩上を行くという。

こちら側から挑んだとはいえ、熟練である筆頭ハンターとその師匠を敗退させたのだから。

その事実は古龍種という相手を考えれば低く捉われがちだが、古龍種を撃退した経験が豊富とされる二人だからこそ、その事実は重く受け止めている。

故に、今回は【我らの団】ハンター・リリトに加え筆頭旅団四名、計五名のハンターが参戦することを許された。

ドンドルマは人類にとって重要視されている拠点の一つであり、ようやく街の機能が復活しようとしているのだ。

ここで古龍種によって完膚なきまで破壊されては、人類の生活環境に大きな支障を与えることになる。何としても守らなければならぬ。

この特別処置には、もう一つの理由がある。それは……。

——ギユオオオオオオオオオオ！

嵐が吹き荒れる音を掻き消す金属音のような咆哮を轟かせ、クシャ

ルダオラは錆びた体に龍風圧を纏わせる。

その直後に轟音と共に砲弾が放たれたが、龍風圧によって勢いを消され、身に纏う風の防壁によって砲弾が静止、地面に落ちる。

その轟音と咆哮を無視するかのように旋律を奏でるのは、狩猟笛を吹き鳴らす【我らの団】女ハンター・リリトだ。

レイアSシリーズを着込んでいるが、体力を増強させるこの装備は安心感が違うらしい。古龍種の一撃を恐れてこそだ。

普段のリリトはヘヴィボウガンを主力としているが、風を操るクシャルダオラを相手ということで武器を変更している。

狩猟笛マスターバグパイプが持つ風圧の影響を無効化できる旋律だけでも、クシャルダオラとの対峙はずっと楽になると事前に学んだからだ。

「旋律完了しました」

「よし、引き続き砲弾を装填する！どうか持ちこたえてくれ！」

リリトに加え筆頭旅団全員に旋律が行き渡る。保険として旋律効果を受け取った筆頭ハンターは移動式大砲への装填を続けた。

吹き荒れる嵐に比べると小さな音色だがクシャルダオラの聴覚にはしっかりと届いており、襲い掛かろうとわざわざ四足で走り出した。

「いちらですー！」

旋律を終えたリリトはクシャルダオラから見て右方向へ回避。直後に筆頭ランサーが操作するバリスタでクシャルダオラを射抜く。

挑発と見て取ったのかクシャルダオラはリリトに背を向けて助走し、バリスタを撃ち続ける筆頭ランサーへ飛ぶ。

「目を閉じるッスー！」

筆頭ルーキーが叫んだ直後、クシャルダオラの眼前に放り出された閃光玉が発光。

強烈な閃光をかううじて防いだ筆頭ランサーに対し、クシャルダオラは閃光に目が眩んで失速。

流星の古龍種も混乱し、龍風圧も解けて地面に落下。閃光玉には勝てなかったよ。

「今のうちね」

ガシヤコンと音を立てて毒液入りの弾丸を装填、筆頭ガンナーが防壁の上からクシャルダオラを狙い打つ。

落下の衝撃で上手く立てないことを良い事に連射。リリトは筆頭ガンナーの射線に入らぬようにしつつ、クシャルダオラの頭部を笛で殴打。

立て続けに攻撃したい処だが、そうは問屋が卸さないとばかりにクシャルダオラが起き上がる。

リリトは起き上がる直前に笛を背負って退避、直後にクシャルダオラの前足と尾が地面を抉った。

視界が回復すれば、全身にめぐる毒と錆へのストレスが合わさり、すぐさま怒りを露わにしてリリトに襲い掛かる。

リリトはクシャルダオラから距離を取りつつ、バリスタの援護射撃で動きを妨害してくれている事もあり、懐にしまっていた物をしかと確認する。

試作高密度滅龍炭……ドンドルマが新たに開発した【巨龍砲】を発動するのに必要な材料だ。

だが発動にはまだ早い。安全な場所から見守っているであろう筆頭ハンターの師匠が持つ知識と経験、そして勘を頼りにした指示を待っているのだ。

(間に合ってくれ……！)

その筆頭ハンターは移動式大砲から砲弾を発射。連続して砲弾が、毒で弱り風圧が消えたクシャルダオラに降り注ぐ。

それを見届けた筆頭ハンターは少しでも早く装填しようと、体内に蓄積する汗と熱、そして疲労を無視して砲弾を運び出す。

彼が焦りを増している理由。それは仲間やドンドルマの安否、そしてクシャルダオラという脅威が居る事もあるが、もう一つの理由がある。

現在は遺跡平原を歩き来しているオウシヨウザザミ。二名のハンターの報告によると、盾蟹の亜種とチャチャブーと共に大人しくして

いるのを確認したという。

未知の樹海にて密漁ハンターを追いかけまわしているツジギリギザミ。密漁ハンターを囿にドンドルマを遠ざけるのが目的だ。

この二匹だけは何としても、クシャルダオラを撃退するまでにドンドルマから遠ざげなければならぬ。

片方は絶対無比と言っても過言ではない防御力を持ち、数少ない資料を照らし合わせた理論によれば、巨龍砲ですら防ぐ可能性もあるという。

片方は尋常でないほどの攻撃力と切れ味を持ち、ドンドルマの施設は勿論の事、万が一でも巨龍砲に関連した施設を破壊されたら全てが無駄に終わる。

普通の大型モンスターならこうはならないが、この二匹は例外だ。並のハンターが狩れるような相手ではないし、古龍種を撃退する為の手段を防ぐ、もしくは破壊する力がこの二匹にはある。

古龍種という災害そのものを撃退するだけでも大変だというのに、撃退する為の手段を潰されては堪ったものではない。

ならばすべきとは何かといえば……二匹が訪れるより先に古龍種を撃退する。これに尽きる。

かといって【巨龍砲】は発射までに時間がかかり、体力を温存したままのクシャルダオラに当たる可能性は低い。

クシャルダオラを出来るだけ弱らせ、注意を引き付け、巨龍砲を確実に当てる。

古龍種とて生き物だ。持続的に自身を追い込む敵と認識し、強大な一撃があると解れば自ら撤退していく。

その為に五人がかりでクシャルダオラを追い込んでいる最中だ。その甲斐あって怒りの中、彼らを敵と見なし、執拗に攻撃を繰り返していた。

筆頭ハンターは連続砲撃を受けたクシャルダオラを見届けた後、古龍種の相手を続けるべく、再び砲弾を装填し始める。

(いいぞ、確実にクシャルダオラの体力が消耗していく)

吹き抜ける風と打ち付ける雨を体中に受け止めながら、師匠は遠くに見えるハンター達を見守る。

筆頭ハンターの師として、ここから見守るしかないのは苦痛でしかない。

だからといって、近衛兵が傍らにいたとはいえ、自分がここから逃げて良い理由にはならない。

クシャルダオラの体力を見極め、巨龍砲の一撃を当てる可能性を高め、彼ら5人の無事を祈る。

万が一の場合は安全地帯も兼ねた拠点に待機している【我らの団】の飛行船で逃走もできる。

だが自分を含め、彼らもハンター達の帰還を信じている。当然ドンドルマを救ってくるとも。

彼らを代表して自分が見守らなければ——師匠はそう心に言い聞かせながら、ハンターと古龍種の戦いを見つめていた。

—だがしかし。

「伝令！伝令——！」

—慌てて師匠に駆け付けてきた衛兵の言葉が、最悪の事態を知らせる。

「ツジギリギザミがドンドルマに接近中との報告あり！囃として雇った密漁ハンター達もドンドルマ内に侵入したとの報告が——！」

—心強かな師匠が、嵐に流されるように姿勢を崩した。

第77話 「刀蟹襲来」

——それに遭遇したのは、ある意味で幸運であり、ある意味で不運であった。

「ひやー、凄い嵐やな」

「クシャルダオラがドンドルマに接近しているとはいえ、この時点でこの風ですか……」

ネコタクの荷台に腰掛ける二人のハンターは、吹き荒れる雨と風を全身に受け止めながらぼやく。

遺跡平原の生態系の調査を依頼された、褐色肌の女性クカルと、赤みを帯びた金髪の少年イリーダ。

本来は「抗竜石」を用いて狂竜ウイルスの拡散を抑える役割があったのだが、それはとある事情によって断念することに。

そしてネコタクに揺られ、ドンドルマまで残り半分といった道のりの中で嵐を体感していた、というわけだ。

「しかしええんやろか？うちらも避難先に逃げるつちゆうのは。オウシヨウザザミをどうにかすることもできへんし……」

「本来、僕達は狂竜ウイルス拡散を防ぐために派遣されたんです。それをあのチャチャブーが防いでくれたのなら、それでいいじゃないですか」

外套を上から被り嫌そうに暗雲を見上げるクカルを横目にイリーダが言う。

オウシヨウザザミが大人しくしている事と、その供であるチャチャブーが狂竜ウイルスを鎮めた事実を伝える為だ。

狂竜ウイルスに浸食されたダイミヨウザザミ亜種の雌が鎮まったこともあり、遺跡平原とドンドルマの危機が一つ減ったともいえる。

どういう原理で狂竜ウイルスを鎮静化したのかはわからないが、これ以上のウイルスの拡散、および狂竜化個体の暴走が減るのならありがたい。

とはいえ完全に除去できているとは言えないのだが……大型は上記の二匹しか確認されていない上、鋼龍が近づいている事もあって周辺のモンスター動きも大人しい。

逃げの理由にもなるかもしれないが、ギルドへの報告、ドンドルマ外に避難した人々の護衛も兼ねた撤退だ。

「ニヤ、嵐怖いニヤ。ドンドルマ行きたくないニヤ」

「心配せえへんでも、この先で曲がればドンドルマの外れに行くで」

ガーグアの手綱を持ったアイルーが心配そうに暗雲を見上げるが、クカルは前を指さして安心させる。

この道はドンドルマへ続いているが、途中にある分岐点で曲がれば外れに、つまりは避難先の拠点への道となる。

自然と嵐——正確には鋼龍——とは反対方向に行くのだ。何も問題はない。

——その分岐点が近づいてきた時、イリーダはある存在に気付いた。

「……ん？あれは……」

眼を細めて見ると、4人のハンターらしき人物を乗せたネコタクが猛スピードで走っていくのが解る。

何やら荷台車を引くアプトノスも怯えて逃げ惑っているようにも見えるので、イリーダはその様子を観察してみる。

「ほら早く！アイツが足止め食らっているうちに早く！」

「ニヤニヤニヤ、ネコタク使いの荒い方ですニヤ！」

「うるせえ！早く逃げなきゃテメエも切り刻まれちゃうぞ！」

「全速力出しますニヤ！」

「兄貴……俺吐きそうッス……」

嵐の中だというのに彼らの会話が聞こえるが、どうして焦っているのだろうか。

そのままネコタクはクカルとイリーダの乗るネコタクを横切り、ドンドルマへと向かう道へと走っていった。

「おいおい、ドンドルマにヤクシャルダオラが来とるんやで？そこへ向かうなんてアホやろ」

「おかしいですね……装備から見てもハンターなのは確かなのに……」

ここでクカルとイリーダは首を傾げる。

ハンターギルドは、この日に備え事前に、管轄内に滞在している全ハンターにクシャルダオラ来襲を告げている。

飛行船や砂上船と言った各移動手段で訪れないよう、数日前にはギルド全体を通じて運航停止を命じた。

さらに一部を除いたクエストを受注できないよう手配するなど徹底しており、外に出ているハンターは自分達2人ぐらいだと思っただ。

それなのに4人もハンターが武装した状態で外出しており、ドンドルマへ猛スピードで向かっていく。

どうしたのだろうと首を傾げていた2人と1匹が、視界の端にある姿を捉えた。

——刀のように鋭い刃を掲げて走る、黒い甲殻種が。

「ツジギリーー!?」

要注意リストにデカデカと表示されていた、ドンドルマで最も危険視されているモンスター・ツジギリギザミ。

そんなモンスターが狂竜ウィルスを漏らしつつ、甲殻種とは思えない速度で走ってくる。

なるほど、先ほどのハンター達が血相を変え、逃げるようにしてネコタクを走らせたのも頷ける。これは物凄い恐怖だ。

——本来なら自分達も逃げに走るべきなのだろうか……。

「そこを曲がってドンドルマに向かって!」

「にゃ!」

「ええから早よおせんかい!」

黒い甲殻種に驚愕していたアイルーは2人の呼びかけに反射的に応えてしまい、手綱を操ってガーグアを曲がらせる。

甲殻種の凶暴なオーラに当てられた事もあってか、ガーグアは荷台の重さを無視したような急カーブを決めた。

ツジギリギザミは新たな獲物の出現に気づき歩行速度を上げる。両腕の刀同士を打ち鳴らしながら。

まるでフォークとナイフを掲げイタダキマスするような仕草を前に、ガーグアは決死の勢いで駆け抜ける！

「ニャー！道外れちゃったニャー！」

「これでいいんや！でないと街の皆が危ないで！」

「正直ドンドルマに向かわせても不味いんですがね……」

後ろから迫り来る恐^{ツジギリギザミ}怖だけでなく、これからの対応をどうするか頭を悩ませ冷や汗をかく2人。

こんな凶悪なモンスターを避難先に連れていくわけにはいかず咄嗟に指示したものの、ドンドルマにはそれ以上の危険が待っている。

突如として現れたツジギリギザミ、吹き荒れる嵐、ドンドルマに君臨しているだろう鋼龍クシャルダオラ……死亡フラグしか見当たらない現状。

「どうしてこうなった……」

いくら進んで困役を買ったとはいえ、こうなった運命を呪う2人と1匹であった。

この時2人は知らなかった。

先ほどのハンター集団はツジギリギザミを引き付ける役割を持っていたこと。

そのハンター集団は密漁者の集まりであったということ。

彼らは生き残る為ならドンドルマの門ですら登って内部へ逃げ込む悪党だということ。

そして遺跡平原で佇んでいたはずのオウシヨウザザミがドンドルマに向けて歩き出したこと。

全ての決着はドンドルマで。

第78話「密猟者と2人組」

彼らは思う。自分達は何故このような事をしているのだろうか、と。

何をしているのか、という事は解っている。解らないのは、そこに至るまでの過程だ。

刀蟹ツジギリギザミと対峙した時からか？

ギルドナイトに捕まり、密猟の罪を軽くするから依頼を受けると命じられた時からか？

セルレギオスに遭遇し、撤退していたギルドナイトに見つかった時からか？

オウシヨウザザミを先に発見したハンター達を妨害せず、さつさと逃げなかった時か？

オウシヨウザザミを金儲けに利用できないかと企み、ドンドルマに潜り込んだ時からか？

それら数多もの過程と要因が走馬灯のように脳裏に巡り、やがて彼ら一同は一つの真理を見出す。

その心理には気づいてはいけなしいし、気づいても意味はないのだが、彼は叫ばずにはいられない。

「密猟ハンターなんてやるんじゃないやなかつたツスー！」

グラビドXシリーズを纏った小太りな男・ドドは、分厚く大きな木製の扉にしがみつきながら泣き叫び。

「ええい喚くんじゃねえ見つかるだろ！ていうかいい加減ダイエットしやがれドド！」

巨大な門を登り終え扉の上に立ったレウスXシリーズの男・レガツダは、ドドの胴体に巻かれたロープを引き上げている。

「いいから登りな！ヤツが来る前に登り切つちまえばこっちのもんだ！」

それでも重いドドの無駄にデカイケツを押し上げているのは、レイアXシリーズを着込んだ美丈夫・カラン。

「早くしろ早く！来てる来てるって！」

恐らくは一番先に登り見張り役を気絶させたであろう、ガララXシリーズを着た狡賢そうな男・ギギレは彼方を見張りながら叫ぶ。

双眼鏡越しに見える景色には、解り易い程に刃の鋏を振り回すツジギリギザミと、その前を走る荷台車。

荷台車はどうでもいい。問題はツジギリギザミだ。真つ直ぐと此方ドンドルマに向かつてきている。

密猟者のギギレ達とて、自然の恩恵に預かり、弱肉強食の世界を生き抜くハンターだ。

さらに密猟という法に反する悪事を働く以上、並のハンターとは違った、しかし一步誤れば凄惨な最期を迎える危険な生き方をしてきた。

ギルドナイトに見つかりかけた危機感は古龍種と遭遇した時に似ているし、幾度のピンチや逆境も味わってきた。身の丈に合わない恐ろしいモンスターにも何度も遭遇した。

だがアレは別物だ。元の強さや狂竜化の影響など関係ない。

今まで味わったことのない殺意と鋭すぎる爪を向けられた一同だからこそ解る、心を折るどころか真つ二つにするような重圧。

故に逃げの姿勢。クシャルダオラが居ても関係ない。とにかく逃げ込める先が欲しいから。

「一度ドンドルマに入り込めばこつちのもんだ！仮にヤツが乗り込もうが関係ねえ、入り組んだ地形なら逃げ切れらあ！」

「んなこと言っている暇あったら手伝え！ドドいい加減痩せろよ！」

「だつてえ〜」

泣き言を言うドドを必死に引き上げているレガツダが怒鳴り、ギギレは慌てて手伝いに入る。

「おう、手伝おうか！」

「おおありがとよ——へぶつ!!」

背後に掛けられた声に助かったと振り向くレガツダに顔面パンチ！

「レガツダ!?!」

ギギレは突然の出来事に思考が追い付けず、しかもレガツダが気絶

した事でロープの重みが増加。

思わず手を離しそうになって踏ん張るも、ギギレ一人ではドドを落とさずにいるのがやつとだ。

そして踏ん張った状態で振り向く先には。

「すまないなー！こうしないと暴れられそうだったんでな！」

ウエスタンハットが似合うダンディな男と、無言で指をペキペキと鳴らす巨漢の竜人族。

何が起こったと下から二名の声が響くが、見るからに強そうな巨漢を前にしたギギレはそれどころではなく。

(あ、これ詰んだな……)

口角をヒクつかせて、自分達は逃げ場を無くしたのだと自覚したのだった。予想していたとはいえ、こうも早く結果が出ると悲しくなるものである。

一方、密猟ハンターとは違って腹を括ったハンターが2人いる。

ツジギリギザミの猛攻をギリギリの所で掻い潜っている、イリーダとクカルだ。

2人をドンドルマ前に下した後にアイルーとガーグアを逃がし、ツジギリギザミを引き寄せる役を買って出たのである。

強い風と強かに打ち付ける雨を全身に浴びながら、雨水が染みて滑りやすくなっている大地をしかと踏みしめ体を動かす。

一步でも間違えれば転倒、ほんの些細な不運で目に雨水が入り一瞬だけ視界が悪くなることもある。

だが2人には余裕も余念も与えられない。縦横無尽に駆け巡り、一瞬の油断ですら考慮して動き続けなければならなかった。

そうしないと、ツジギリギザミの猛攻を回避することはできないから。

元々ショウグンギザミは長いリーチを活かした素早くて広い攻撃と、4脚故の高めの機動力を有している。

加えてツジギリギザミの攻撃性は群を抜いて高く、一刀一刀が振ら

れる速度と威力は桁違い。

さらに嫌なオマケとして、凶竜化による我武者羅めいた攻撃はイリーダとクカルを鎧ごと刈り取らんと迫りくる。

死にそんな思いを連続で体感しながらも、イリーダとクカルは悪態をつく事なく回避を続けている……悪態をつく暇もないのだが。

2人にとつて一番の危惧にして恐怖する事は、己の命が尽きる時であり……人類の拠点が奪われることだ。

ドンドルマは人類の要の1つだ。この街は人々の暮らしを守る砦であり、全ての駆け出しハンターが夢見る聖地でもある。

そんなドンドルマを……これまで多くの人々と英雄が守ってきた歴史ある街を壊されてなるものか。

クシャルダオラという脅威を前に別のハンター達が戦ってくれているというのに、横やりを入れられてなるものか。

そんな思いがイリーダとクカルの恐怖心を抑え込み、されど避け続けるという緊張感を保ちつつ、刀蟹を前にするという選択を選んだ。

おかげでドンドルマ前ではあるが、ツジギリギザミの対象は2人のハンターに目が行っている。

眼前で敵がチョココマカと動いていて鬱陶しいのか、それとも未だ命を狩れない事への苛立ちか、一心不乱に刀を振り回す。

だがクカルとイリーダは人間だ。嵐の中、強烈な殺意と攻撃を避け続けるだけの緊張感と体力が持ちそうにない。

雨水に交じって汗が流れ、息切れが風音に掻き消される。傷はつかねど心身は確実にすり減っていく。

そしてツジギリギザミから距離を取った途端……。

―ドゴンツッ！

高所から突如としてオウシヨウザザミが落下し、1匹と2人の間の地面にめり込んだ。

何故か知らないが、背中にメラルー数匹とチャチャブーを乗せて……。

「お、親方！空からオウシヨウザザミが！」

第79話 「突撃！ドンドル守り隊！」

ドンドルマの外壁の手前にて繰り広げられた、ハンター2名によるツジギリギザミの進路妨害（回避中心）。そこに割り込んできたのは、空高くより落ちてきた、背面に猫人族を乗せているオウシヨウザザミ。

この豪雨の中、いかにして、そして何ゆえにオウシヨウザザミがやってきたのかを説明するには、数時間ほど時を戻す必要があった。

いかに鋼龍クシャルダオラと言えど、ドンドルマとその周辺に加え、遺跡平原にまで嵐の範囲を伸ばすことはできない。それ故にドンドルマに住む猫人族―アイルーやメラルーなどは、最も近辺である遺跡平原の集落に逃げ込む者も多い。

さらに遺跡平原には大人しいオウシヨウザザミとダイミヨウザザミ亜種ぐらいしか大型モンスターが存在しない為、現在の遺跡平原は高い安全性が約束されている。

だからだろうか、今日の集落には大勢のアイルーメラルーが入り込み、皆が手狭な思いをしていた。

小さいながらも店を切り盛りするアイルー、配達を担当するメラルー、ただの観光客など猫人族にも色々ある。

それでも誰も彼もが不満を漏らさず、むしろ自分達よりも技術力の高い人間が作った土産物を喜んで売買していた。逞しいものである。

そんな中、一匹の焦げ茶色のアイルーがソワソワとした様子で集落の外―正確にはドンドルマの方角―を見ていた。

気になったのか、1匹のアイルーが、嵐対策に入り口を塞いでいる大岩の前で佇んでいる彼女（一応メスである）に駆け寄る。

「ニヤ、どうしたニヤ、こげ茶の」

「ニヤ〜……アタチのお店、大丈夫かニヤ〜。心配ニヤ〜」

「お店ニヤ？」

「こげ茶、ドンドルマでハチミツ屋さんを開いたばかりなんだニヤ」

そんなやり取りを見ていた別のアイルーが、首を傾げているアイルーに応える。

こげ茶と呼ばれたアイルーはその通りだと言わんばかりに首を縦に振り、不安そうに大岩を見る。

確かに開いたばかりの店が嵐で吹き飛ばされるかと思うと、胸が張り裂けそうな焦燥感に駆られるだろう。

見れば他のドントルマ育ちの猫人族達も心配げに大岩を見ていた。家族や友人、中には恋人やお宝を心配する者もいるようだ。

そんなアイルー達を遺跡平原育ちのアイルーが心配する中、ふと地面が揺れている事に気づく。

「ニヤ、ニヤニヤニヤー！」

「フニヤーっ!？」

突如として足元の地面が盛り上がり、数匹のメラルー達が地面から飛び出てきたではないか。

驚いて毛を逆立てるアイルーを他所に、そのメラルー達に見覚えのある別のアイルーが駆け寄る。

「ニヤ？未知の樹海に逃げ込んだんじやニヤイのか？」

「ヤバいニヤー！激ヤバなシヨウグンギザミが樹海から出てきたのニヤー！」

どうやらこのメラルー達は未知の樹海を主な拠点としていた探検隊らしいが、妙に騒がしい。

リーダー格のメラルーはともかく他のメラルーは恐慌状態に陥っているらしく、雨で濡れた体を拭こうともせず慌てふためいている。

「激ヤバなシヨウグンギザミ……それってツジギリギザミニヤー!？」

その曖昧な呼称が通じるシヨウグンギザミは只一匹……海から渡ってきたというシヨウグンギザミの変異種だ。

ここ最近、未知の樹海で暴れまわっているというツジギリギザミの恐ろしさは遺跡平原のアイルー達にも伝わっているらしい。

「そうなんだニヤー！変なハンターさん達を追いかけて、いつのまにかドンドルマに向かっていくのを見たニヤー！」

「にや、にやんだってー!？」

ツジギリギザミがドンドルマに向かっている——それを聞いてしまったアイルー達——特にドンドルマに居つく者——は一斉に振り返り、リーダーメラルーに詰め寄ってくる。

「にやんにやんだそのハンターさん達！」

「許せんニヤー！」

「それよりツジギリニヤー！どうするニヤ、どうするニヤー！」

「アタチのお店が〜！」

「そんニヤことオイラに言われても〜！」

もはやモフモフおしくら饅頭状態。様々なアイルー達が困った困ったと詰め寄ってくる。

それだけツジギリギザミの危険性は認知されており、下手したらクシャルダオラよりドンドルマを破壊しかねないからだ。

——そんなアイルーメラルー達に、1匹のメラルーが立ち上がった！

「僕に良い考えがあるニヤー！」

そのメラルーは困り果て慌てている猫人族達に聞こえるよう、入り口の大岩の上に仁王立ちしていた。

その主張に大勢のアイルーとメラルー達の注目を集め、騒動を一時的とはいえ治めるに成功。

「ニヤ、青毛の」

そのツルハシを背負うメラルーは青い毛を持っていた。それだけで彼が何者かある程度の猫人族は認知する。

彼はユクモ村から海を渡ってやってきた商隊のリーダー格で、ドンドルマ付近の砂漠で鉱石を採掘し、それを故郷に持ち帰ろうとした所へ足止めを食らっていたのだ。

「良い考えって、あのツジギリギザミをどうにかするとか言うんじゃないよニヤ？」

「その通りニヤー！」

「バカ言うんじゃないニヤ〜！」

黒いメラルーが走り出し、青毛メラルーに向けてネコまつしぐらの

技！しかしガードされた！

攻撃を弾かれ錐揉み落下する黒メラルーを他所に、他のアイルー達は青メラルーのしようとしていることに啞然としていた。

特にツジギリギザミの恐怖を見たアイルーやメラルーは無理だと言わんばかりに首を振っている。

何せ狂竜ウイルスに浸食されているだけでなく、あの切れ味と凶暴性は恐怖を感じさせるばかりだ。ハンターならともかく我々アイルーメラルー程度では全員が力を合わせても敵わないだろう。

彼らがツジギリギザミへの不安と恐怖で満ちていく中、青メラルーは自信を持ってこう言う。

「今この遺跡平原にはヤツが居るニャー！そいつを利用すれば対抗できるはずだニャー！」

そんなアイルー達を他所に、オウシヨウザザミは相変わらずだった。

クシャルダオラが出ようがツジギリギザミが向かってようが、自身に危険が訪れない限り彼はマイペース。少々風が吹いているものの遺跡平原は平穏そのもので、呑気に草を食べているケルビ達を背景に、ダイミヨウザザミ亜種と食事を共にしていた。

鋏でチマチマと虫や実を摘まんでは口に運ぶを繰り返す中、鳥兜を被っているチャチャブーことブツチャーは別行動をしている。

別行動と言っても距離はさほど離れておらず、武器である杖の手入れをしていたようだ。先端の古くなった鋳石を新しいものと交換するらしい。

機嫌よく新しい鋳石を棒切れに巻き付けている中、ブツチャーはふと顔を上げ、ある存在を目の当たりにする。

―そこには、ガンキンSネコヘルムを被った、焦げ茶色の猫人族が

立って居た。

(大丈夫かニヤこげ茶……確かに僕はあのチャチャブーを説得する必要があるーって言ったけどニヤ)

(いや焦げ茶が、チャチャブーと対話したことがあるからアタチがするーって言って……本当かニヤ?)

(そもそもなんでガンキンSネコヘルムなのニヤ?)

遠くでヒソヒソニヤニヤと声が聞こえるが、戦慄を覚えているブツチャーはそれどころではなかった。

何しろ目の前の猫人族からは決死の気配を漂わせているような気がして、彼または彼女に応じなければならぬという気になってしまふ。

思わずブツチャーは新調した杖を持って構え、目の前の焦げ茶アイルーと対峙する。

そうして2匹の間に風が吹き……こげ茶が動き出す。

▼こげ茶は 不思議な踊りを 踊った。

▼ブツチャーは 思わず 踊り出す!

▼踊る2匹の 心が 通じ合っているようだ……。

そうして不思議にして奇妙な踊り(どんな踊りかはご想像にお任せします)を続けること暫く。

2人はガツチリと握手を交わし、ブツチャーが無言で頷き、こげ茶が握る手に力を込めて返す。

(え、何ニヤ? 話を通ったのかニヤ?)

(話っていうレベルじゃないけどニヤ……)

(これがいわゆる^{ボデイランゲージ}肉体言語って奴ニヤ?)

とりあえず外野のメラルー達は2匹の話が通じたものと捉え、ひと

まず一安心。

次の作戦に移行しよう、と言わんばかりに青メラルーは無言で領き、準備を始めるのだった。

唐突だが、オウシヨウザザミの大好物は何かと言われれば、キノコ類のマンドラゴラと上がる。

成長につれて良質な鉱石類を食すことが増えたとはいえ昆虫類やキノコ類の方が美味いらしく、特にマンドラゴラは見つけ次第すぐに駆け付けて食べる。

空中にマンドラゴラの山が浮かんでいた場合、即座に反応して其方に向いてしまうほどに。

眼前には紐で括られた網一杯に詰まっているマンドラゴラがブラさがっている。

無機質な黒い眼がキラキラと輝いてみえるほど、オウシヨウザザミはマンドラゴラをジツと見つめていた。

ちなみにダイミヨウザザミ亜種は気にせずお昼寝。例えどこからやってきたかも解らないメラルーが群がっていたとしても。

オウシヨウザザミも気にせず鋏を伸ばしてマンドラゴラを取ろうとするが、スイッと離れていくので、一歩近づく。

それに合わせて離れる。また一歩近づく。

それでも離れていく。鬱陶しくなったので歩いてみるが、それでも近づけない。

ムキになったのか、甲殻種に似合わぬ速度で走り出す！だが追いつけない！ムキーツ！

(やっぱりバカだニヤ)

(食い意地が張っているニヤ)

(待っててねアタチのお店！)

(旦那を誘導するたあ、コイツら頭良いでヤンスなあ)

オウシヨウザザミの食い意地に呆れる青メラルーとアイルー、店を守るべくしがみ付く焦げ茶アイルー。

そんな猫人トリオを尊敬の眼差し(?)で見つめるブツチャー。それでいいのか自称オウシヨウザザミの子分。

ダイミヨウザザミ亜種に群がっていたメラルー達は、ブツチャーのアドバイスで定めた居残り組らしい。

かくして、マンドラゴラで誘導されたオウシヨウザザミは、ドンドルマへと向かっていく。

その漲る食欲故に、この先に存在する古龍種と変異種の存在に気づかぬまま……。

第80話「其々の願い」

—コオオオオオオ!

嵐にも負けぬ甲高い咆哮が轟き渡り、その錆色の身体に黒い旋風が巻き起こる。鋼龍の怒りに応じるかのように風が吹き荒れ、逃げるハンターを執拗に追いかける。

そんなクシャルダオラから逃げるハンターことリリトは、嵐の中で長い戦闘時間を過ごしたことで身体の疲弊がピークに近い事を実感している。

こんがり肉の1つでも頬張りたいぐらい腹が減っているが、応戦している筆頭ハンター達、そして自分の帰りを待っているはずの「我らの団」の為にと疲れた身体を酷使させる。

しかし彼女一人だけではない。

リリトの疲弊が見て取れたか筆頭ランサーがわざわざ高所から飛び降り、クシャルダオラの気を逸らす為に囷となってきた。

気性が荒くなっているクシャルダオラは眼前の敵を排除しようと筆頭ランサーに狙いを定め、その隙にリリトは高所を登り始める。

そんな彼女に筆頭ガンナーが手を差し伸べ、非常食である携帯食料を手渡す。本来ならこんがり肉でも渡したい処だが、今は緊急事態故にコレで勘弁してもらう。

さて、いくら防御に特化した筆頭ランサーとはいえクシャルダオラ相手では分が悪い。

腹を膨らまし一息ついたリリトは脱いだレイアSヘルムを再び被り、高所から飛び降りようとして……。

「ハンターさん！巨龍砲の準備が整ったそうっす！」

駆け付けた筆頭ルーキーの報告が届き、いよいよか、とリリトはヘルム越しに見える移動式砲台を見やる。

そこでは巨龍砲に必要な砲弾数を詰め終えたのか筆頭ハンターが手を振っており、それに手を振って応じ、そちらへと駆け出す。

リリトが移動式砲台こちらがわに駆け出したのを確認した筆頭ハンターは唐突に高所から飛び降り、クシャルダオラへと向かう。

応戦している筆頭ランサーの横に立ち、軽く嘶いて威嚇するクシヤルダオラを眼前に双剣を構える筆頭ハンター。注意を此方側に向けさせれば良い為、回避か防御に徹すればいい。

吹き抜ける嵐の音とクシヤルダオラの咆哮が轟く中、鉄と鉄がぶつかり合う音が響いている事を、鋼龍撃退しか頭のない彼らは気づかない――。

ツジギリギザミは徐に両前脚の刃を斜め後ろに突き刺し、地面を難なく切り裂きながら前進。

そのまま盾のように身構えるオウシヨウザザミの直前で停止、刃を振り上げ、地面を切り裂く事で生じた抵抗が消え、カアンツと甲高い音を立てて衝突。

様々な鉱石が混合し圧縮した頑丈な鋏ではあるが浅い斬り傷が走り、対してツジギリギザミの刃には刃毀れ一つもない。

切りつけた反動かツジギリギザミが仰け反るも四脚を地面に固定して軽減。だがオウシヨウザザミはその隙を逃さず、鋏を構えたまま突進、シールドバッシュと呼ばれる攻撃がツジギリギザミに襲い掛かる。

両者ともに大型の甲殻種とはいえ軽い分類に入るからかツジギリギザミが軽く吹き飛ぶ程度に終わるも、ツジギリギザミは即座に体勢を整え、今度は鋏を横に大きく広げる。

そのまま四本脚の内一本を軸にグルリと横に回転、刀のような鋏を二回連続でオウシヨウザザミに叩きつける。鋏を構えたままなので二回とも鋏に打ち付けられるが、遠心力も合わさったからかオウシヨウザザミの身体は大きく揺れた。

オウシヨウザザミも四本足を地面に食い込ませる事で衝撃を抑え込むも、ツジギリギザミは回転の勢いを乗せたまま前進、独楽のようにオウシヨウザザミの周囲を行き交い切り刻む。

朱い剣筋を宿す程の斬撃を連続でお見舞いするもオウシヨウザザ

ミの虹色に光る甲殻と背殻には僅かな傷しか与えられていない……
防御チートと言わんばかりの防御力に傷を走らせたこと自体が凄
いのだが。

「助けてニャー！」

「離れたら確実に死ぬニャー！死ぬ気で掴まるニャー！」

「キー（このぐらい序の口でヤンスのに）」

「アタチのお店を守るのニャー！」

何より凄いののは、そんな甲殻種の攻防に巻き込まれながらも、しつ
かりとオウシヨウザザミに掴まっている猫人族達かもしれない。

「ほれ、もう少しだ！」

「わかっとなるつちゆうねん！」

一方その頃、人間側は無事にドンドルマの外壁に逃げ延びていた。
クシャルダオラ撃退に赴いているハンター・リリトの帰りを待つて
いた【我らの団】だったが、密猟者が逃げ出したと聞いて団長と加工
担当が駆け出したのだ。

後ろではロープで雁字搦めに縛られた密猟ハンター×4人が大人
しくしており、勇敢にもツジギリギザミを抑え込んでいたクカルとイ
リーダーを救出。今に至る。

「……凄いな」

「ええ、あの甲殻に傷を負わせるなんて」

団長がクカルを腕を掴んで外壁の上へ上らせる中、【我らの団】加
工担当とハンター・イリーダーが感慨深いとばかりに溜息を吐きなが
ら、二匹の甲殻種の争いを見守っている。

長年モンスターの外殻や竜骨を元に加工してきたからこそ、若くし
て様々な修羅場を潜り抜けた天才的ハンターだからこそ解る、最高ク
ラスの矛盾の争い。

絶え間なく斬り刻むツジギリギザミと、その猛攻を防ぎ続けるオウ
シヨウザザミ。徐々に虹色の甲殻へ走る傷が増えるも、斬るといっ
り叩きつける動作になっているからか斬撃にブレが出てくる。

ハンター達の間で囁かれ、イリーダー自身も幾つか目の当たりにして
きた【狩技】と呼ばれる技に似た動きが幾つも出てくるも、それらを

防ぎ続けるオウシヨウザザミの防御力も素晴らしい。

刀蟹から技を得ようと、爛々と目を光らせ甲殻種の戦いを見続けるイリーダ。

古龍種撃退の為、移動式砲台に乗り込み最終段階へと移行するリリト。

ドンドルマを守るべく、オウシヨウザザミを連れてきた猫人族達。

其々の心の内に宿している願いを聞き届けるかのように――

紅い流星が暗雲の下を駆け巡っていた。

第81話 「天より落ちし彗星」

—ギユリリリリリイイイイ!

「「ぎにゃあ〜!」」

オウシヨウザザミが傷だらけの鋏を交差させるように擦りつけ、不協和音が周囲に轟き、アイルーとメラルー2匹に襲い掛かる。

思わず耳を塞いでしまった獣人族3匹（ブツチャーは耳栓を装備したので平気）はポロリと落下、ツジギリギザミが様子見しているのが最大の幸運、と言わんばかりに一目散に逃げだす。

「今だニヤ〜!」

「に〜げるんだニヤ〜!」

「アタチのお店〜!」

スタコラサツサと四つ足でドンドルマに向けてダツシュ!ちなみにブツチャーはオウシヨウザザミの背に乗ったまま、彼らに向けて手を振って見送っていた。

そんな獣人族達の事など気にも止めない程、オウシヨウザザミは焦っていた。数多の鉱石を合成した甲殻にこれ程の傷がついた経験など無かったからだ。

不協和音が鳴りやめばツジギリギザミは再び刀のような鋏を……振り回す事なく、砥石の粉まみれの口に近づけ研ぎ始める。

焦るオウシヨウザザミに対し、ツジギリギザミは苛立ちを隠せないでいた。何度斬りつけても倒れない上、幾多もの斬撃で刃が潰れてきたからだ。

ツジギリギザミは念入りに油と砥石粉で刀を研ぐ。この動作にだけは時間を多く費やしてしまうのが、ツジギリギザミの大きな弱点だった。

オウシヨウザザミは好機と言わんばかりに鋏を地面に打ち付け、足を高く上げて背面である王冠のような背殻を掲げ、ゆっさゆっさと揺さぶり出した。

すると王冠のような背殻——ここでは王冠殻と呼ぶ——に生えていた幾多もの棘がツジギリギザミに向かって飛んでいく。これは鉱石に

交じって出た護石の塊だ。

人の頭ほどもある護石棘が霰のようにツジギリギザミに降り注がれるが、コツコツと音を立てて付着するだけで大したダメージにはならない。ツジギリギザミも気にせず、もう片方の研ぎに集中していた。

しかしこの行為はオウシヨウザザミ特有の物であると、老人ハンター・ジグエがこの場に居れば間違いなく語っていたであろう。

何故ならこの護石棘は、相手に様々なスキル補正を付与させるのだから。被害者はジグエ・クツクラブトリオの計4名。

この世界は未だ謎に包まれており、モンスターの素材から造られる防具や各地で採れるお守りには、ハンターに不思議な力を宿らせる。

オウシヨウザザミは様々な鉱石を食しては甲殻に反映させる特異体質を持つ。中でもお守り関連は王冠殻に集中し、装飾のように表面に棘として浮き出る性質があった。

オウシヨウザザミはお守りの性質を知ってか知らないでか、護石棘を投擲武器のように体を揺すって発射、敵に付着させランダムにスキル補正を発生させる。

ツジギリギザミに宿ったスキル補正は何か——それは研ぎ終えた直後に知る事となる。

一通り護石棘をバラ撒いたオウシヨウザザミは地面に打ち付けていた鋏を抜き、鋏を振り上げたまま突進。時に防御、時に攻撃と臨機応変に対応できる態勢だ。

ツジギリギザミは研ぎ終えてピカリと光る刀を横一文字に広げ、一字を描くように鋏を伸ばした状態で再び回転。オウシヨウザザミは突進を続けたまま鋏を前方に構えガードの態勢に入る。

横薙ぎに刀が打ち付けられ、空いた方の刀で鋏を正面から突き、動きが止まらないと解ればさらにもう片方の鋏を振り上げ打ち付ける。

打つ。打つ。打つ。前進していたはずのオウシヨウザザミが後退る程にツジギリギザミの連続攻撃は凄まじく——盾としている鋏に更に深く、多く傷が入っていく。

——よりもよって【連撃】かぁーい！

なお、上記の台詞はイメージです。モンスターがスキル名と効果を知る由がありませんし。

場合によっては新たなスキルを付与することもある護石棘。それが裏目に、それも最悪な方向に出てしまったようだ。

攻撃する度に会心率が上がるという【連撃】のスキルがツジギリギザミに付与してしまったようだ！これはアンラツキイー！

元より攻撃的で連続攻撃を好んでいたツジギリギザミは知ってか知らずか、前方をカバーするような広範囲の斬撃を次々と繰り出す。

防ぐ手段は鋏だけではない。閉じていた鋏同士に少しだけ隙間を開け、そこから大量の水が線を描くように放たれる。

水ブレスを真正面から受けてしまったツジギリギザミは顔面(?)に直撃。水の押す力の方が強かったからか、仰向けに転倒してしまう。

ツジギリギザミの背殻は、グラビモスやバサルモスの甲殻を剥ぎ取り継ぎ合わせた物なのでデコボコしており、横転しやすいからか直に体勢を立て直す事ができる。

だがオウシヨウザザミはそれを逃さない！幅広い鋏を転倒したツジギリギザミの下に潜り込ませ、そのまま押し出す！

ゴロンと転倒するツジギリギザミ。すぐさま接近し、また鋏で押し出すオウシヨウザザミ。また転倒する。押し出す。転ぶ。押し出す。転ぶ。押し出す。転ぶ。

ツジギリギザミはオウシヨウザザミと違って防御力、ひいては重心を重視しなかった故に意外と軽い。オウシヨウザザミのパワーも合わさってゴロゴロと転がっていく。

「……一方的な展開になりましたね」
「かなりアホな展開やけどな」

さー上がってきー、と垂らしたロープを伝って登ってくるアイルー・メラルー達を励ますクカル。

先程までの攻防がウソのようにオウシヨウザザミが一方的にツジ

ギリギザミを押し転がしているのを眺めているイリーダは、安心したような不安のような複雑な心情だった。

「しかしあのままではいかんぞ。いつ狂竜ウイルスを克服するか解らん」

仁王立ちして腕を組んで見守っている【我らの団】団長は、浮かない顔をして甲殻種らを見下ろしている。その言葉に【我らの団】加工屋も無言で頷く。

忘れがちだが、ツジギリギザミは未だ狂竜ウイルスに侵されている状態だ。まだ克服はしていない今のうちに叩かなければ手遅れになる。

そもそも、ツジギリギザミを遠ざけようとギルドが目論んでいたのは、万が一極限状態になってしまった場合を考慮してからだ。極限状態は抗竜石で対処可能とはいえ、ドンドルマに向かわせるわけにはいかない。

いつ極限状態になるかとハラハラする2人と、甲殻種の決着がつかぬかとハラハラするイリーダ、そしてアイルー達が無事に登って来れるかハラハラするクカル。ついでにこの先どうなるんだろうとハラハラしている密猟ハンター4人。

そんな7人（+3匹）を驚愕させる出来事が起こる。

——ドオオオオオオオン！

ドンドルマ中央に響き渡る轟音。そして赤い稲妻。広大な龍属性エネルギーの放出。

ドンドルマの外を向いていた人達は後ろからの轟音と豪風に目を見開くほどの驚愕を受けるが、即座に団長が振り向いて中央部を見やる。

「あいつら……やりやがったな！」

歯を向き出して笑う団長——リリト達はクシャルダオラに【巨龍砲】をお見舞いすることが出来たのだ！

いつしか嵐も収まっている。クシャルダオラに大ダメージを与え

た影響だろうか？そう考えていた矢先。

「……なんだありやあ？」

ふと上を見上げれば、暗雲から赤い光が降りてくる。それは真っ直ぐと下方向に落ちてくるらしく、近づいているのか徐々に大きくなつていき――。

「ああーツジギリギザミが！」

「どうしたっ!？」

降りてくる赤い光を他所に、イリーダの叫びを聞いた団長は思わず振り向く。

ニヤーニヤーと怯えてくつつくアイルー・メラルーを抱きしめて見下ろしているイリーダと、同じ方向を見下ろしている青ざめたクカル。

その視線に合わせて団長も下を見れば――ドンドルマの門前で、ツジギリギザミが両の刀を振り上げオウシヨウザザミに威嚇しているのではないか。

見れば転がしていたはずのオウシヨウザザミはオロオロと慌てている。どうやら【巨龍砲】の衝撃が響いて驚かせてしまったようだ。

しかし注目すべきはそこではない。注目すべきは門前のツジギリギザミの容態――全身に纏う紫色のオーラにあった。

「いかんー完全に極限状態になつとる！」

よりにもよつてこの段階で極限状態になつてしまうとは。

狂竜ウイルスを完全に克服したツジギリギザミはドス黒いオーラを全身からあふれ出し、いつにも増して禍々しい切れ味を醸し出す刀を振り上げている。

その迫力たるや、同じく狂竜ウイルスに感染し克服したことのあるオウシヨウザザミから見ても、久々に恐怖を覚えさせるほどであった。既に逃げ腰だし。

ツジギリギザミは今度こそオウシヨウザザミを斬り殺そうと刀を交差させ、大きく飛び上がる。

そのまま刀をオウシヨウザザミに向けて振り下ろさんと、刀を振り上げ一気に――。

——刹那、団長達の真上を高速で飛行する何かが横切り、遅れて暴風が巻き起こる。

団長らが高速で何かが通り過ぎたと察知し振り向いた頃には、飛びかかるうと高所に跳び上がったツジギリギザミと衝突する音が響いた。

団長らが衝突音の正体を知るべく振り返れば、既にツジギリギザミは遠くへ吹っ飛んで転げ落ちていた。またしても正体を見失ってしまったようだ。

「——上——」

優れた感覚を持つイリダーが直感的に上を見上げ、遅れて団長らも見上げる。

暗雲が広がる上空では、先程団長が見た赤い光の筋が弧を描いて伸び、それが起き上がるうとしていたツジギリギザミに向かっていくように近づいていく……もしかしたなくても直撃コースだった。

——ドゴオンッ！

再び訪れる衝突音——ただし重くて鈍い嫌な音——と同時に、ツジギリギザミの身体は地中にめり込み、それどころかあまりの運動エネルギーにより地面を抉りつつ前進していった。

元々防御力に優れているわけでないが、極限状態により異常に強化された甲殻が仇となり、延々と土色の線を描きつつある。

勢いが止まる頃にはモウモウと土煙が立ち込めるも、突如として煙から飛び出た存在により瞬時に吹き飛び、地面に埋もれ無残な死骸と化したツジギリギザミが露わになる。

しかし彼ら人間が注目したのは、ツジギリギザミの死ではない——
——天空へと昇る古龍種の姿だった。

まさに彗星のように現れ彗星のように天へ行くその姿を最も目に焼き付けたのは、【我らの団】の団長であった。

銀の甲殻。矢尻のようなフォルム。奇妙な形状をした翼。尾を引く紅いエネルギー。みるみる内に遠ざかる圧倒的スピード。

後に彼は、古龍種【天彗龍バルファルク】の存在を知ることになる

——この時はまだ、新たな冒険の始まりを予感するだけだったが。

ちなみにオウシヨウザミは、その彗星から逃げるように何処かへ走っていた。

第82話「終わりの先」

嵐と蟹が去ってから数日間、ドンドルマは大騒ぎだった。

まず、「巨龍砲」の前に放置されたクシャルダオラの死骸の処理。リリトと筆頭ハンターの話によると、クシャルダオラは見知らぬ古龍種らしきモンスターに倒され、その古龍種は超高速で空へ飛び去ったそう。

【巨龍砲】のダメージで弱っていた所を、超高空からの超高速のダイナミック叩きつけで仕留めたそう。何それ怖い。【我らの団】団長らの証言もあって、虚言ではないと確証される。

幸いにも外的特徴は捉えたし、同格の競争相手を討ち取った事で安堵したのか、古龍種はドンドルマを攻撃することなく飛び去った。もし連続で戦う事になるなら間違いなく退避を命じていた。

しかもその古龍種は帰り際にツジギリギザミまで討ち取ったという。何それ強すぎね？

攻撃力の高いツジギリギザミも、防御力が疎かだった事、古龍種が超スピードを持っていた事、その超スピードで全身全霊の体当たりを食らった事により一撃必殺。

もう色々とぶちまけてグロテスクな死骸になっているツジギリギザミの処理にも、ギルドは手を回している。極限状態であった事もあって、色々取り扱いが難しいのだ。

しかし多くのハンターや鍛冶職人の強い希望により、ツジギリギザミの素材は自然還元分と研究用を除き流出が決定。大老殿の管理下、特定の依頼を達成した者に褒賞として与えられるようだ。なお、依頼内容はどれも難易度激高なので、挑む時は相当のランクと覚悟が必要。

因みに研究用素材は最先端の技術が集うメゼポルタに搬送されるとのこと。量も褒賞分より多い為に優れた武器が出来そうだが、鍛冶職人は太刀・大剣・双剣で意見が分かれて混沌としているらしい。気の早い連中だ。

それにしても皮肉な話である。古龍種によって訪れた危機が、突如

として現れた古龍種によって解決するなどとは。

因みに高速で飛行する古龍種は筆頭ハンターの師匠によると「天彗龍」と呼ばれる個体らしい。古い文献で見た姿をたまたま思い出したとか。加えてリリトが拾った、高速飛行の際に甲殻が剥がれ落ちて焼けた物を分析した結果、「天彗龍」なる古龍種の存在は確実といえた。これを聞いた【我らの団】、特に団長に至っては拾い物である『灼けた甲殻』を強引に貰い受け、新たな冒険だと張り切っていた。流星は団長、浪漫を追い求める漢である。

こうして【我らの団】一行は復興作業を一通り終えた後、新たな目標である「天彗龍」の更なる情報を得ようと、ツテがあるという龍歴院へとイサナ船を発進させるのだった。忙しい連中であるが、彼ららしいと言えよう。

尚、オウシヨウザザミを呼び出したメラルーとアイルーには拳骨をお見舞いしてやったらしい。

結果的にオウシヨウザザミがツジギリギザミの進行を阻止したとはいえ、下手をすれば二匹の甲殻種がドンドルマ内に侵入し大惨事を引き起こす可能性があった。

善かれと思つてした事でも事態の悪化に繋がり兼ねなかつたとして、ギルドのお偉いさんはリーダー格である青毛メラルーを筆頭とした三匹にキツくいお説教をお見舞いしてやることに。だが青毛メラルーは頭に出来たタンコブを擦りながら「俺はやったぜ」と満足気だし、こげ茶アイルーは無事なお店を見て非常に喜んでいた。黒メラルーはとばっちりを受けたようなものだが。

何にしても「終わりよければ全て良し」。無事に生き延びられたし、三匹は仲間を呼んで張り切つて街の修繕作業に勤しむのだった。

お仕置きとドンドルマと言えば、【我らの団】によつてお縄になった密猟ハンター達についてだが……唐突に何を言うのかと思うだろうが、これには理由がある。

ツジギリギザミをドンドルマに近づけないよう刑罰を兼ねて依頼したというのに、よりにもよつてドンドルマに近づけさせてしまったのだ。逃げたくなるのも仕方ないだろうが、未知の樹海内に留めてお

けよって話である。

当然ながら、レガツダ・ギギレ・ガラン・ドドの4名は罰としてドンドルマ復興の為に強制労働、後に牢獄入りである。ギルドナイトに始末されなかっただけでもありがたいと思いなさい。

しかしながら死ぬような目にあつた事もあつてか、思い出し泣きするドドは勿論の事、レガツダ達極悪人達も流石に懲りて従順に働いている……「生きているんだな俺達」と感動しながら。

この先は牢屋で暮らす羽目になるだろうが、密猟ハンター4人は悔い改めるようにせつせと資材を運ぶのだった。

そしてオウシヨウザザミはいええば……平常運転である。

ツジギリギザミと対峙し天彗龍から逃げ出した後、ギルドがその行方を追つてみた所あつさりが見つかった。

遺跡平原で雌のダイミヨウザザミ亜種と並んで歩く姿は、ザザミ種に詳しい調査員の観察結果によるとダイミヨウザザミの番として成立しているとの事。傷跡まみれになつたことでオウシヨウザザミの生存本能が刺激され、子孫を残そうとしたのだろうか？

なんにしても種の繁栄は生き物の務め。むしろ食欲と睡眠欲しかないと思われていたオウシヨウザザミにも性欲があつたんだなあと、報告書を読むギルド職員達はある意味で納得したらしい。

クシャルダオラも天彗龍も去つた今、オウシヨウザザミはダイミヨウザザミ亜種が生息できる地域を転々と回っていくことだろう。防御力の高い特殊ザザミが傍に居ればザザミ亜種も安泰だろうし。

鬼面族のオトモを携えた二匹の甲殻種は、奇妙な生態系を見せつつ平凡を満喫することだろう。暫くギルドは二匹の観測を続行すること。

——ここまで聞けば良い話ばかりだろうが、一番の問題はイリーダにあつた。

ハンター・クカルは、ガーグアが引く荷台車の上で頭を抱えていた。

原因は隣で恍惚の表情を浮かべている若き男・イリーダにある。晴天の下、ある物を天に掲げては溜息を零している。

大型モンスターも通らない道端を進む荷台の上で揺られる二人のハンターと一匹のアイルー、という平凡な光景ではあるが……イリーダが天に掲げている物に問題があった。

「なあイリーダ……それどないすんねん？」

「家宝にします」

「いや家宝で」

クカルが問いかけるも、視線を逸らすことなく真つ直ぐ見つめているイリーダに呆れたような溜息を零す。

どうするねんなー、と言っているように頭をガシガシと掻いた後、クカルは意を決したようにイリーダの頬を両手で挟み、無理やりこっちに向けさせる。イリーダは抵抗の素振りもなかった。

「あのな、確かにその価値は計り知れん。うちらハンターにとっちや宝も当然や。せやかてな……」

危ない光を宿しているイリーダの目を真つ直ぐと見て話すクカルが、チラリと視線を逸らしてそれを見る。

イリーダが両手で挟んで持ち上げている物は、小振りな大剣のようにも見える、刃物の破片だった。

妖しい光沢を放つそれは研ぎ澄まされた刃であり、まるで巨大な刃物が割れて出来た断片のようである。実際の所これは断片であり、あるモンスターの素材でもある。

その素材の元であるモンスターの名は……。

「いくらなんでもツジギリギザミの刃を盗み取るのはアカンやろ！」

クカルは叫ぶように怒鳴るが、イリーダは何処吹く風と言わんばかりに手に持った刃―『刀蟹の刃片』を掲げ、太陽の光を反射させながら見つめる。

天慧龍によって粉碎されたツジギリギザミ。その死亡時に最も近くに居た人物は【我らの団】と密漁者達、そしてクカルとイリーダの

二人だ。獣人族は除外。

その死骸を間近で見た彼らの目を盗み、イリーダは近場にあつた刀蟹の刃の破片をコッソリと特殊な布で包んで隠し持っていたのだ。布は剥ぎ取りナイフですら破けない、モンスター素材を包む為の物である。

さも普通の素材のように振る舞い、ドンドルマの無事を祝う宴の中で平然を装い、用が終わったから別の地方へ向かうと何食わぬ顔でドンドルマを後にしたのだ。

クカルが気づいたのは今さつき……イリーダが怪しい笑みを浮かべながら布から取り出した物を眺めていたのを見た時だ。

ツジギリギザミの死骸を処理するギルドは、関係者以外がツジギリギザミから剥ぎ取る事を固く禁じた。何せ世界で一匹しかいない特殊な甲殻種だ。殻一枚でも素材としての価値は勿論の事、好事家に売りつければ高値で売れるだろう。

特に切れ味バツグンの刀のような鋏は、強さを求めるハンター（特に太刀使い）からすれば喉から手が出る程に欲しい貴重品である。その稀少性故に鋏の大半はギルドの管理下に置かれ、メゼポルタに送られる事になるのだが。

そんなツジギリギザミの鋏——『刀蟹の刀爪』の破片である『刀蟹の刃片』を、掌サイズの切っ先とはいえ手に入れたのだ。イリーダは。

「せやからな？ギルドに大人しく報告しいや。素直に報告すればもしかしてもありえるで？」

そうクカルはイリーダに優しく声をかける。もしかして、とは何を差すかは本人も解らない。口から出まかせだし。

もしこの事がギルドにバレれば、彼に重い処罰を下すだろう。ギルドの管理下で素材を手に入れたのではなく勝手に、しかも最重要部位である刃先を黙って持ち出したのだから。

例えギルドが手掛ける前に手に入れた極僅かな物だからといって、希少だからこそ勝手に持ち出す事は許されない。最低でも周囲のハンターの不興を買って暴動が起きるだろう。そしてそうなれば、

真つ先に巻き添えを食らうは彼と同伴していた自分だ。クカル

だからこそクカルは「今からでも遅くないから」と言っているように肩に手をかけ、さっさと自白してギルドに返還することを薦めた。欲しいのは痛いほど解るが、持っているだけで何かしらの災いを呼びそうなのに加工しようとするれば絶対にバレる。

そんなクカルの必死さが伝わる眼差しを目の当たりにしたイリーダはといえば……。

「バレなきやいいんですよ」

―眩しいまでの清々しい笑顔を浮かべて、平然と応えるのだった。

(ダメや、完全に頭がそつちに行つとる……!)

話は終わったとばかりに刀爪の切っ先を様々な角度で見つめるイリーダ。そんな彼を見て頭痛を起こしたように頭を抱えるクカル。

オウシヨウザザミVSツジギリギザミの激戦―正確にはツジギリギザミの技―に当てられた事もあったのか、イリーダは狂人ハンターの一步手前にまで足を踏み込もうとしている。

話を傍から聞いていた手綱を握るアイルーも、事の重大さを肌で感じてしまったのか、柔らかな毛の下から冷や汗を流している。送り届けたらすぐに退散しようと心に決めながら。

とりあえず彼とは次の街で別れよう。そう決めたクカルであった。

―そんなクカルなど気にも止めずに、イリーダは美しい物を眺めるように刀爪を見つめ続けていた。

ヤオザミ成長記

オウシヨウザザミという甲殻種モンスターが、この世には存在している。

この世は様々なモンスターが跋扈している。各地の環境に合わせて生態系を築き、そこに大小様々なモンスターが集う事で食物連鎖が発し、自然の一部として食う食われるの弱肉強食の世界が繰り広げられる。

そんなモンスターも多種多様な種が居るが、そこから更なる進化を経たモンスターも少なくない。ある物は別の環境に適応した「亜種」として。ある物は強大な力を得て限られた地域に生息する「希少種」として。ある物は別大陸に進出した「遷悠種」として。逆に現存するモンスターの祖先である「始種」という存在も確認されている。

その中の一つとして、短期間で環境に適応し姿を変えた「変異種」というものがある。オウシヨウザザミもそれに分類されており、当時甲殻種の存在が確認されていない時期の孤島に流れ着いたヤオザミが、突然変異によって今の姿になったと言われている。

各地のギルドの情報を照らし合した結果、オウシヨウザザミの歴史は長いという訳ではなく、しかし波乱に満ちた生態であった。

ヤオザミの頃には既に突然変異が生じ、食した鉱石類を己の甲殻に混ぜ込むという性質を手に入っていた。

幼少時から高い防御力を有していたヤオザミはドスジヤギイの群れに襲われても平然と過ごし、日々色々な物を食べながら孤島に暮らし、火竜夫婦が到来した頃には新しいヤドを求めて別の地域へと旅立った。

ヤオザミとダイミヨウザザミの間である「ブシザミ」の頃は、硬いヤドを求めて砂原に出現し、ボルボロスの頭蓋骨を手に入れた。

この頃からは食した毒物を体内に蓄積、敵を撃退する術を得ており、それを用いて潜口竜を倒した。この時から、今では名高き商いメラルー「青毛」の冒険が始まったとされている。

鋼色の盾蟹となった「鎧蟹アラムシャザザミ」からは苦難の連続

だった。「ユクモのマ王」ことディアブロスの若き頃からの宿命のライバルだったらしく、片方の角を折られてからは毎度の如く角竜に喧嘩を売られていたらしい。

しかし様々な鉱石を食らっては外殻を強化してきたアラムシャザザミはディアブロスの猛攻に耐えてきた。その攻防は長らくユクモ地域を震撼させてきたが、あるメラルーの策略によって鎧蟹は砂原を去った。

火山地帯の良質な鉱石を食した事、そして自然の恵みが豊富な島「楽土」の発見により、鎧蟹の防御力は益々強化され「鬼鉄蟹オニムシャザザミ」へと変貌。とあるハンター達に撃退されるまでの間、楽土の支配者として君臨していた。

また火山地域に多く発掘される護石関連を大量に摂取したことで、相手に護石を付着させ様々なスキルを付与する新たな状態異常「護石やられ」という荒技を生み出したが、多くの炭鉱夫ハンターの憎しみを買ったそう。

その他にも、奇面族の子供がついてきたり、メゼポルタの脅威を知ったり、狂竜化したりと色々な騒動に巻き込まれてきた。

そして現在の最終形態、天廻龍シャガルマガラと対峙した事で弱点の背部を改善した虹色の蟹「冠蟹オウシヨウザザミ」へと変貌。その稀有性と珍しい鉱石を排出する体質により、ドンドルマの悩みの種としてバルバレ管轄の地域を騒がせることとなった。

しかし最終的にはダイミヨウザザミ亜種と結ばれ、その後の行く先をアイルー達に探らせており、現在も調査隊アイルーとザザミ夫婦の追いかけてついでが続いている。

このように、オウシヨウザザミの人生はとても濃ゆい物だった。ここだけでは語れぬ記録は多々あり、たった一匹の甲殻種は多くの人々に影響を与え続けてきた。

例えば、鎧蟹の頃から追い続けてきた男女2人。常に上を目指した求道者であったが、最後にはハンター夫婦として共に暮らす事となった。

例えば、鬼鉄蟹と奇面族を行動を共にしたとある王女。遠い未来、

ワガママな彼女は王族でありながら伝説の蟹を求めハンターとなつて旅に出る。

例えば、鬼鉄蟹の素晴らしく頑丈な甲殻に魅了されたハンター。彼は「世界一硬い防具」の為にオウシヨウザザミを追うべく、日々鍛冶職人及びハンターとしての鍛錬を続けている。

例えば、冠蟹の甲殻のカケラを手にした老人ハンター。年老いた彼は身を焦がす冒険心をカケラと共に、仲間である幼き鍛冶屋の娘に託した。

例えば、冠蟹と敵対した刀蟹の切っ先を手にした若きハンター。同じく世界に一匹しか居なかった甲殻種の素材を内密で手にした彼と、その素材の行方は今も解っていない。

その影響力は今もなお世界中に轟いており、その高硬度の甲殻が採掘可能ということもあって、各地のハンターとギルドが冠蟹を追い続けている。中には密猟者も入っている為、対処に追われるギルドの仕事は増える一方だとか。

最近では天外魔境と名高きメゼポルタ地方も目を光らせているらしい。刀蟹の素材があまりにも優秀で鍛冶し甲斐があったのか、同じく世界に一匹しかいない甲殻種であるオウシヨウザザミに注目しているらしい。

多くの注目を集める中、オウシヨウザザミは各地を巡りながらのんびりと暮らしている。

だが敢えて言おう。これがダイミヨウザザミ変異種の生態なのだ。

オウシヨウザザミは、のんびり屋でマイペースで、危機が迫れば臆病になり即座に逃げる。これも弱肉強食で生き抜ける一つの性質である。

オウシヨウザザミの人生は波乱万丈で、それでいてノンビリとした不思議な生態。数多くの厄介ごとを耐えきり、彼は今日も食事を求め大地を歩むのだ。

長き旅路だった。この道中にも様々な出来事が起こった。ジェツト噴射する古龍種に掴まって蟹が空の旅をすると誰が予想できるだろうか。

だが彼は辿り着いたのだ。己のルーツである、ユクモ地方の砂原地域に。

とぼつちりや面倒ごとに巻き込まれてと巡り廻って、いつしか地平線一杯に広がる砂の大地と、それを泳ぐデルクスの群れを拝める日が来るとは……甲殻種特有の無表情であるはずのオウシヨウザザミも、感動しているのか暫し其の場に佇んでいた。

いつしか自分の周りを囲んでいたメラルー達もニャーニャーと騒いでおり、歓迎を受けているようだ。オウシヨウザザミは悪くない気分なのか、そんな騒ぐメラルー達に注意しつつ前を歩く。

まずオウシヨウザザミが缺で摘まんだのは、サボテンだった。水分を欲しているのか丁寧に根元から千切り、それをもう片方の缺で摘まんでサボテンを口に運ぶ。

だがオウシヨウザザミは忘れていた……忘れて当然だった。そして誰がこの事態を予想できようか。

かつてよりユクモ地域の砂原には「ユクモのマ王」と呼ばれし凶悪なモンスターが生息していること。

そのモンスターはオウシヨウザザミの若かりし頃であるアラムシャザザミ期からのライバル的存在（一方的）であったこと。

そしてそのライバルは今も生きており、今も力をつけ続け、常に砂原の王者として君臨し続けている。

突然地面が揺れたかと思えば、砂の中から勢いよく飛び出し、オウシヨウザザミを地中から天高く突き上げた。その存在の名は——
塵魔おうちまディアブロス。

長年ザザミの存在を忘れなかった塵殺の暴君は、積年の鬱憤を晴らすかのように水蒸気を発生、落ちてきたオウシヨウザザミを白い爆発で覆い尽くした。

オウシヨウザザミの苦難はまだまだ続くようである……だがこの世に楽な道などない。苦悩があるからこそ進化への道を歩み、常日頃変化する自然界に適応するのだ。

それはハンターもモンスターも同じ。常に新しい可能性を求めて生きていく。例え弱き存在であろうとも、生き残りさえすれば未来がある。

——おうま麿魔ディアブロスの猛攻を防ぎ続けるオウシヨウザザミも、まだまだ新しい可能性を秘めているのかもしれない。

——ヤオザミ成長記より——